

長野県更埴市

屋代遺跡群附松田館

—重要遺跡範囲確認調査報告書—

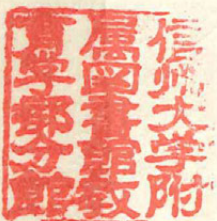
2 0 0 2

更埴市教育委員会

信州大学附属図書館



0720083971



長野県更埴市

屋代遺跡群附松田館

—重要遺跡範囲確認調査報告書—

2 0 0 2

更埴市教育委員会



G地区359号住居跡



G地区瓦集中区



屋代寺地区1号住居跡



屋代寺地区1号住居跡出土土器



屋代寺地区14号住居跡出土土器



大宮地区3号住居跡出土土器

例 言

- 1 本書は、更埴市教育委員会が、国・長野県の補助を受けて実施した重要遺跡範囲確認調査の報告書である。
- 2 本書の編集は小野紀男が行った。執筆は佐藤信之及び小野が担当した。
- 3 分析及び考察では次の方々にご協力をお願いし、玉稿を賜った。(敬称略)
白居直之 鳥羽英継 (株)第四紀地質研究所
- 4 現場における実測図は担当者及び国光一穂、竹内由香里、土屋哲樹が作成し、遺物の実測は小野及び国光、矢島洋子が行った。
- 5 遺構番号は発掘調査時の番号をそのまま使用しているため、欠番が生じている。また屋代遺跡群G地区においては、国道403号土口バイパス建設に伴う発掘調査と一連のものであるため、通し番号とした。
- 6 本書中の図版の方位は、平面直角座標系第Ⅷ系の座標北を示す。また標高は海拔mで示した。
- 7 発掘調査・報告書の作成に当たり、下記の諸機関・諸氏にご指導、ご援助をいただいた。記して感謝申し上げます。(敬称略)
長野県教育委員会、長野県埋蔵文化財センター、東京学芸大学考古学研究室、オリオン機械(株)
片岡雅夫、鎌田佳治、小池永保、半田英彦、前山和枝、町田勝則、松田孝弘、松林孝二郎
- 8 本調査に伴う出土遺物、実測図、写真等の資料は全て更埴市教育委員会が保管している。
なお、調査の関係資料には各調査地区を略して下記のとおり表記した。
屋代遺跡群G地区「YDG」、屋代寺地区「YOK」、大境地区「OZ7」、大宮地区「OMY3」、松田館
「MDY」

凡 例

- 1 本書に掲載した実測図の縮尺は原則として下記のとおりである。縮尺が異なる場合はその縮尺を表記した。

主な遺構

全体図 1/100 住居跡 1/60 掘立柱建物跡 1/80 土坑 1/30
溝断面 1/40

主な遺物

土器 1/4 土製品 1/2 布目瓦 1/4 鉄製品 1/2
骨角器 1/2 玉類 1/1 滑石製模造品 1/1 石製品 1/2

- 2 本書に掲載した主な遺物写真の縮尺は下記のとおりである。



土器・布目瓦 1/2～1/4

土製品・鉄製品・骨角器・石製品 1/2

玉類・滑石製模造品 1/1

- 3 実測図中のスクリーンパターン及び断面の処理は下記により表している。

遺 構 : 炭化物  焼 土 

遺 物 : 赤色塗彩 赤  黒色処理 

遺物断面 : 弥生土器・土師器 白ぬき 須恵器 黒塗り

- 4 遺構の規模はcmで表しており、住居跡は下端、土坑は上端を計測している。

目 次

例言・凡例

目次

第1章	調査の概要	
	第1節 屋代遺跡群	1
	第2節 松田館	3
第2章	発掘調査に至る経過	4
第3章	調査日誌	5
第4章	遺跡の環境	6
第5章	屋代遺跡群	
	第1節 調査概要	15
	第2節 屋代遺跡群G地区	16
	第3節 屋代寺地区	37
	第4節 大境地区	50
	第5節 大宮地区	61
	第6節 その他の遺物	67
	住居跡一覧表	77
第6章	松田館	
	第1節 調査概要	79
	第2節 まとめ	80
第7章	屋代遺跡群出土古瓦の自然科学分析	85
第8章	考察	
	第1節 屋代寺地区出土の北陸系土器について	105
	第2節 屋代遺跡群出土の竈形土器について	112
第9章	まとめ	126

写真図版

報告書抄録

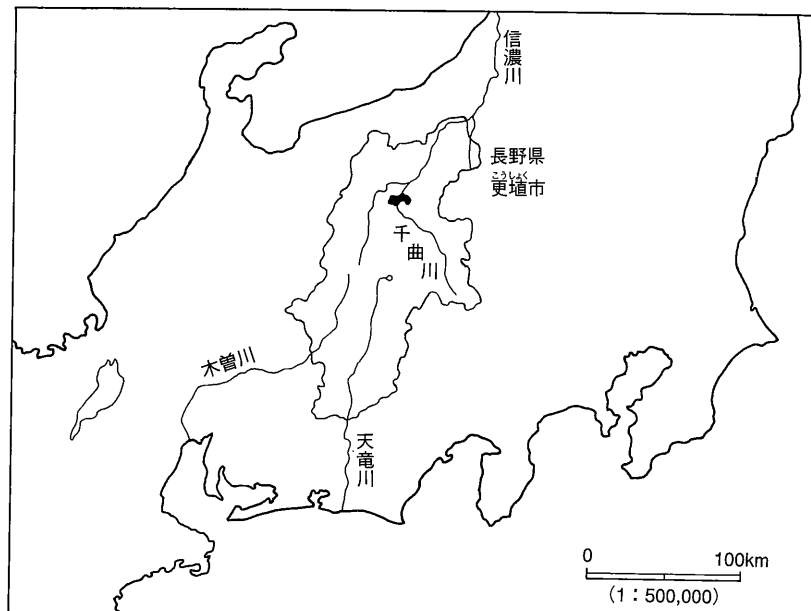
第1章 調査の概要

第1節 屋代遺跡群

- 1 調査遺跡名 屋代遺跡群（市台帳No31）
- 2 所在地及び
土地所有者 更埴市大字屋代・雨宮
個人
- 3 原因及び
事業委託者 学術調査＝重要遺跡範囲確認調査
更埴市（生涯学習課）
- 4 調査の内容 発掘調査 約780㎡
（平成8年度100㎡、9年度180㎡、10年度200㎡、11年度200㎡、12年度100㎡）
- 5 調査期間 発掘調査 平成8年11月21日～12月19日（屋代遺跡群G地区）
平成10年2月18日～3月24日（屋代遺跡群G地区）
平成10年9月17日～10月1日（屋代遺跡群G地区）
平成11年2月15日～3月20日（屋代寺地区）
平成12年2月10日～3月24日（大境地区）
平成12年8月23日～9月27日（大宮地区）
整理調査 平成9年1月6日～平成14年3月22日
- 6 調査費用 14,315,169円（国庫補助金7,150千円、長野県補助2,145千円）
平成8年度 1,000,246円
平成9年度 2,008,745円
平成10年度 3,480,348円
平成11年度 2,806,907円
平成12年度 2,014,535円
平成13年度 3,004,388円
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会
調査指導 岩崎卓也 長野県文化財保護審議会委員
木下正史 東京学芸大学教授
担当者 佐藤信之 更埴市教育委員会
小野紀男 更埴市教育委員会
調査員 矢島洋子 日本考古学協会員
調査補助員 竹内由香里 東京学芸大学学生
土屋哲樹 東京学芸大学学生
宮入文彦 花園大学学生
調査参加者 相沢重人 井出義文 岩崎鷹雄 宇都宮義久 猿渡久人 大井操子
大久保修身 岡田栄子 春日有子 金井順子 金田良一 国光一穂
久保啓子 神戸富子 小林昌子 小松よね 高野貞子 富沢豊延

第1章 調査の概要

	中村文恵	西沢拾太郎	堀内広人	松林深水	松本 晃	宮崎恵子
	宮崎米雄	柳沢悦子	柳沢君雄			
事務局	更埴市教育委員会生涯学習課（平成8～10年度文化課）					
	教育長	下崎文義				
	教育次長	松下 悟（矢島弘夫 竹内幸義 前任者）				
	課長	柳原康廣（西巻 功 坂口寛子 西沢秀文）				
	文化財係長	金井幸二（下崎雅信）				
	文化財係	佐藤信之 小野紀男（矢島宏雄 春原峰子 宮島裕明 堀内美和）				
委託等業者	重機	(株)武田組	西小寺建設(株)	(有)堀内商会	長坂建設(株)	
	機械等	(株)アクティオ長野	測量	(株)光陽測量	報告書印刷	信毎書籍印刷(株)
8 種別・時期	集落跡	弥生時代後半～平安時代				
	寺院跡	平安時代（屋代寺地区）				
	居館跡	中世（G地区、大境地区）				
9 遺構・遺物	弥生時代	竪穴住居跡	3棟			
	古墳時代	竪穴住居跡	43棟			
	古代	竪穴住居跡	17棟	掘立柱建物跡	2棟	
	時期不明	竪穴住居跡	5棟			
	中世以降	堀	2基			
	出土遺物	土器片	弥生時代～中世	コンテナ	50箱	
		金属器・骨角器・石製品等				



第1図 更埴市の位置

第2節 松田館

- 1 調査遺跡名 ^{まつだやかた}松田館 (市台帳No214)
- 2 所在地及び
土地所有者 更埴市大字八幡字森下3033番地
松田孝弘
- 3 原因及び
事業委託者 学術調査=重要遺跡範囲確認調査
更埴市(生涯学習課)
- 4 調査の内容 発掘調査 約100m²
地形測量
- 5 調査期間 発掘調査 平成10年11月4日～11月27日
- 6 調査費用 1,031,166円(国庫補助金500千円、長野県補助150千円)
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会
調査指導 井原今朝男 国立歴史民俗博物館教授
担当者 佐藤信之 更埴市教育委員会
調査参加者 猿渡久人 粕尾正善 国光一穂 久保啓子 小林千春 高野貞子
中村文恵
事務局 更埴市教育委員会生涯学習課
委託等業者 重機 信州建設(株) 測量 (株)光陽測量
- 8 種別・時期 居館跡 中世～近世
- 9 遺構・遺物 中世～近世 堀 1基
土塁 1基
道路状石敷 1基
出土遺物 陶磁器・土器皿 中世～近世 コンテナ1箱

第2章 発掘調査に至る経過

平成2年、(財)長野県埋蔵文化財センター（以下、県埋文と略す）によって、上信越自動車道の発掘調査が更埴市内でも始まり、平成4年には屋代遺跡群を南北に縦断する形で調査が開始された。更埴条里水田址を含めた総調査面積は14万㎡を超え、更埴市域ではかつてない規模のものであり、多くの成果が期待されるものであった。平成6年の調査では、千曲川の旧河道内より全国初の出土となった国府木簡を始めとした多数の木簡や祭祀遺物が出土し、また周辺からは大形の掘立柱建物跡を検出するなど付近に官衙が存在していた可能性が指摘され、注目を集めるようになった。平成5年には、国道403号線土口バイパスが屋代遺跡群を東西に横断する形で建設されることとなり、平成7年から更埴市教育委員会によって調査が開始された。

これら一連の事業に伴って、屋代遺跡群周辺の急速な開発が予想されたため、官衙遺構の範囲確認と保護のための基礎資料を収集するため、平成8年度から国及び県に対し重要遺跡範囲確認調査の補助金申請を行った。平成8年度及び9年度は土口バイパスの調査で大形の掘立柱建物跡が検出された屋代遺跡群G地区の調査を実施した。多くの住居跡が検出されたが、官衙に関連すると思われる遺構は検出することはできなかった。

平成10年度に入り、かねてより文化財所在調査を行っていた武水別神社宮司松田家の屋敷地が、中世の居館をそのまま利用したものである可能性が指摘され、居館遺構の調査を行うこととした。このため、国及び県に対し補助事業の計画変更承認申請を行った。また、屋代遺跡群G地区及び屋代寺推定地となっている屋代寺地区の調査を実施した。G地区の調査では、住居跡の検出はなかったものの、瓦を使用したカマド状の遺構が検出され、注目された。この瓦は屋代寺推定地周辺で出土する瓦とは様相を異にしており、付近に瓦葺きの建物が存在していた可能性がある。屋代寺地点の調査では官衙や寺院に関連する遺構の検出はできなかったが、弥生時代終末期と考えられる住居跡から北陸系土器がまとまって出土した。また平安時代の住居跡からは甕形土器が出土した。東北信地方では初の出土であり注目される。

平成11年度は県埋文の調査により木簡が出土した地点の上流域にあたる大境地区の調査を実施した。検出した遺構は住居跡が主体であり、掘立柱建物跡の検出はあったものの、1棟のみであり、官衙に関連すると思われる遺構は検出できなかった。この他に、以前の調査で確認されていた中世の居館に関連すると思われる溝が検出された。

平成12年度は雨宮坐日吉神社境内となる大宮地区の調査を行った。検出した遺構は古墳時代を中心とするものであり、官衙に関連すると思われる遺構は検出できなかった。弥生時代中期前半と思われる遺物が比較的まとまった量出土しており、注目される。

第3章 調査日誌

平成8年度

屋代遺跡群G地区

- 11月19日 重機により表土除去
- 21日 作業員入り調査開始
- 22日 中世の溝（G区9号溝）掘り下げ
- 26日 住居跡掘り下げ開始
- 12月2日 初雪により調査中止
- 3日 G区9号溝掘り下げ完了
- 9日 359号住居跡掘り下げ完了
- 16日 実測を終え、調査完了
- 19日 埋め戻し完了

平成9年度

屋代遺跡群G地区

平成10年

- 2月10日 重機により表土除去
- 12日 作業員入り調査開始
- 19日 基準点測量実施
- 22日 長野冬季オリンピック閉幕
- 23日 最初の住居跡検出
遺構の切り合いが激しく調査難航
- 3月3日 掘立柱建物跡検出
- 13日 住居跡掘り下げ完了
- 17日 全体写真撮影
- 19日 実測を終え、調査完了
- 24日 埋め戻し完了

平成10年度

屋代遺跡群G地区

- 9月17日 重機により表土除去
- 18日 作業員入り調査開始
基準点測量実施
- 21日 瓦集中区検出
- 10月1日 埋め戻し完了

松田館

- 11月4日 松田館調査開始
土塁にトレンチ設定
- 20日 井原今朝男先生視察
- 26日 堀の部分拡張後埋め戻し

平成11年

- 3月24日 松田館平面図完成

屋代遺跡群屋代寺地区

- 2月15日 重機により表土除去
- 16日 作業員入り調査開始
- 22日 最初の住居跡検出
- 3月17日 14号住居跡から北陸系土器がま
まって出土
- 20日 埋め戻し完了

平成11年度

屋代遺跡群大境地区

平成12年

- 2月10日 重機により表土除去
- 12日 作業員入り調査開始
- 16日 基準点測量実施
- 17日 最初の住居跡検出
- 3月22日 実測を終え、調査完了
- 24日 埋め戻し完了

平成12年度

屋代遺跡群大宮地区

- 8月23日 重機により表土除去
- 24日 作業員入り調査開始
- 28日 最初の住居跡検出
- 30日 基準点測量実施
- 9月13日 1トレンチ調査完了、2トレン
チ調査開始
- 27日 埋め戻し完了

第4章 遺跡の環境

屋代遺跡群は、長野県更埴市の大字屋代及び雨宮に所在しており、海拔355m前後を測ることができる。

上田から北流する千曲川は、善光寺平に入りその流れを北東に大きく変える。その屈曲部には度重なる洪水によって、東西に伸びる広大な自然堤防が形成されている。屋代遺跡群はこの自然堤防上に営まれたものであり、東西3.5km、南北1kmにわたって展開する更埴市最大の遺跡群で、馬口、城ノ内、生仁遺跡等が含まれている。また、自然堤防と善光寺平南縁を画する山地との間には後背湿地が広がっており、一帯は「屋代田んぼ」と呼ばれ更埴市最大の稲作地帯となっている。

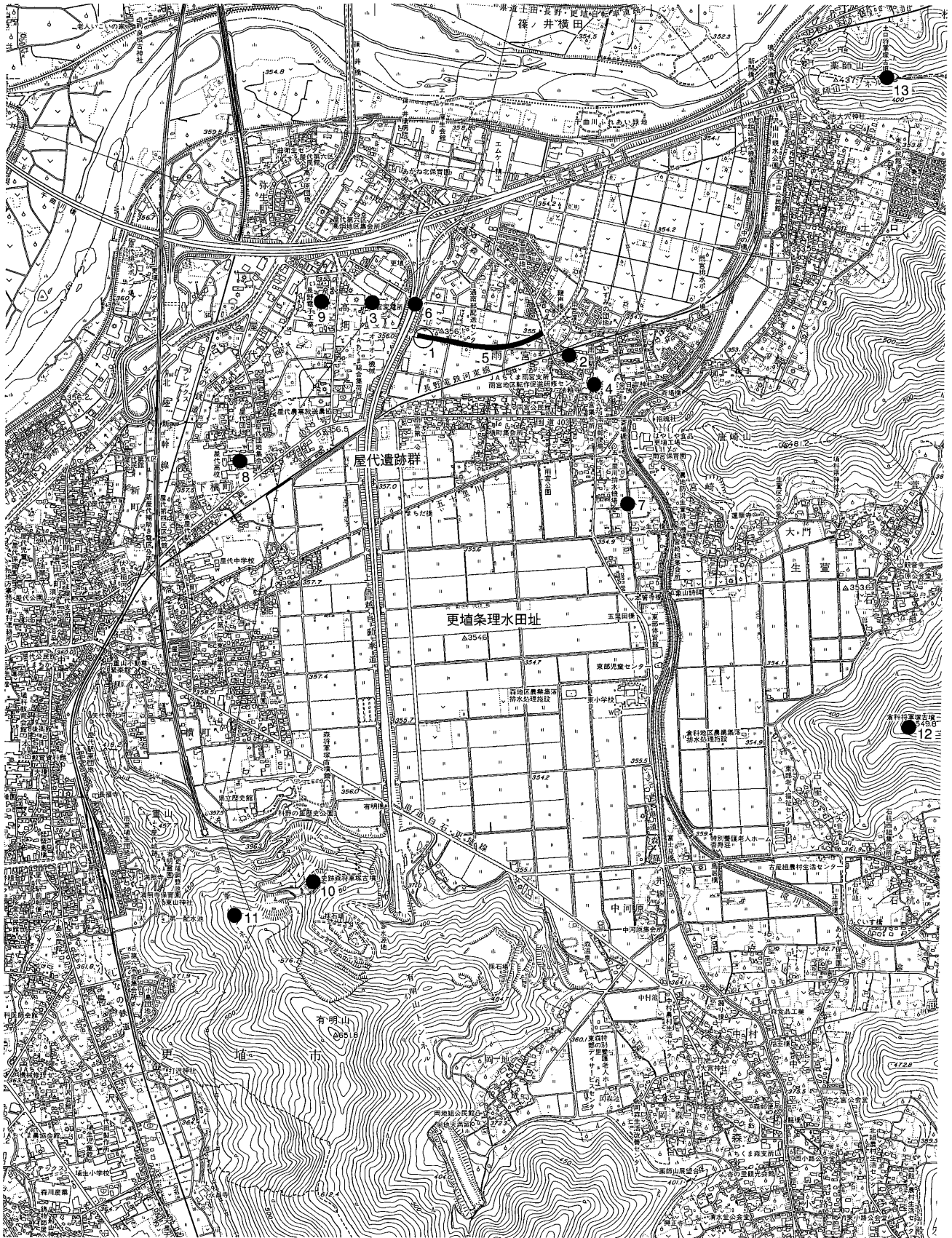
遺跡の存在は、昭和8年に屋代高等学校プール建設に際して、緑釉陶器の水瓶や広口の四耳壺が出土したことから古くから知られていた。また昭和32年には善光寺平初の学術調査が城ノ内遺跡において行われている。上信越自動車道や国道403号線土口バイパス建設等に伴う調査によって、屋代遺跡群からはこれまでに1000棟を超える住居跡が検出されている。遺跡が自然堤防上に展開するのは縄文時代後期の土偶が出土していることから、当該期からと考えられていたが、平成6年、上信越自動車道建設に伴い県埋文によって行われた調査では、地表下約6mから縄文時代中期初頭の住居跡が検出され、さらに数千年遡ることが確認された。

弥生時代の遺構は生仁遺跡を中心として検出されている。昭和63年に行われた調査では、多くの住居跡と共に卜骨を始めとする数多くの骨角器が出土している。

善光寺平南縁を画する山々から後背湿地に向かって伸びる尾根上には、4世紀から5世紀にかけての前方後円墳が集中して築造されている。森將軍塚古墳は4世紀後半の築造と考えられ、全長98mの規模を持つ。復原整備に伴い実施された調査では、古墳の周囲から多くの小形埋葬施設が検出された。倉科將軍塚古墳に隣接する倉科2号墳からは、平成12年に行われた調査によって三角板革綴短甲や蛇行剣など多くの副葬品が出土している。この他、土口將軍塚古墳や有明山將軍塚古墳が、屋代遺跡群や後背湿地を見下ろす尾根上に点在している。また、大穴遺跡からは横穴式石室を内部主体に持つ、終末期の古墳群が検出されている。古墳時代の住居跡は遺跡群内ほぼ全域から検出されており、多くの住居跡が見つっている。高速道地点からは一辺10m近い規模を持つ大形の住居跡も見つかっており、ある程度の有力者が居住していたものと考えられている。

遺跡群全域から住居跡が検出される状況は古代でも同様である。多くの住居跡が見つっているが、検出された遺構・遺物の中には大形の掘立柱建物跡や国府・郡府木簡や木製祭祀具、唐三彩などがあり、遺跡群周辺に官衙が存在していた可能性が指摘されている。城ノ内遺跡の周辺では、中世居館の堀と考えられる溝が複数検出されている。城ノ内とはその字名が示すとおり、一重山に築造された屋代城の居館があったとされる地点であり、一辺100m程の方形区画を持つ溝が検出されている。

後背湿地に広がる屋代田んぼは、ほ場整備が行われる前は地表面に条里的地割を良く残していた。昭和36年から始まった総合学術調査及び高速道の調査成果等から、平安時代の水田区画をかなり踏襲していることが明らかとなった。この条里地割は、新幹線地点付近まで及んでいることが近年の調査で判明している。水田面の上部を覆う砂層は9世紀末に起きたとされる「仁和の大洪水」によって堆積したのと考えられており、その層厚は2mに達する地点もある。

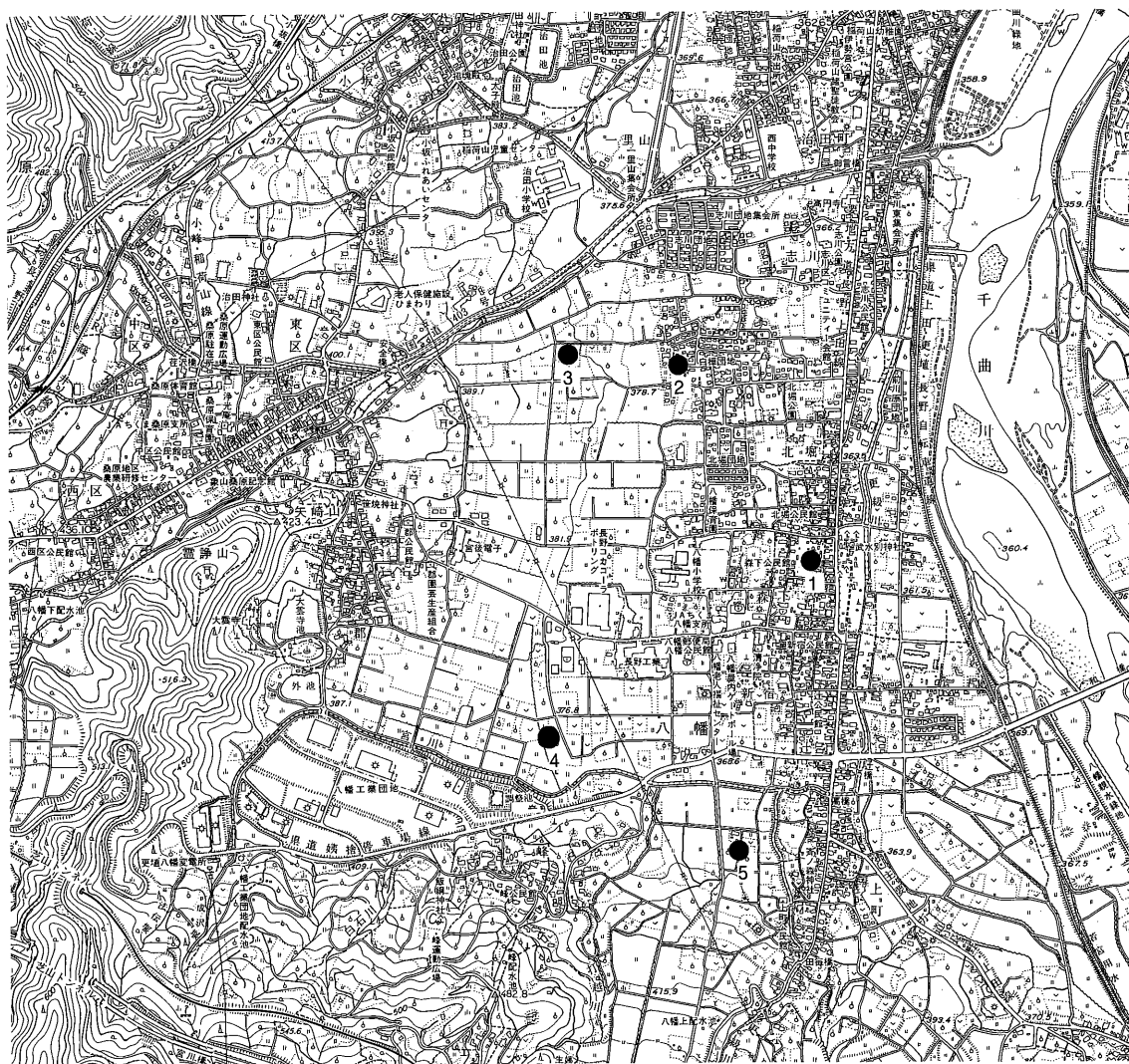


- 1 屋代遺跡群G地区 2 屋代寺地区 3 大境地区 4 大宮地区 5 土口バイパス調査地点 6 木簡出土地点 7 生仁遺跡
 8 馬口遺跡 9 城ノ内遺跡 10 森將軍塚古墳 11 有明山將軍塚古墳 12 倉科將軍塚古墳 13 土口將軍塚古墳

第2図 屋代遺跡群位置図 (1:20,000)

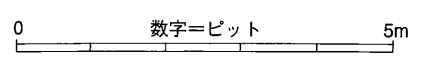
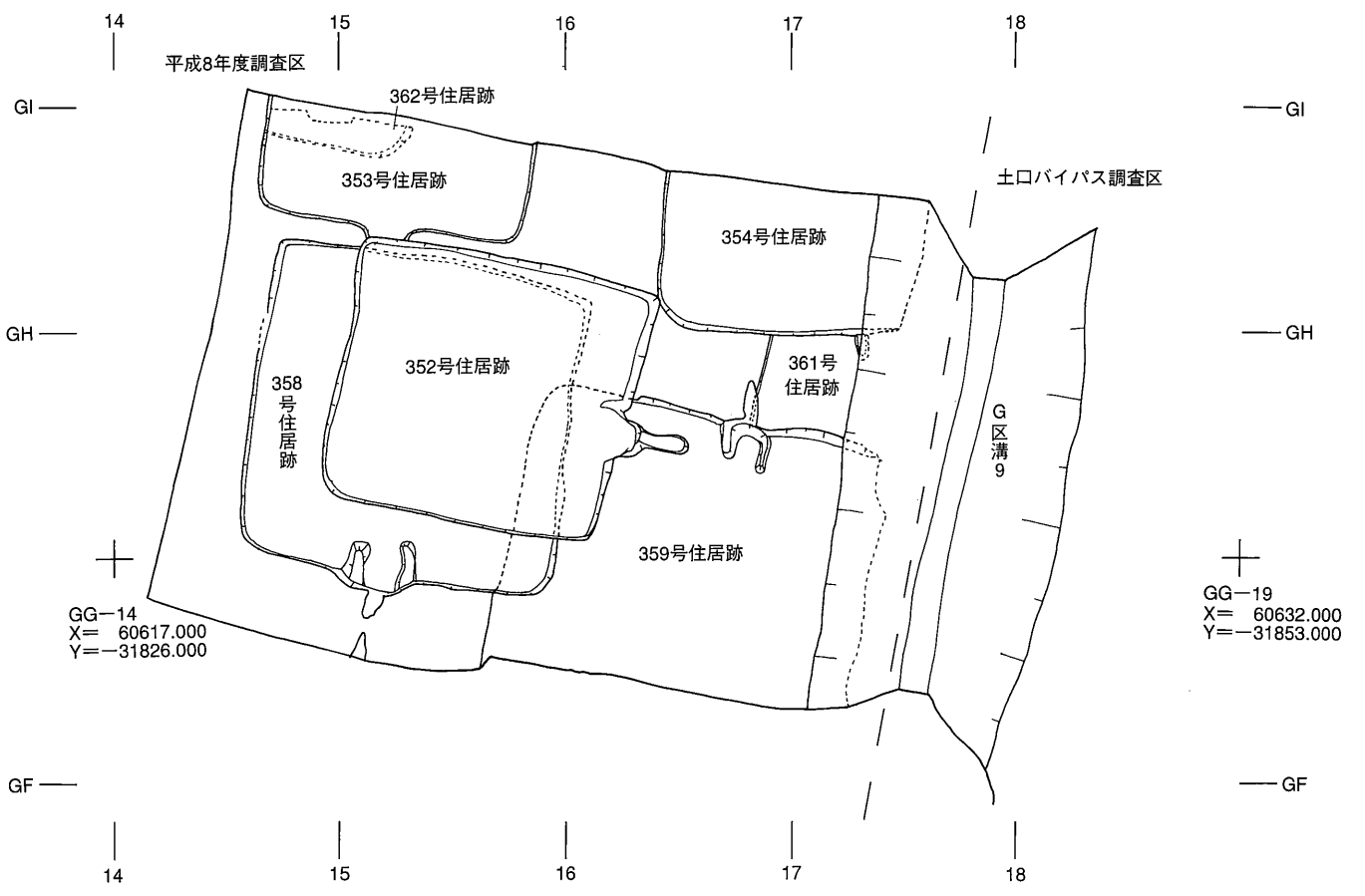
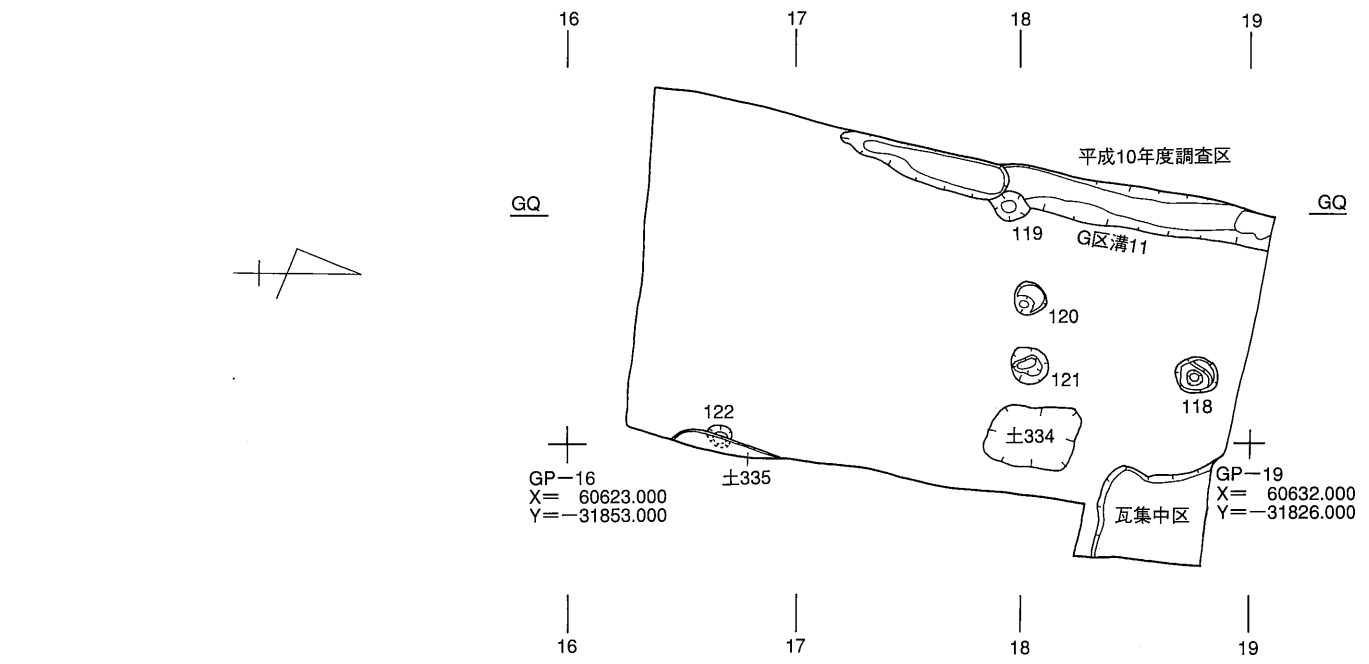
松田館は更埴市大字八幡字森下に所在し、海拔360m前後を測る。延喜式にその名が見える武水別神社の神官屋敷である。周囲に土塁や堀を巡らせた方形の区画を持つ屋敷地であり、中世の居館を利用したものである可能性が指摘されている。屋敷地内の建造物には18世紀代に建造されたと見られるものもあり、近世の神官屋敷の形状を良く残している。神官である松田氏は戦国時代末期には上杉景勝に従い、稲荷山城の城番なども勤めている。武水別神社は軍神として古くから崇敬を集め、川中島の合戦においては上杉輝虎（謙信）が戦勝祈願を行った記録が残されている。また、江戸時代には神宮寺分と併せて200石の朱印地が与えられていた。境内にある摂社高良社本殿は室町時代末の建造と推定されており、長野県宝に指定されている。

松田館の西側に広がる水田地帯は八幡遺跡群として捉えられており、青木遺跡や北稻付遺跡、社宮司遺跡が含まれている。青木遺跡からは瓦塔や布目瓦の出土が知られており、また県埋文により平成12年から始まった国道18号坂城更埴バイパス建設に伴う発掘調査では、社宮司遺跡より全国初の出土となる六角木幢の出土があり注目されている。周辺には「郡」(コオリ)という集落があり、その名から更級郡衙の比定地のひとつとなっている。

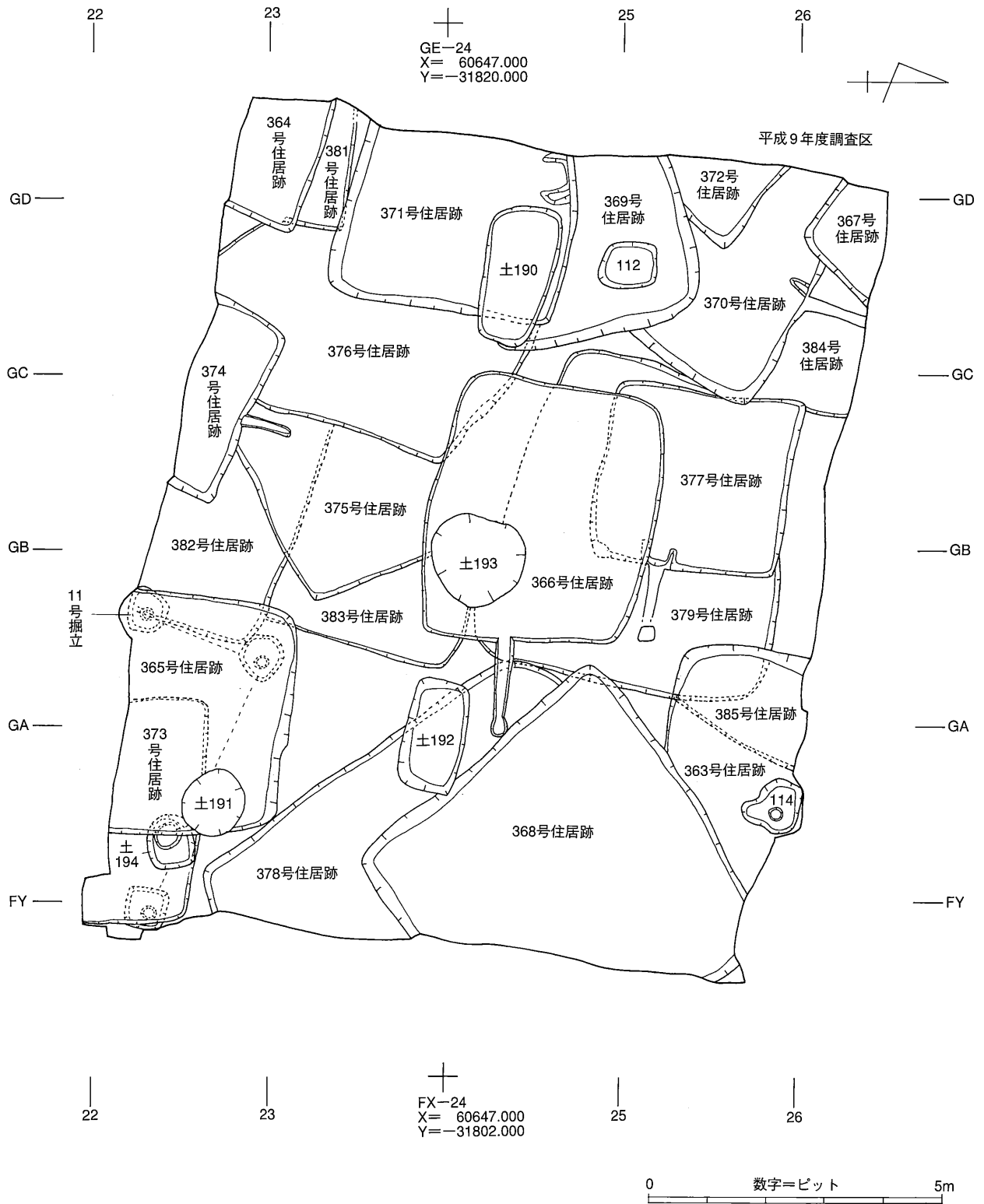


1 松田館 2 青木遺跡 3 北稻付遺跡 4 社宮司遺跡 5 外西川原遺跡

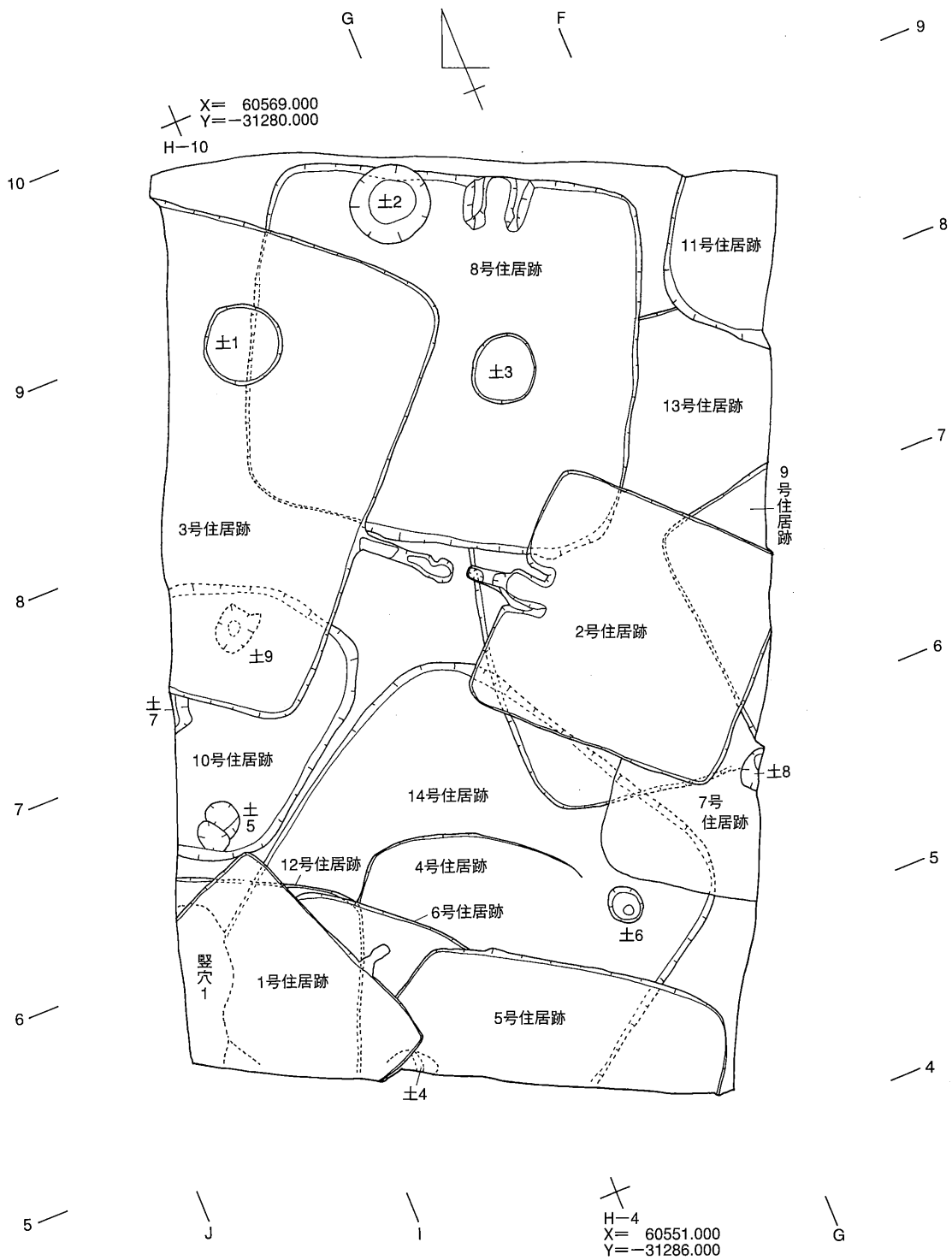
第3図 松田館位置図 (1:20,000)



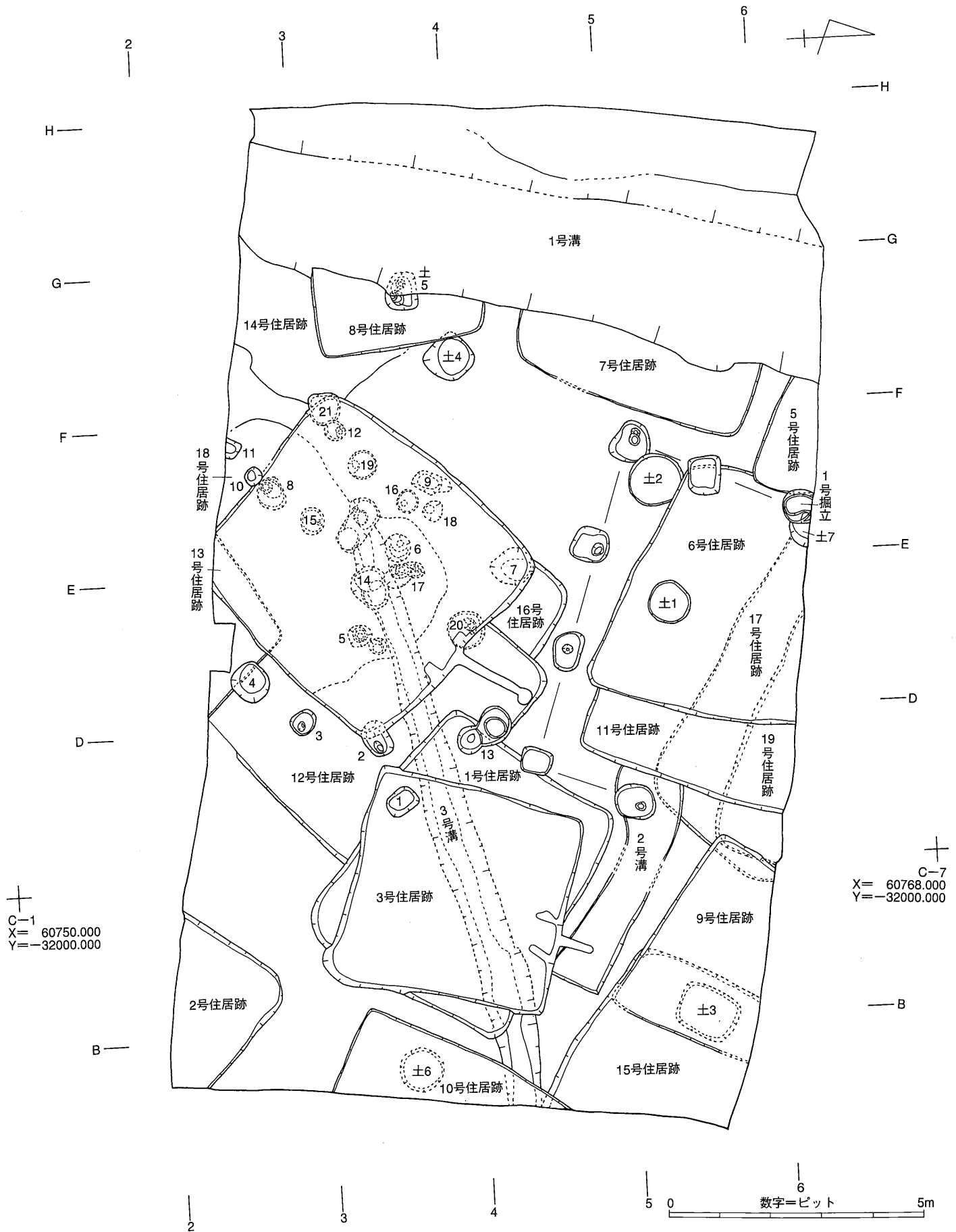
第4図 屋代遺跡群G地区全体図1



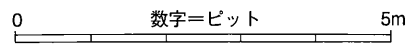
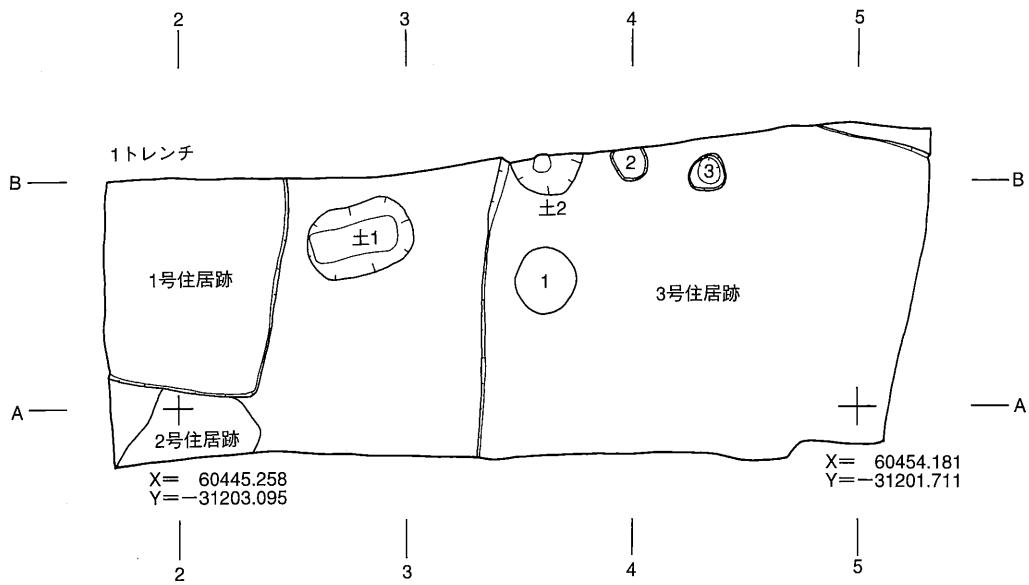
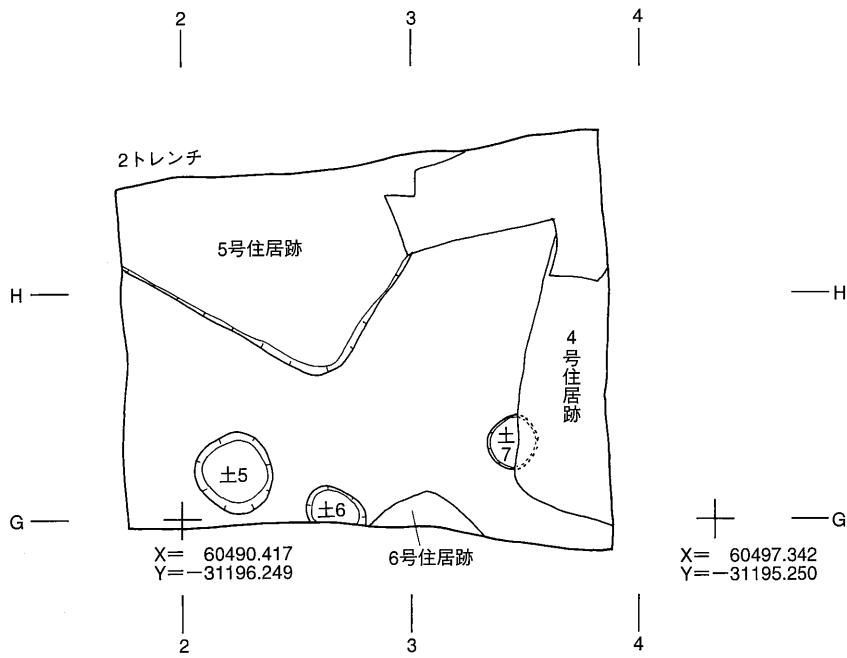
第5図 屋代遺跡群G地区全体図2



第6图 屋代寺地区全体图



第7図 大境地区全体図



第8図 大宮地区全体図

第5章 屋代遺跡群

第1節 調査概要

調査地点は官衙遺跡の範囲確認という目的のため、遺跡群内に点在している。このため、各調査地点においてはそれぞれ個別の遺跡名が付けられている。本報告では一括して屋代遺跡群として扱うため、各遺跡を屋代遺跡群〇〇地区とした。ただし土口バイパスに隣接する調査地点においては、土口バイパスの調査区を使用し、屋代遺跡群G地区とした。以下、各地区毎にその概要を記したい。

屋代遺跡群G地区

土口バイパスの調査によって大形の掘立柱建物跡が検出された地点である。調査は土口バイパスの両側に調査区を設定して行った。国庫補助事業分として検出した住居跡は29棟であるが中央を土口バイパスが通っており周辺で検出されている住居跡は膨大な数になる。平成8年度及び10年度は土口バイパスの南側、9年度は北側の調査を実施した。平成8年度の調査では土口バイパスで検出された大形の掘立柱建物跡（7号掘立柱建物跡）に関連する遺構の検出が期待されたが、中世の溝である9号溝の南側には住居跡が広がっているだけであった。平成9年度の調査では掘立柱建物跡の検出はあったものの、官衙に直接関連すると見られる遺構の検出はできなかった。平成10年度の調査では住居跡の検出はなく、瓦集中区を検出した。出土した瓦は屋代寺地区周辺で出土する瓦とは相違が認められ、付近に瓦葺きの建物が存在していた可能性があり注目される。

屋代寺地区

平成2年度の調査によって布目瓦が多量に出土した屋代寺推定地の調査である。前回の調査では道路状の石敷が検出されていたが、今回の調査では瓦の出土はあったものの寺院に直接関連する遺構を検出することはできなかった。14棟の住居跡が検出されているが、このうち1号住居跡からは竈形土器が出土している。善光寺平では初の出土であり注目される。また、14号住居跡からは弥生時代後期の北陸系土器がまとまって出土した。在地系の土器4点を除いて全てが北陸系のものであり、北陸地方との交流があったことを想定させるものである。

大境地区

木簡が多量に出土した地点の上流約100mの自然堤防上に設定した調査地点である。19棟の住居跡を検出したが官衙に直接関連する遺構を検出することはできなかった。弥生時代後期から平安時代の住居跡を検出しているが遺構の重複が激しく、完掘できた住居跡は多くない。中世の溝である1号溝は城ノ内遺跡周辺で検出されている居館に関連するものであり、一辺100m程の方形区画を持つものであることを追認することができた。

大宮地区

重要無形民俗文化財「雨宮の御神事」で知られる雨宮坐日吉神社境内に設定した調査地点である。2箇所のトレンチを設定して調査を実施した。検出した遺構は住居跡6棟であるが、いずれも古墳時代のもと考えられ、官衙に関連すると思われる遺構は検出できなかった。また、2トレンチからは遺構の検出はできなかったものの弥生時代中期前半の土器が出土している。昭和58年度に行った調査でもある程度まとまった量の土器が出土しており、注目される。

第2節 屋代遺跡群G地区

官衙との関連が想定される掘立柱建物跡が、土口バイパスの発掘調査で検出されているため、その周辺の調査を行った。調査では29棟の住居跡と2棟の掘立柱建物跡が検出されていたが、官衙関連遺構を検出することはできなかった。

1 古墳時代

359号住居跡 (第9～11図、図版2・15)

位置：GG・GH-15～17 規模：不明 平面形：隅丸方形

主軸方向：N-75°-W 新旧関係：352・358号住居跡より古、361号住居跡・G区9号溝より新

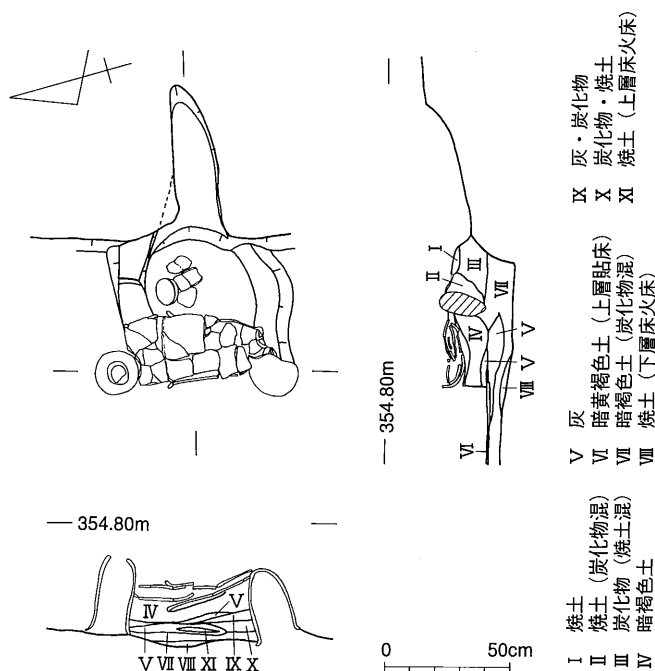
床面：2面検出されている。上層の床は、暗黄褐色土が3cm前後の厚さに貼られており、平坦で良く締まっている。カマドの周辺には焼土が広がった部分がある。下層の床は10cmほどの間層をはさんでおり、黄褐色の堆積土をそのまま床面としている。凹凸はあるが良く締まっている。

壁：北側はG区9号溝に切られており、東側は調査区外にあるため検出できなかった。検出できた部分は顕著で、壁高は上層床面で45cmを測る。

カマド：西壁中央に作られている。袖は粘土製で先端に長胴甕を伏せて立て、その上に2本をソケット状に差し込んだ長胴甕を乗せて焚き口としている。中央部分には河原石が立てられており支脚と思われるが、埋設はされていない。上下両床面ともこのカマドを使用したと思われ、火床が2面確認されているが、袖に立てられた長胴甕の下には小さな掘り込みがあり、当初は石を立てていたものと思われる。煙道は住居側の幅が約30cmと広く、65cmほど伸びて立ち上がる。

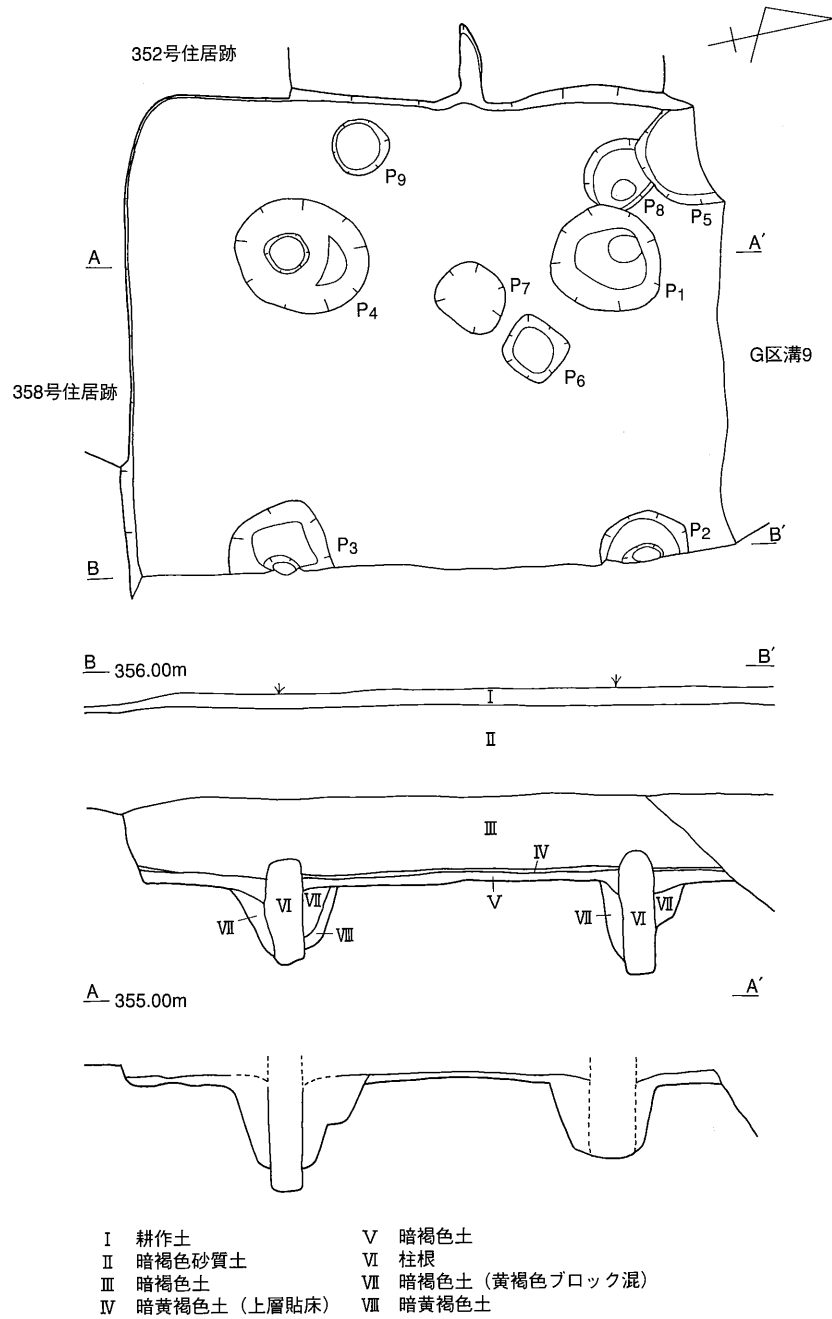
柱穴：主柱穴4本を検出した。柱掘方は直径80～90cmで深さは上層床面から80cm前後で、直径25cmほどの柱痕跡を確認している。柱痕跡は覆土中でも確認できることから、住居は柱が立った状態で廃棄されたものと思われる。下層床面の北西隅には直径90cm深さ20cmほどの掘り込みがあり、貯蔵穴と思われるが遺物の出土などはない。この他、上層床面ではカマドの南側から、焼土と炭化物を多量に含んだ掘り込みが、下層床面の中央付近でも深さ35cmほどの掘り込みを確認している。

遺物：長胴甕を除きいずれも覆土からの出土である。1～4は内面黒色処理された坏で、内外面ともヘラミガキで整えている。口径は12cm以下と小形であり、丸底の底部からわん曲して立ち上がった体部はそのまま口縁部となる。5～8はカマドの構築材として使用された長胴甕で、5はハケ、6・8はナデで7はケズリで整えている。カマド構築材として使用されていたため

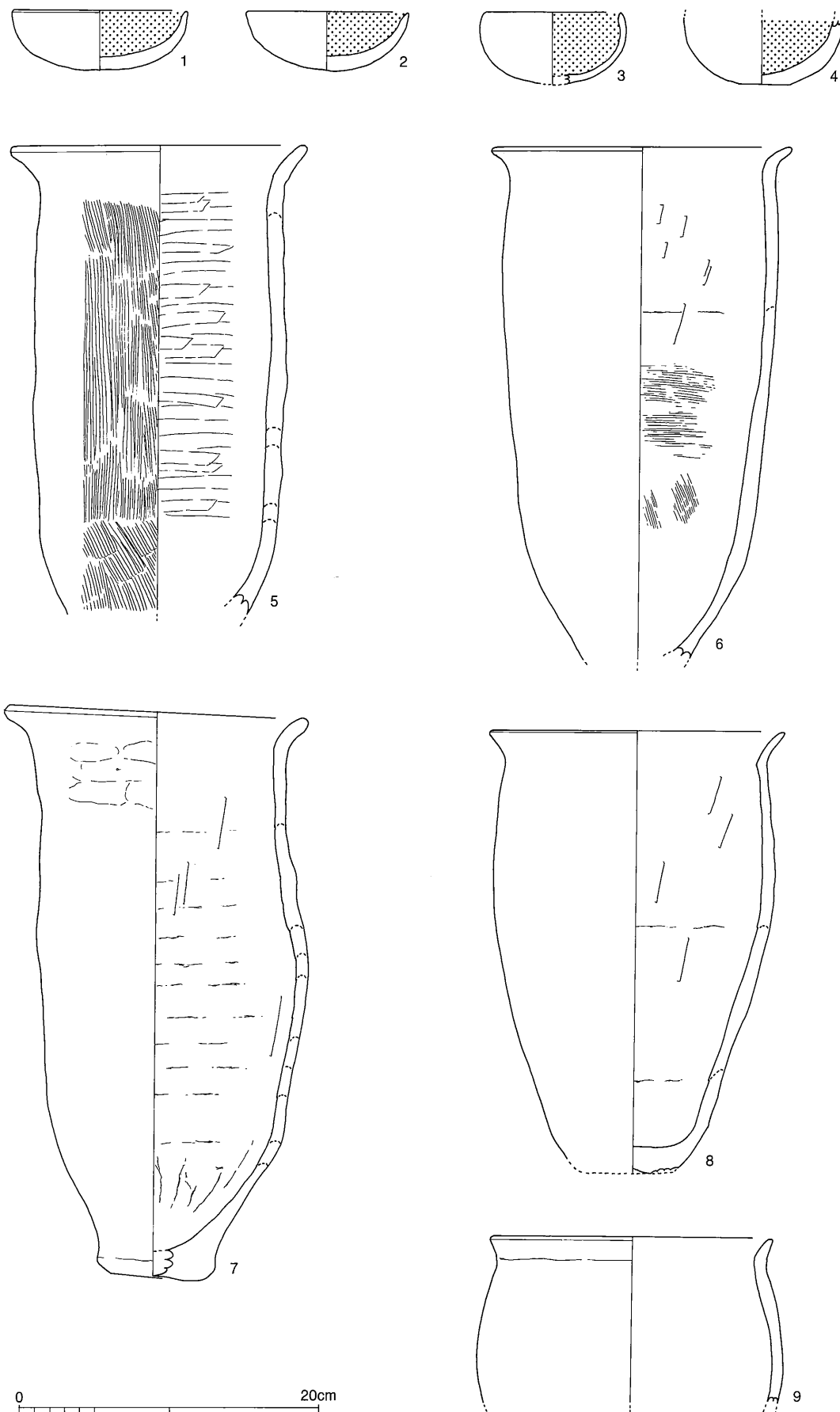


第9図 359号住居跡カマド

か、器面に焼土が付着しているものが多い。9も甕と思われるが、鉢の可能性もある。この他に砥石（第79図9）が出土している。



第10図 359号住居跡



第11図 359号住居跡出土遺物

368号住居跡 (第12・13図、図版2・16)

位置：FY・GA・GB-23~25

規模：535×500

平面形：方形？

主軸方向：N-55°-E

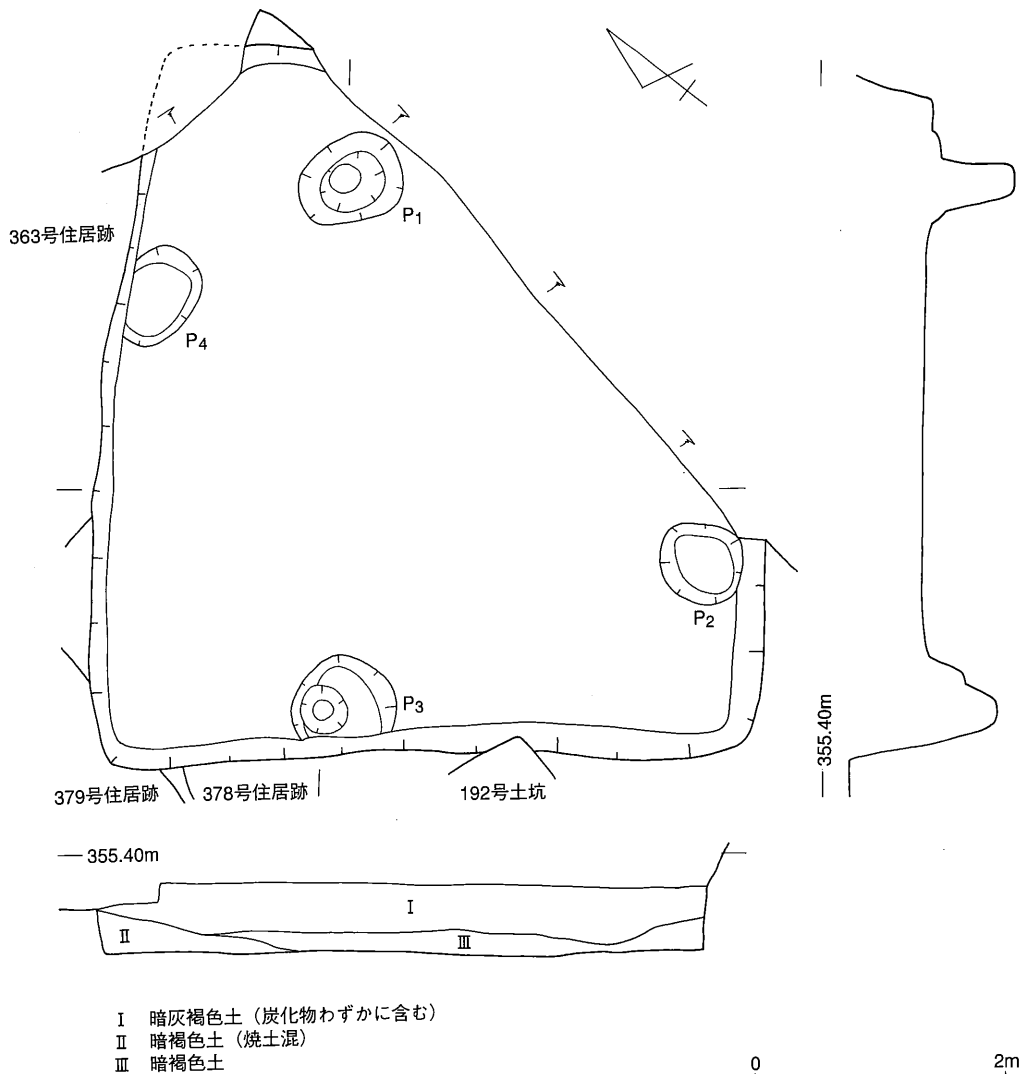
新旧関係：192号土坑より古、363・378・379号住居跡より新

床面：凹凸はあるが顕著で良く締まっている。東側が調査区外にあるためカマドは検出していない。

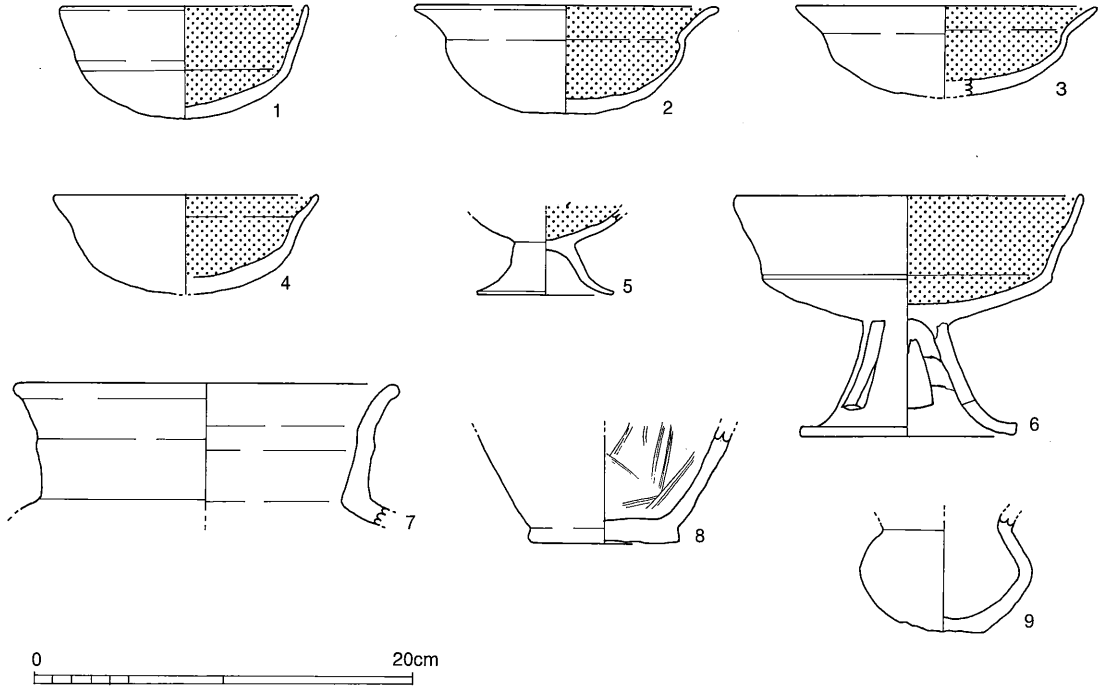
壁：掘り込みは垂直に近く顕著で最大壁高は60cmを測る。

柱穴：4カ所の掘り込みを確認している。P₁・P₂は直径80cm、深さ50cmほどで主柱穴と思われるが、P₁は壁に接しており異なった配列となる。その他の掘り込みは深さ30cm以下で、住居との関係は定かではない。

遺物：1~4は内面黒色処理された坏で、内外面をミガキで整えている。口縁部が大きく外反するものと、体部下半に稜をなし、口縁部が直線的に立ち上がるものがある。5・6は高坏で内面は黒色処理されている。5は脚部が短く、「ハ」の字状に開いている。6は須恵器の模倣で脚部に3カ所の透かしを持ち、体部は稜をなし口縁部が直線的に開く。7はわずかに有段口縁の形状を残した壺の口縁部であり、8は長胴化した甕の底部である。9は小型丸底土器であるがミガキはなく作りも粗い。この他に土錘(第79図5)が出土している。



第12図 368号住居跡



第13図 368号住居跡出土遺物

370号住居跡 (第14図、図版2・16)

位置：GC~GE-25・26

規模：不明

平面形：隅丸方形

主軸方向：N-37°-E 新旧関係：367・369・372号住居跡より古、377・379・384号住居跡より新

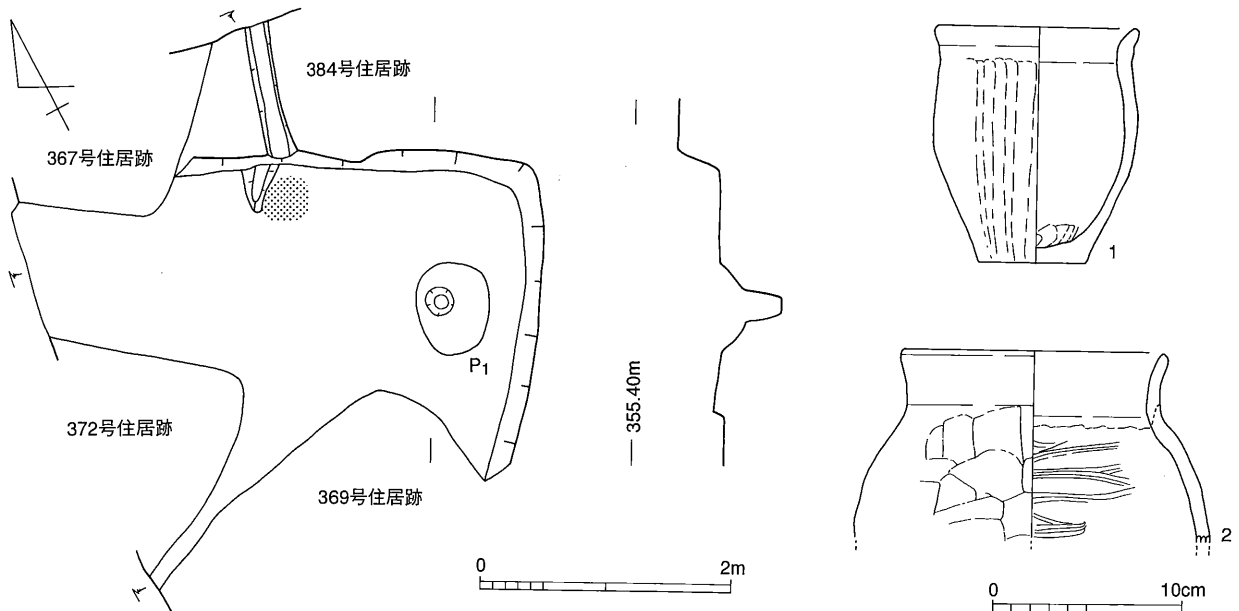
床面：重複する部分が多く、検出できた部分は少ないが、凹凸はあるものの顕著であった。

壁：立ち上がりは明確で、最大壁高55cmを測る。

カマド：北壁中央に作られている。粘土製のカマドであったが、西側の袖と火床をわずかに残して壊されている。煙道は幅約20cmで壁面からやや北に傾いて伸びており、調査区外に続いている。

柱穴：主柱穴と思われる1本を検出した。深さは45cmほどで直径約20cmの柱痕跡が認められる。

遺物：出土遺物は少ない。1は小形甕、2は甕で共に口縁部はわずかに外反しており、外面はケズリで整えている。この他に紡錘車形土製品(第79図1)が出土している。



第14図 370号住居跡及び出土遺物

377号住居跡 (第15・16図、図版3・16)

位置：GB・GC-24・25 規模：305×300 平面形：隅丸方形

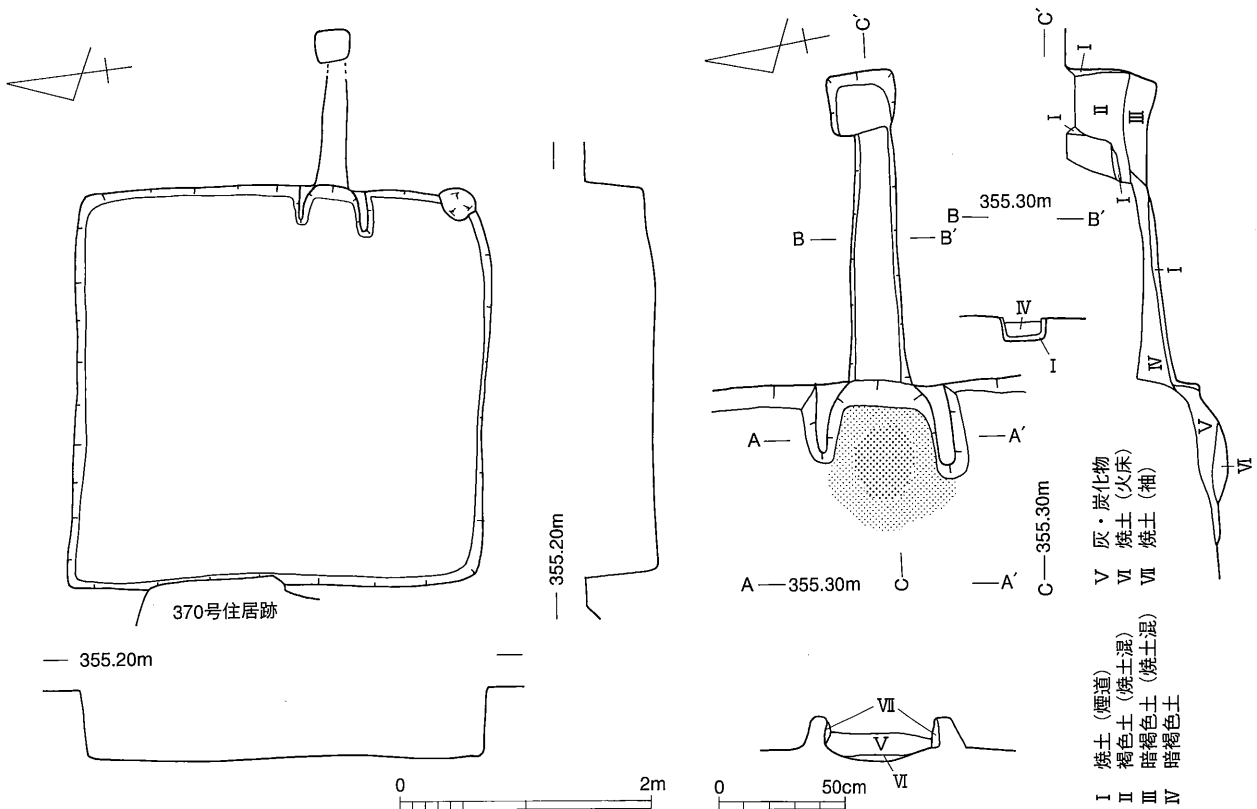
主軸方向：N-100°-E 新旧関係：366・370号住居跡より古、379・384号住居跡より新

床面：床は軟弱であり明確でなかった。カマドの火床を確認したことから、床面を推定したものであり、貼床は認められなかった。

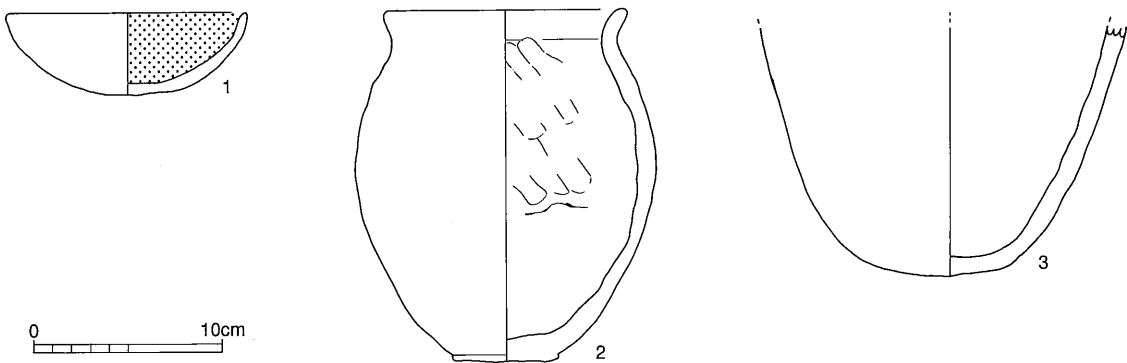
壁：ほぼ垂直に掘り込まれ、最大壁高55cmを測る。

カマド：東壁南寄りに作られている。粘土製で袖は長さ30cmほどが残っており、火床は良く焼けている。煙道は100cmほど伸びて1辺約25cmの方形の煙出しとなる

遺物：1は内面黒色処理された坏で、丸底の底部からわん曲して立ち上がりそのまま口縁部となる。2はナデで整えた甕で、口縁部が短く外反する。3は甕の底部であろう。この他に鉄鎌(第81図2)が出土している。



第15図 377号住居跡及びカマド



第16図 377号住居跡出土遺物

379号住居跡 (第17・18図、図版3・16)

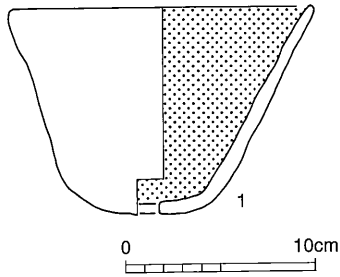
位置：GB～GD-24・25

規模：535×460

平面形：隅丸方形

主軸方向：N-13°-E

新旧関係：363・366・368・377号住居跡・193号土坑より古



第17図 379号住居跡出土遺物

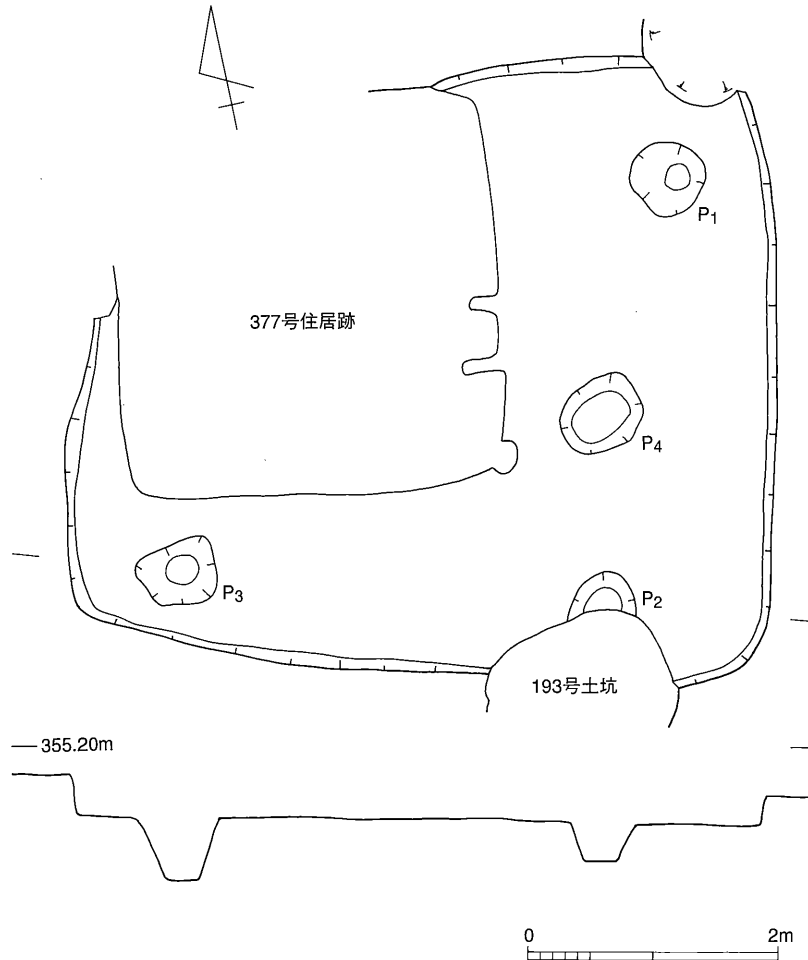
床面：377号住居跡に中央付近を破壊されていたが、残った部分は凹凸があるものの顕著に検出された。

カマド：北壁または西壁にあったものと思われるが、痕跡を残していない。

壁：立ち上がりは垂直に近く顕著で、最大壁高33cmを測る。

柱穴：4ヶ所の掘り込みを検出しており、P₁～P₃は主柱穴で直径60cm前後、深さ30～60cmを測る。住居の壁面から50cmほどの位置に作られており、柱間を広く取った配置となっている。

遺物：出土遺物は少なく、図示できるのは底部に1孔を持ち体部が直線的に開く土師器の甑1点だけである。



第18図 379号住居跡

382号住居跡 (第19・20図、図版3)

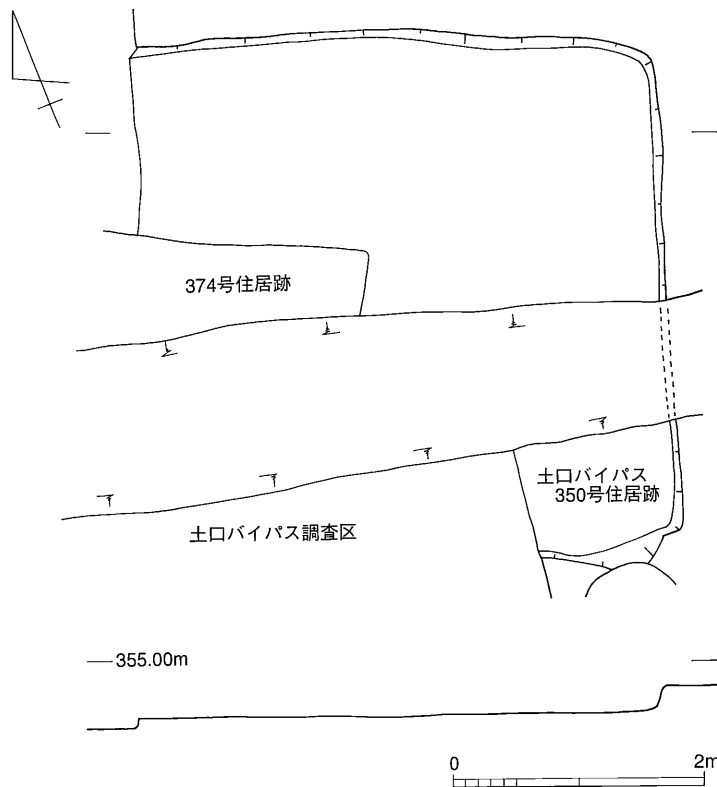
位置：GB・GC-22・23 規模：(410) × 平面形：隅丸方形 主軸方向：N-21°-E

新旧関係：365・374・375号住居跡・11号掘立柱建物跡より古、383号住居跡より新

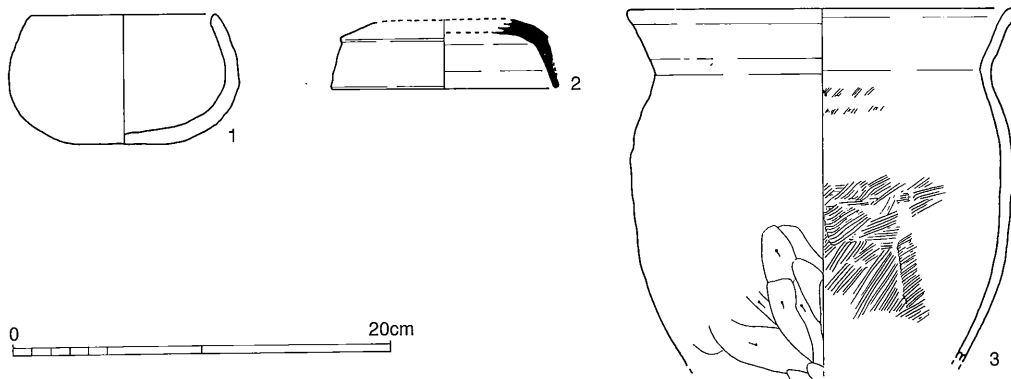
床面：ほぼ平坦であり、顕著な貼床であった。出土遺物などから土口バイパス調査の350号住居跡と同一のものと思われる。

壁：多くの住居跡と重複関係にあるため残りは悪い。最大壁高20cmを測る。

遺物：出土遺物は少ない。1は350号住居跡として調査した部分より出土した土師器坏である。碗形の体部を持ち、口縁部はやや内傾する。2は須恵器坏蓋である。天井部と口縁部を画する稜の突出はほとんど認められない。端部は四角く成形されており、天井部外面には自然釉が付着している。胎土は精選されており、色調は灰白色を呈する。3は土師器甕である。口頸部のくびれは緩やかであり、体部外面をヘラケズリ、内面はハケによって調整される。



第19図 382号住居跡

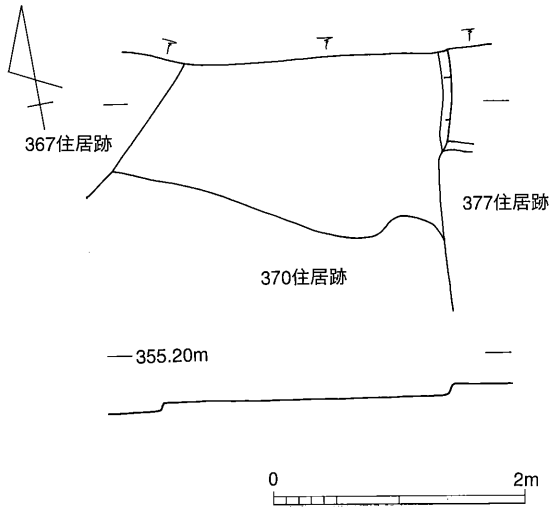


第20図 382号住居跡出土遺物

384号住居跡 (第21・22図、図版16)

位置：GC・GD-25・26 規模：不明 平面形：不明

主軸方向：不明 新旧関係：367・370・377号住居跡より古



第21図 384号住居跡

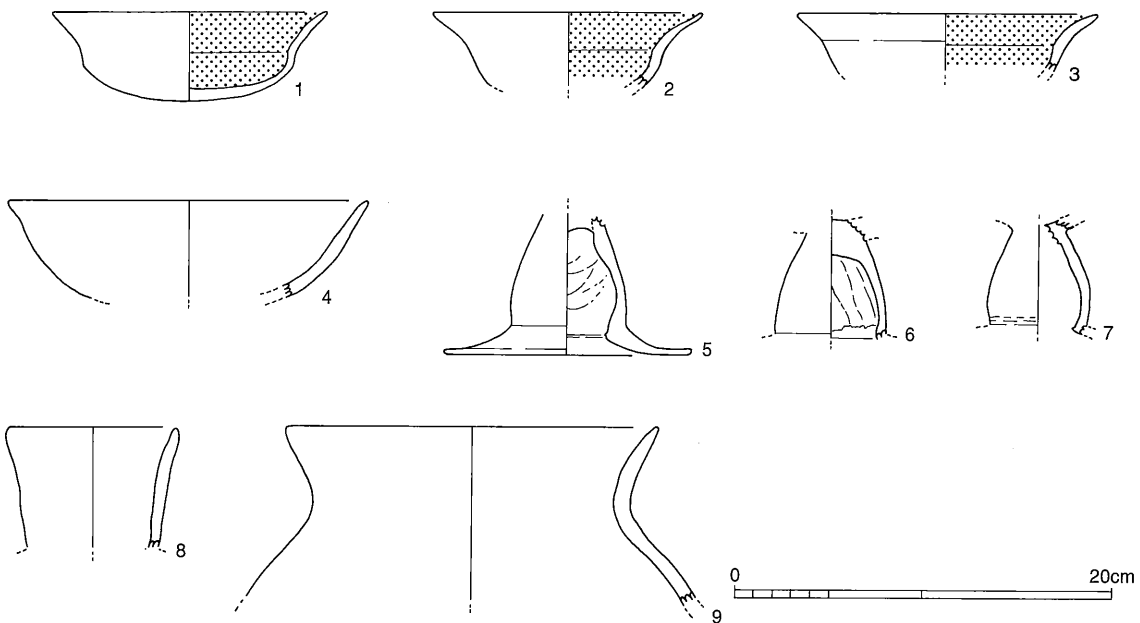
床面：ほぼ平坦であり、顕著な貼床であった。

壁：東壁の一部を検出しただけである。残りは悪く、最大壁高10cmを測ることができる。北側は調査区外へと続いている。

カマド：東壁際から焼土を検出している。調査区の端となっているため明確ではないが、この付近にカマドがあったものと思われる。袖や煙道等は検出することはできなかった。

遺物：住居跡として検出できた部分はわずかであったが、比較的まとまった量の遺物が出土している。1～3は土師器坏である。いずれも内面黒色処理されており、碗形の体部から口縁が大きく開く形態を呈している。また、口縁部と体部の境界には1段の明瞭な稜が認められる。

4～7は土師器の高坏である。4は坏部であり、内外面ともいねいにヘラミガキされる。5～7は脚部である。いずれも胴の張った筒形の脚部から底部が大きく開く形態をとるものである。また、外面はていねいにヘラミガキされている。8は土師器直口壺の口縁部と思われ、内外面ともいねいにヘラミガキされている。9は土師器甕である。最大径を胴部中程に持つ球形胴の甕と思われ、内外面ともいねいにヘラミガキされている。この他に有孔円板 (第82図40) や受部に稜を持ち、そこから口縁部が立ち上がる形態をとる須恵器坏身が出土しているが図化することはできなかった。



第22図 384号住居跡出土遺物

2 古代

352号住居跡（第23図、図版4・16）

位置：GH・GI-15・16 規模：365×345 平面形：方形

主軸方向：N-12°-E 新旧関係：353・358・359号住居跡より新

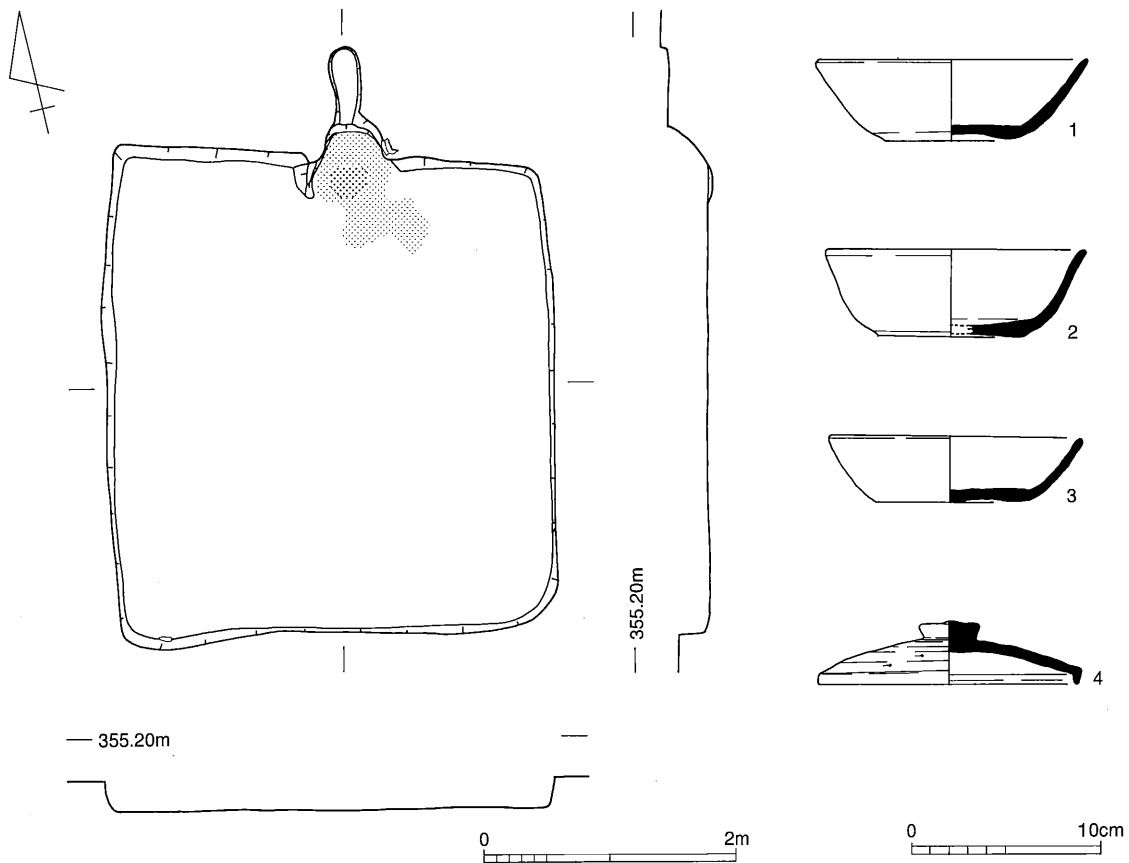
床面：平坦でカマド付近を中心に良く締まっていた。

柱穴：不明

壁：掘り込みは垂直に近く、壁高25cm前後を測る。

カマド：北壁中央付近に作られており、壁面を台形に30cmほど突出させている。西側には粘土製の袖が20cmほど残っていたが、構築材と思われる石などは検出されていない。火床は良く焼けており周囲には炭化物が広がっている。煙道は幅20cmほどであり、やや弧を描くようにして60cmほど延びて立ち上がる。

遺物：出土遺物は少なく、図示できるものはいずれも須恵器である。1～3は坏で比較的底径が大きく、いずれも糸切りであるが、3には回転ヘラケズリが施されている。またロクロナデによる稜は顕著でない。4は坏蓋で扁平なつまみが付く。外面の3/4以上を回転ヘラケズリしている。この他に石製紡錘車（第79図7）、滑石製白玉（第82図12）が出土している。



第23図 352号住居跡及び出土遺物

353号住居跡 (第24・25図、図版4・17)

位置：GI-15・16 規模：355× 平面形：方形

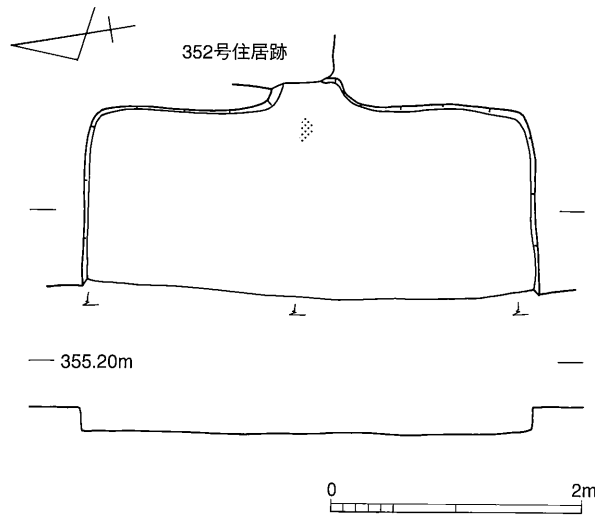
主軸方向：N-100°-E 新旧関係：352号住居跡より古

床面：西側は調査区外にあり平坦であったが、カマド付近を除きあまり締まっていない。

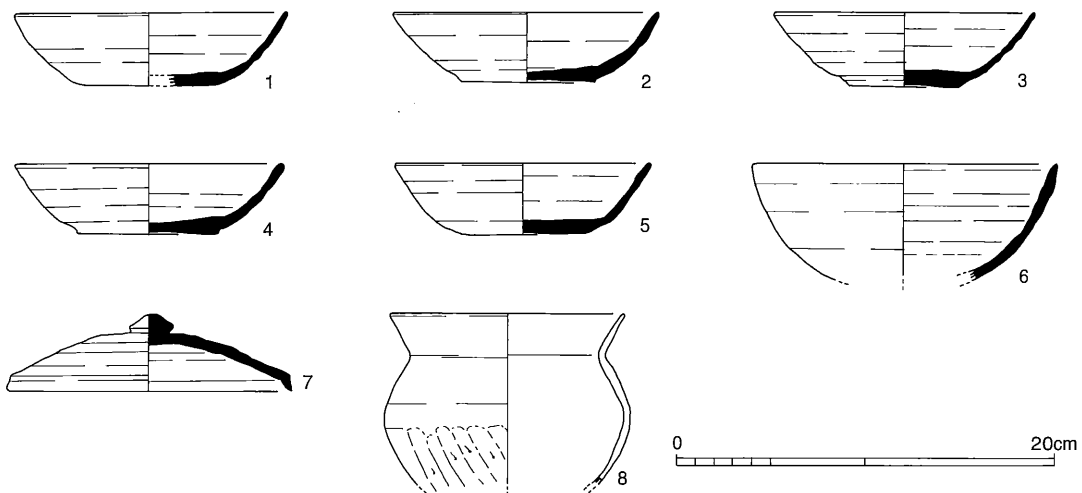
壁：立ち上がりは垂直に近く、壁高は20cm前後を測る。

カマド：東壁中央付近に作られており、壁面を幅50cmほど突出させている。奥行きは20cm前後と思われるが、奥壁を258号住居跡に切られている。袖はなく、内部からは小さな火床と焼土塊が検出されている。

遺物：遺物の多くはカマド内から出土している。1～6は須恵器の杯で、底部はいずれも糸切りと思われるが1・2はヘラケズリ、3・4はナデが糸切りの後に施されている。6を除き底径が大きく、口径に対して器高が小さい。7は須恵器の杯蓋で扁平な宝珠型つまみが付き、端部はやや外に開く。8は土師器の小型甕でロクロ成形の後、胴部下半にヘラケズリを施している。



第24図 353号住居跡



第25図 353号住居跡出土遺物

358号住居跡（第26図、図版4）

位置：GG～GI-14～16 規模：420×410 平面形：方形

主軸方向：N-101°-E 新旧関係：352号住居跡より古、359号住居跡より新

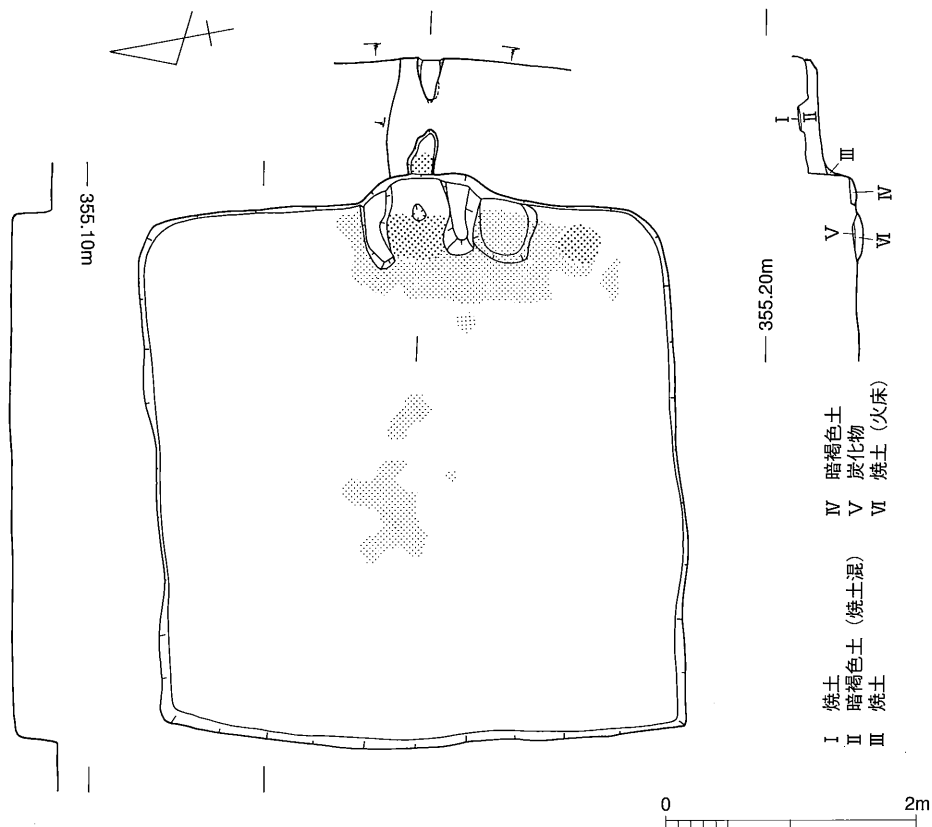
床面：顕著で良く締まっていたが凹凸が激しい。中央には床面からやや浮いて炭化物が見られる。また南東隅の床面直上からは焼土が検出されている。

壁：ほぼ垂直に立ち上がっており壁高30cm前後を測る。

カマド：東壁中央付近に作られている。壁面を奥行き20cm、幅100cmほど突出させており、幅約50cmの燃焼部をはさんで、長さ50cmほどの袖が粘土で作られている。燃焼部からは良く焼けた火床が検出されており、火床の奥には支脚を埋設したと思われる直径10cmほどの掘り込みがある。カマドの周囲には炭化物が広がっている。

柱穴：柱穴は検出されなかったが、カマドの南側には深さ約20cmの掘り込みがあり、カマドに付属する施設と思われる。

遺物：出土遺物は少なく、図示できるものはないが、ロクロ成形された小型甕や内面黒色処理された土師器の杯などが出土している。



第26図 358号住居跡

366号住居跡 (第27・28図、図版5・17)

位置：GB・GC-22~25 規模：430×365 平面形：長方形

主軸方向：N-98°-E 新旧関係：193号土坑より古、375~379・383号住居跡より新

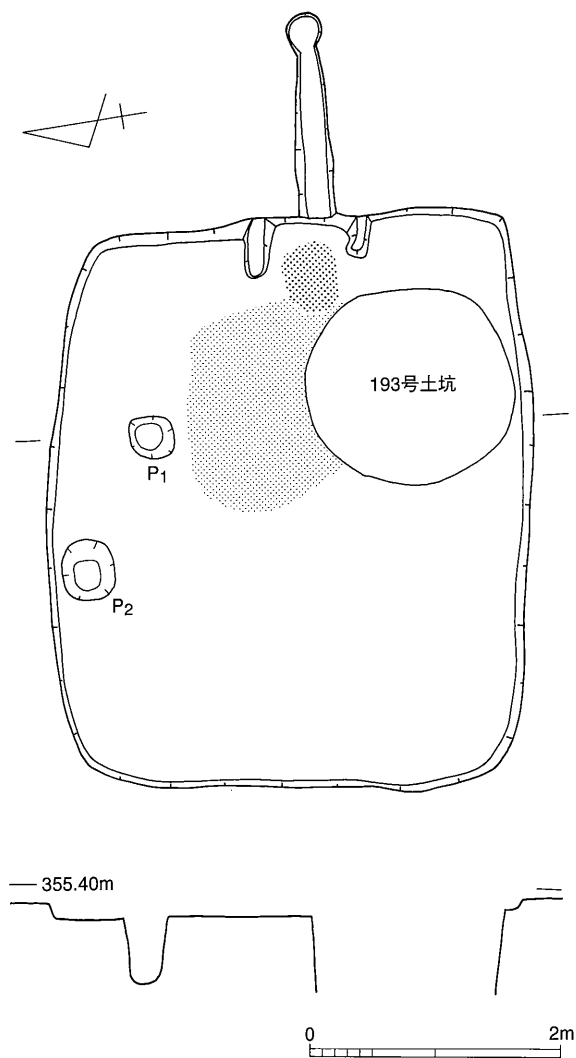
床面：凹凸はあるが顕著に検出されている。

壁：やや胴張りとなり壁高は10cm前後しか残っていないが、明確に検出されている。

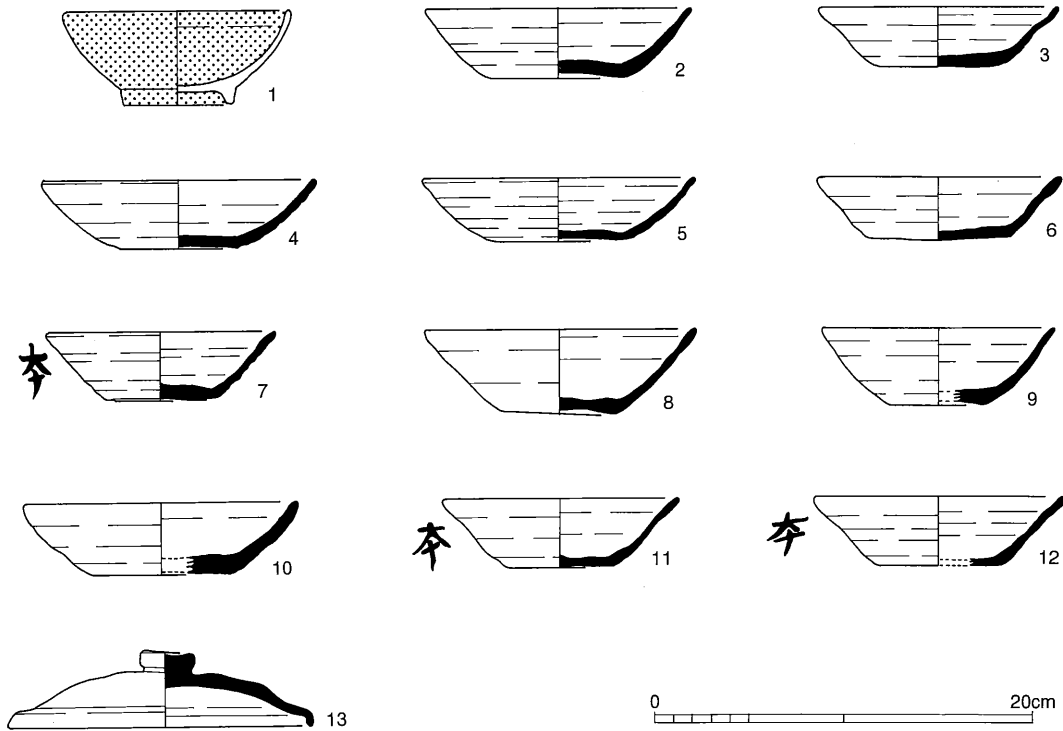
カマド：東壁中央付近に作られている。粘土製の袖は壁面からほぼ垂直に60cmほど伸びており、炭化物が焚き口から住居中央付近にまで広がっている。煙道は壁面と垂直に150cmほど水平に伸びている。

柱穴：住居の北側から2カ所の掘り込みを検出している。深さは共に50cmを超えており、掘り込みも顕著であるが、一定の配置を示しておらず住居との関係は定かではない。

遺物：カマド付近から集中して出土している。1は内外面黒色処理された土師器の椀で、全面にいいいなミガキが施されており、口径12cmと小形である。2~12は須恵器の杯で底部はすべて糸切痕を残している。体部が直線的に開く口径13~14cmの物が多い。7・11・12には「本」と判読できる墨書がある。13は須恵器の杯蓋で扁平なつまみが付き、端部は明瞭な稜をなさずに屈曲している。この他に土錘 (第79図4)、砥石 (第79図10) が出土している。



第27図 366号住居跡



第28図 366号住居跡出土遺物

373号住居跡 (第29・30図、図版5・18)

位置：FY・GA・GB-22 規模：370× 平面形：方形

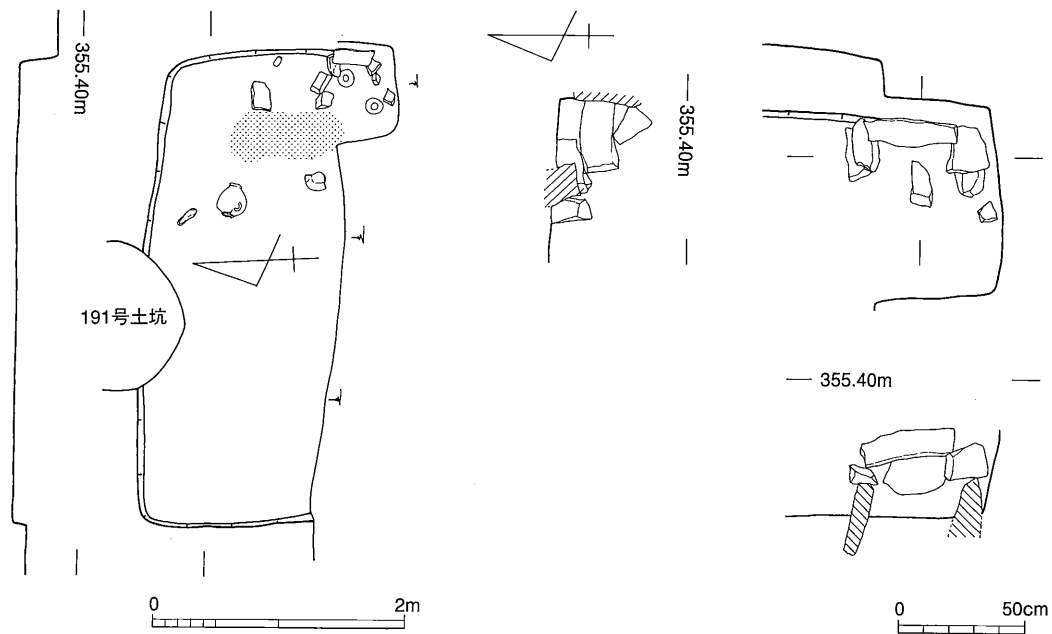
主軸方向：N-95°-E 新旧関係：365号住居跡・191号土坑より古、11号掘立柱建物跡より新

床面：南側は調査区外にあり検出できなかった。床面はほぼ平坦であり、締まりはなかったものの黄褐色土を貼った顕著なものであった。

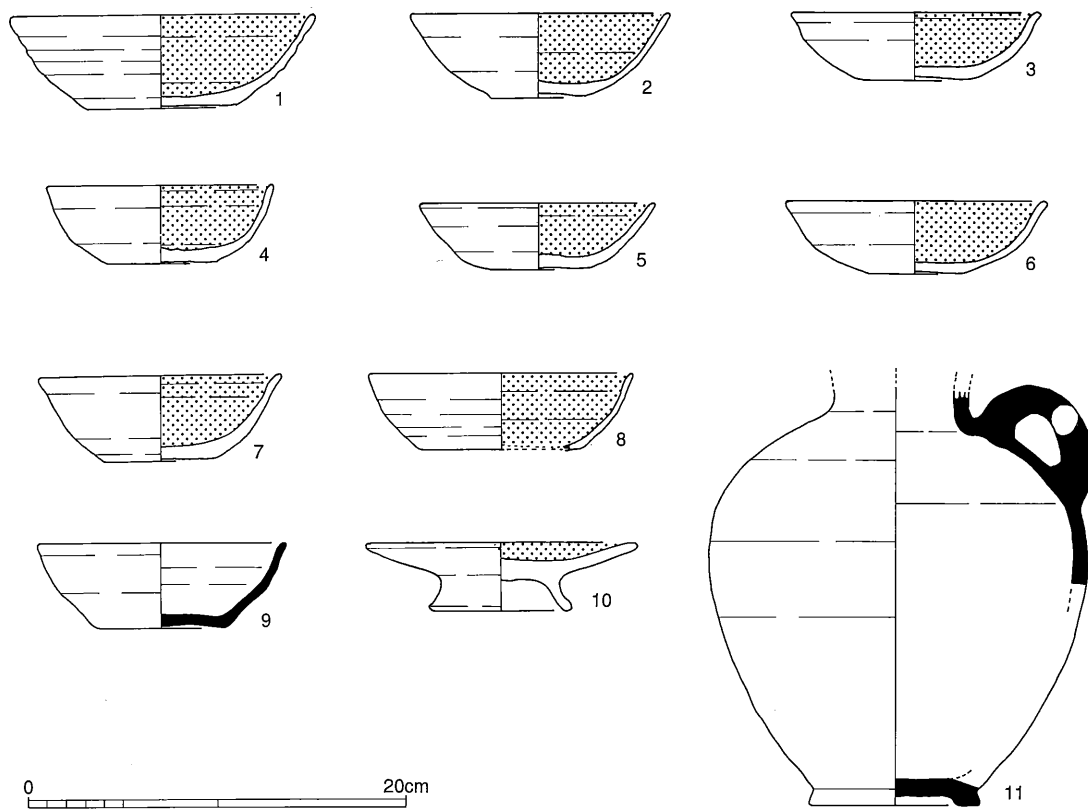
壁：明確に検出することができたが、残りは悪い。最大壁高30cmを測るが大部分が10cm以下となっている。

カマド：西壁ほぼ中央付近と思われる位置から検出した。石組みのカマドであり、粘土の使用は確認できなかった。袖は角礫を2段に積んでおり、その上に架構石を乗せているが懸口の部分は失われている。カマドのほぼ中央には支脚石が埋められているが、周囲はあまり焼土化していない。前面には炭化物が広がっている。煙道は調査区外になるため検出できなかった。カマドの周辺から検出している角礫は、カマド構築材であったものと考えられる。

遺物：カマドの周囲を中心として比較的まとまった量の遺物が出土している。1～8は土師器坏である。いずれも内面黒色処理されており、底部には回転糸切痕を残している。1の口径が16cmとやや大形の他はいずれも13cm前後の口径を測り、口縁部が短く外反する形態をとるものが多い。9は須恵器坏である。焼成の甘い軟質須恵器であり、底部には回転糸切痕を残している。10は足の長い高台が付いた土師器皿である。11は須恵器の把手付長頸壺である。頸部の付け根で意図的に打ち欠かれたものと思われる、何らかの形で再利用されていたものと思われる。この他に土錘(第79図6)が出土している。



第29図 373号住居跡及びピカマド



第30図 373号住居跡出土遺物

11号掘立柱建物跡 (第31図、図版5)

位置：FY・GA・GB-22 規模：2間(470)× 平面形：長方形

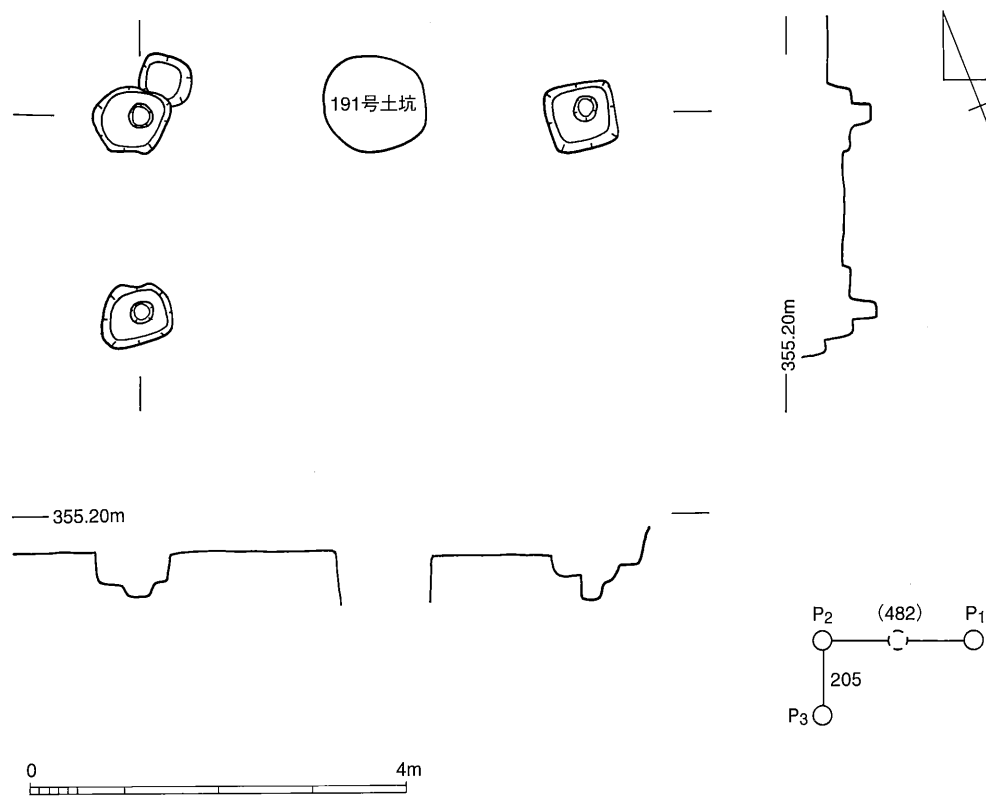
長軸方向：N-24°-E 新旧関係：365・373号住居跡・191号土坑より古、382号住居跡より新

柱掘方：柱穴3基を検出しただけであり、大部分は調査区外になるものと思われる。梁行2間以上の建物と思われるが、中央の柱穴は191号土坑に破壊されており検出できなかった。桁行については不明である。柱掘方は一辺60~70cmの方形を基本としており、検出面からの深さは最大60cmを測るが、上部を住居跡によって削られており、ほとんど残っていない。掘方の中からは直径約20cmの柱根跡を検出している。

柱間：梁行はP₁~P₂間で482cmを測ることができる。191号土坑の部分に柱があるものと仮定すると240cm前後の柱間となる。桁行は205cmを測る。

遺物：掘方内から土器の小破片が出土しているが図化できたものはない。

重複する382号住居跡を破壊し、373号住居跡によって破壊されていることから6世紀中葉から9世紀中葉にかけての建物跡と思われる。



第31図 11号掘立柱建物跡

194号土坑 (第32図、図版6・18)

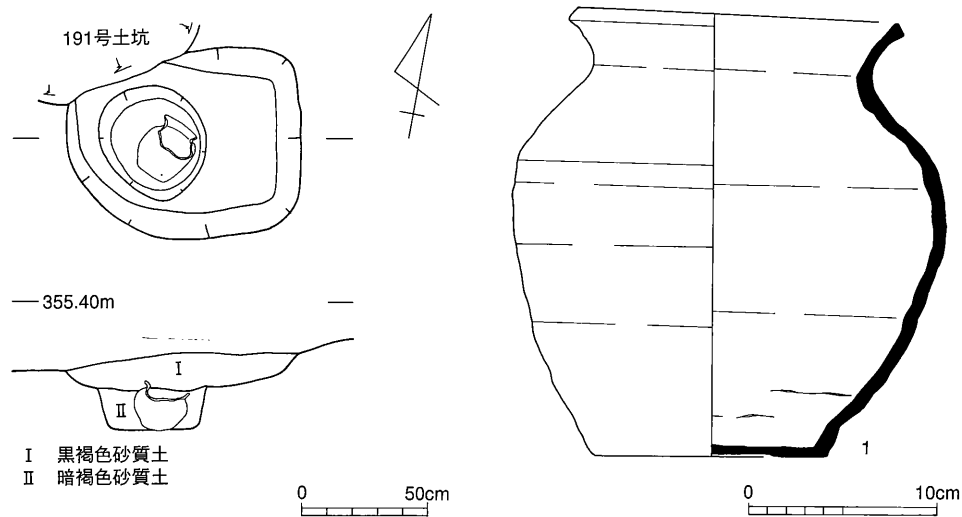
位置：GA-22 規模：95×75 平面形：隅丸長方形

長軸方向：N-80°-E 新旧関係：365号住居跡・191号土坑より古、373号住居跡より新

構造：長方形の掘方のやや西寄りに直径約45cmの円形の掘り込みが認められ、その中に須恵器短頸壺が横位の状態で埋設されていた。検出面からの深さは最大30cmを測る。

遺物：埋設されていた須恵器短頸壺1点のみである。ほぼ完形に復原することができる。口縁端部は面取りされており、内外面にはロクロナデによる稜が認められる。

埋設されていた土器の状況から土坑墓の可能性が高いものと思われるが、土器の中からは何も出土しなかった。重複する373号住居跡を掘り込んで作られていることと、覆土が「仁和の洪水砂」であることから、9世紀末前後の土坑と思われる。



第32図 194号土坑及び出土遺物

瓦集中区（第33～37図、図版6・18・19）

位置：GP-18 **規模**：不明 **平面形**：隅丸方形？

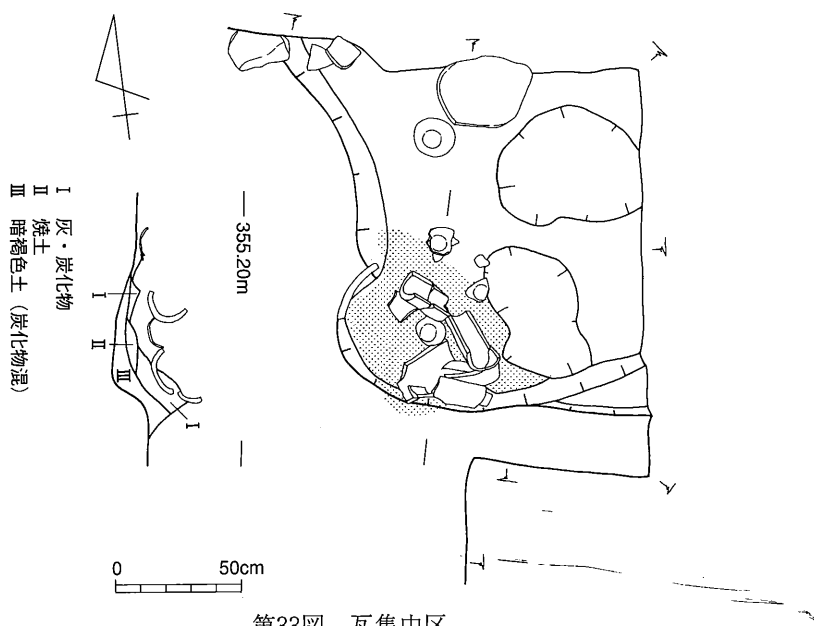
主軸方向：不明 **新旧関係**：なし

構造：北側及び東側が調査区外となるが、方形のプランを持つものと思われる。住居跡の可能性もあるが、明確な貼床が検出されなかったことと、壁の立ち上がりが緩やかであることから瓦集中区とした。床面には凹凸が認められ、南西の隅から炭化物と共に遺物がまとまって出土した。検出面からの深さ最大20cmを測ることができる。厚く堆積した炭化物の中から平瓦2点と丸瓦4点などが出土している。平瓦を袖とし、その上に丸瓦を架構して焚口としたカマドであると見ることもできる。これをカマドであると仮定すると住居跡の隅に作られたものになる。出土した瓦が二次焼成を受けていることから、何らかの火を用いた施設であったとすることができるだろう。また、遺構の周囲からは柱痕を持つピットが検出されており、これらを一連の遺構とすると何らかの囲屋の構造があった可能性が指摘できる。

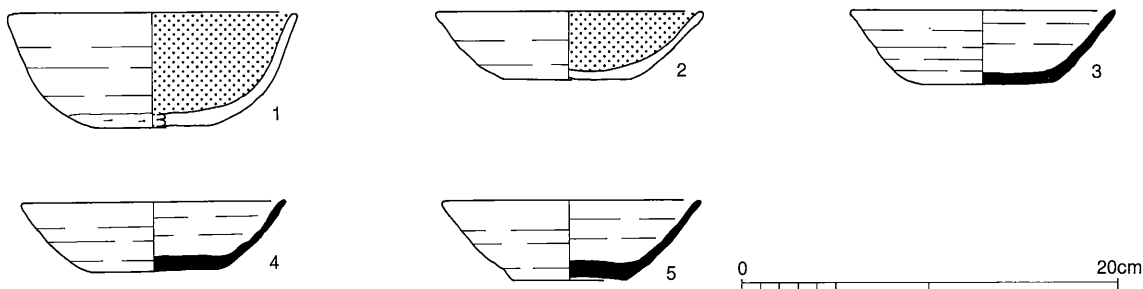
遺物：瓦が出土した地点の周辺からまとまって出土している。1、2は土師器坏である。1は内面黒色処理され、底部は切り離し後、回転ヘラケズリが施されている。また、口径に比して器高の高い椀形の形態を呈している。2も内面黒色処理されるが、底部には回転糸切痕が残っている。3～5は須恵器坏である。いずれも底部には回転糸切痕を残し、体部が直線的に伸びる形態を呈している。口径は14cm前後で一定している。6、7は平瓦である。6は凹面に布目を残しているが、ハケ状の工具によってナデ消されている。器厚が約3.5cmと厚いものであり、屋代寺推定地周辺で出土する瓦と同種

のものであろう。7は凸面に縄目を残しており、また器厚も約1.5cmと薄く、6とは異質な感じを受け
る。縄目及び凹面に残っている布目はハケ状工具によるナデが施されている。8~11は丸瓦である。
いずれも凹面には布目を残しており、凸面はヘラケズリが施されている。また凹面の布目はハケ状工
具によるナデが施されている。

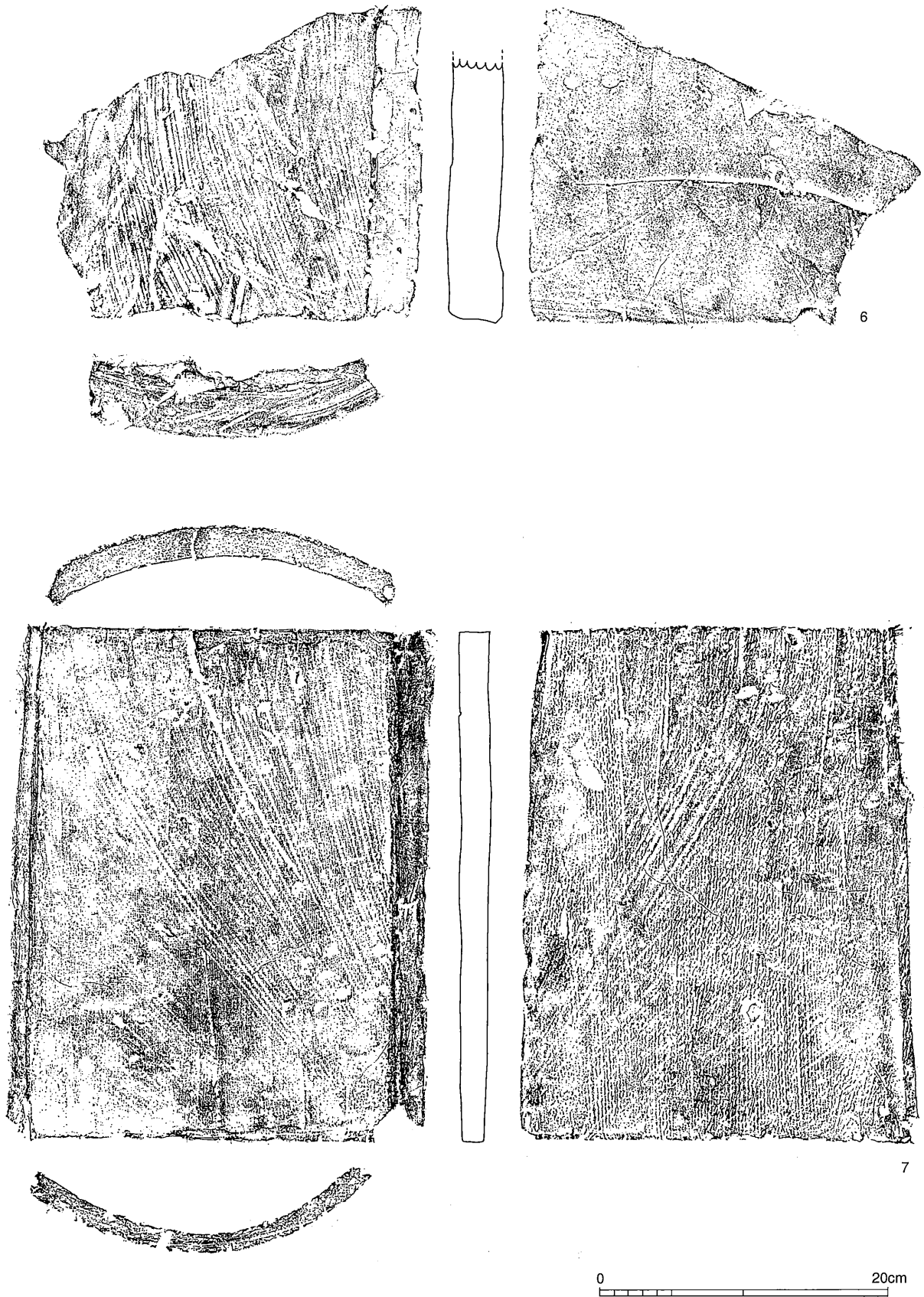
本遺構から出土した坏の中には、底部に回転ヘラケズリが施されているものが認められることから
8世紀後半を前後する時期のものと思われる。出土した瓦にはいわゆる「屋代寺瓦」とされるもの
も含まれていたが、これとは成形技法の異なる瓦が出土している。このことから、調査地周辺に屋代
寺とは別の瓦葺の建物が存在していた可能性が指摘できるだろう。ただし、両者の瓦には布目をハケ
状工具でナデ消すという調整技法上の共通性が認められるため、何らかの関連性を持ったものでは
あると言えるだろう。



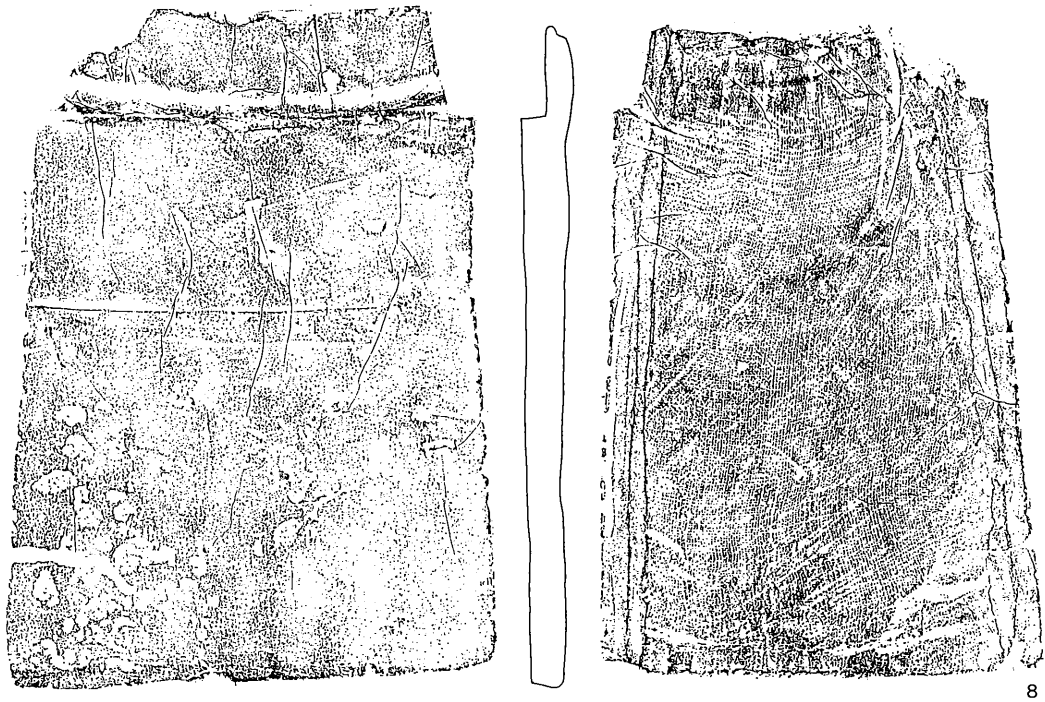
第33図 瓦集中区



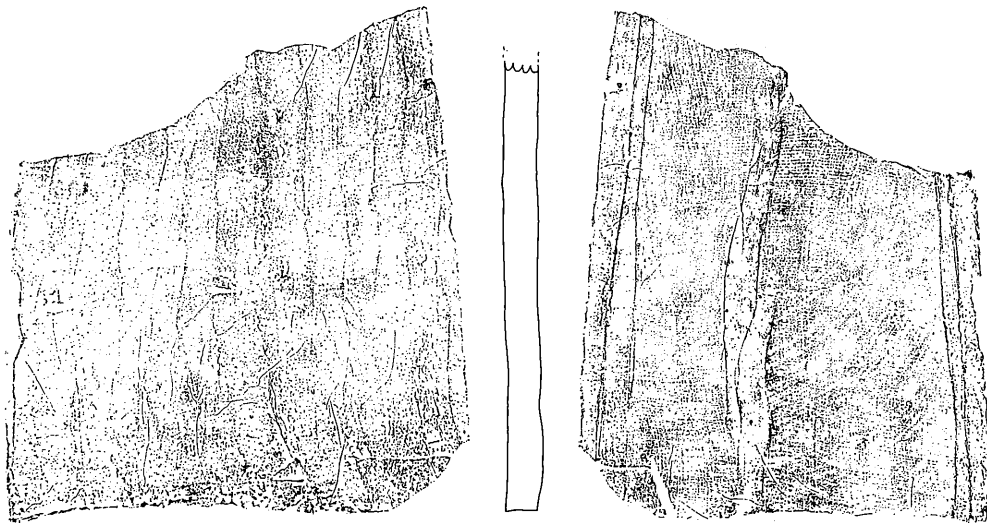
第34図 瓦集中区出土遺物 1



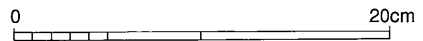
第35図 瓦集中区出土遺物 2



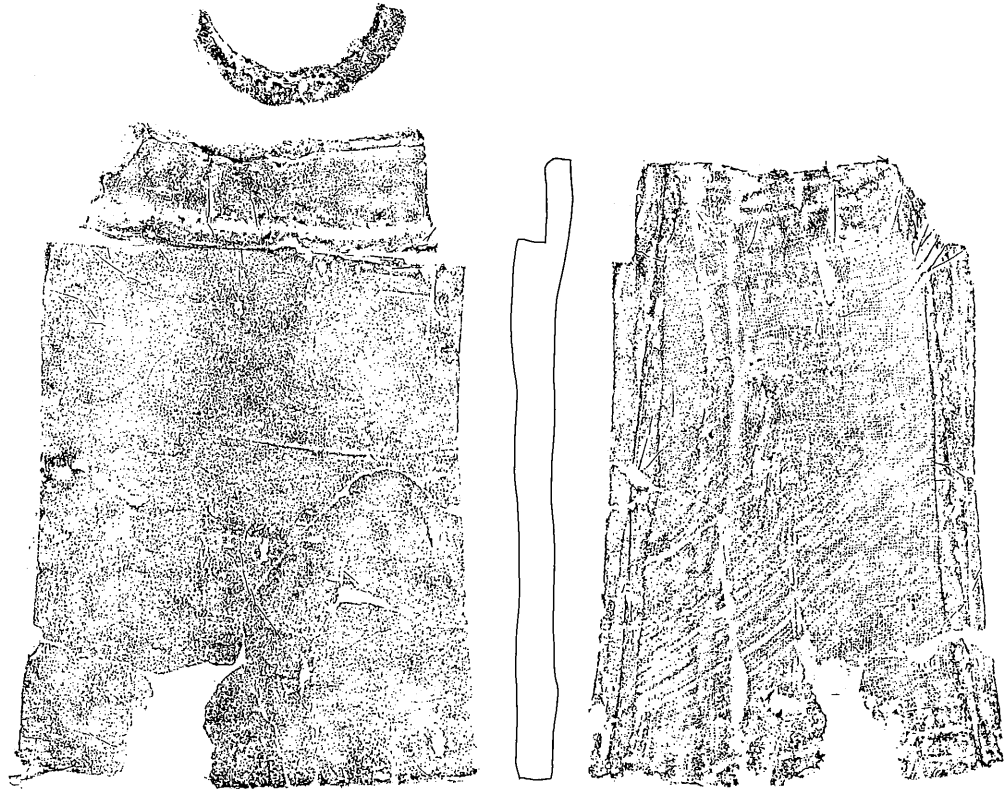
8



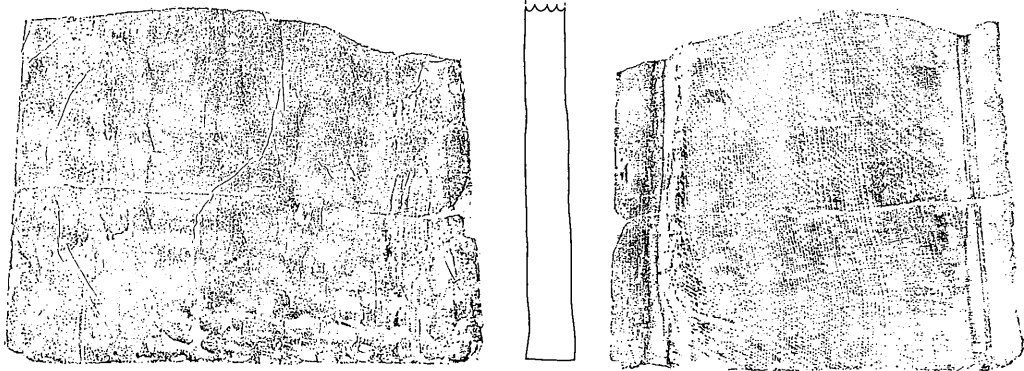
9



第36図 瓦集中区出土遺物 3



10



11



0 20cm

第37図 瓦集中区出土遺物 4

第3節 屋代寺地区

平成2年度に行った調査によって道路状の石敷が検出され、布目瓦が多量に出土した屋代寺推定地に隣接する地点に設定した調査区である。調査では14棟の住居跡などを検出したが、布目瓦の出土はあったものの、寺院に直接関連すると思われる遺構は検出できなかった。

1 弥生時代

14号住居跡（第38～40図、図版7・20～22）

位置：G～J-4～6 規模：670×600 平面形：隅丸方形

主軸方向：N-57°-E 新旧関係：重複関係にあるすべての遺構より古

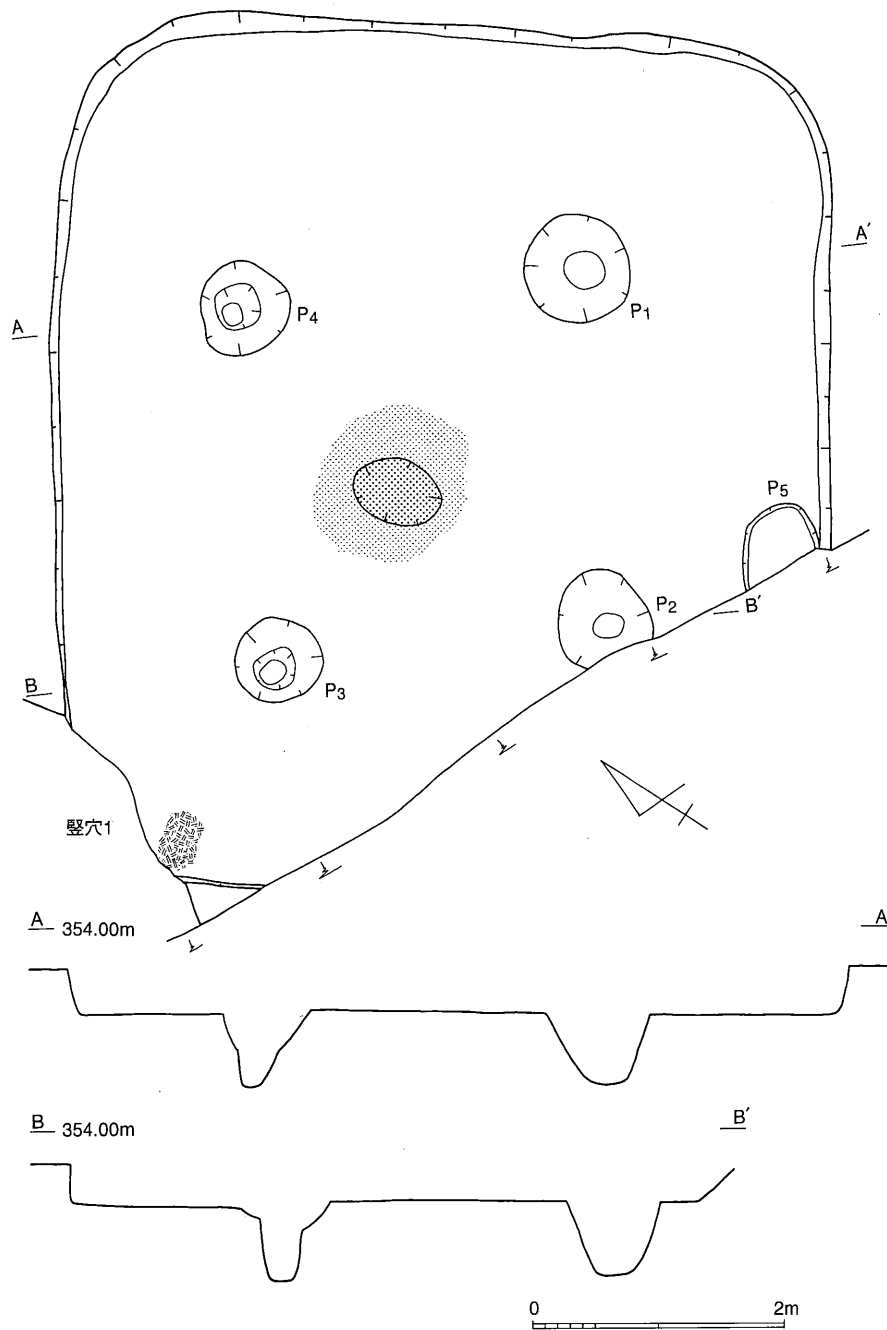
床面：平坦で良く締まっており顕著であった。特に中央部の炉の付近は黄褐色土が貼られており、硬く締まっていた。西隅からは土器製作用と思われる粘土を検出している。

壁：東隅は不明確であったが遺物の出土状況から判断した。壁高は30cm前後が残っており、立ち上がりも垂直に近い。

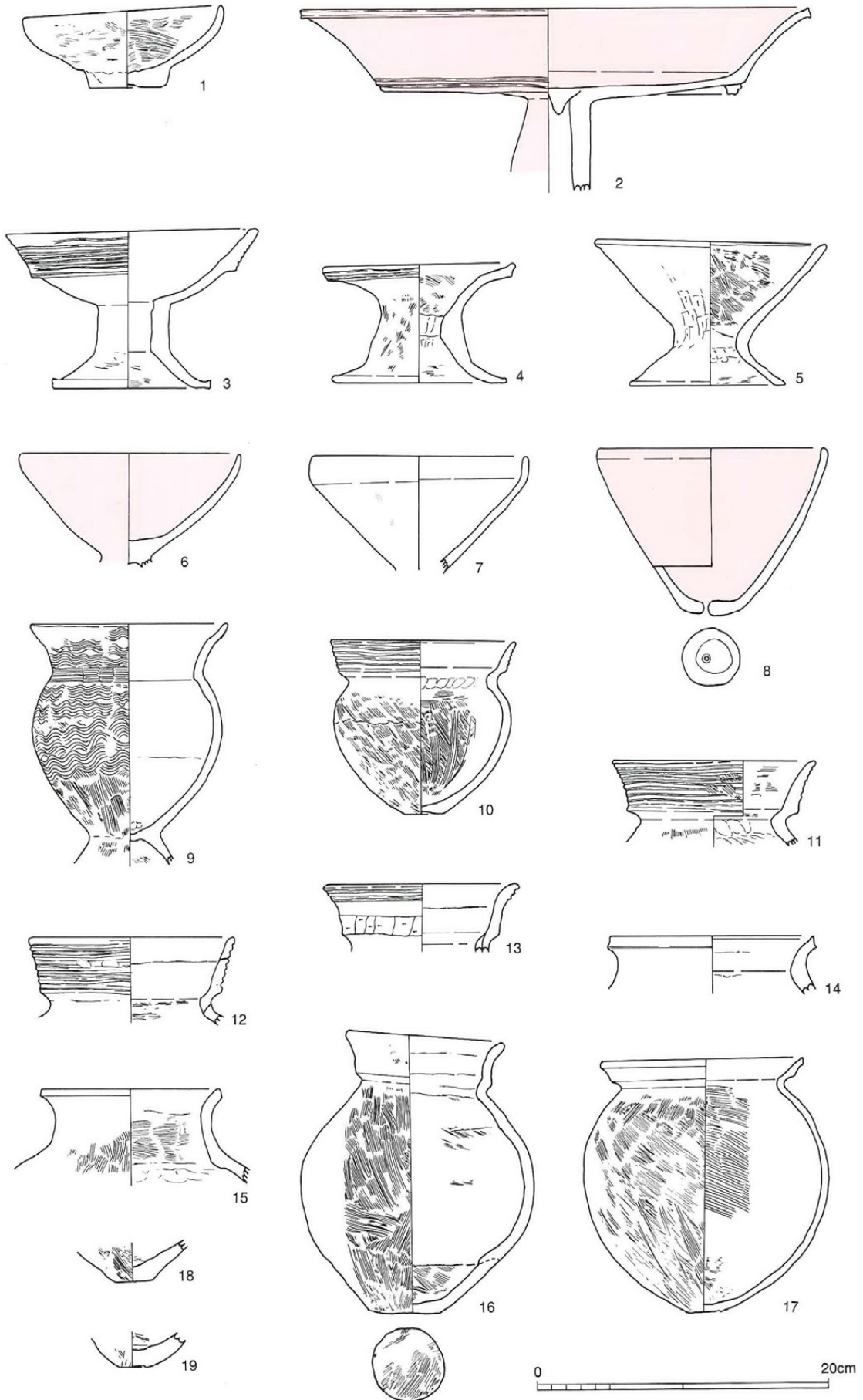
炉：長径約70cmの楕円形の地床炉で、住居の中央部分に作られている。10cmほど掘り込まれており良く焼けている。周囲には炭化物が広がっている。

柱穴：5カ所の掘り込みを検出している。主柱穴のP₁～P₄は直径約60cmの円形で、深さも60cmほどあり、3m前後の間隔で方形になるように配置されている。P₅は南東壁に接しており南側は調査区外に続いている。深さは20cmほどで住居との関係は定かではない。

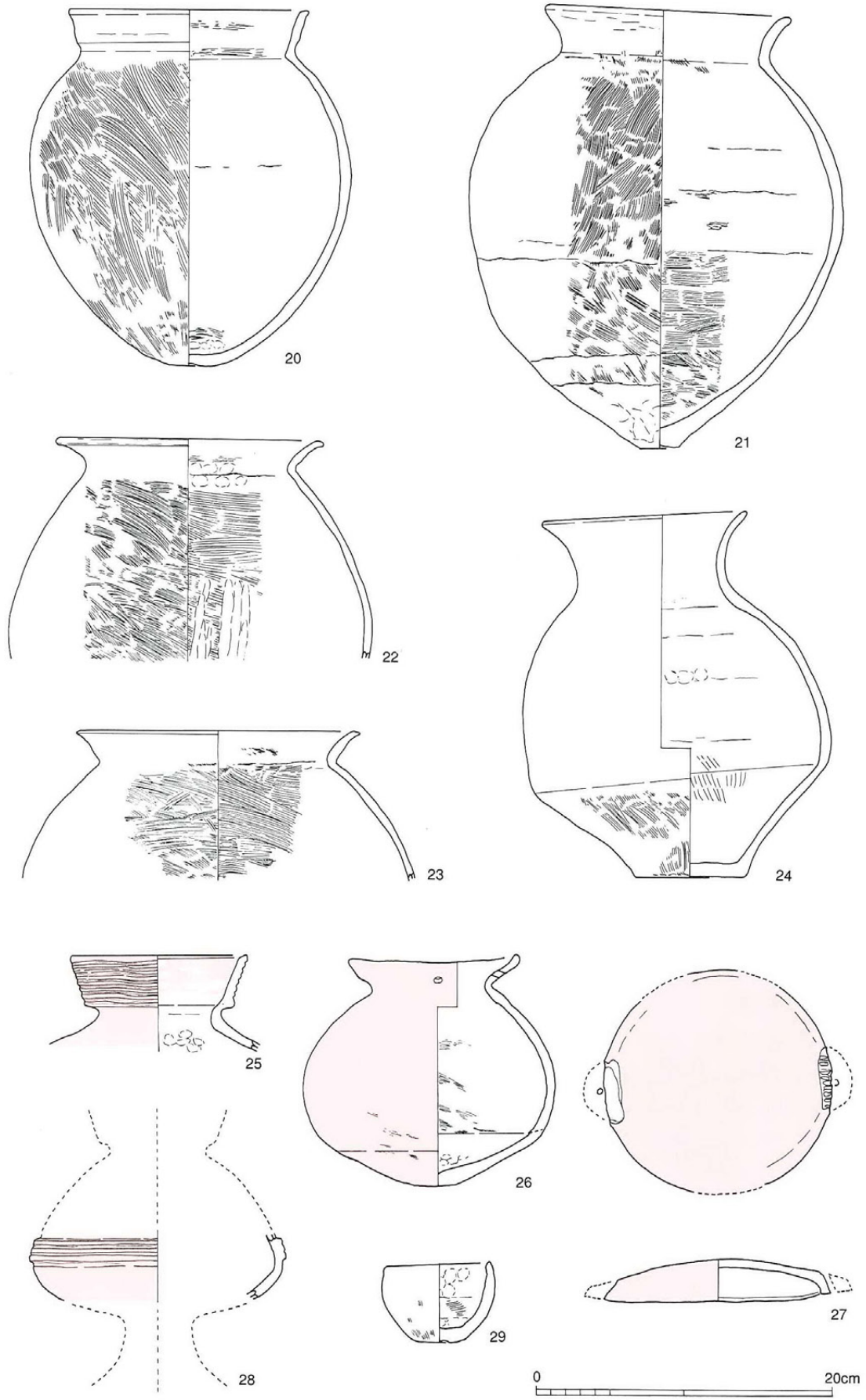
遺物：出土遺物は多く、図示した遺物は29点に上る。また、出土した遺物の多くが北陸地方に系譜を求められるものであり注目される。1は鉢である。内外面ともハケによって調整されているが、蓋である可能性もある。2は盤状の高坏である。外面及び坏部内面を赤彩する非常に大形の高坏である。3～5は器台である。3の受け部外面には8～9条の、4には2条の擬凹線が施文されている。5は「ハ」の字に短く開く脚から受け部が大きく広がるもので、外面ヘラケズリ、内面ハケによって調整されている。6・7は在地系の高坏の坏部であり、6は内外面とも赤彩される。8は有孔鉢である。内外面とも赤彩され、底部に1孔が穿たれている。9～23は甕である。9は在地系の台付甕であり、外面には櫛描波状文が施文されている。10～13の口縁部には擬凹線文が施文されている。14は口縁部が短く屈曲する甕、15は口縁部が直立気味に立ち上がる甕であり、いずれも端部は面取りされている。16の口縁部は11～13と同様な形態を呈しているが、擬凹線文は施文されていない。17～23は頸部が「く」の字に屈曲する甕である。24～26・28は壺である。24は在地の箱清水式土器の系譜をひく壺であるが、外面の赤彩は認められない。25は口縁部に擬凹線文を施文した壺の口縁部であり、外面及び口縁部内面を赤彩する。26は赤彩された壺であり、口縁部が「く」の字に強く屈曲し1孔が穿たれている。28は擬凹線文帯貼付のある装飾壺の体部であり、赤彩されている。27は蓋である。外面は赤彩され、縁辺2ヶ所に突起が貼り付けられた痕跡が残っている。端部は面取りされ、槌状の挟り込みが廻っている。29はミニチュア土器である。



第38図 14号住居跡



第39図 14号住居跡出土遺物 1



第40図 14号住居跡出土遺物 2

2 古墳時代

2号住居跡 (第41・42図、図版7・22)

位置：G・H-5～7 規模：385×380 平面形：方形
 主軸方向：N-47°-W 新旧関係：7～9・13・14号住居跡より新

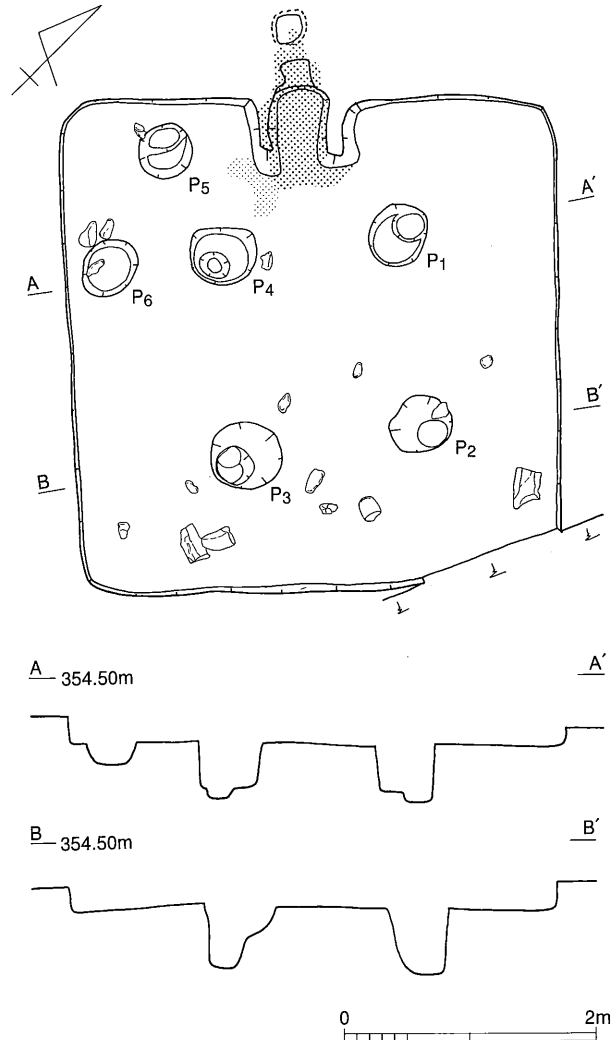
床面：平坦で良く締まっている。

壁：壁高は15cm前後しか残っていなかったが、立ち上がりはほぼ垂直で明確に検出されており、壁面が直線的な整った住居である。

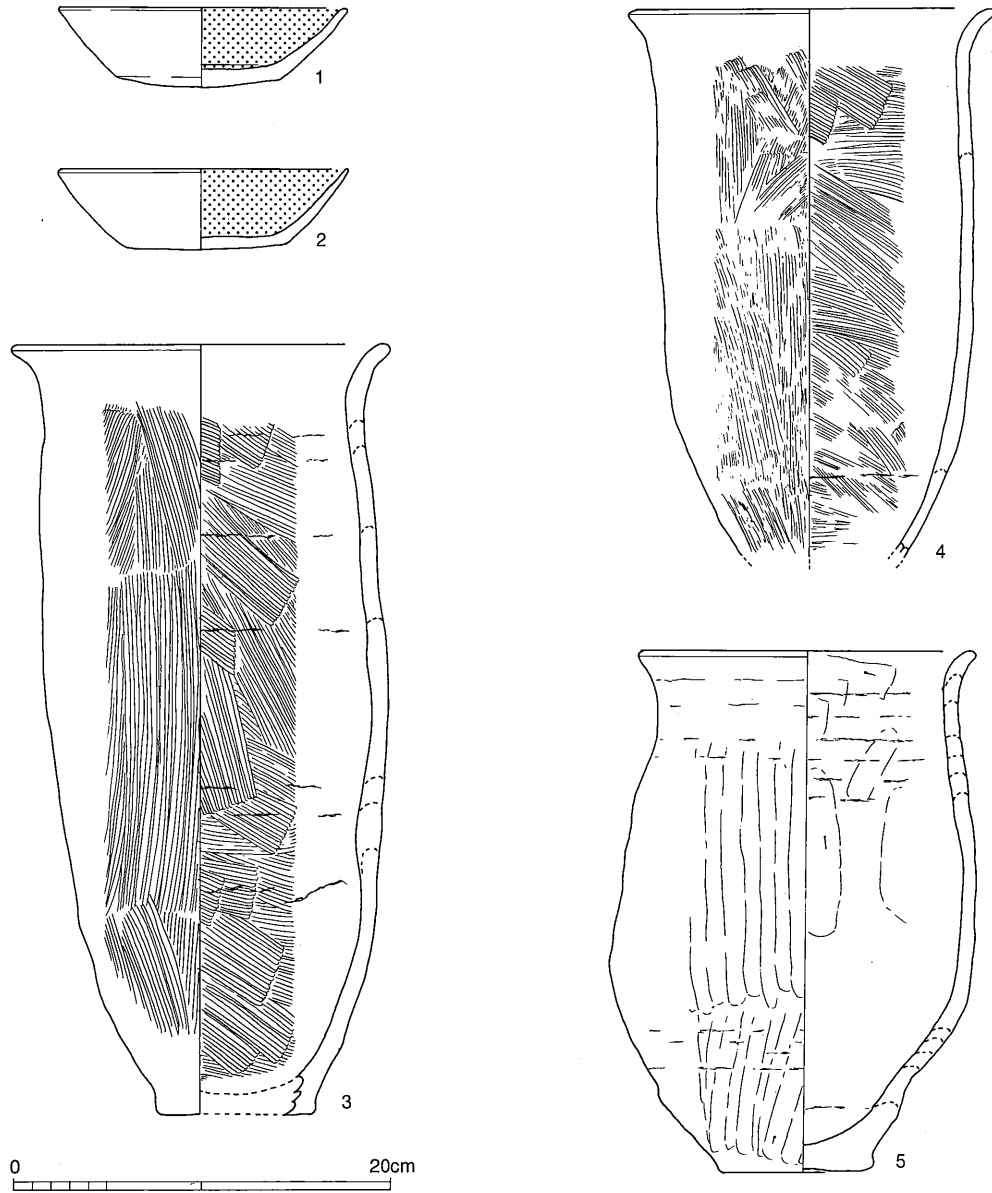
カマド：北西壁の中央に作られている。粘土製で袖は幅40cmほどの燃焼部をはさんで50cmほど伸びており、燃焼部は良く焼けている。煙道は住居の床面と同じレベルまで掘り込んでおり、60cmほど伸びて方形の煙出しとなるが、煙道は比較的短いものである。

柱穴：主柱穴4カ所のほか2カ所の掘り込みを検出した。主柱穴は直径約50cmの円形で、床面からの深さ50cmを測る。160cm前後の間隔で方形に配置されており、柱穴の底には柱の痕跡と思われる直径20cmの落ち込みがある。カマドの西側から検出しているP₅は直径50cm深さ15cmほどで、周辺から遺物が集中して出土しており、貯蔵穴的な機能が考えられる。P₆もほぼ同様の規模であるが、覆土には焼土と炭化物が詰まっており、灰捨穴的な機能が考えられる。

遺物：1・2は内面黒色処理された土師器坏で内外面ともにヘラミガキを施しており、底部はわずかにわん曲し、体部は直線的に開いている。3～5は土師器の長胴甕である。3・4は口縁部に最大径を持ち、内外面ともハケで器面を整えている。5の外面はナデの後粗いヘラミガキを施し、内面はヘラケズリの後、ナデが施されている。いずれも二次焼成を受けている。この他に骨鏃(第81図10)、滑石製白玉3点(第82図13～15)が出土している。



第41図 2号住居跡



第42図 2号住居跡出土遺物

3号住居跡 (第43・44図、図版8)

位置：H・I-6～8 規模：710× 平面形：隅丸方形

主軸方向：N-134°-E 新旧関係：1号土坑より古、8・10号住居跡・9号土坑より新

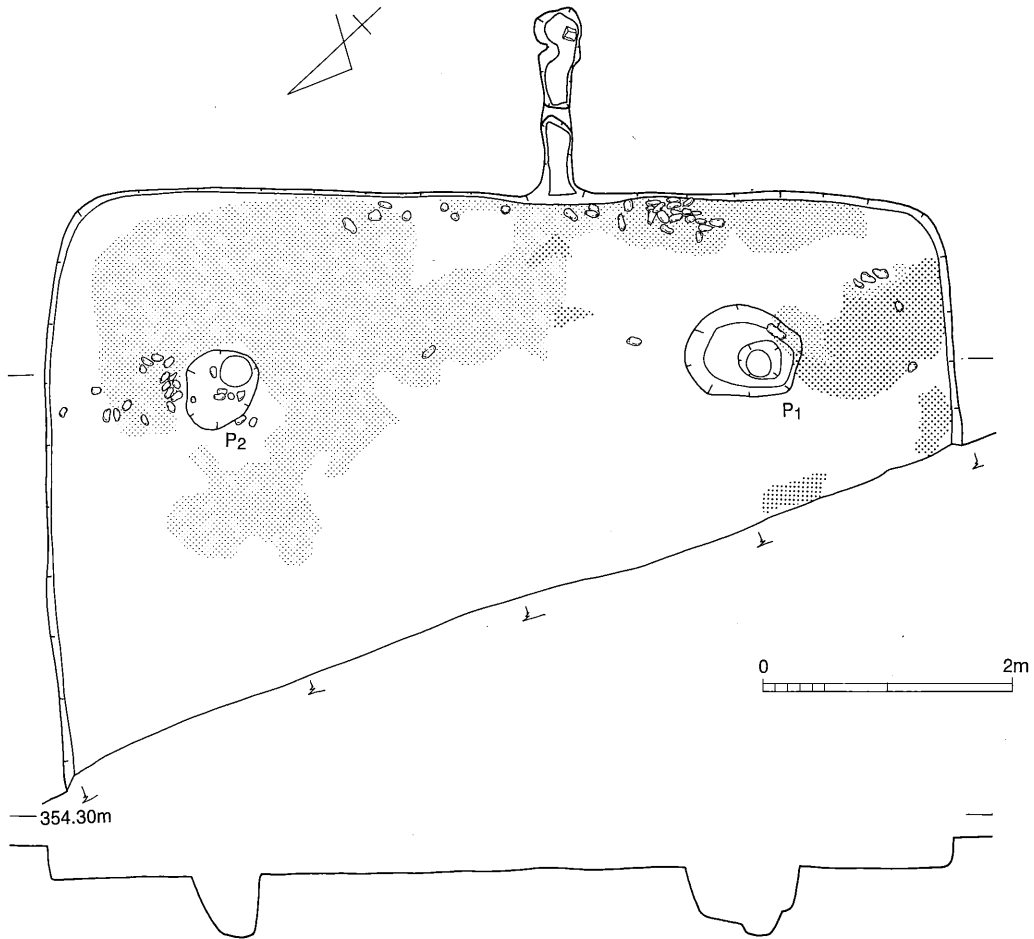
床面：東側は調査区外にあり検出できなかったが、平坦で良く締まっている。床面直上には広範囲から炭化物を検出している。

壁：垂直に近く立ち上がっており顕著であった。壁高は25cm前後を測る。

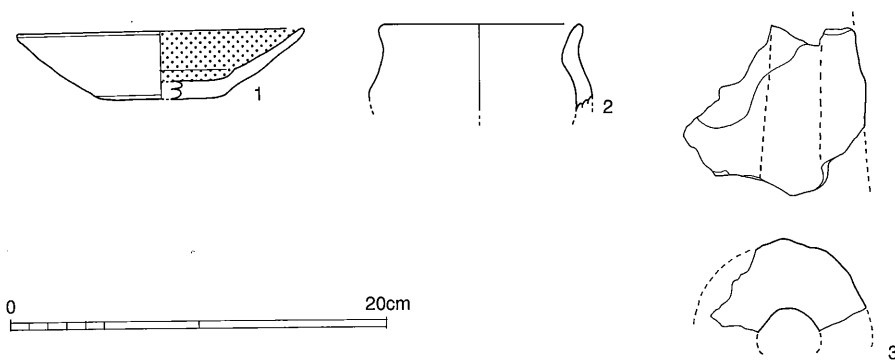
カマド：北西壁のやや北寄りに作られていたが、袖は完全に破壊されており火床も残っていなかった。煙道は壁面と垂直に作られており、住居の床面から10cmほど上がった部分にあり、長さ約150cmを測る。

柱穴：主柱穴2カ所が検出されている。壁面から150cmほど離れた部分に作られており、深さは約50cmを測る。

遺物：出土遺物は少なく、図示できるものは3点のみである。1は内面黒色処理された坏で、全面にヘラミガキを施しており、内面にわずかな段をなす。2は小形の甕であり、内外面ともにヘラミガキされている。3は羽口である。この他に鉄鏝（第81図5）、石製勾玉1点、滑石製白玉2点（第82図1・16・17）が出土している。また、床面からはカマドの北側とP₂の周辺の2ヵ所で、長さ15cm前後の棒状の河原石が四十数点まとまって出土している。



第43図 3号住居跡



第44図 3号住居跡出土遺物

8号住居跡（第45・46図、図版8・23）

位置：G-I-7～9 規模：575×540 平面形：隅丸方形

主軸方向：N-60°-W 新旧関係：2・3号住居跡・1～3号土坑より古、13号住居跡より新

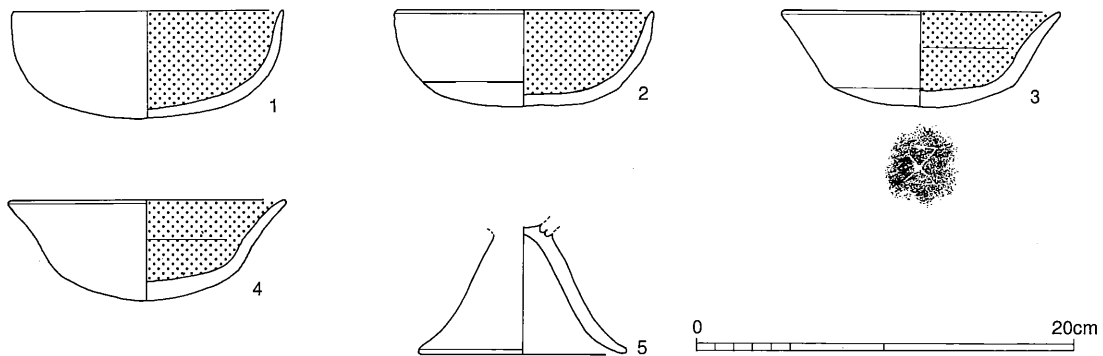
床面：全体に良く締まっており、中央部分が周囲よりわずかに高くなっている。床面直上には暗黄褐色土が数cm認められ、床面が2面ある可能性が高いが、上面はほとんど締まっていない。また、一部からは炭化物の広がりが見出されており、覆土中にも炭化物を多く含んだ土層が見られる。

壁：北壁を除きやや胴張りになる。最大壁高は45cmを測ることができ明確に検出できたが、立ち上がりは比較的なだらかである。

カマド：北壁中央のやや東寄りに作られている。粘土製で袖は幅35cmほどの燃焼部をはさんで約80cm伸びている。火床は良く焼けており、煙道は調査区外へと続いている。

柱穴：主柱穴4カ所とカマドの西側から浅い掘り込みを検出している。主柱穴は直径50～60cm、深さ50cmほどで、壁面から約120cm離れた部分から検出されており、柱間は東西320cm、南北300cmを測る。カマドの西側の掘り込みは幅100cm、長さ170cmを測るが、深さは10cm以下で内部にも床面状の締まった部分がある。

遺物：出土遺物が多いが、小片が多く図示できるものは少ない。図示したものはいずれも土師器で、1・2は底部からわん曲して立ち上がった体部がそのまま口縁部に至る坏、3・4は体部中央付近で屈曲して口縁部が大きく開く坏で、いずれもヘラミガキの後内面黒色処理を行っている。3の底部には線刻が認められる。5は高杯で脚部がハの字状に開いている。この他に骨角器（第81図11・12）、石製丸玉、滑石製白玉3点（第82図11・18～20）が出土している。



第45図 8号住居跡出土遺物

11号住居跡（第47・48図、図版8・23）

位置：F-7・8 規模：不明 平面形：隅丸方形？

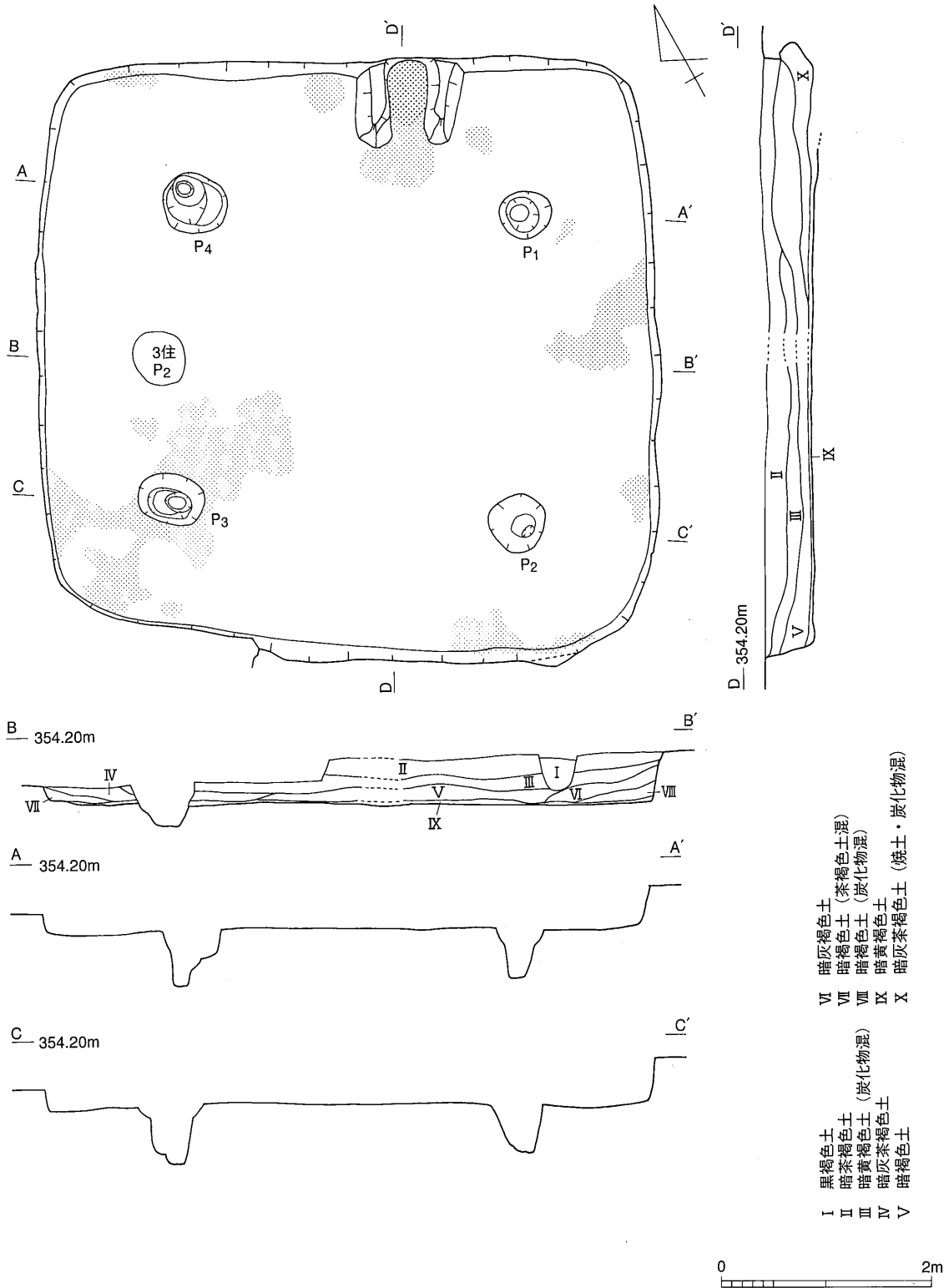
主軸方向：不明 新旧関係：13号住居跡より新

床面：住居の大半は調査区外にあり、検出できたのは西隅の一部であったため、固く締まった部分はなかった。床面から10cmほど浮いた部分からは炭化材が見出されており、焼失住居と思われるが、焼土などは検出されていない。

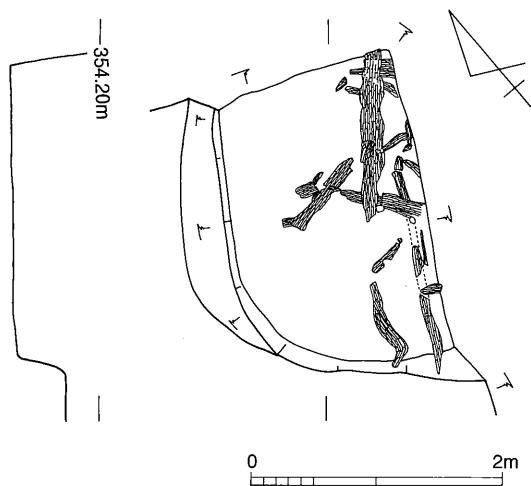
壁：壁高は30cmほどを測ることができるが、上部が崩れており立ち上がりは不明確であった。

遺物：1は土師器の器台の脚部で、ハの字状に開く脚部中央には円形の透かし4孔を穿っており、

外面はていねいにヘラミガキされている。2～4は土師器の甕である。2の口縁部はくの字状に外反しており、外面及び口縁部内面は細かなハケで整えている。3は口頸部が直立気味に立ち上がり、内外面とも板状の工具によるナデが施されている。4は内外面ともハケによって調整した後、粗いミガキも行っている。この他に砥石（第80図11）が出土している。



第46図 8号住居跡

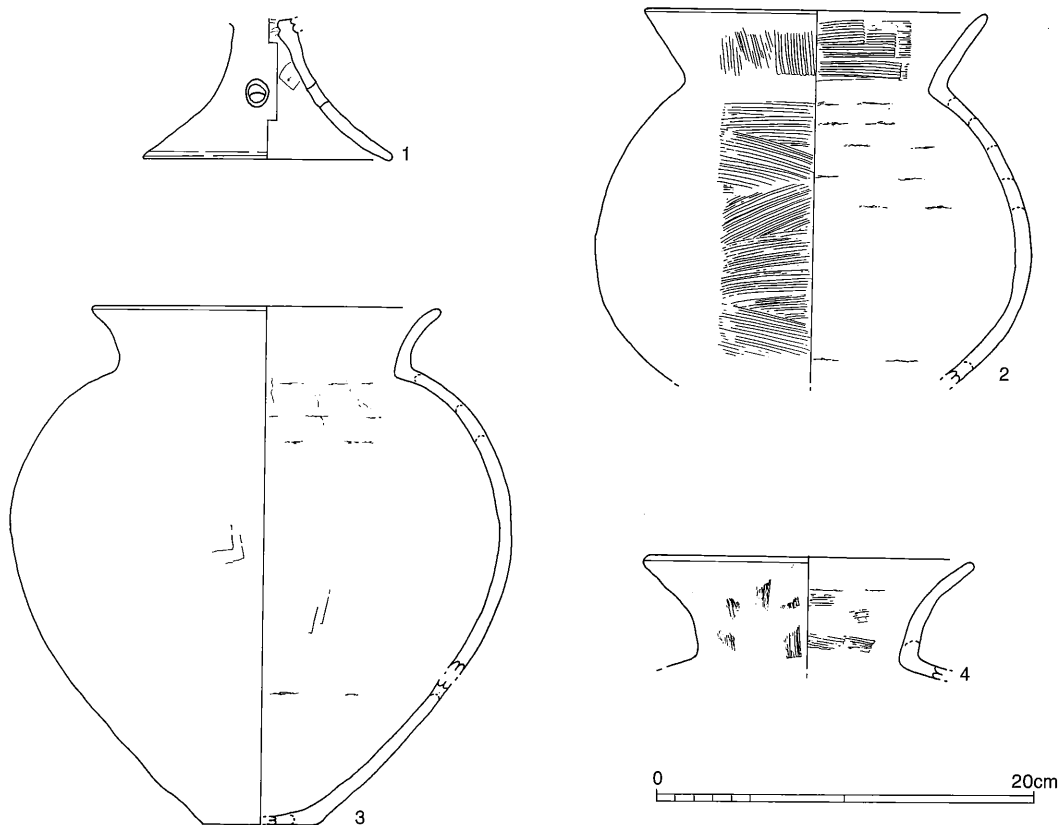


第47図 11号住居跡

13号住居跡 (第49・50図、図版9・24)

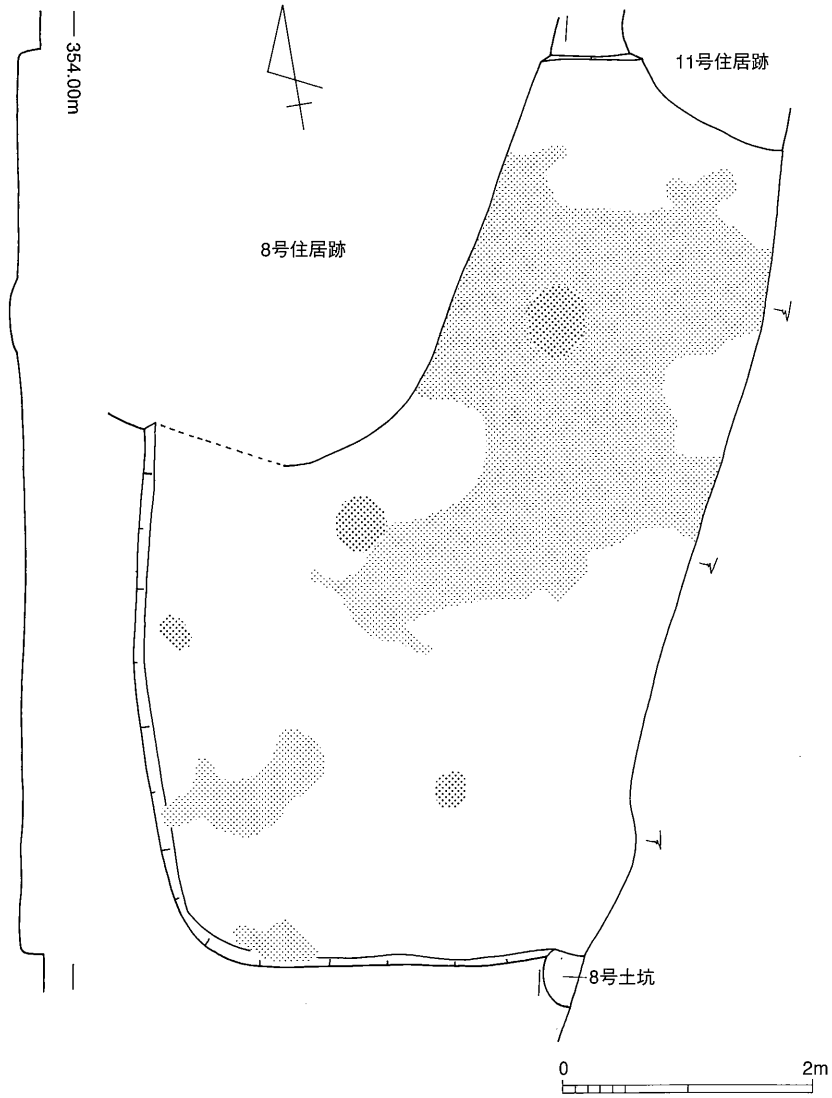
位置：F~H-5~8 規模：715×
 平面形：隅丸方形 主軸方向：N-10°-E
 新旧関係：2・7~9号住居跡より古、14号住居跡より新

床面：全体の約半分ほどを検出したものと思われる。床面はほぼ平坦であり、顕著であった。また床面の広い範囲に渡って炭化物が広がっている。
 壁：立ち上がりは垂直に近く、最大壁高20cmを測る。
 炉：住居跡ほぼ中央の北壁よりになるとされる部分から検出した。直径約60cmの円形の地床炉であり、中央がわずかに窪んでいる。

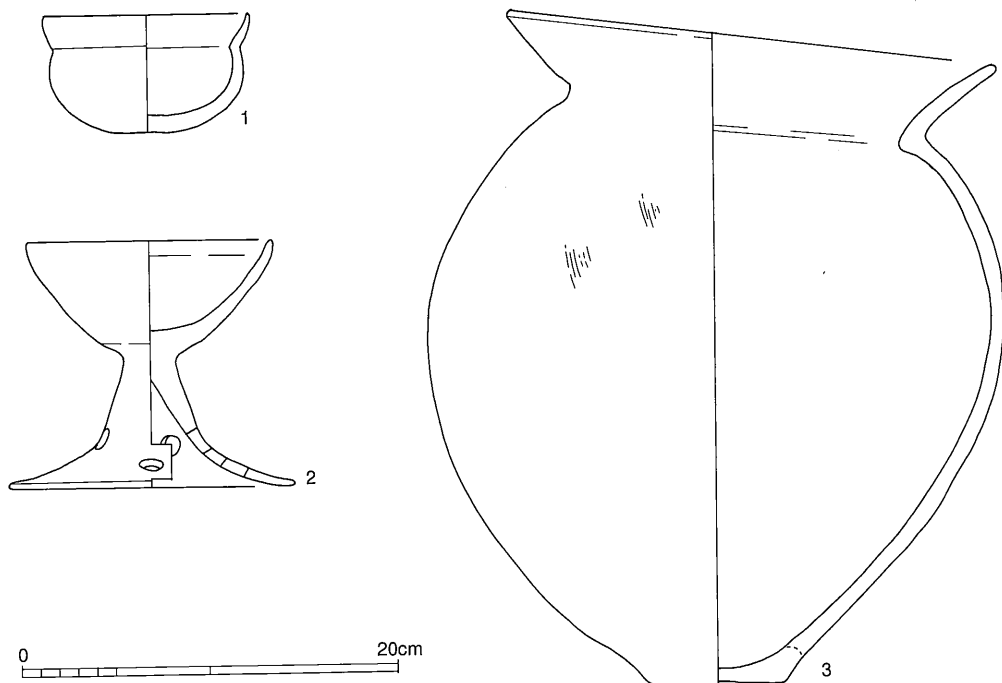


第48図 11号住居跡出土遺物

遺物：出土量はあるが、多くの住居跡と重複関係にあるため小破片が多く、図化できたものは3点のみである。1は小形丸底土器である。半球形の体部から口縁部がやや内わんして短く立ち上がる形態を呈している。最大径を口縁端部に持ち、内外面ともていねいにナデられている。2は高坏である。坏部は椀形であり、そこから脚部がハの字状に大きく開いている。また、脚部には円形の透かしが3方向・2段に穿たれている。坏部内面及び外面は、やや粗いヘラミガキが施されている。3は甕である。口縁はくの字に屈曲し、楕円形の体部中程に最大径を持つ。体部外面はハケの後ナデ、内面には粗いヘラミガキが施されている。



第49图 13号住居跡



第50图 13号住居跡出土遺物

3 古代

1号住居跡 (第51・52図、図版9・24・25)

位置：I・J-5・6 規模：360× 平面形：方形

主軸方向：N-70°-E 新旧関係：5・6・12号住居跡・1号竪穴より新

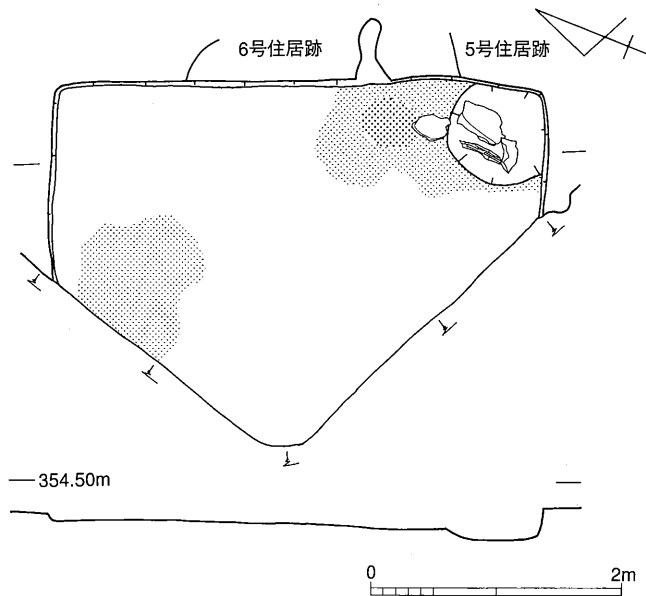
床面：床面はほぼ平坦であり、顕著であった。

壁：ほぼ垂直に掘り込まれているが、壁高は10cmを残すだけである。壁は直線的に作られており、均整のとれた住居跡である。

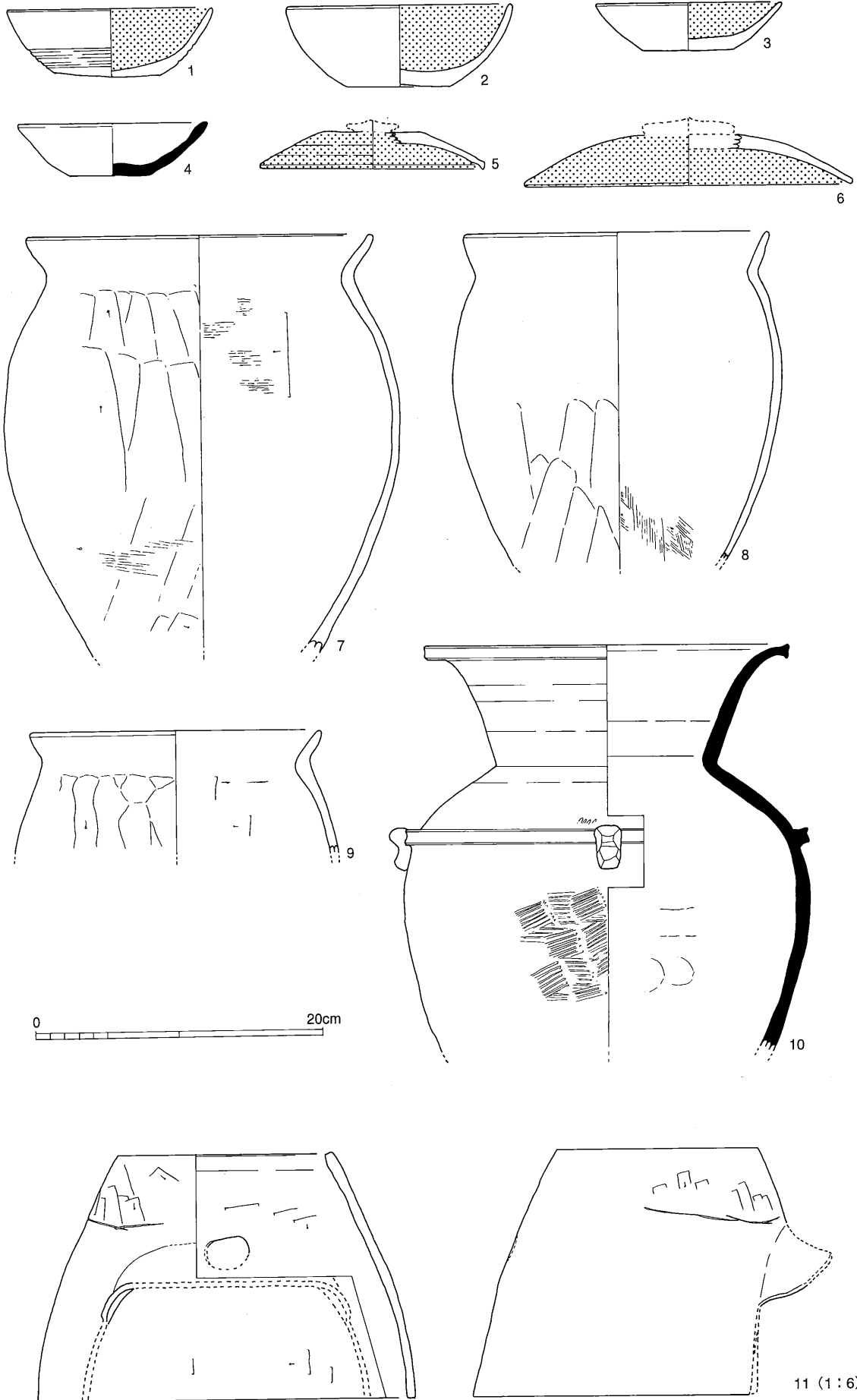
カマド：北東壁のやや南寄りの位置から検出した。火床は顕著であったが、袖は完全に破壊されていた。煙道は約50cm伸びて立ち上がる。また、南側には炭化物の広がりがあり、ここから甕形土器が出土した。

柱穴：主柱穴を検出することはできなかったが、カマドの南側より直径約80cm、深さ5cmほどの落ち込みを検出した。この中からは炭化材などが検出された。

遺物：カマドの周囲と、甕形土器の周辺からまとまって出土している。1～3は土師器坏であり、いずれも内面黒色処理される。4は須恵器坏である。器厚がやや厚く、底径が比較的小さいものである。また底部には回転糸切痕が残っている。5・6は黒色土器である。5は蓋であり、内外面共にねいにヘラミガキされる。6も蓋と思われるが、端部の形状が5とは異なるため、盤である可能性もある。7～9は甕である。いずれも口縁部がくの字に緩くくびれ、砲弾形の体部を持つものと思われる。外面はヘラケズリ、7・8の内面はハケによって調整されている。10は須恵器突帯付四耳壺である。外面には平行タタキ痕を残しているが、部分的にナデ消されているところもある。11は土師質の甕形土器である。懸口は直径約20cmの円形であり、背面には煙出の円孔が穿たれている。焚口は台形を呈しており、庇が付けられている。外面はヘラケズリ、内面はナデによって調整されており、内面及び庇の周囲にはススが付着している。



第51図 1号住居跡



第52図 1号住居跡出土遺物

第4節 大境地区

上信越自動車道の調査によって木簡が出土した地点の上流約100mの自然堤防上に設定した調査区である。調査では19棟の住居跡や掘立柱建物跡1棟などを検出したが、官衙に直接関連すると思われる遺構は検出できなかった。また、中世の居館に関連すると思われる溝を検出しており、従来の調査成果と併せ、一辺約100mの方形の区画を持つものであることがあらためて確認された。

1 弥生時代

17号住居跡 (第53・54図、図版25)

位置：C～F-5・6 規模：不明 平面形：隅丸方形

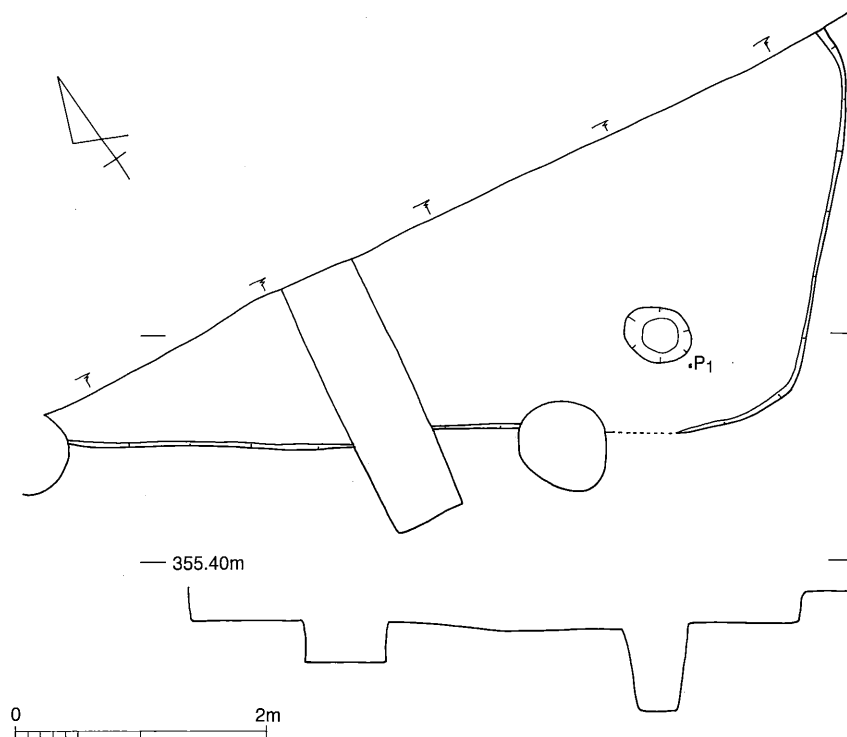
主軸方向：N-53°-W 新旧関係：6・9・11号住居跡より古、19号住居跡より新

床面：締まりはなかったが、ほぼ平坦であり顕著な貼床であった。床は灰白色の粘質土を貼ったものであり、壁際を除くほぼ全面から検出することができた。

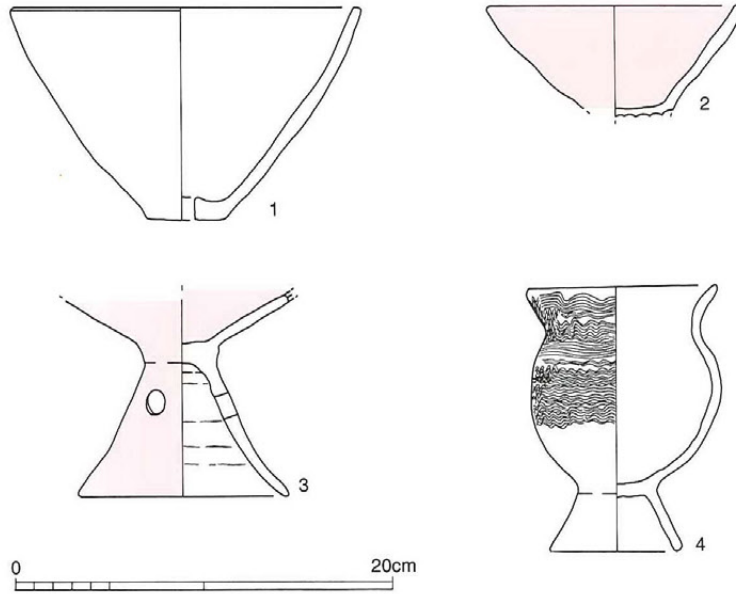
壁：多くの住居跡と重複関係にあるため残りは悪く、最大壁高20cmを測るだけである。

柱穴：住居跡の過半が調査区外となるため、1基を検出しただけである。直径約50cmの円形であり、床面からの深さ70cmを測る。

遺物：出土遺物は少なく、図化できたものは4点のみである。いずれも床面直上からの出土である。1は有孔鉢であり、内外面ともヘラミガキされている。2・3は高坏である。2は坏部であり、内外面ともヘラミガキされる。3は脚部であり、赤彩され脚部には円形の透かしが3方向に穿たれている。4は小形の台付甕であり、外面には櫛描波状文が施されている。



第53図 17号住居跡



第54図 17号住居跡出土遺物

19号住居跡 (第55図、図版10・25)

位置：D・E-5・6

規模：不明

平面形：隅丸方形

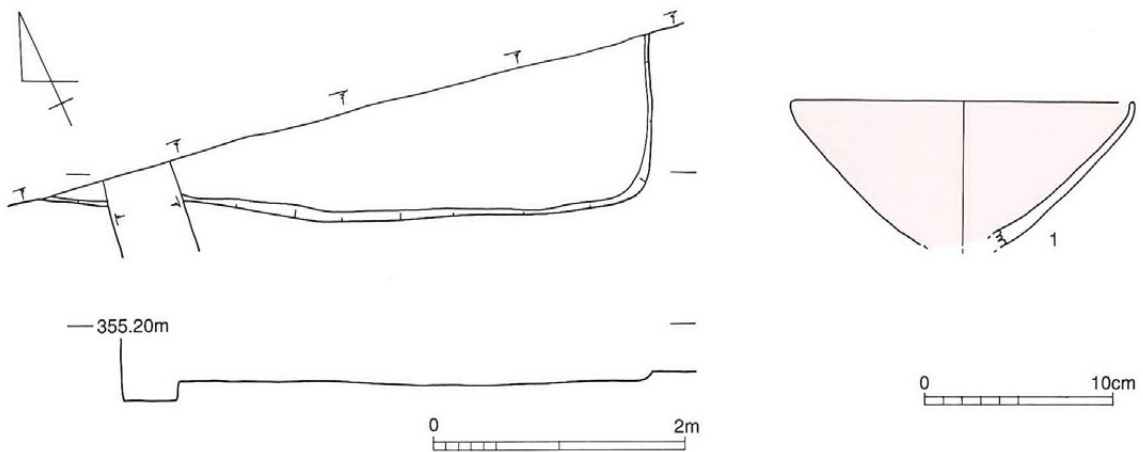
主軸方向：N-67°-W

新旧関係：重複関係にある全ての遺構より古

床面：住居跡の大半が調査区外になるため、締めりのある部分はなかったが、ほぼ平坦であり、顕著な貼床であった。

壁：多くの住居跡と重複関係にあるため、残りは悪い。最大壁高5cmを測るだけである。

遺物：出土遺物は非常に少なく、図化できたものは1点のみである。1は高坏の坏部であり、内外面とも赤彩され、ていねいにヘラミガキされている。体部はやや内わん気味に立ち上がり、口縁部が短く屈曲してほぼ垂直に立ち上がっている。



第55図 19号住居跡及び出土遺物

2 古墳時代

10号住居跡（第56・57図、図版10・25・26）

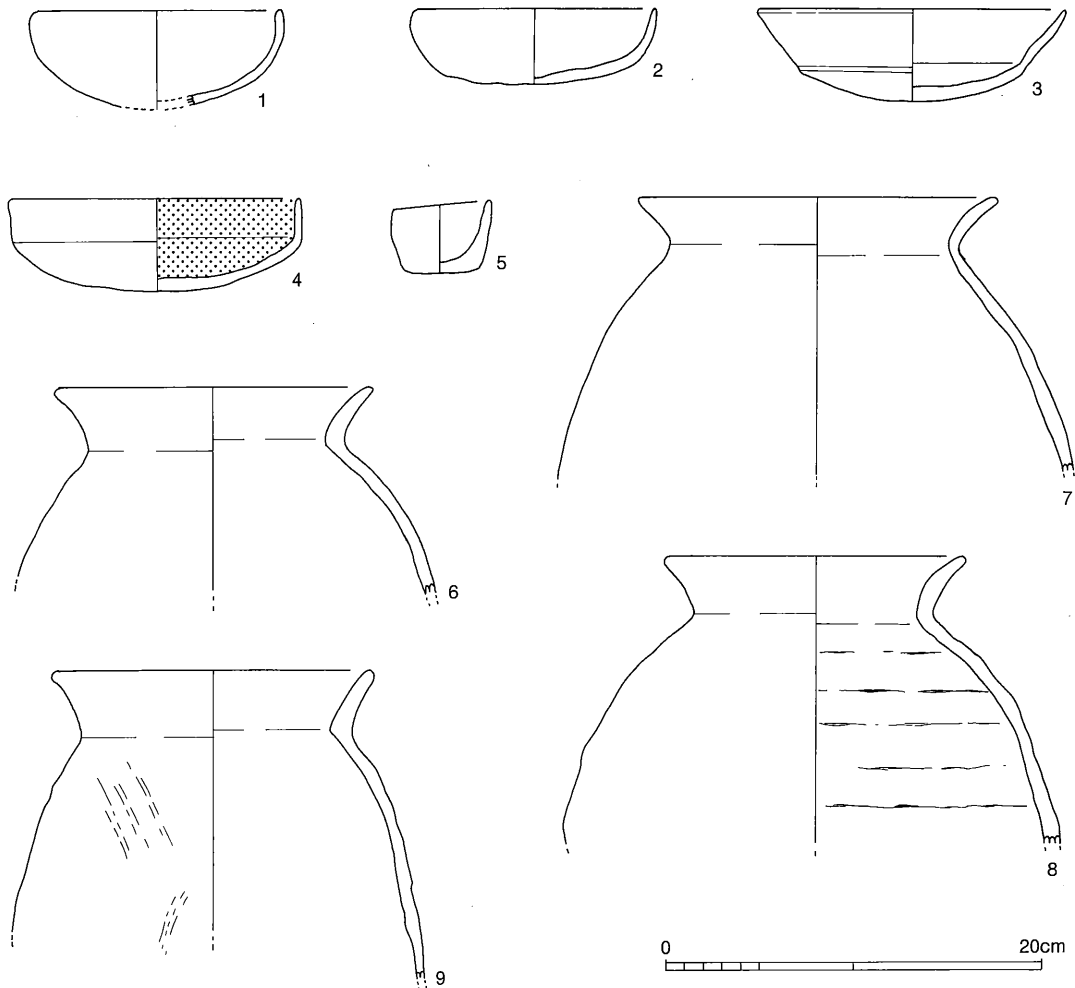
位置：B・C-3・4 規模：不明 平面形：隅丸方形

主軸方向：N-58°-W 新旧関係：15号住居跡・3号土坑より新

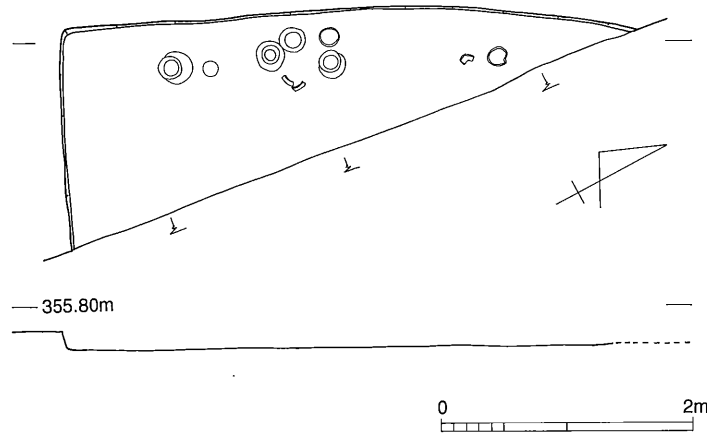
床面：住居跡の大部分が調査区外になるが、ほぼ平坦であり顕著であった。床は黄褐色土を3cm前後の厚さで貼ったものであり、良く叩き締められていた。

壁：壁の残りは悪く、最大壁高15cmを測るだけである。また、壁は直線的に作られており、均整のとれた住居跡であったものと思われる。

遺物：出土量は比較的多い。1～4は土師器坏である。1・2はともに椀形の体部を持ち、口縁部がやや内わん気味に立ち上がる形態を呈している。3・4は丸底の底部を持ち、体部に一段の稜を持って口縁部となっている。いずれも須恵器坏蓋を模倣したものと思われるが、3の口縁部が外傾するのに対し、4はやや内傾している。また4は内面黒色処理される。5はミニチュア土器である。6～9は甕である。いずれも胴部中程でほぼ水平に打ち欠かれていることから、器台として再利用されていたものと思われる。口縁部はくの字に屈曲し、6～8は外面をヘラミガキ、9はハケ後ナデによって調整されている。



第56図 10号住居跡出土遺物



第57図 10号住居跡

11号住居跡 (第58・59図、図版11・26)

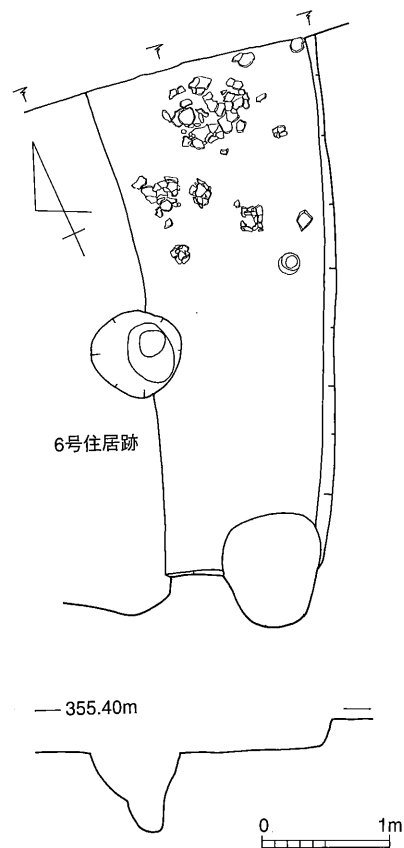
位置：D・E-4・5 規模：不明 平面形：隅丸方形
 主軸方向：N-25°-E 新旧関係：6号住居跡より古、17・19号住居跡より新

床面：ほぼ平坦であり、良く叩き締められていた。床は黄褐色土を3cm前後の厚さに貼ったものであった。

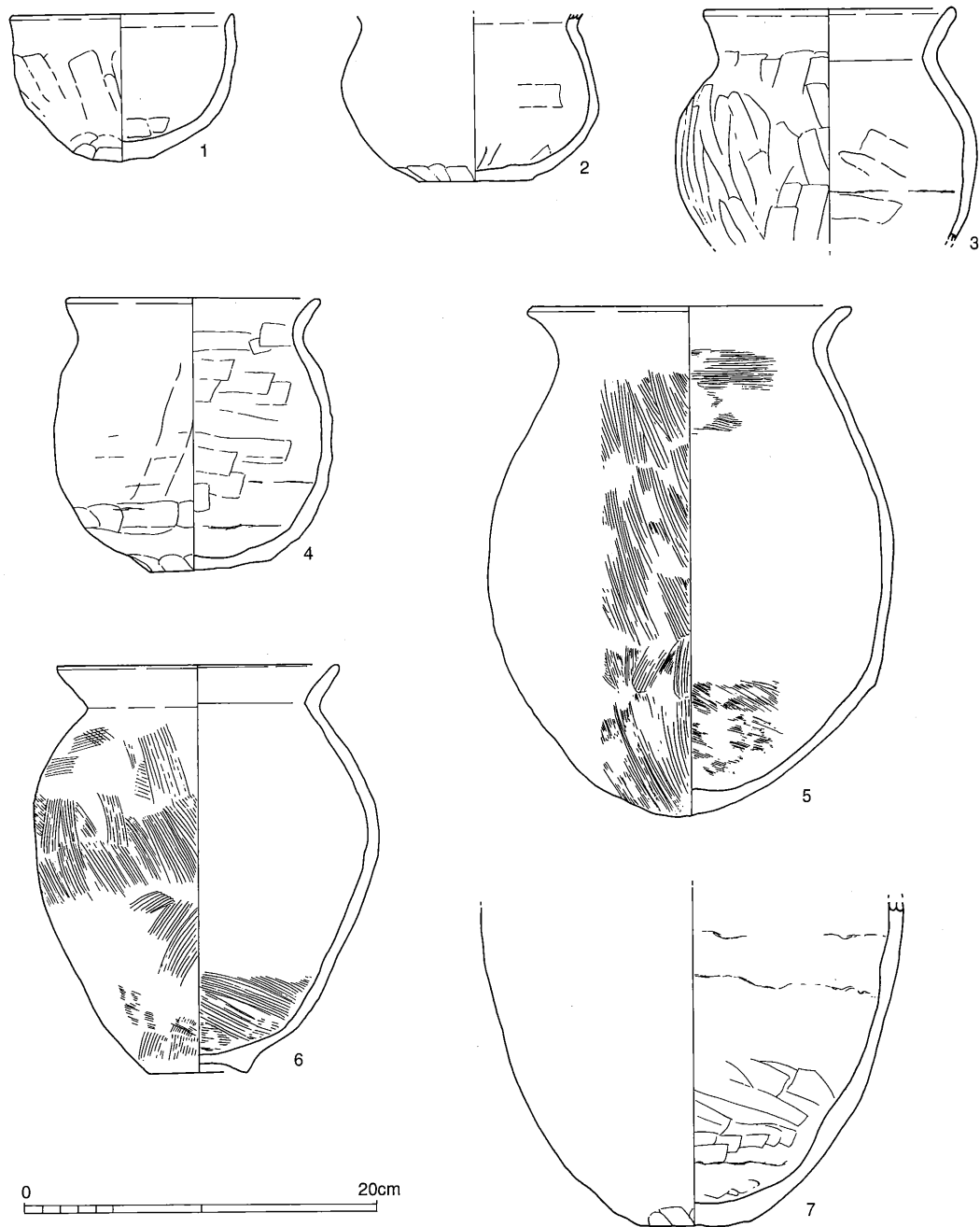
壁：立ち上がりにはやや角度が認められ、最大壁高25cmを測ることができる。

柱穴：重複する住居跡に大部分が破壊され、また一部調査区外になるため、支柱穴は1基検出しただけである。直径約70cmの円形であり、床面からの深さ65cmを測る。

遺物：出土量は比較的多い。図化したものはすべて土師器である。1は坏である。口縁部は直線的に立ち上がり、口径に比して器高の高い形態を呈している。外面はヘラケズリの後、ナデを施しているが、ヘラケズリの痕跡を顕著に残している。2は鉢である。口縁部を欠失するが、平底で椀形の体部をもち、口縁がくの字に屈曲するものと思われる。3～7は甕であり、3・4は小形、5～7は大形の甕である。3・4はいずれも口縁部がくの字に屈曲し、内外面ともヘラケズリによって調整されている。5は丸底で卵形の体部を持ち、内外面ともハケによって調整されている。球形の体部を持つ甕から長胴甕へ移行する途中のものと思われる。6もハケによって調整されるが、くの字に屈曲する口縁部を持ち、底部は平底で中央が高台状に削り込まれている。7は体部であり、内面はヘラケズリされる。この他に砥石(第80図11)が出土している。



第58図 11号住居跡



第59図 11号住居跡出土遺物

15号住居跡 (第60図、図版11)

位置：B・C-4・5

規模：不明

平面形：隅丸方形

主軸方向：N-35°-E

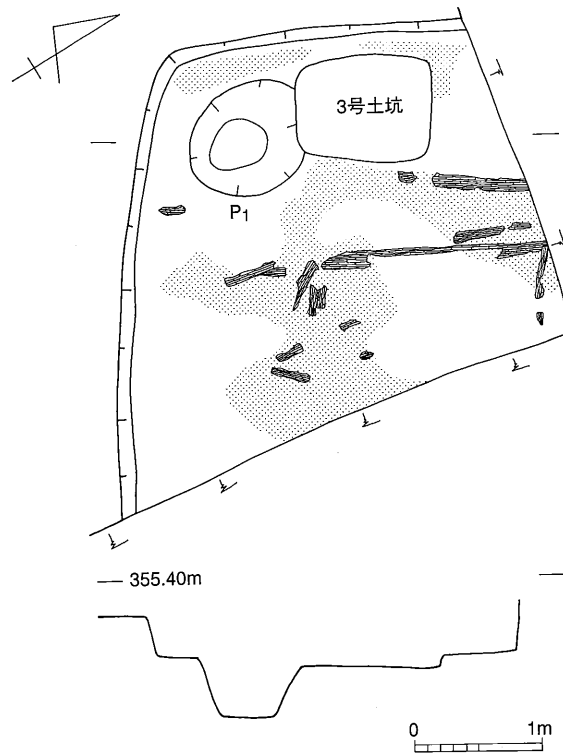
新旧関係：9・10号住居跡・3号土坑より古

床面：黄褐色土を貼った顕著なものであったが、床面に締まりはなかった。直上からは炭化材とともに焼土混じりの炭化物が全面に渡って検出されていることから、焼失住居であったものと思われる。

壁：立ち上がりにはやや角度が認められ、最大壁高30cmを測る。

柱穴：主柱穴は1基を検出しただけである。直径約90cmの円形で、床面からの深さ50cmを測る。

遺物：土師器の破片がわずかに出土しているだけであり、図化できたものはない。



第60図 15号住居跡

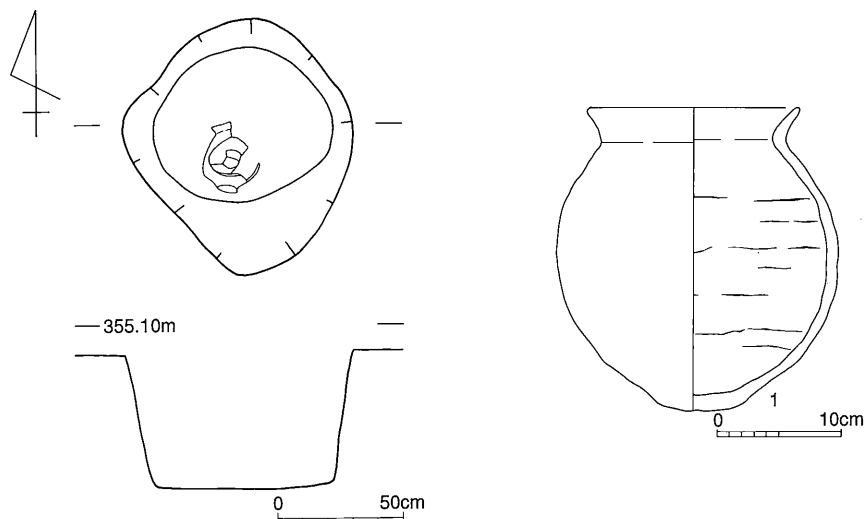
4号土坑 (第61図、図版11・26)

位置：G-3・4 規模：長径105cm 平面形：不整形円形

新旧関係：8号住居跡より古

構造：平面形は不整形円形を呈し、検出面からの深さ55cmを測る。土坑内の南西寄りのところから土師器甕が横位の状態で埋設されていた。

遺物：埋設されていた土師器甕1点のみである。口縁部の一部を欠失するが、ほぼ完形に復原することができる。底部が肥厚し、平底を意識した作りとなっているが、丸みを帯びており自立することはできない。外面はていねいにヘラミガキされており、内面はナデが施されているが、輪積痕を顕著に残している。埋設されていた土器の状況から土坑墓である可能性が高いものと思われるが、土器の中からは何も出土しなかった。



第61図 4号土坑及び出土遺物

3 古代

4号住居跡 (第62・63図、図版12・27)

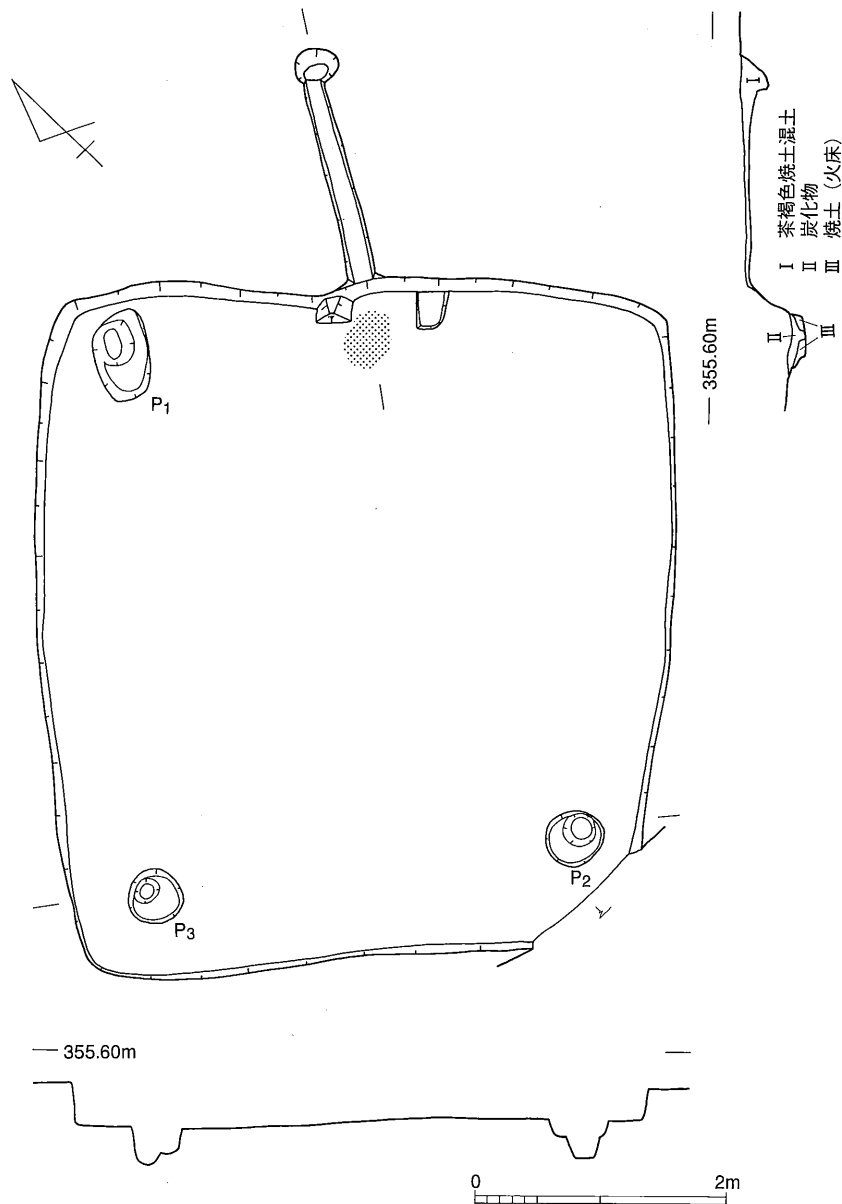
位置：D～G-2～4 規模：515×490 平面形：隅丸方形

主軸方向：N-47°-E 新旧関係：12～14・16号住居跡より新

床面：ほぼ平坦であり、黄褐色土を3cm前後の厚さで貼った顕著な貼床であった。また床面は良く叩き締められていた。

壁：立ち上がりは、ほぼ垂直であり、最大壁高35cmを測る。

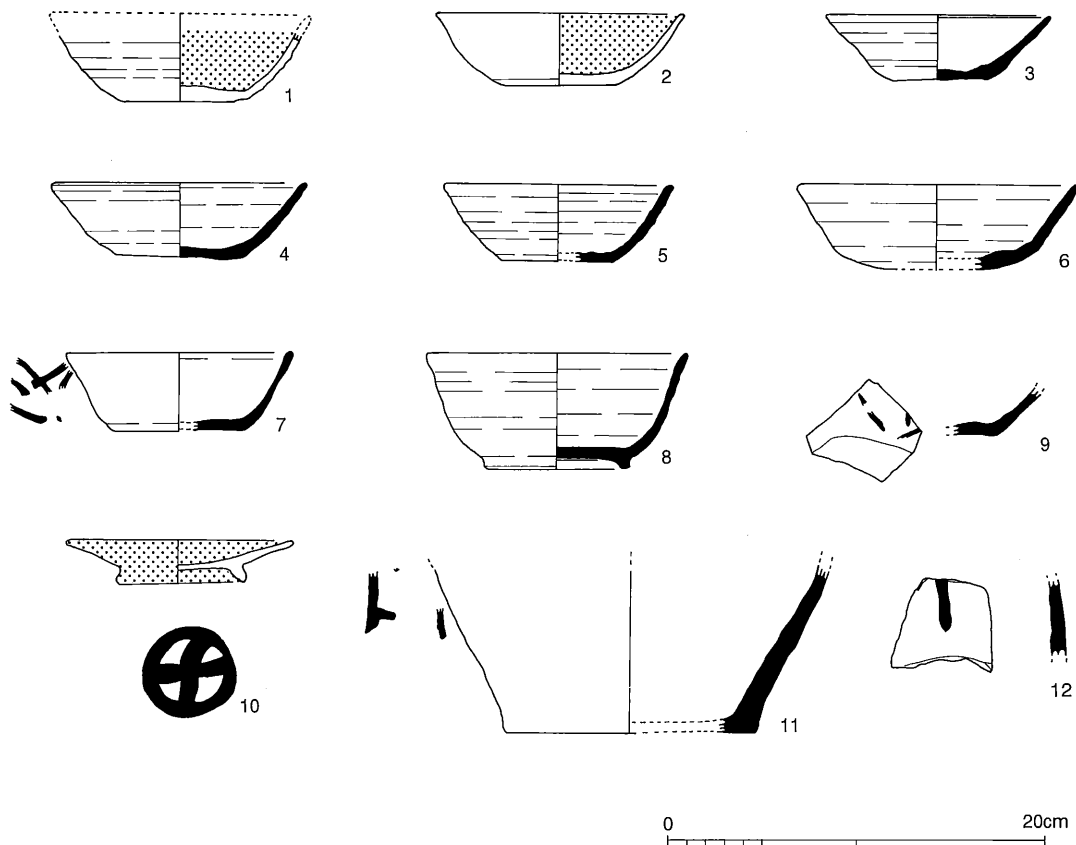
カマド：北壁のほぼ中央から検出した。袖は粘土製であったが、住居跡掘り下げの際に破壊してしまい、わずかしか残っていない。カマド内やや西寄りの部分には良く焼けた火床が残っていた。煙道は壁とは直交せずやや傾いており、160cm程伸びて楕円形の煙出となる。



第62図 4号住居跡

柱 穴：P₁～P₃の3基を検出した。いずれも支柱穴と考えられるが、北東隅の柱穴は検出することはできなかった。P₁～P₃とも床面からの深さ40cm前後を測ることができる。また、柱穴は壁から30cm程度しか離れておらず、柱間を広くとった作りになるものと思われる。

遺 物：出土量が多いが多くの住居跡と重複関係にあるため、確実に本住居跡に伴うと考えられる遺物は少ない。1・2は土師器坏である。いずれも内面黒色処理されており、底部は切り離し後回転ヘラケズリされている。また、1の体部にはロクロナデによる稜を顕著に残しているが、2にはそれが認められない。3～9は須恵器坏である。3・4・7の底部には回転糸切痕を残しているが、5・6の底部はヘラケズリが施されている。8には高台が付いている。また7・9には墨書が認められるが、残存率が悪いので判読不能である。10は黒色土器皿である。内外面ともいねいにヘラミガキされており、底部には墨書が認められる。11は須恵器甕であるが、墨書が認められる。12も墨書の認められる須恵器甕の破片であり、11と同一個体であると思われるが接合することができなかった。



第63図 4号住居跡出土遺物

12号住居跡 (第64・65図、図版12・27)

位 置：D・E-2～4

規 模：520×430

平面形：隅丸長方形

主軸方向：N-45°-E

新旧関係：1・3・4・13号住居跡より古、16号住居跡より新

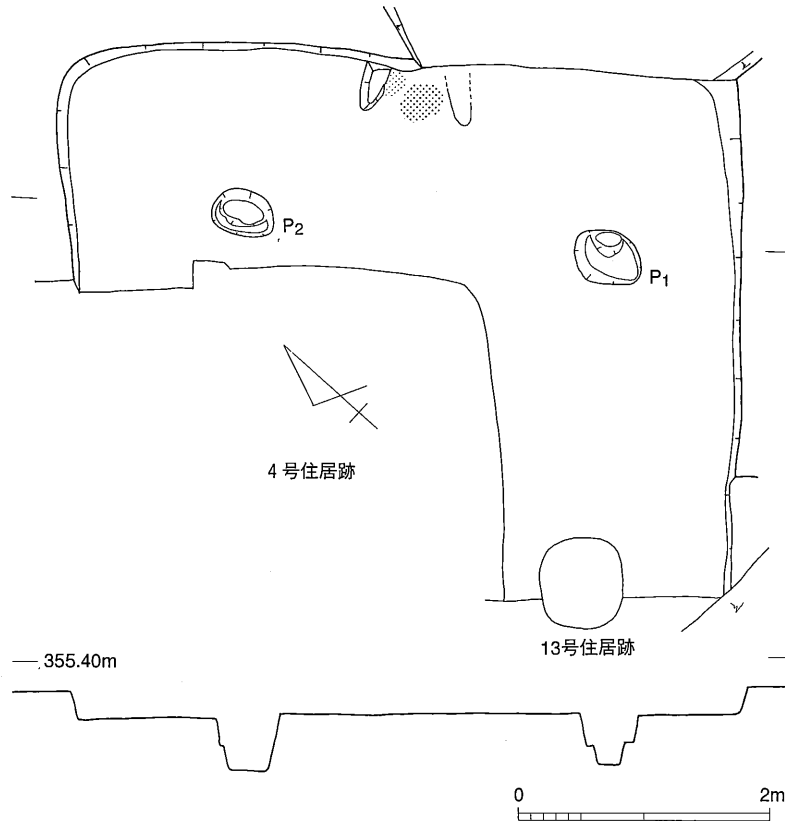
床 面：ほぼ平坦であり、顕著で良く叩き締められていた。

壁：立ち上がりは、ほぼ垂直であり、最大壁高25cmを測る。

カマド：北東壁ほぼ中央付近から検出した。左側の袖は残っていたが、右側の袖は他の住居跡に破壊されており、痕跡だけが残っただけである。中央からは良く焼けた火床を検出している。

柱 穴：主柱穴は2基検出している。P₁は一辺約50cmの方形、P₂は長径約50cmの楕円形であり、ともに床面からの深さ55cmを測ることができる。

遺 物：多くの住居跡と重複関係にあるため、本住居跡に伴うと考えられる遺物は少ない。1は須恵器坏である。口縁部はやや外反気味に立ち上がり、底部にはヘラ記号が認められる。2は須恵器長頸壺である。頸部がほぼ水平に切り取られていることから、再利用されていたものと思われる。外面には平行タタキ痕をわずかに残しているが、ナデ消されている。3・4は土師器の長胴甕である。いずれも外面はタテハケ、内面はヨコハケによって調整されている。



第64図 12号住居跡

1号掘立柱建物跡 (第66図、図版12)

位 置：D～F-4～6 **規 模**：2間 (344) × 3間 (660) **平面形**：長方形

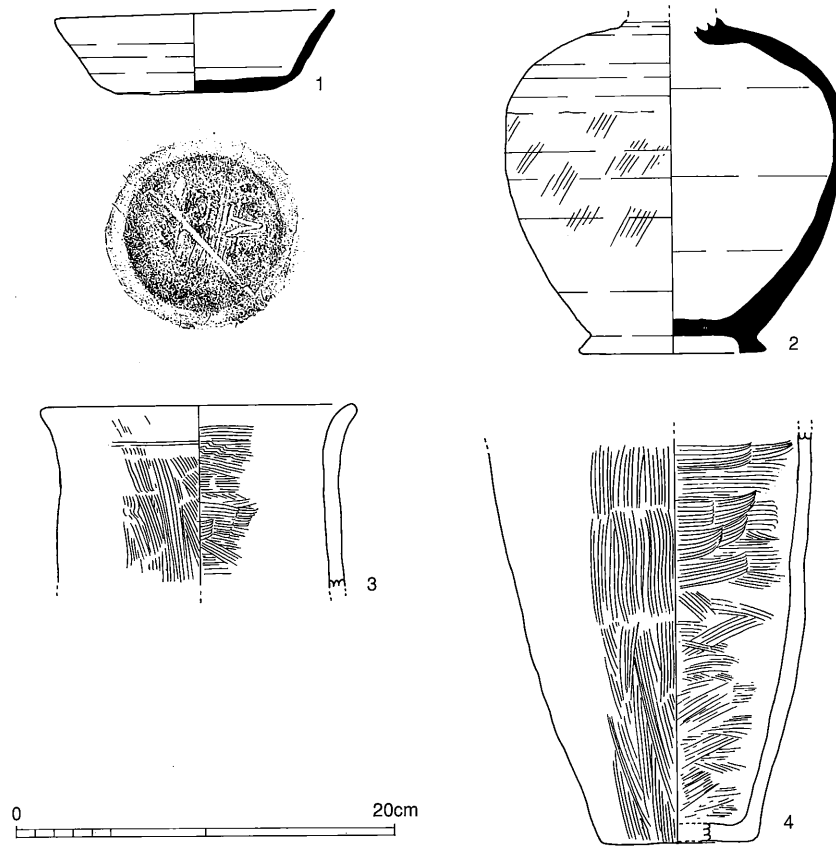
長軸方向：N-70°-W **新旧関係**：重複関係にある全ての遺構より新

柱掘方：掘方はいずれも方形を基本としており、一辺80cm前後を測ることができる。梁行は2間以上、桁行は3間の建物と思われる。掘方の中には、直径20cm前後の柱根跡を残しているものもある。

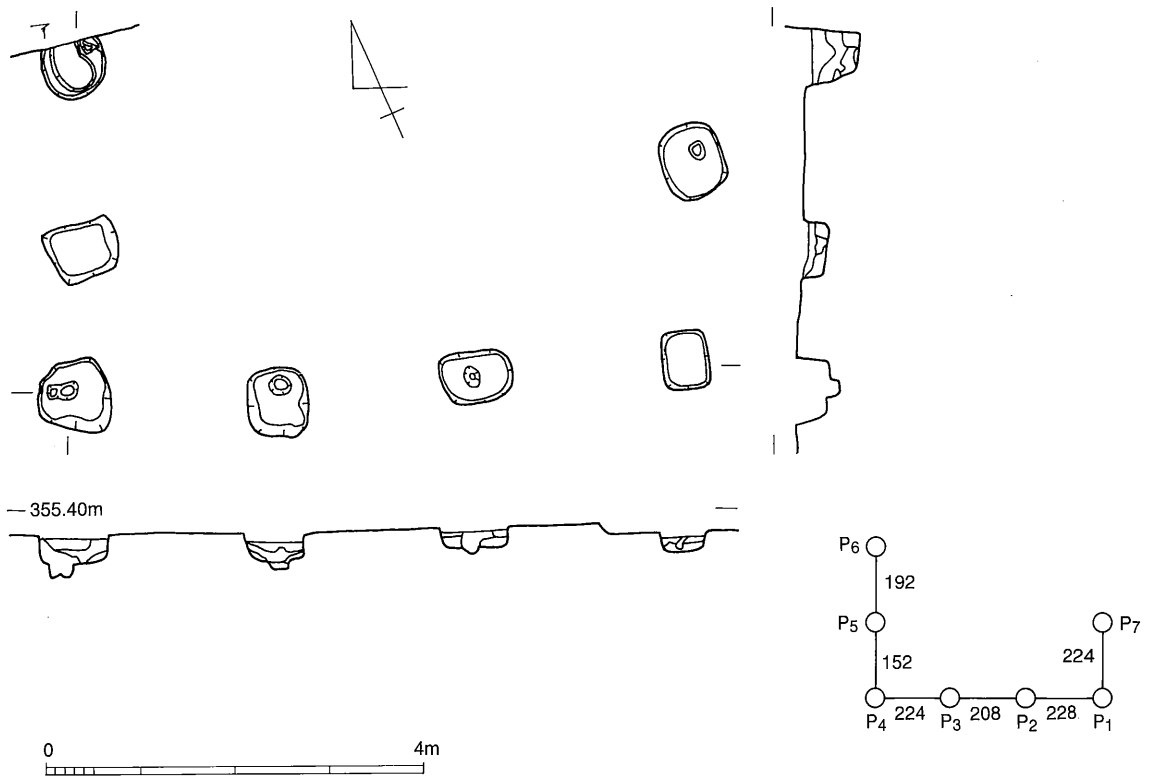
柱 間：梁行はP₄～P₅間で152cm、P₅～P₆間で192cm、P₁～P₇間で224cmであり一定していない。桁行はP₁～P₂間、P₃～P₄間が225cm前後、P₂～P₃間が208cmとなっており、中央部の柱間が若干狭くなっている。

遺 物：掘方内から土器の小破片が出土しているが、図化できたものはない。

本建物跡は、重複する全ての住居跡を破壊していることから、6世紀以降に作られたものと思われるが、建物跡に伴う遺物がないため、その時期を明らかにすることはできなかった。



第65図 12号住居跡出土遺物



第66図 1号掘立柱建物跡

4 中世

1号溝 (第67図)

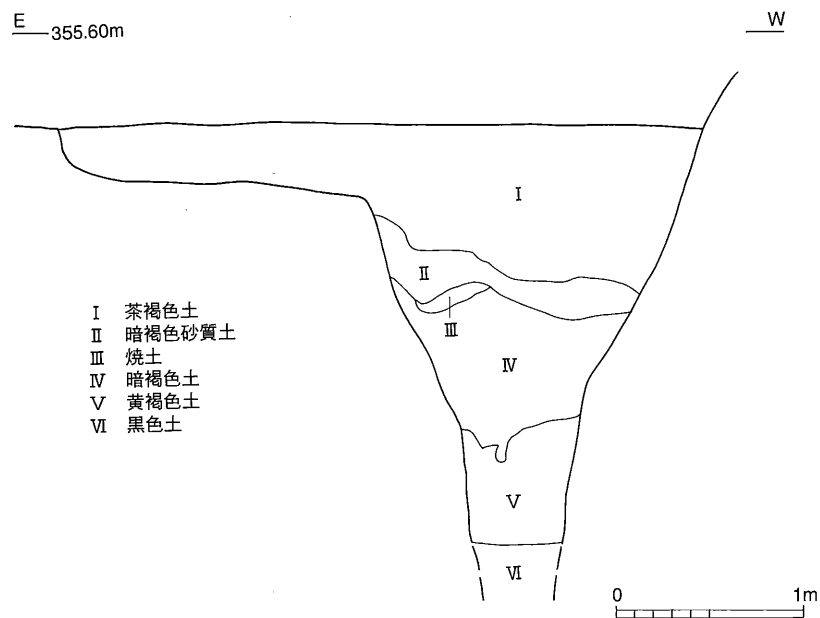
位置：H-2～6 規模：長さ1150以上、深さ190以上 平面形：直線

主軸方向：N-15°-E 新旧関係：重複する全ての遺構より新

構造：隣接する変電所建設に伴う調査により検出された中世居館に関連する溝の延長を検出したものである。検出面下190cmまで掘り下げたが、崩落の危険があったため、これ以上の掘り下げは断念した。断面はV字形または台形になるものと思われ、下部は垂直に近い掘り込みとなっている。覆土は大別して4層に分けることができるが、水平に近い堆積状況を示していることから人為的に埋められたものと思われる。また、最下層となるVI層は泥炭に近い黒色土であることから、水が滞留していた時期があったものと思われる。溝の東側約2.5mの範囲では遺構の検出がまったくできない状況であったため、溝に伴う何らかの施設があったものと思われる。

遺物：土器の小破片がわずかに出土しているだけであり図化できたものはなかったが、内耳土器が出土していることから、中世以降の溝と考えられる。

本遺構は変電所部分で西側に直角に折れ曲がっていることが確認されている。旧地籍図を見ると、調査地周辺では旧流路に削られている部分もあるが、一辺約100m程の方形区画が見てとれる。今回の調査では時期を推定できる遺物の出土はなかったが、前回の調査では15世紀中頃を中心とした遺物が出土している。また、調査地の南西に位置する荒井遺跡では一辺60m程の方形区画を持つ中世の溝が検出されており、周辺に複数の居館が存在していたものと思われる。



第67図 1号溝断面

第5節 大宮地区

調査地は雨宮坐日吉神社の境内であり、2ヶ所のトレンチを設定して調査を実施した。屋代寺推定地に隣接していることから、寺院に関連する遺構が検出される可能性も想定していたが、検出した遺構は古墳時代を中心としたものであり、布目瓦の出土はあったものの、その出土量はわずかであり寺院に関わる遺構は検出できなかった。

3号住居跡（第68・69図、図版13・27・28）

位置：A～C-3～5 規模：不明 平面形：方形？

主軸方向：不明 新旧関係：2号土坑より古

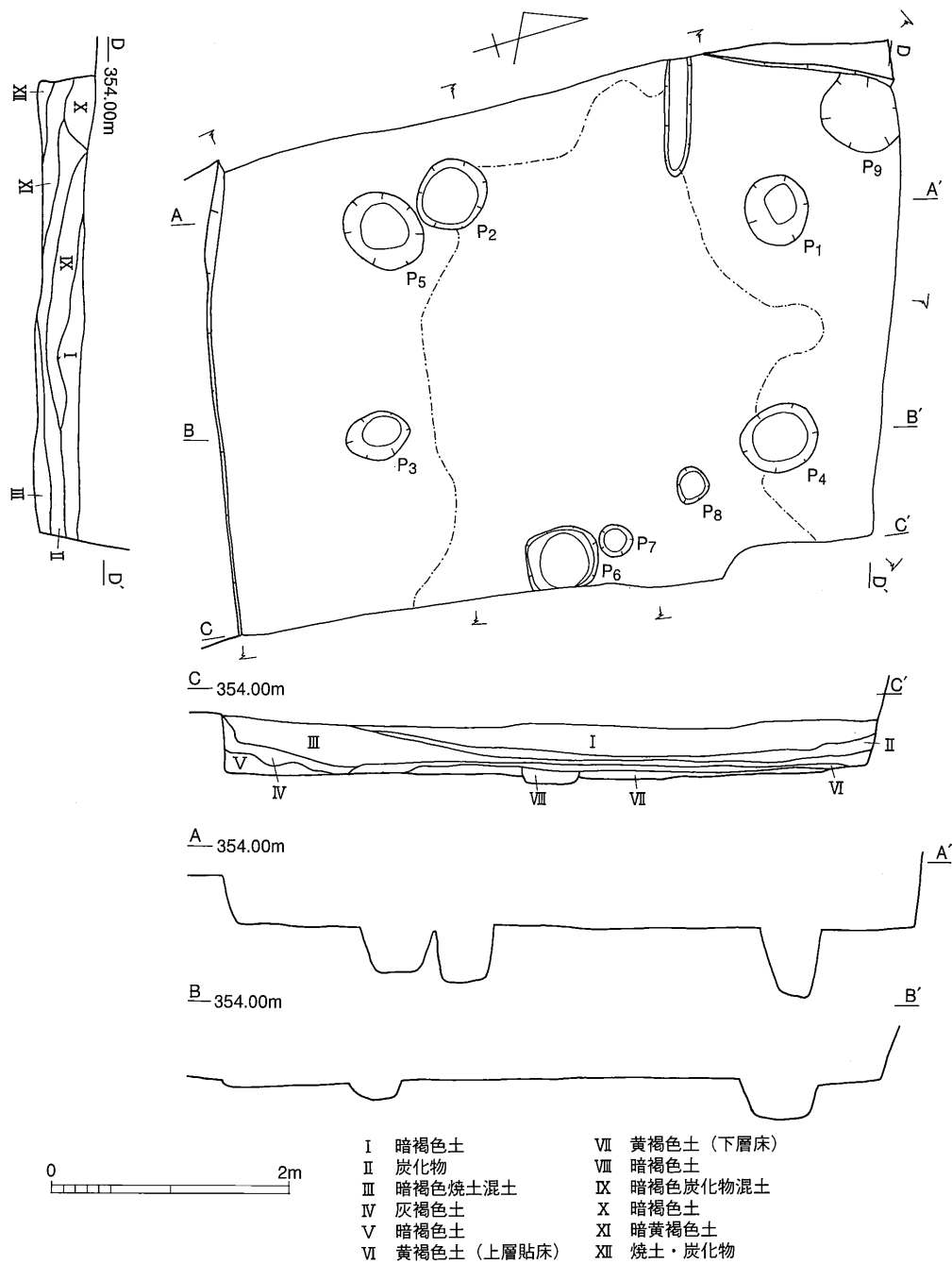
床 面：2面検出している。上層の床は黄褐色土を5cm前後の厚さに貼っており、平坦で良く叩き締められていた。下層の床はわずかな間層を挟んだだけであり、上層の床の直下から検出された。平坦で良く叩き締められていた。また、下層の床面からは間仕切溝と思われる溝を1基検出している。

壁：ほぼ垂直に掘り込まれ、最大壁高50cmを測ることができる。調査区が狭かったため、全掘することはできなかったが、一辺6m以上を測る比較的大形の住居跡である。

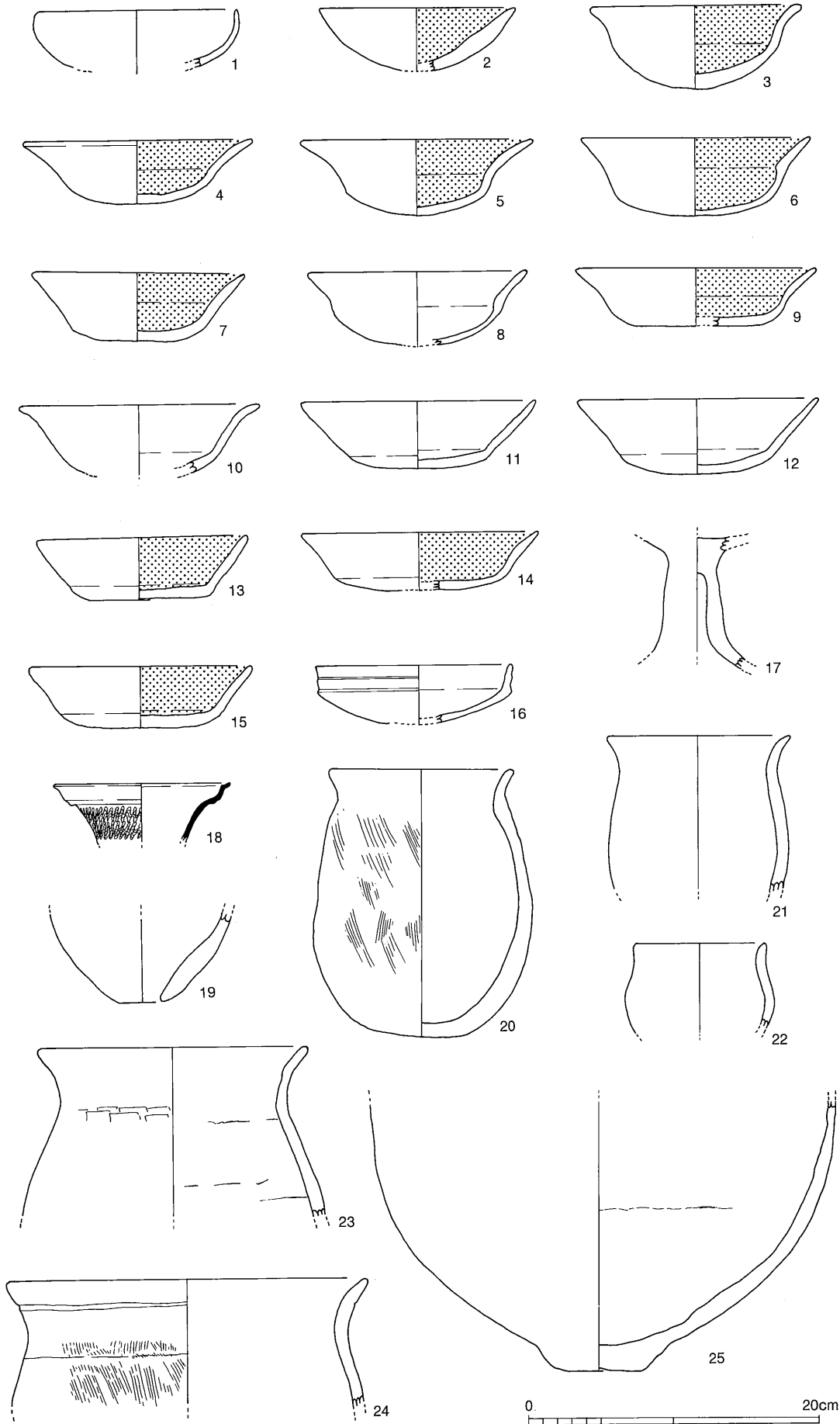
柱 穴：9基のピットを検出しているが、主柱穴になると思われるものはP₁・P₄・P₅の3基である。主柱穴はいずれも直径60cm前後を測る円形であり、床面からの深さ45cm前後を測ることができる。またP₇・P₈の中には炭化物のみが充満しており、柱がそのまま炭化した可能性も考えられる。

覆 土：覆土は大別して4層に分けることができる。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積により埋没したものと思われるが、Ⅱ層には炭化物が多量に含まれており、住居跡が埋没する過程において何らかの焚火行為があったものと思われる。

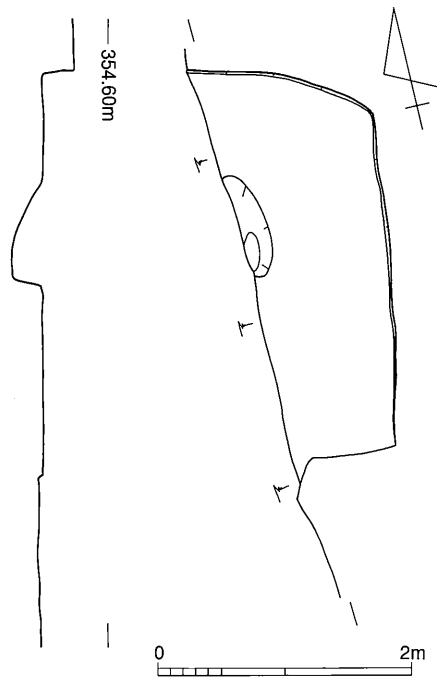
遺 物：出土量が多い。1～16は土師器坏である。1は椀形の体部を持ち、口縁が直立する形態を呈している。2は口縁が直線的に開いているが、器厚がかなり厚いものである。3～10はともに椀形の体部から口縁が大きく外反する形態を呈しており、3～7・9は内面黒色処理されている。11～15は底部が扁平であり、口縁部は緩く外反するか直線的である。また、13～15は内面黒色処理される。16は須恵器坏蓋を模倣した坏であるが、口縁部の立ち上がりにも一段の稜が認められる。これらの坏類は16を除いて全てていねいにヘラミガキされている。17は高坏の脚部である。円筒形の筒部を持った屈折脚高坏であり、外面はていねいにヘラミガキされている。18は須恵器甕の口縁部である。外面には櫛描波状文が密に施されており、口縁端部には段が認められる。器厚も薄く精緻な作りであるが、歪みが著しい。19は甑である。内外面ともヘラミガキされており、底部に1孔が穿たれている。20～22は小形の甕である。20は卵形の体部から口縁が緩くくびれる形態を呈している。外面にはハケが認められ、内面はナデによって調整されている。23～25は大形の甕である。23・24は口縁部で、23の外面にはヘラケズリ、24の外面にはハケが認められる。25は底部であり、底部は平底で外面はヘラミガキされている。この他に骨角製の柄が付いた刀子（第81図5）、土製勾玉、管玉、丸玉、滑石製白玉8点（第82図3・8・10・30～37）が出土している。



第68図 3号住居跡



第69図 3号住居跡出土遺物



第70図 4号住居跡

4号住居跡 (第70図、図版14)

位置：H-3 規模：不明
平面形：隅丸方形 主軸方向：N-15°-E
新旧関係：なし

床面：ほぼ平坦であり、地山の黄褐色土を叩き締めた顕著なものであった。

壁：表土掘削時に住居跡の大半を削平してしまったため、ほとんど残っていない。壁はほぼ垂直に立ち上がり、最大壁高25cmを測る。

柱穴：主柱穴を1基検出した。直径80cm前後を測るものと思われ、床面からの深さ30cmを測る。

遺物：小破片がわずかに出土しているだけであり、図化できたものはなかったが、ていねいにヘラミガキされた椀形の坏などが出土している。

5号住居跡 (第71～73図、図版14・28)

位置：H-I-1・2 規模：不明 平面形：隅丸方形
主軸方向：N-40°-E 新旧関係：なし

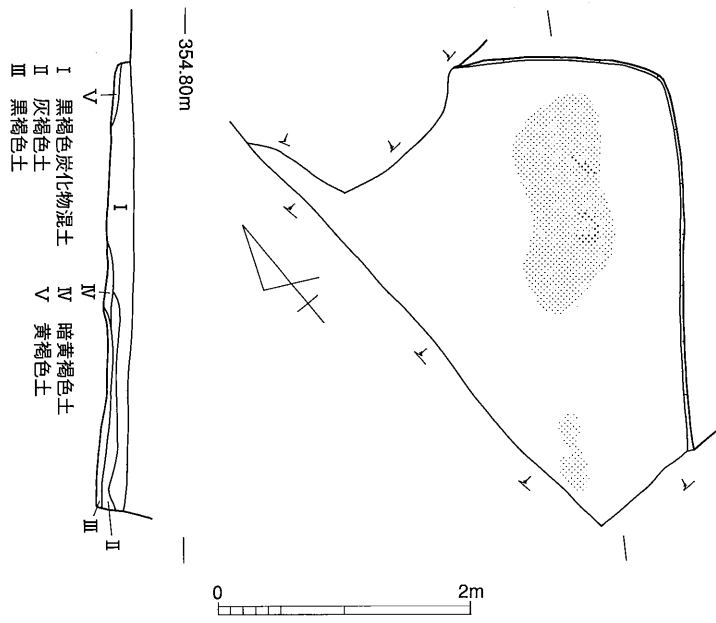
床面：2面検出している。上層の床は暗黄褐色土を3cm前後の厚さに貼った床であり、凹凸はあるものの、顕著で良く叩き締められていた。下層の床は黄褐色土の地山を叩き締めてそのまま床面としており、ほぼ平坦な床面となっている。

壁：立ち上がりは、ほぼ垂直であり、最大壁高30cmを測る。住居跡の大半が調査区外になるが、壁は顕著に検出することができた。

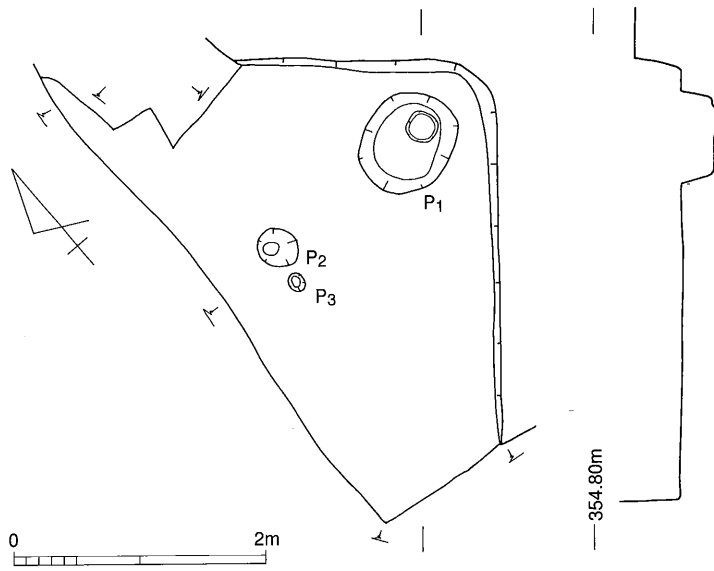
柱穴：下層床面から3基のピットを検出したが、主柱穴になると思われるものはP₁のみである。直径約80cmの円形であり、床面からの深さ30cmを測ることができる。また底部には直径約25cmの柱痕跡が確認されている。

炉：上層床面から検出している。U字形を呈した地床炉であり、掘り込みはほとんど認められない。炉の周囲には炭化物が広がっている。

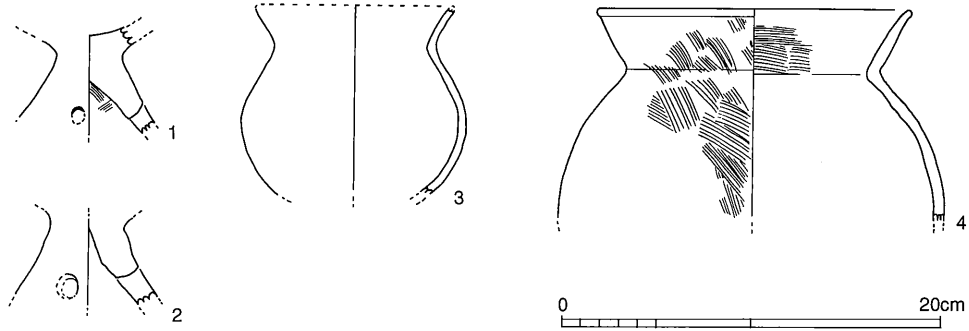
遺物：出土量はあるが、小破片が多く、図化できたものは4点のみである。1・2はともに高坏の脚部である。裾がラッパ状に大きく開く形態を呈するものと思われ、筒部には円形の透孔が穿たれている。外面及び坏部内面はていねいにヘラミガキされている。3・4は甕である。3は比較的小形の甕であり、口縁部がくの字に屈曲し、外面はヘラミガキされている。4は比較的大形の甕であり、口縁部はくの字に屈曲し、端部は玉縁状に肥厚している。胴部は球形になるものと思われ、外面及び口縁内面にはハケが施されている。



第71图 5号住居跡上層床面



第72图 5号住居跡下層床面



第73図 5号住居跡出土遺物

2号土坑 (第74図、図版14・28)

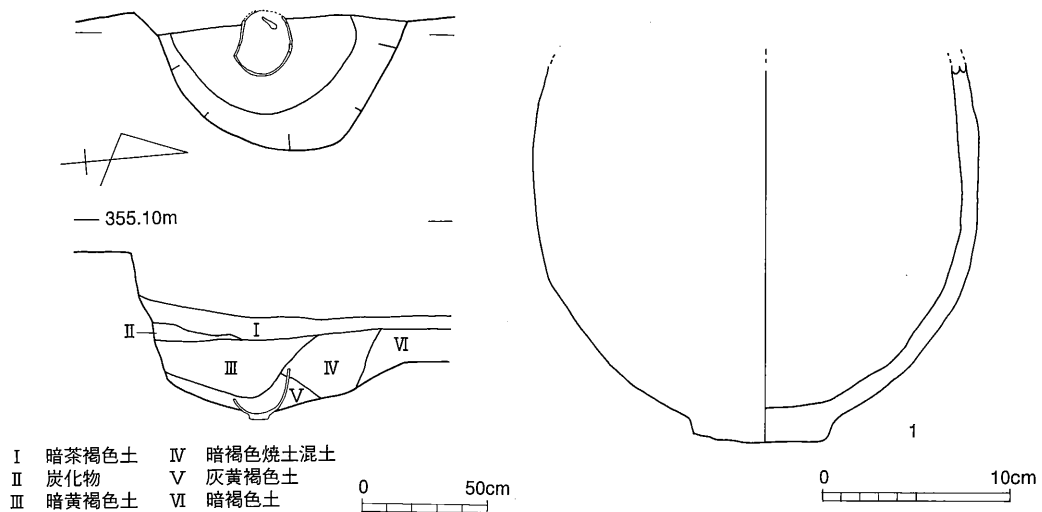
位置：A・B-3 規模：直径95 平面形：不整円形

新旧関係：3号住居跡より新

構造：平面形は不整な円形を呈するものと思われるが、全体の半分ほどを検出しただけで全体を把握することはできなかった。上層からは炭化物層が検出されていることから、3号住居跡が埋没して行く過程で行われた焚火行為よりも前に土坑が掘り込まれたものと思われる。土坑のほぼ中央に正位の状態で甕の下半部が埋設されており、中から少量の骨片が出土した。

遺物：埋設されていた土師器甕1点のみである。上半部を欠いているが、破断面がほぼ水平であることから、意図的に打ち欠かれたものと思われる。底部は平底であり、内外面ともナデによって調整されている。

埋設されていた土器の状況及び骨片が出土していることから土坑墓であると考えられる。



第74図 2号土坑及び出土遺物

第6節 その他の遺物

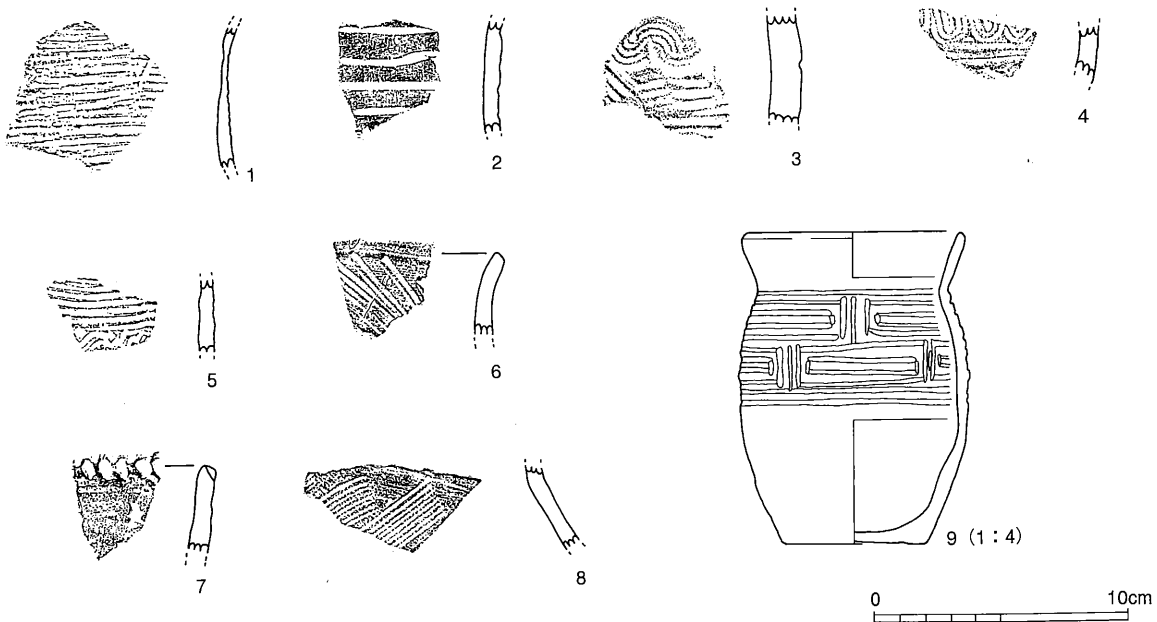
土器以外の遺物及び、特定の遺構以外から出土した土器についてはその他の遺物として扱った。

1 弥生土器

弥生時代中期（第75図）

大宮地区2トレンチから弥生時代中期の土器片が出土している。1・2は頸部の破片と思われ、1には横位の条痕文が認められる。2には横位の沈線が現状で4条確認できる。3～5は胴部の破片と思われ、3・4には円弧文が認められる。5は横位の条痕文の下にヘラ描の波状文が認められる。6・7は口縁部の破片である。6の口縁端部は直角に近く、外面には櫛描羽状文が認められる。7の端部には刻みが付けられている。9は甕形土器である。口縁部は緩くくびれて直線的に立ち上がり、胴部中程に文様帯を持つ。ヘラ描沈線による変形工字文が施されており、外面はヘラミガキされている。

これら一群の土器は条痕文を持つ水神平系と、櫛描羽状文を持つ新諏訪町式土器に併行するものと思われ、いずれも弥生時代中期前半に属すると思われるものである。昭和58年に行われた調査においても、当該期の土器片がまとまった量出土しており、遺構の検出こそできていないものの、その数はかなりの量になる。調査地周辺では、弥生時代中期前半にはすでに集落が成立していた可能性が指摘できるだろう。

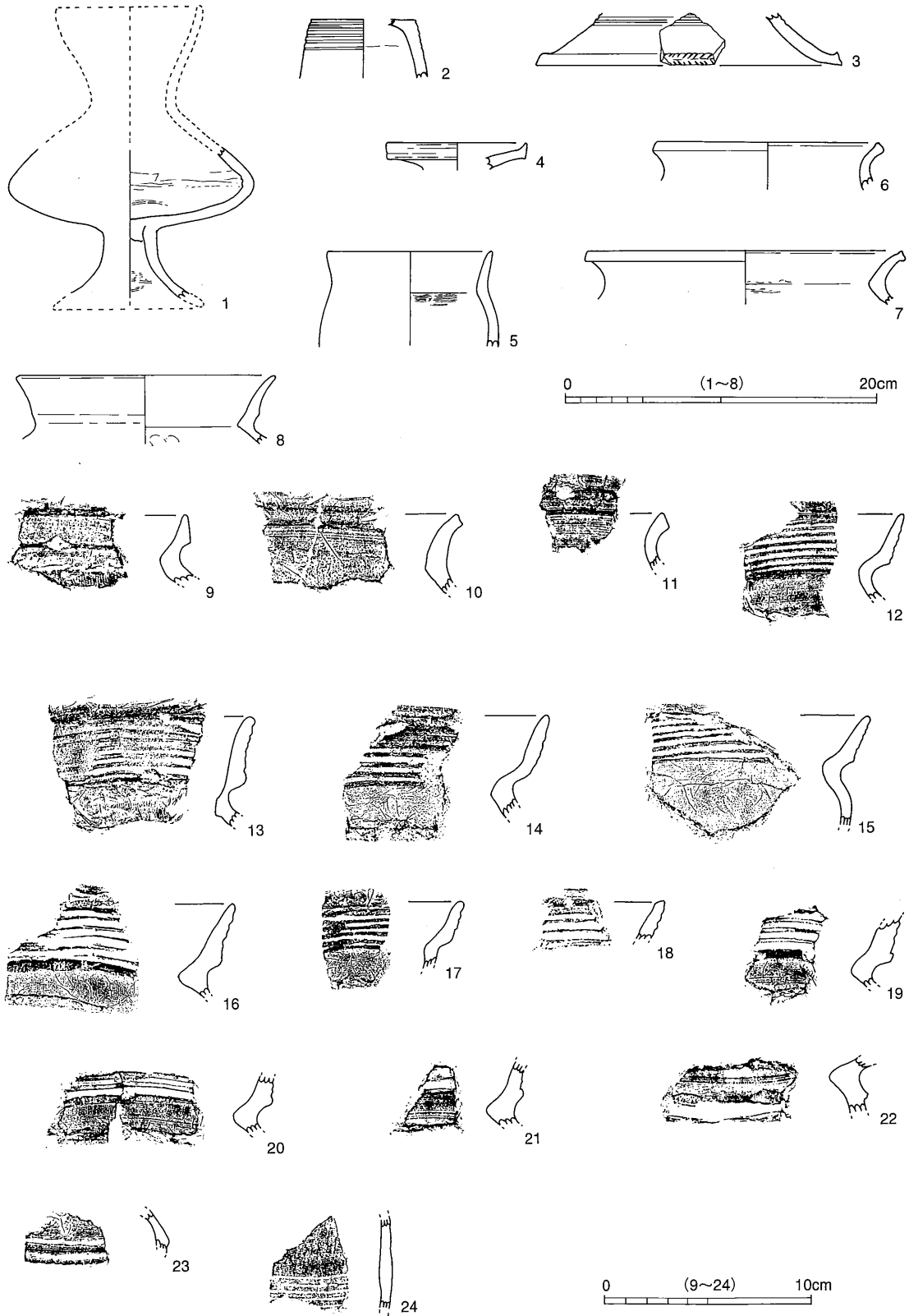


第75図 弥生時代中期土器

弥生時代後期（第76図）

屋代寺地区14号住居跡は弥生時代終末期の住居跡と考えられ、多くの北陸系土器が出土している。検出面から出土したものも合わせると、その個数は30個体を超えている。第76図は9・10・13・21が14号住居跡、残りが検出面より出土した北陸系土器である。1は脚付長頸壺である。胴部は扁平な球形を呈しており外面は赤彩され、ていねいにヘラミガキされている。2・3は高坏の脚部と思われる。2は筒部と思われ、外面には沈線が認められる。3の外面は赤彩され、端部には矢羽状の刻みが認めら

れる。4は器台と思われる。口縁端部は短く直立し、擬凹線が認められる。5～22は甕である。5は小形の甕であり、外面はていねいにヘラミガキされている。6・7・10・11は短く内傾する口縁端部を持ち、口頸部はくの字に屈曲している。8は口頸部に一段の稜を持ち、そこから口縁部が緩く外反



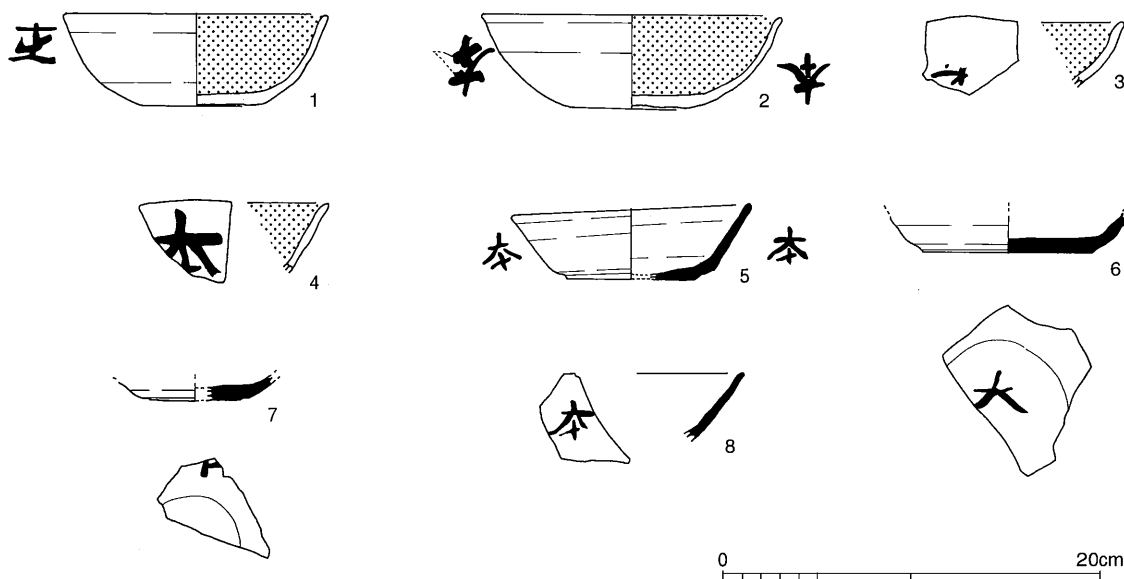
第76図 屋代寺地区出土北陸系土器

する形状を呈している。12～22は口縁部に擬凹線を持つ甕である。23は装飾壺の体部と思われる。

2 墨書土器 (第77図)

G地区からは、住居跡以外からもまとまった量の墨書土器が出土している。1は検出面から出土した土師器坏であり、外面に「主」もしくは「生」と判読できそうな墨書が認められる。2も検出面から出土した土師器坏である。外面2ヶ所に逆位で「本」と判読できる墨書が認められる。3・4は小破片であるが、4はやはり「本」と判読できる。5は須恵器坏であり、外面2ヶ所に正位で「本」と判読できる墨書が認められる。6は底部に「大」と判読できる墨書が認められるが、「本」であった可能性が高いと思われる。7・8は小破片であるが、8はやはり「本」と判読できる。

G地区ではこの他に366号住居跡から「本」と判読できる墨書土器が3点出土している。判読できた墨書は「本」が圧倒的に多く、土口バイパスの調査地点でも「本」と判読できる墨書土器が2点出土している。また土口バイパス309号住居跡からは「生」に良く似た墨書土器がまとめて出土しており、本調査地点においても「本」と判読できる墨書土器が検出面を除いては366号住居跡からしか出土していないことから、これらの墨書は土器の所有に関わるものであった可能性が考えられる。



第77図 G地区出土墨書土器

3 布目瓦 (第78図)

屋代寺地区及び大宮地区より出土している。1は屋代寺地区から出土した軒平瓦である。重弧文を持つものであり、これまで知られていた屋代寺瓦の軒平瓦と同一のものである。2～4は屋代寺地区から出土した平瓦である。いずれも凹面には布目を残しており、幅2～3cmの浅い溝状の模骨痕を残している。5の凸面は格子目のタタキ痕をそのまま残しているが、3・4はヘラにより削り取られている。5は屋代寺地区、6は大宮地区から出土した丸瓦である。いずれも凹面には布目を残しており、凸面はヘラケズリが施され、縄目を残しているものはない。また6は径が小さく器厚も薄いため、ソケット部分になるものと思われる。

4 土製品

土製紡錘車（第79図1～3）

3点出土している。1はG地区370号住居跡から出土したものである。重量244gを測ることができ、紡錘車としてはかなり大形のものであることから、他の土製品である可能性も否定できない。焼成は土師質であり、表面はていねいにヘラミガキされている。2はG地区グリッドから出土したものである。土師質であり、表面はていねいにヘラミガキされている。約1/2を欠失しているが、残存重量66gを測る。3は大境地区グリッドから出土したものである。土師質であり、表面はていねいにヘラミガキされている。約1/2を欠失しているが、断面形はそろばん玉形を呈している。残存重量17gを測る。

土錘（第79図4～6）

3点出土しているが、いずれも土師質であり、G地区から出土したものである。4は366号住居跡から出土したものであり、平面形は円筒形を呈している。全長4.5cm、重量41gを測る。5は368号住居跡から出土したものであり、全長6.0cm、重量87gを測る。6は373号住居跡から出土したものである。平面形は紡錘形を呈し、全長8.5cm、重量107gを測る。

5 石製品

石製紡錘車（第79図7・8）

2点出土しているが、いずれもG地区からの出土である。7は352号住居跡から出土したものである。約1/2を欠失しているが、表面には擦痕が認められる。8はグリッドから出土したものである。断面形は台形を呈しており、表面には擦痕が認められる。

砥石（第79図9・10、第80図11・12）

4点出土している。11は置き砥石と思われるが、他の3点は手持ち砥石と思われるものである。9はG地区359号住居跡から出土したもので、平面形は長方形を呈している。12は大境地区11号住居跡から出土したものであり、平面形は柱状を呈している。また、直径3mm程の持ち運び用と思われる孔が穿たれているが、この孔は貫通していない。

軽石製品（第80図13～15）

3点出土している。13はG地区374号住居跡から出土したもので、直径約1cmの孔が中程まで穿たれている。14・15は屋代寺地区グリッドから出土したものであり、いずれも面取りがされているが、用途は不明である。

6 鉄製品

紡錘車（第81図1）

1点のみ出土している。1はG地区354号住居跡から出土したものである。断面形は板状を呈し、直径4.5cmを測る比較的小型の紡錘車である。芯棒は失われている。

鎌（第81図2～4）

3点出土している。いずれも曲線刃になるものと思われるが、全形がわかるものは2点である。2はG地区377号住居跡から出土したものである。基部を欠失しているが、ほぼ原形を保持しており、全長13cm前後を測るものと思われる。4は大宮地区グリッドから出土したものであり、全長10cmを測る。

刃部がかなりわん曲しており、研ぎ減りしているものと思われる。

鉄鏃 (第81図5・6、図版31)

2点出土しているが、いずれも屋代寺地区からの出土である。5は3号住居跡から出土したものであり、片刃矢鏃若しくは柳葉鏃と思われる。茎部を欠失するが、現存長14cmを測る。6は10号住居跡から出土したものである。柳葉鏃であり、現存長6.5cmを測る。両者とも銹化が著しいため、詳細は不明である。

刀子 (第81図7～9、図版31)

3点出土している。7は大宮地区3号住居跡から出土したものである。刀子本体は大部分が欠失しているが、骨角製の柄に装着された状態で出土している。柄の断面形は楕円形を呈しており、柄頭部分が屈曲している。茎は柄に2.5cm程差し込まれているだけである。8は大境地区3号住居跡から出土したもので、茎部分を除いてほぼ完存する。9は大境地区グリッドから出土したものである。

7 骨角器

骨鏃 (第81図10～12、図版31)

3点出土しているが、いずれも屋代寺地区からの出土であり、全形を窺い知ることのできるものは1点のみである。10は2号住居跡から出土したもので、鏃身部は柳葉形に近い形状を呈し、断面形はかまぼこ形となる。11・12はともに8号住居跡から出土したものであるが、欠失部分が大きいため、詳細は不明である。

8 玉類

勾玉 (第82図1～3、図版29)

3点出土しており、2点が石製、1点が土製である。1は屋代寺地区3号住居跡から出土した石製勾玉である。表面はていねいに研磨されており光沢を放っている。2は大境地区3号土坑から出土したものである。欠損品であるが碧玉製の勾玉である。3は大宮地区3号住居跡から出土した土製勾玉である。色調は黒色であり、ヘラミガキが施されている。

管玉 (第82図4～8、図版29)

5点出土している。いずれも片側穿孔で、濃緑色を呈するグリーンタフ製のものが多い。

丸玉 (第82図9～11、図版29)

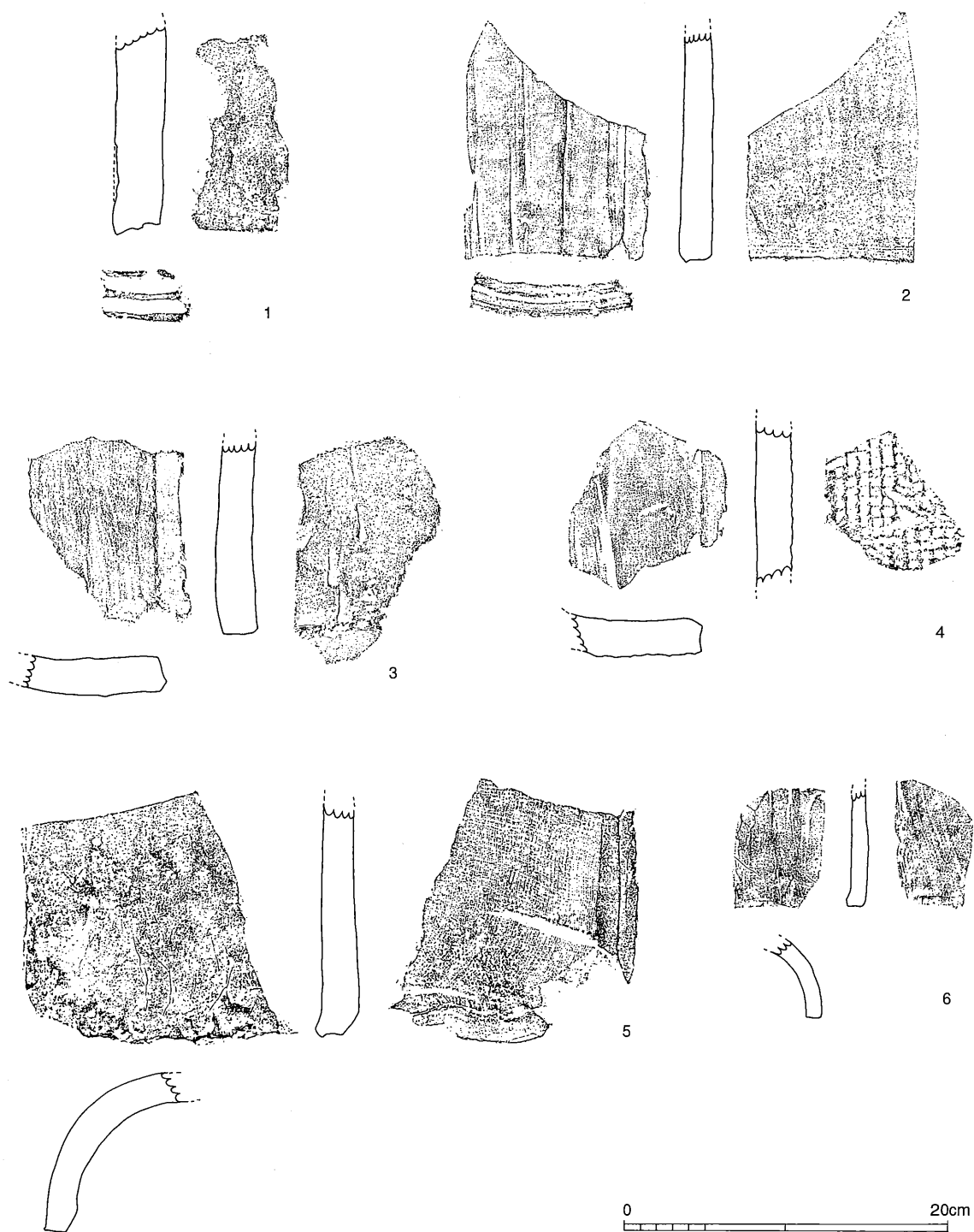
3点出土している。いずれも黒色を呈しており、直径1～3mmの穿孔がある。

臼玉 (第82図12～39、図版29)

28点出土している。平面形は方形を呈するものが多く、そろばん玉状になるものは1点のみである。直径3～5mmのものが主体を占めているが1cm程度になるものも2点出土している。また、大宮地区3号住居跡からは8点と比較的まとまった量が出土している。

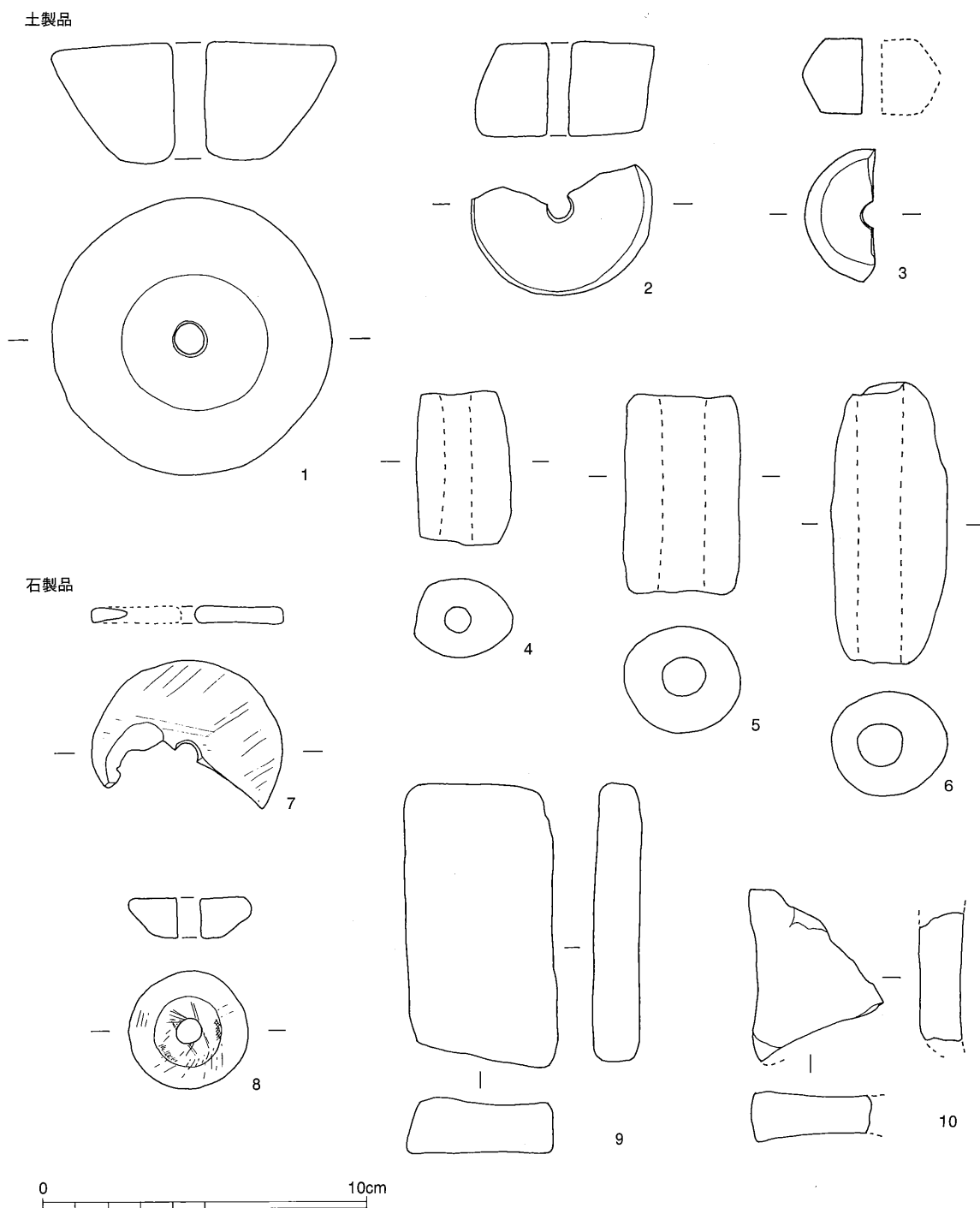
滑石製模造品 (第82図40、図版29)

G地区384号住居跡から出土した有孔円板1点のみである。平面形は円形に近く、2孔が穿たれている。また、表面には擦痕が残っている。



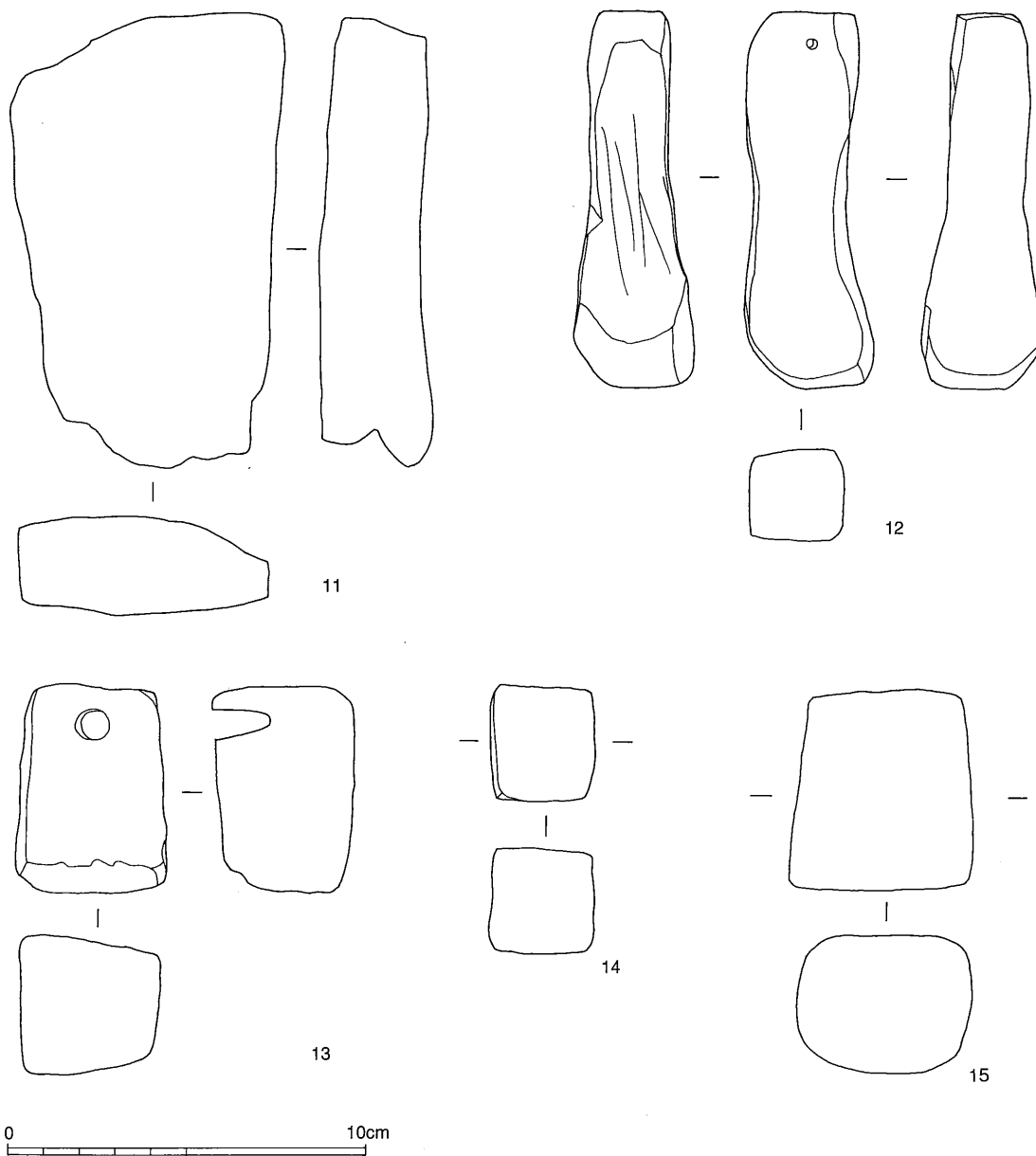
1~4 屋代寺地区グリッド 5 屋代寺地区1号住居跡 6 大宮地区1トレンチ

第78図 布目瓦



1 G地区370号住居跡 2・8G地区グリッド 3 大境地区グリッド 4・10 G地区366号住居跡 5 G地区368号住居跡
6 G地区373号住居跡 7 G地区352号住居跡 9 G地区359号住居跡

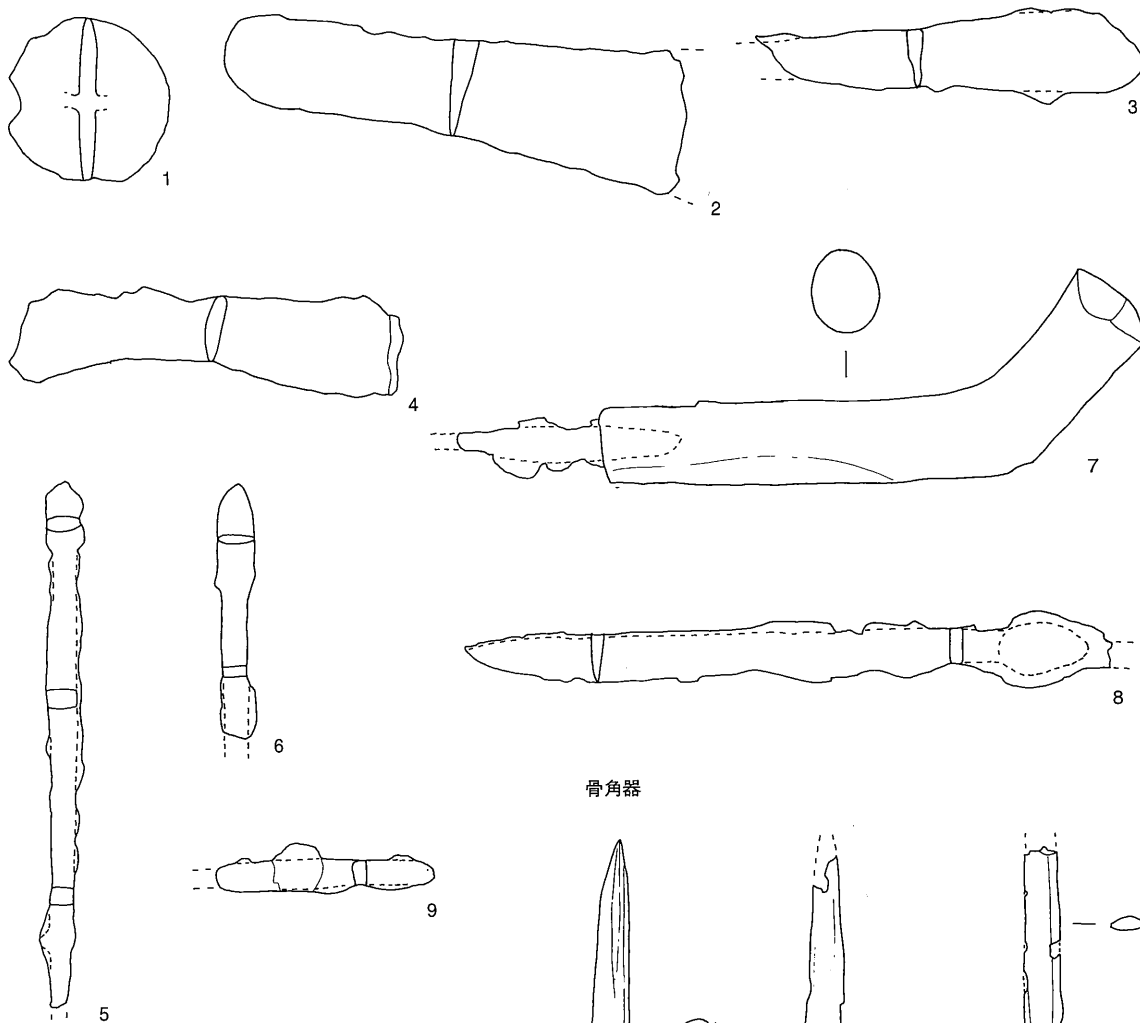
第79図 土製品・石製品1



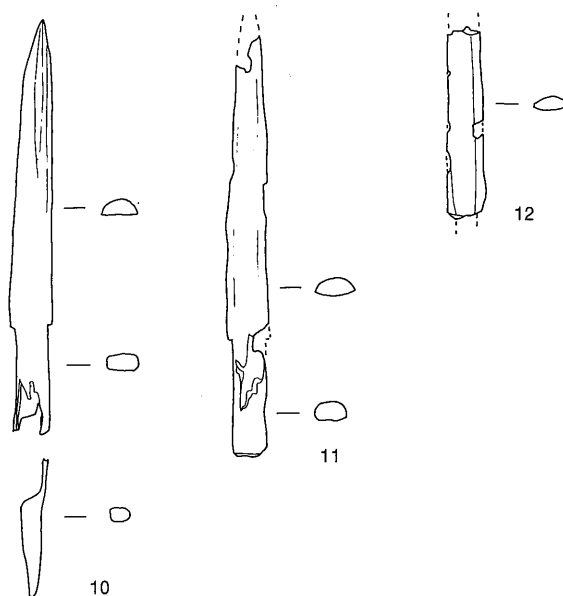
11 屋代寺地区11号住居跡 12 大境地区11号住居跡 13 G地区374号住居跡 14・15 屋代寺地区グリッド

第80図 石製品2

鉄製品



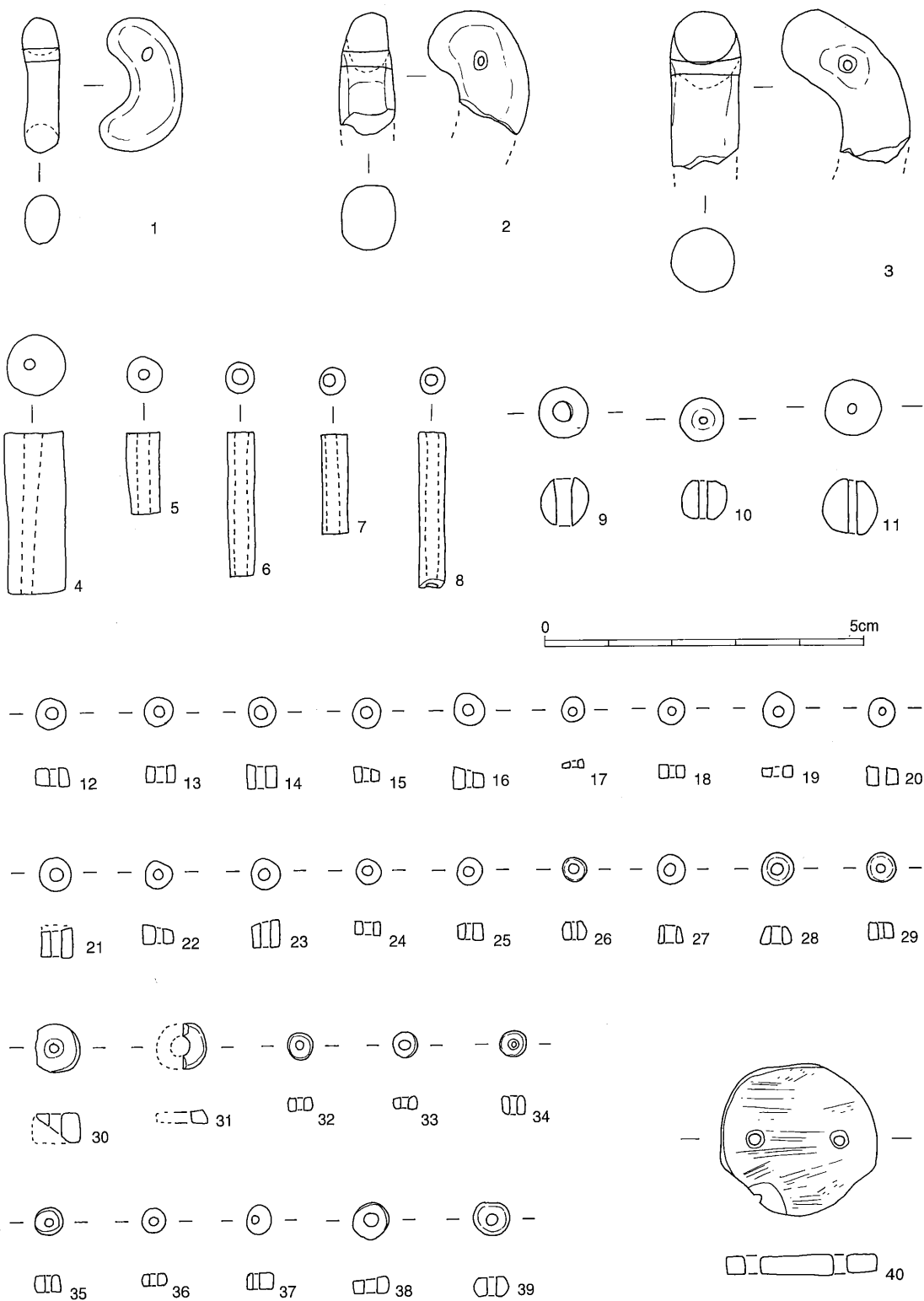
骨角器



0 10cm

- 1 G地区354号住居跡 2 G地区377号住居跡 3 G地区グリッド 4 大宮地区グリッド 5 屋代寺地区3号住居跡
 6 屋代寺地区10号住居跡 7 大宮地区3号住居跡 8 大境地区3号住居跡 9 大境地区グリッド
 10 屋代寺地区2号住居跡 11・12 屋代寺地区8号住居跡

第81図 鉄製品・骨角器



1・16・17 屋代寺地区3号住居跡 2 大境地区3号土坑 3・8・10・30~37 大宮地区3号住居跡 4 G地区369号住居跡
 5 屋代寺地区10号住居跡 6・7・21~25 屋代寺地区グリッド 9 G地区359号住居跡 11・18~20 屋代寺地区8号住居跡
 12 G地区352号住居跡 13~15 屋代寺地区2号住居跡 26 大境地区1号住居跡 27 大境地区3号住居跡
 28 大境地区6号住居跡 29 大境地区9号住居跡 38・39 大宮地区グリッド 40 G地区384号住居跡

第82図 玉類・滑石製模造品

住居跡一覧表

住居跡 No	位置	時代	形態	主軸方向	規 模 (cm)	備 考
屋代遺跡群 G 地区						
352	GH・GI-15・16	古代	方形	N-12°-E	365×345	詳細本文中
353	GI-15・16	古代	方形	N-100°-E	355×	詳細本文中
354	GH・GI-17・18	古代	隅丸方形	N-93°-E	345×	
355	欠番 (土口バイパス発掘調査の住居跡)					
356	欠番 (土口バイパス発掘調査の住居跡)					
357	欠番 (土口バイパス発掘調査の住居跡)					
358	GG~GI-14~16	古代	方形	N-101°-E	420×410	詳細本文中
359	GG・GH-15~17	古墳	隅丸方形	N-75°-W	不明	詳細本文中
360	欠番 (土口バイパス発掘調査の住居跡)					
361	GH・GI-16・17	古墳	不明	不明	不明	
362	GI-14・15	不明	方形?	不明	不明	
363	GA・GB-25	古墳	隅丸方形	不明	不明	
364	GD・GE-23・24	古代	方形	不明	不明	
365	GA・GB-22・23	古代	隅丸方形	N-15°-E	390×	
366	GB・GC-22~25	古代	長方形	N-98°-E	430×365	詳細本文中
367	GD・GE-26	古墳	隅丸方形	不明	不明	
368	FY・GA・GB-23~25	古墳	方形?	N-55°-E	535×500	詳細本文中
369	GD・GE-24・25	古墳	隅丸方形	N-85°-E	360×	
370	GC~GE-25・26	古墳	隅丸方形	N-37°-E	不明	詳細本文中
371	GD・GE-23・24	古代	隅丸方形	N-105°-E	365×	
372	GD・GE-25	古墳	方形?	不明	不明	
373	FY・GA・GB-22	古代	方形	N-95°-E	370×	詳細本文中
374	GC・GD-22・23	古代	方形	N-16°-E	295×	
375	GA・GB-24・25	古墳	方形	不明	不明	
376	GC・GD-22~24	古墳	方形?	N-20°-E	490×	
377	GB・GC-24・25	古墳	隅丸方形	N-100°-E	305×300	詳細本文中
378	FY・GA・GB-22~24	古墳	方形	N-35°-W	700×	
379	GB~GD-24・25	古墳	隅丸方形	N-13°-E	535×460	詳細本文中
380	欠番					
381	GD・GE-23	古墳	方形	不明	不明	
382	GB・GC-22・23	古墳	隅丸方形	N-21°-E	(410) ×	詳細本文中
383	GB・23・24	古墳	隅丸方形	不明	不明	
384	GC・GD-25・26	古墳	不明	不明	不明	詳細本文中
385	GA・GB-25	古墳	不明	不明	不明	
屋代寺地区						
1	I・J-5・6	古代	方形	N-70°-E	360×	詳細本文中
2	G・H-5~7	古墳	方形	N-47°-W	385×380	詳細本文中

住居跡 No	位置	時代	形態	主軸方向	規模 (cm)	備考
3	H・I-6~8	古墳	隅丸方形	N-134°-E	710×	詳細本文中
4	H-5・6	古墳	方形?	不明	不明	詳細本文中
5	H・I-4・5	古墳	隅丸方形	N-57°-W	515×	詳細本文中
6	I-5・6	古墳	不明	不明	不明	
7	G・H-5・6	古墳	隅丸方形	不明	390×	
8	G~I-7~9	古墳	隅丸方形	N-60°-W	575×540	詳細本文中
9	F・G-5~7	古墳	隅丸方形	不明	不明	
10	I・J-6・7	古墳	隅丸方形?	不明	395×	
11	F-7・8	古墳	隅丸方形?	不明	不明	詳細本文中
12	I・J-5・6	古墳	方形	不明	不明	不明
13	F~H・5~8	古墳	隅丸方形	N-10°-E	715×	詳細本文中
14	G~J-4~6	弥生	隅丸方形	N-57°-E	670×600	詳細本文中
大境地区						
1	B~E-3・4	古墳	隅丸方形	N-55°-W	490×415	
2	B・C-2	古墳	隅丸方形	不明	不明	
3	C・D-3・4	古代	隅丸方形	N-22°-E	410×400	
4	D~G-2~4	古代	隅丸方形	N-47°-E	515×490	詳細本文中
5	F・G-5・6	不明	隅丸方形	不明	不明	
6	D~F-4~6	古墳	隅丸方形	N-68°-W	480×	
7	F・G-4・5	不明	隅丸方形	N-22°-E	470×	
8	G-3・4	不明	方形	N-5°-W	310×	
9	B・C-4・5	古代	方形	N-58°-W	365×	
10	B・C-3・4	古墳	隅丸方形	N-58°-W	不明	詳細本文中
11	D・E-4・5	古墳	隅丸方形	N-25°-E	不明	詳細本文中
12	D・E-2~4	古代	隅丸長方形	N-45°-E	540×430	詳細本文中
13	E・F-2	古代	方形	N-60°-E	不明	
14	G・H-2・3	古墳	不明	不明	不明	
15	B・C-4・5	古墳	隅丸方形	N-35°-E	不明	詳細本文中
16	E・F-4	古代	隅丸方形	不明	不明	
17	C~F-5・6	弥生	隅丸方形	N-53°-W	不明	詳細本文中
18	E・F-2・3	古墳	不明	不明	不明	
19	D・E-5・6	弥生	隅丸方形	N-67°-W	不明	詳細本文中
大宮地区						
1	B-2・3	古墳	方形	不明	不明	
2	A・B-1・2	古墳	不明	不明	不明	
3	A~C-3~5	古墳	方形?	不明	不明	詳細本文中
4	H-3	古墳	隅丸方形	N-15°-E	不明	詳細本文中
5	H・I-1・2	古墳	隅丸方形	N-40°-E	不明	詳細本文中
6	G・H-2	不明	方形?	不明	不明	

第6章 松田館

第1節 調査概要

松田館は、武水別神社の神官屋敷として使用されており、明治時代の絵図には土塁や堀なども描かれている。東西約70m、南北約90mの規模を持ち、現在も西側と南北の一部には土塁が残っており、東側には堀もみられる。

中世の居館と考えられているが、築造年代など不明な点が多いため、館内の地形測量を行い、合わせて2カ所の調査区を設定した。

1 トレンチ (第85・87図、図版32)

館西側の土塁中央付近に、東西約18m、幅2mのトレンチを設定し、土塁と堀の断面観察を行った。土塁は、最終的に幅10m高さ2.8m程の規模となったが、大きく分けて3期の構築が考えられる。

I期 高さ2m、幅8m程で、内側は35°外側は30°前後の角度になるように作られている。構築土は特に締まった部分などは無く、裾花凝灰岩の砂粒を含んだ土や、泥炭質の土が使用されており、館周辺で採掘されたものと思われる。

II期 I期の上部に盛土を行い高さ2.8mとしている。盛土は土塁内側部分に行っているため、頂点が1m程内側となり、内面の角度は約50°となる。また、盛土は水平に近く版築状の堆積を示している。

III期 土塁内側に盛土を行い幅10mと広げているが、相対的に締まりが無い。構築土も粘質に乏しく、それぞれの層が厚いため、盛土とするよりも、内部を整地した際の残土が積まれていると見るべきかもしれない。

堀は西側が調査区外へと延びていたため、正確な値は得られなかったが、深さは約1.8mで幅5m前後と思われる。約30°の角度で落ち込む土塁法面に屈曲点などは無く、そのまま堀の底まで達している。また、初期の土塁構築土に泥炭質の土層が見られることから、堀と土塁は同時に構築されたものと理解できる。

出土遺物には、土師質の皿(かわらけ)と近世陶器・瓦がある。かわらけは口径約7cmで底部に顕著な糸切り痕跡を残している。体部が直線的から内湾ぎみに開くことから、おそらく16世紀前半を前後する時期と考えられている。2点ともI期構築土塁の基底部付近から出土している。近世陶器と瓦は主にIII期構築土塁と堀から出土している。

2 トレンチ (第86図、図版32)

西側で土塁が切れる裏長屋門部分に設定したトレンチである。現存する裏長屋門は土塁から突出して作られているため、土塁に関連する施設の存在を想定して調査を行った。

地表の腐植土を取り除くと、石積の水路が現れる。この水路は現地表でも確認できるもので、料理の間の洗い場を通して東側へと流れている。この水路にほぼ平行して細かな石を敷いた通路が東側へと延びている。下層の調査は、隣接する櫓の根に覆われていたため十分な調査ができず、土塁に関連する門などの施設は確認できなかった。ただ部分的に掘り下げることができた地点では、地表下65cmから5cm前後の川原石を敷いた石敷を検出している。幅60~70cm程で東西方向に伸びており、上層の通路直下であるため同様の施設と考えられる。

出土遺物は、上層から出土した天保通宝と、若干の近世以降と思われる陶器が出土しているが、下層の石敷に伴う遺物の出土は無かった。

第2節 まとめ

調査は僅かなトレンチによるものであったが、屋敷を取り巻く土塁や堀が中世まで遡る可能性をあらためて確認できたことは大きい。I期土塁の基底部付近から出土したかわらけから、16世紀前半を前後する時期の築造と考えられる。

現在の宮司である松田家は、相模国足柄郡松田郷、現在の神奈川県松田町の出とされ、武田氏に仕え、この地を領有して八幡宮に奉仕したとされており、元亀元年（1570）に武田信玄より「更級郡八幡、東徳寺」支配の朱印状を受けている。天正10年（1582）武田氏が滅んだため、2代目の民部助は上杉景勝に仕えて稲荷山城を守り、天正12年（1584）5月には八幡領一円を安堵されている。これらの資料から、16世紀後半には八幡宮周辺は松田氏の支配にあったものと理解できる。

しかし、屋代家文書には屋代氏が上杉景勝から八幡と神主給分が与えられた天正10年12月12日の文書が含まれており、武田氏が滅亡した天正10年から、天正12年4月に上杉を離反し徳川に仕えるまでの間は、屋代氏が八幡周辺を領有していたものと思われる。

15世紀から16世紀中葉について知る資料はほとんどないが、永享11年（1439）の結城合戦に小笠原氏に属して参戦した信濃侍の中に、桑原氏が屋代氏・雨宮氏・生仁氏などと共に記されており、この地の有力な土豪であったことを示している。佐野山城や小坂城も桑原氏によって築城されたといわれている。また桑原村誌によれば、桑原氏は矢崎山付近に居住したこともあったとされており、その支配は八幡にまで及んでいたと考えられる。天文22年（1553）武田氏が葛尾城を攻め、更埴地域はいったん武田氏に制圧されたが、更埴地域の土豪は武田氏に反旗を翻し、八幡周辺で激しく戦った。しかし、武田氏に制圧され、桑原氏は村上氏と共に上杉氏を頼って越後へ敗走した。その後川中島の戦いが始まり、桑原氏の資料は登場しなくなる。

これらの資料から、八幡宮周辺は15世紀から16世紀中頃までは桑原氏によって領有されており、その後、武田から安堵された松田氏が領有し、武田滅亡から天正12年までは屋代氏が領有し、再び松田氏の領有になったと考えられる。しかし、当時の領有はどのような形態だったのか、平安時代末から続いた石清水八幡宮の荘園としての占有はどうであったのかなど不明な点も多く、推測の域を脱しない。

館の築造について具体的に迫ることはできなかったが、こうした緊張関係の中で構築されたものであり、更埴市の中世史を知る上で重要な資料といえる。今回の調査から館内部の遺構も埋蔵されている可能性が高まっており、調査と保存について検討していかなければならない。

参考文献

更埴市桑原村誌編纂委員会：1967「桑原村誌」

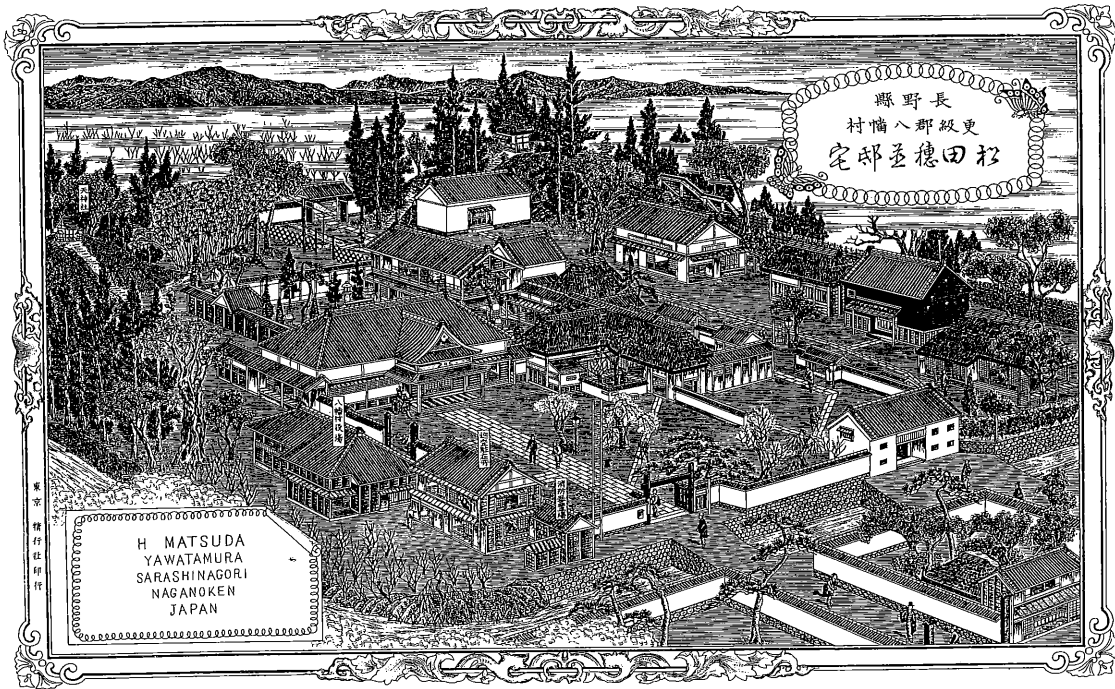
更科埴科地方誌刊行会：1978「更級埴科地方誌第2巻」原始・古代・中世編

更埴市史刊行会：1994・1988「更埴市史」第一・二巻

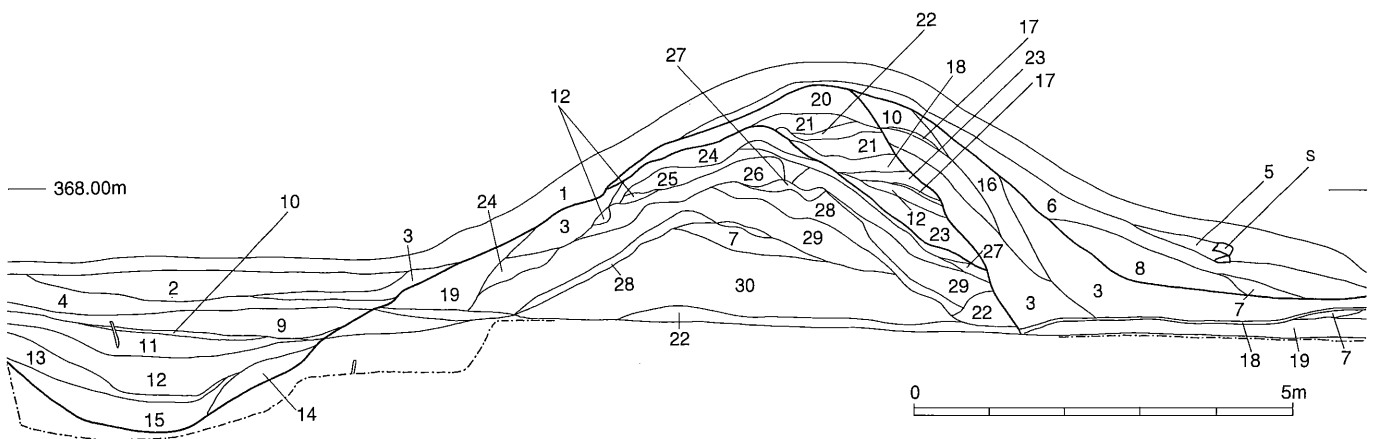
更埴市教育委員会：1995「屋代城範囲確認調査報告書」



第83図 松田館地形測量図 (1:400)

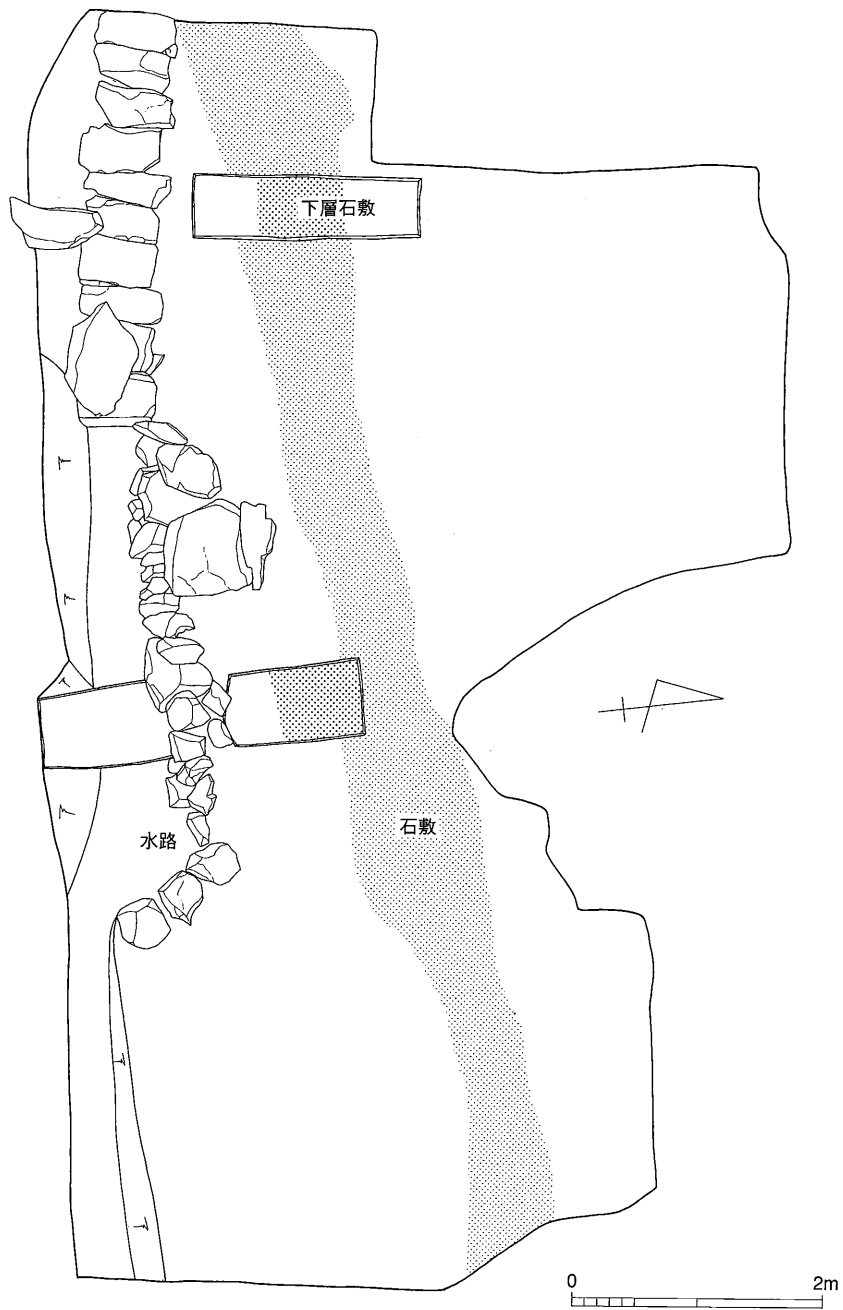


第84図 松田館全景絵図（明治時代）

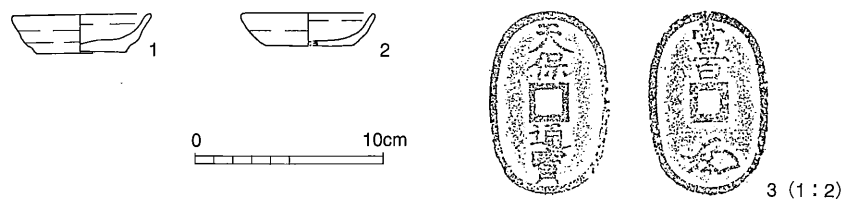


- | | | |
|----------------|---------------------|-----------------|
| 1. 表土 | 11. 灰黒色砂質土 | 21. 黒色土と暗灰褐色土混合 |
| 2. 褐色土（カクラン） | 12. 黒色土（泥炭に近い） | 22. 茶褐色砂質土 |
| 3. 暗褐色土 | 13. 暗灰黄色砂質土 | 23. 暗灰褐色粘質土 |
| 4. 灰褐色粘質土 | 14. 暗灰黄褐色砂質土（土塁の崩れ） | 24. 暗灰茶褐色土 |
| 5. 暗褐色土（よく締まる） | 15. 黒色粘質土（泥炭に近い） | 25. 褐色土（黒色土混入） |
| 6. 褐色土 | 16. 暗褐色土（灰色ブロック多） | 26. 暗黄褐色砂レキ土 |
| 7. 暗茶褐色土 | 17. 黒褐色土 | 27. 暗黄褐色粘質土 |
| 8. 暗黄褐 | 18. 鉄分の沈殿層 | 28. 暗灰褐色粘質土 |
| 9. 暗灰色粘質土 | 19. 暗灰褐色土 | 29. 暗茶褐色粘質土 |
| 10. 暗茶褐色砂質土 | 20. 暗茶褐色土（裨花凝灰岩） | 30. 茶褐色粘質土 |

第85図 土層土層断面図



第86図 2トレンチ全体図



第87図 出土遺物

第7章 屋代遺跡群出土古瓦の自然科学分析

株式会社 第四紀 地質研究所

X線回折試験及び化学分析試験

1 実験条件

1-1 試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示す通りである。

X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

化学分析は土器をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄し、乾燥後、試料表面をコーティングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し、分析した。

1-2 X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JDX-8020 X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40kV, Current: 30mA, ステップ角度: 0.02°

計数時間: 0.5秒。

1-3 化学分析

元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置をセットし、実験条件は加速電圧: 15kV、分析法: スプリント法、分析倍率: 200倍、分析有効時間: 100秒、分析指定元素10元素で行った。

2 X線回折試験結果の取扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示す通りである。

第1表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

2-1 組成分類

1) Mont-Mica-Hb三角ダイヤグラム

第88図に示すように三角ダイヤグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mont、Mica、Hbの3成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイヤグラムはモンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb) のX線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント (%) で表示する。

モンモリロナイトは $\text{Mont}/(\text{Mont}+\text{Mica}+\text{Hb}) \times 100$ でパーセントとして求め、同様にMica, Hbも計算し、三角ダイヤグラムに記載する。

三角ダイヤグラム内の1~4はMont, Mica, Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分より

なっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第88図に示す通りである。

2) Mont-Ch, Mica-Hb菱形ダイヤグラム

第89図に示すように菱形ダイヤグラムを1～19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の内、

a) 3成分以上含まれない、b) Mont,Chの2成分が含まれない、

c) Mica,Hbの2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイヤグラムはMont-Ch, Mica-Hbの組合せを表示するものである。

Mont-Ch, Mica-Hb のそれぞれのX線回折試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、 $\text{Mont}/\text{Mont}+\text{Ch} \times 100$ と計算し、Mica,Hb,Chも各々同様に計算し、記載する。

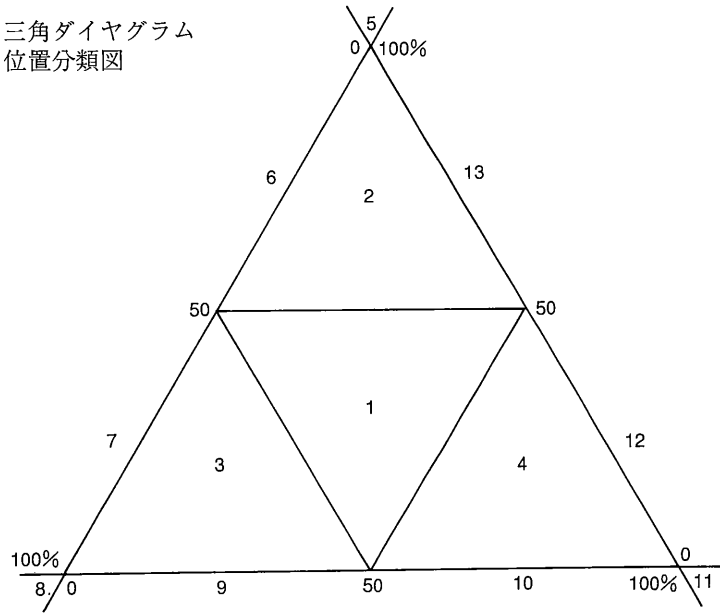
菱形ダイヤグラム内にある1～7はMont,Mica,Hb,Chの4成分を含み、各辺はMont,Mica,Hb,Chのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は第89図に示すとおりである。

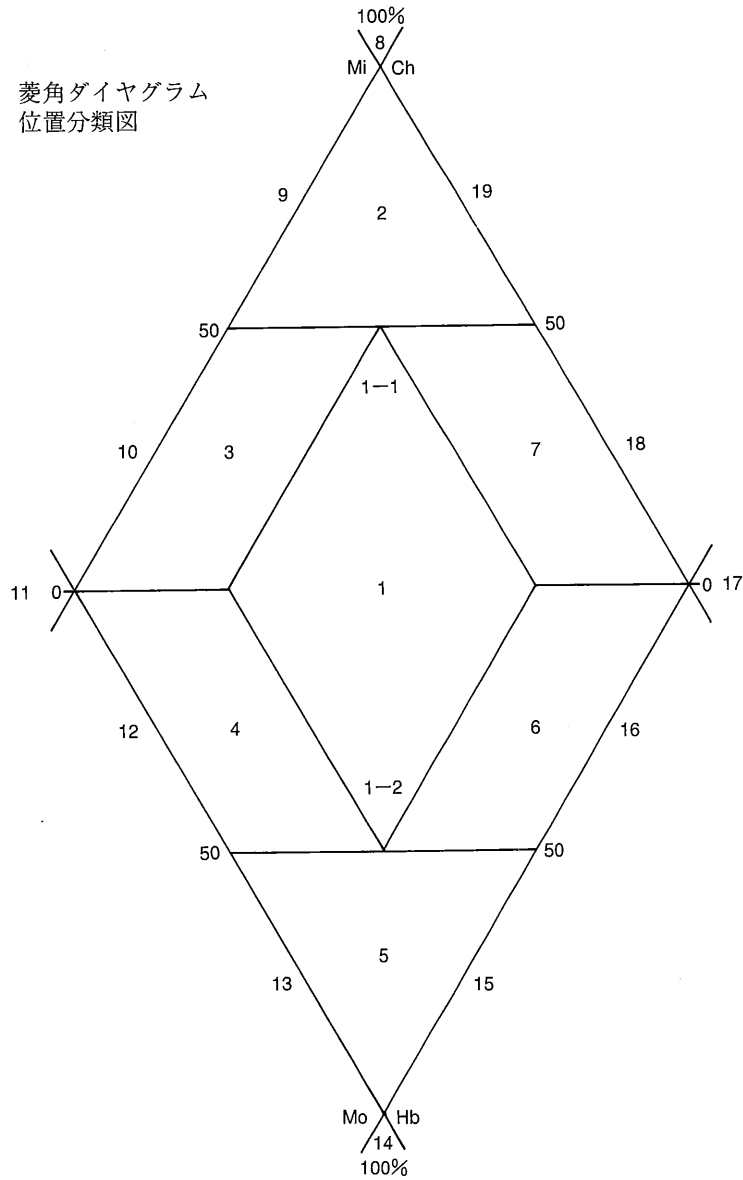
3) 化学分析結果の取扱い

化学分析結果は酸化物として、ノーマル法(10元素全体で100%になる)で計算し、化学分析表を作成した。化学分析表に基づいて $\text{SiO}_2-\text{Al}_2\text{O}_3$ 図、 $\text{Fe}_2\text{O}_3-\text{MgO}$ 図、 $\text{K}_2\text{O}-\text{CaO}$ 図の各図を作成した。これらの図をもとに、土器類を元素の面から分類した。

第88図 三角ダイヤグラム
位置分類図



第89図 菱角ダイヤグラム
位置分類図



3 X線回折試験結果

3-1 タイプ分類

第1表胎土性状表には屋代遺跡と青木遺跡から出土した古瓦が記載してある。

第3表タイプ分類一覧表に示すように瓦の胎土はA～Dの4タイプに分類された。

Aタイプ：Hb 1成分を含み、Mont, Mica, Chの3成分に欠ける。

Bタイプ：Mica, Hbの2成分を含み、Mont, Chの2成分に欠ける。

Cタイプ：Mica 1成分を含み、Mont, Hb, Chの3成分に欠ける。

Dタイプ：Mont, Mica, Hb, Chの4成分に欠ける。

ムライトやクリストバライトの検出される古瓦は高温で焼成されているため、鉱物が熱により分解し、ガラスに変質している。そのため4成分が検出されない。

青木遺跡の古瓦は高温で焼成されているためにすべてDタイプである。屋代遺跡の古瓦は全体に焼成温度が低く、A～Dの4タイプが検出され、CとDタイプは各5個、AとBタイプは各2個である。

3-2 石英 (Qt)-斜長石 (Pl) の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂はおのおの固有の石英と斜長石比を有していると言える。

第90図Qt-Pl図には屋代遺跡と青木遺跡から出土した古瓦が記載してある。

Qtの強度が低いほうから青木遺跡：瓦、屋代遺跡：瓦Ⅰ～Ⅲ、屋代遺跡：瓦Ⅰ～Ⅱ、その他に分類される。

青木遺跡：瓦：Qtが700～2000、Plが50～150の領域に集中する。

屋代遺跡：瓦Ⅰ～Ⅲ：Qtが1300～2400、Plが100～400の領域に集中する。

屋代遺跡：瓦Ⅰ～Ⅱ：Qtが1700～3000、Plが400～700の領域に集中する。

その他：屋代-7は屋代遺跡：瓦Ⅰ～Ⅱに近いが、焼成温度が高く、Plがいくぶん低い。青木-9はQtの強度が青木遺跡：瓦の中では高く、異質である。

青木遺跡の古瓦は屋代遺跡の古瓦と比較して、Plの強度が低い領域にあり、焼成温度が高い。屋代遺跡の古瓦はPlの強度が高い領域と低い領域の2種類ある。Plの強度が高い領域の屋代遺跡：瓦Ⅰ～Ⅱは焼成温度が低く、Plの強度が低い領域の屋代遺跡：瓦Ⅰ～Ⅲは焼成温度がいくぶん高い。

4 化学分析結果

第2表化学分析表には屋代遺跡と青木遺跡から出土した古瓦が記載してある。分析結果に基づいて第91図SiO₂-Al₂O₃図、第92図Fe₂O₃-MgO図、第93図K₂O-CaO図を作成した。

4-1 SiO₂-Al₂O₃の相関について

第91図SiO₂-Al₂O₃図に示すように、屋代遺跡：瓦Ⅰ～Ⅲ、屋代遺跡：その他と青木遺跡：瓦の5タイプに分類された。

屋代遺跡：瓦Ⅰ = SiO₂が58～65%、Al₂O₃が23～28%の領域に平瓦と丸瓦が集中する。個体数は7個と屋代遺跡では最も多い。

屋代遺跡：瓦Ⅱ = SiO₂が62～67%、Al₂O₃が18～23%の領域に丸瓦が集中する。

屋代遺跡：瓦Ⅲ = SiO₂が53～58%、Al₂O₃が19～25%の領域に丸瓦が分布する。

屋代遺跡：その他 = 屋代-8は屋代遺跡：瓦Ⅰと比較してAl₂O₃の値が低く、いくぶん組成が異なる。

青木遺跡：瓦 = SiO₂が52～65%、Al₂O₃が21～25%の領域に集中する。

4-2 Fe₂O₃-MgOの相関について

第92図Fe₂O₃-MgO図に示すように、屋代遺跡：瓦Ⅰ～Ⅲと青木遺跡：瓦はFe₂O₃が5～13%、MgOが0～0.3%の領域で共存し、Fe₂O₃が6～10%、MgOが0.3～0.6%に屋代遺跡：瓦Ⅱが分布する。Fe₂O₃が12%以上には屋代遺跡：瓦Ⅲが分布する。青木-1はFe₂O₃が15%と青木遺跡の瓦の中ではいくぶん高い値を示す。

4-3 K₂O-CaOの相関について

第93図K₂O-CaO図に示すようにCaOが低い領域から高い領域に向けて、青木遺跡：瓦と屋代遺跡：瓦Ⅰ～Ⅲの4タイプに分類された。

屋代遺跡：瓦Ⅰ = K₂Oが1.7～3.0%、CaOが0.6～1.3%の領域に集中する。

屋代遺跡：瓦Ⅱ = K₂Oが2.7～3.7%、CaOが1.0～1.6%の領域に集中する。

屋代遺跡：瓦Ⅲ = K₂Oが2.0～4.2%、CaOが1.4～1.8%の領域に分布する。

青木遺跡：瓦 = K₂Oが1.8～3.0%、CaOが0.2～0.7%の領域に集中する。

まとめ

屋代遺跡と青木遺跡から出土した古瓦の分類は第4表組成分類表に取りまとめた。

1) 化学分析によって、屋代遺跡の古瓦はⅠ～Ⅲの3タイプに分類された。

Ⅰタイプは平瓦と丸瓦が主体で、Al₂O₃が23～28%と高く、ⅡタイプはMgOが0.3%と高く、ⅢタイプはSiO₂が53～58%と低く、各々3タイプは異なる化学組成をしている。青木遺跡の古瓦はQt-Plの相関においても、化学組成においても同じグループに集中する傾向にあり、胎土は同じものと判断される。

2) Qt-Pl相関では屋代遺跡の古瓦はPlの強度が高く、青木遺跡の古瓦はPlの強度が低く、焼成温度が異なる。(Plの強度が高いほど焼成温度は低く、Plの強度が低いほど焼成温度が高い。)

3) 屋代-8の平瓦は化学組成的にはⅠタイプに近いがいくぶん組成が異なる傾向が見られる。

4) 屋代-1の軒丸瓦は化学組成と砂の混合比であるQt-Pl相関でも屋代遺跡：瓦Ⅱタイプの胎土と一

致している。

- 5) 別図に示す千曲川流域の古窯跡群との比較対比では屋代遺跡と青木遺跡の古瓦はSiO₂が64%以下と低く、長野市周辺、戸倉・更埴、佐久平周辺の各地域の古窯跡とは明らかに組成が異なり、既分析のどのデータとも一致しない。屋代遺跡と青木遺跡の古瓦はこれらの古窯跡とは異なる窯で焼かれたものと判断される。

引用文献

長野県埋蔵文化財センター 1999 「更埴条里遺跡屋代遺跡群」 古代1 編本文

第1表 胎土性状表

試料No	タイプ分類	組織分類							粘土鉱物および造岩鉱物										備考	
		Mo-Mt-Hb	Mo-Ch-Mt-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-fels	Halloy	Kaol	Pyrite	Au	瓦種	時期	備考
屋代-1	A	5	20				52		1670	302	130	67				83		軒丸瓦	8世紀~9世紀	屋代遺跡群
屋代-2	D	14	20						1403	200	122	47				51		丸瓦	8世紀~9世紀	屋代遺跡群G地区
屋代-3	D	14	20						1959	265	154	60				58		丸瓦	8世紀~9世紀	屋代遺跡群G地区
屋代-4	D	14	20						1923	165	131	75				77		丸瓦	8世紀~9世紀	屋代遺跡群G地区
屋代-5	C	8	20		182			2021		605								平瓦	8世紀~9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
屋代-6	C	8	20		187			1565		304								平瓦	8世紀~9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
屋代-7	D	14	20					2812		350								平瓦	8世紀~9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
屋代-8	D	14	20					2004	281	134	76					66		平瓦	8世紀~9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
屋代-9	C	8	20		145			2037	450	103								平瓦	8世紀~9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
屋代-10	C	8	20		140			2082	457	140								丸瓦	8世紀~9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
屋代-11	A	5	20				108		1670	380	385	99				89		丸瓦	8世紀~9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
屋代-12	B	7	20		84		64		1718	231	117	60						丸瓦	8世紀~9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
屋代-13	B	7	20		130		94		2784	597	116							丸瓦	8世紀~9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
屋代-14	C	8	20		232				1938	459	101							丸瓦	8世紀~9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
青木-1	D	14	20						1259	112	333	102						平瓦	8世紀~9世紀	青木遺跡
青木-2	D	14	20						1878	115	140	72				78		平瓦	8世紀~9世紀	青木遺跡
青木-3	D	14	20						1334	88	474	99				90		平瓦	8世紀~9世紀	青木遺跡
青木-4	D	14	20						1059	83	525	112				106		平瓦	8世紀~9世紀	青木遺跡
青木-5	D	14	20						1141	81	424	104				94		平瓦	8世紀~9世紀	青木遺跡
青木-6	D	14	20						797	83	405	204				217		平瓦	8世紀~9世紀	青木遺跡
青木-7	D	14	20						1100	109	578	89				79		平瓦	8世紀~9世紀	青木遺跡
青木-8	D	14	20						1216	114	216	140				160		平瓦	8世紀~9世紀	青木遺跡
青木-9	D	14	20						2335	200	242	92				78		丸瓦	8世紀~9世紀	青木遺跡
青木-10	D	14	20						1059	85	453	114				136		丸瓦	8世紀~9世紀	青木遺跡

Mont: モンモロロナイト Mica: 雲母類 Hb: 角閃石 Ch: 緑泥石 (Ch:Fe 一次反射、Ch:Mg 二次反射) Qt: 石英 Pl: 斜長石 Crist: クリスタロバライト Mullite: ムライト
 K-fels: カリ長石 Halloy: ハロイサイト Kaol: カオリナイト Pyrite: 黄鉄鉱 Au: 普通輝石 Py: 紫蘇輝石

第2表化学分析表

試料番号	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	NiO	Total	瓦種	時期	備考
屋代-1	1.40	0.60	21.31	62.16	3.27	1.14	1.19	0.36	8.57	0.00	100.00	軒丸瓦	8世紀~9世紀	屋代遺跡群
屋代-2	1.05	0.78	20.46	53.56	4.06	1.48	0.98	0.32	#####	0.17	100.00	丸瓦	8世紀~9世紀	屋代遺跡群G地区
屋代-3	1.23	0.40	20.35	65.16	2.79	1.36	1.20	0.38	6.77	0.26	100.00	丸瓦	8世紀~9世紀	屋代遺跡群G地区
屋代-4	0.98	0.51	21.97	63.42	2.99	1.13	1.18	0.28	7.34	0.20	100.00	丸瓦	8世紀~9世紀	屋代遺跡群G地区
屋代-5	0.39	0.00	27.77	59.35	2.18	0.91	0.97	0.01	8.42	0.00	100.00	平瓦	8世紀~9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
屋代-6	0.73	0.00	25.36	63.59	2.53	0.76	0.88	0.00	6.16	0.00	100.01	平瓦	8世紀~9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
屋代-7	0.64	0.11	25.12	62.77	2.49	0.99	1.17	0.19	6.38	0.14	100.00	平瓦	8世紀~9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
屋代-8	1.20	0.27	21.42	61.67	2.17	0.81	1.20	0.40	#####	0.06	99.99	平瓦	8世紀~9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
屋代-9	0.67	0.00	23.49	63.82	2.48	0.83	1.04	0.10	7.54	0.02	99.99	平瓦	8世紀~9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
屋代-10	1.29	0.04	23.05	63.67	3.37	1.52	1.04	0.00	5.74	0.28	100.00	丸瓦	8世紀~9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
屋代-11	1.43	0.00	24.47	56.85	2.23	1.84	1.50	0.13	#####	0.02	100.00	丸瓦	8世紀~9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
屋代-12	0.54	0.00	25.04	60.31	2.75	0.64	1.20	0.00	9.35	0.15	99.98	丸瓦	8世紀~9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
屋代-13	0.68	0.00	24.84	63.54	1.84	1.04	0.91	0.00	7.15	0.00	100.00	丸瓦	8世紀~9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
屋代-14	0.37	0.00	26.83	61.05	2.33	0.81	0.85	0.22	7.40	0.14	100.00	丸瓦	8世紀~9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
青木-1	0.86	0.00	21.52	57.83	2.53	0.50	1.34	0.32	#####	0.19	100.00	平瓦	8世紀~9世紀	青木遺跡
青木-2	0.91	0.00	23.75	63.28	2.29	0.36	1.43	0.00	7.99	0.00	100.01	平瓦	8世紀~9世紀	青木遺跡
青木-3	0.80	0.00	23.89	60.18	2.70	0.45	1.50	0.00	#####	0.14	100.01	平瓦	8世紀~9世紀	青木遺跡
青木-4	0.87	0.00	23.18	62.47	2.54	0.49	1.42	0.00	8.92	0.11	100.00	平瓦	8世紀~9世紀	青木遺跡
青木-5	0.97	0.00	23.64	61.86	2.35	0.47	1.15	0.13	9.43	0.00	100.00	平瓦	8世紀~9世紀	青木遺跡
青木-6	1.11	0.00	23.81	63.76	2.60	0.46	1.07	0.00	7.18	0.00	99.99	平瓦	8世紀~9世紀	青木遺跡
青木-7	1.02	0.00	23.74	59.74	2.50	0.61	1.37	0.27	#####	0.26	100.01	平瓦	8世紀~9世紀	青木遺跡
青木-8	0.86	0.00	22.85	61.60	2.10	0.51	1.30	0.17	#####	0.00	99.99	平瓦	8世紀~9世紀	青木遺跡
青木-9	1.03	0.09	22.52	60.74	2.67	0.28	1.28	0.55	#####	0.00	100.00	丸瓦	8世紀~9世紀	青木遺跡
青木-10	1.02	0.00	23.77	59.59	1.97	0.43	1.21	0.38	#####	0.00	100.01	丸瓦	8世紀~9世紀	青木遺跡

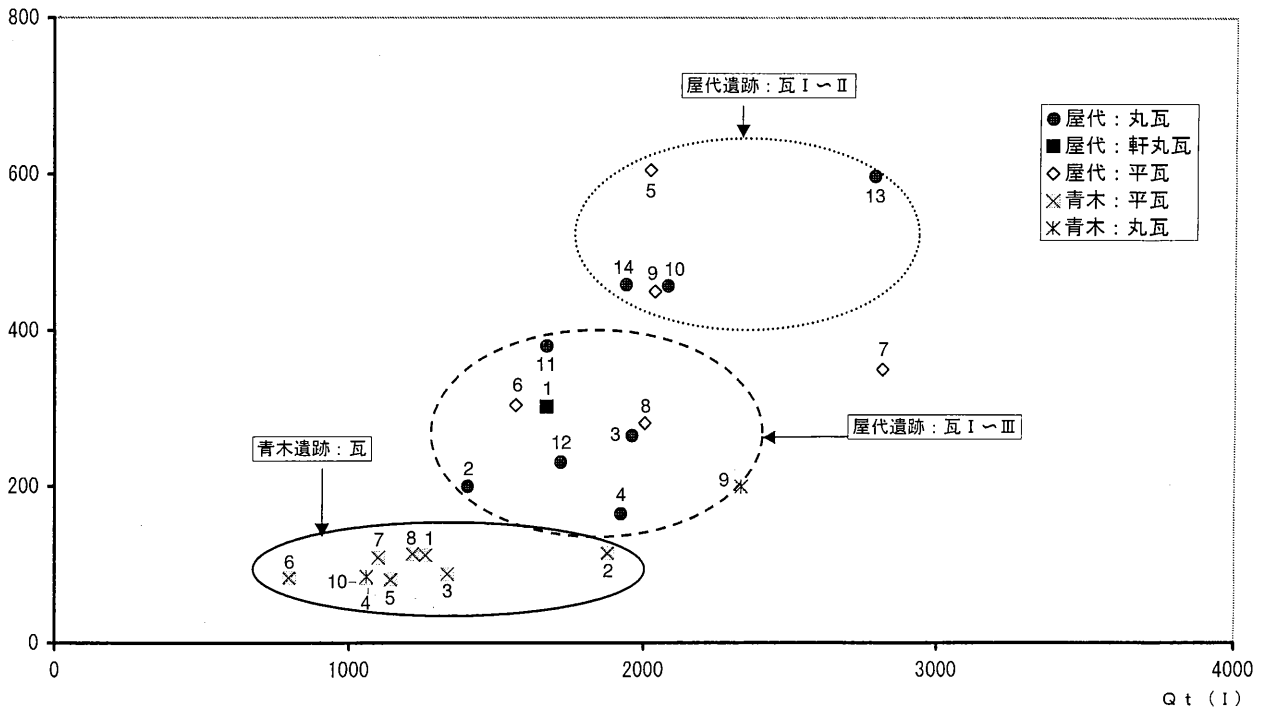
第3表タイプ分類表

試料 No	タイプ 分類	備 考		
		瓦種	時 期	備 考
屋代-1	A	軒丸瓦	8世紀～9世紀	屋代遺跡群
屋代-11	A	丸瓦	8世紀～9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
屋代-12	B	丸瓦	8世紀～9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
屋代-13	B	丸瓦	8世紀～9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
屋代-5	C	平瓦	8世紀～9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
屋代-6	C	平瓦	8世紀～9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
屋代-9	C	平瓦	8世紀～9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
屋代-10	C	丸瓦	8世紀～9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
屋代-14	C	丸瓦	8世紀～9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
屋代-2	D	丸瓦	8世紀～9世紀	屋代遺跡群G地区
屋代-3	D	丸瓦	8世紀～9世紀	屋代遺跡群G地区
屋代-4	D	丸瓦	8世紀～9世紀	屋代遺跡群G地区
屋代-7	D	平瓦	8世紀～9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
屋代-8	D	平瓦	8世紀～9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区
青木-1	D	平瓦	8世紀～9世紀	青木遺跡
青木-2	D	平瓦	8世紀～9世紀	青木遺跡
青木-3	D	平瓦	8世紀～9世紀	青木遺跡
青木-4	D	平瓦	8世紀～9世紀	青木遺跡
青木-5	D	平瓦	8世紀～9世紀	青木遺跡
青木-6	D	平瓦	8世紀～9世紀	青木遺跡
青木-7	D	平瓦	8世紀～9世紀	青木遺跡
青木-8	D	平瓦	8世紀～9世紀	青木遺跡
青木-9	D	丸瓦	8世紀～9世紀	青木遺跡
青木-10	D	丸瓦	8世紀～9世紀	青木遺跡

第4表組成分類表

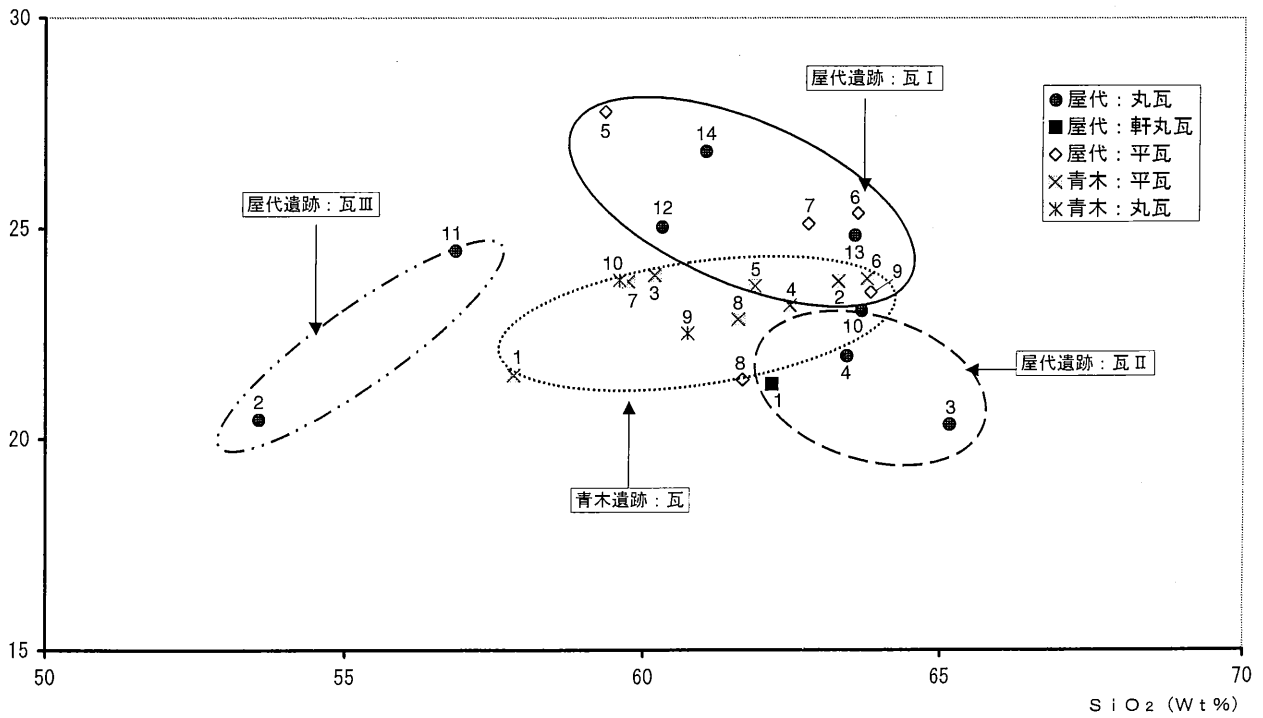
試料No	タイプ分類	備 考			
		瓦種	時 期	遺跡名	分類特性
屋代遺跡：瓦 I					
屋代-12	B	丸瓦	8世紀～9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区	焼成度高：PI低
屋代-13	B	丸瓦	8世紀～9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区	焼成度低：PI高
屋代-5	C	平瓦	8世紀～9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区	焼成度低：PI高
屋代-6	C	平瓦	8世紀～9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区	焼成度高：PI低
屋代-9	C	平瓦	8世紀～9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区	焼成度低：PI高
屋代-14	C	丸瓦	8世紀～9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区	焼成度低：PI高
屋代-7	D	平瓦	8世紀～9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区	焼成度低：PI高
屋代遺跡：瓦 II					
屋代-1	A	軒丸瓦	8世紀～9世紀	屋代遺跡群	焼成度高：PI低
屋代-10	C	丸瓦	8世紀～9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区	焼成度低：PI高
屋代-3	D	丸瓦	8世紀～9世紀	屋代遺跡群G地区	焼成度高：PI低
屋代-4	D	丸瓦	8世紀～9世紀	屋代遺跡群G地区	焼成度高：PI低
屋代遺跡：瓦 III					
屋代-11	A	丸瓦	8世紀～9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区	焼成度高：PI低
屋代-2	D	丸瓦	8世紀～9世紀	屋代遺跡群G地区	焼成度高：PI低
屋代遺跡：瓦-その他					
屋代-8	D	平瓦	8世紀～9世紀	屋代遺跡群屋代寺地区	焼成度高：PI低
青木遺跡：瓦					
青木-1	D	平瓦	8世紀～9世紀	青木遺跡	Fe ₂ O ₃ 大
青木-2	D	平瓦	8世紀～9世紀	青木遺跡	
青木-3	D	平瓦	8世紀～9世紀	青木遺跡	
青木-4	D	平瓦	8世紀～9世紀	青木遺跡	
青木-5	D	平瓦	8世紀～9世紀	青木遺跡	
青木-6	D	平瓦	8世紀～9世紀	青木遺跡	
青木-7	D	平瓦	8世紀～9世紀	青木遺跡	
青木-8	D	平瓦	8世紀～9世紀	青木遺跡	
青木-9	D	丸瓦	8世紀～9世紀	青木遺跡	Qt大
青木-10	D	丸瓦	8世紀～9世紀	青木遺跡	

PI (I)

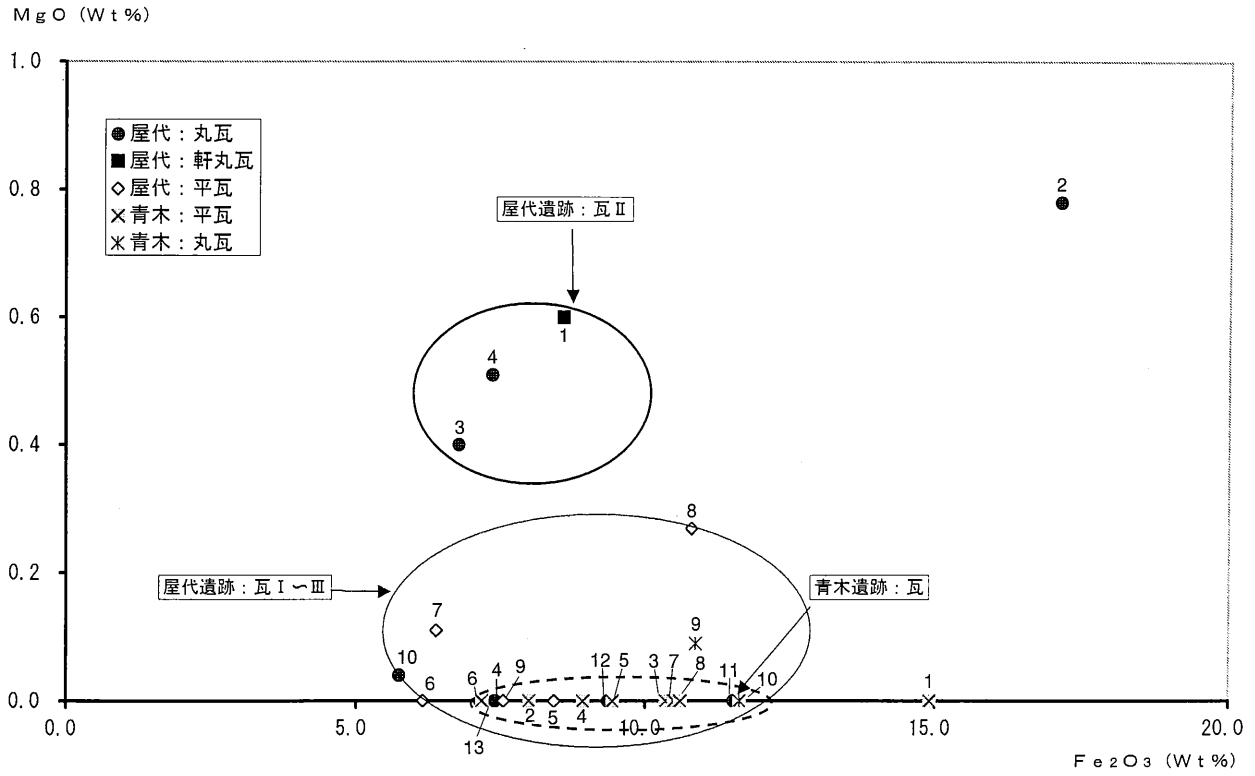


第90図 Qt-PI図

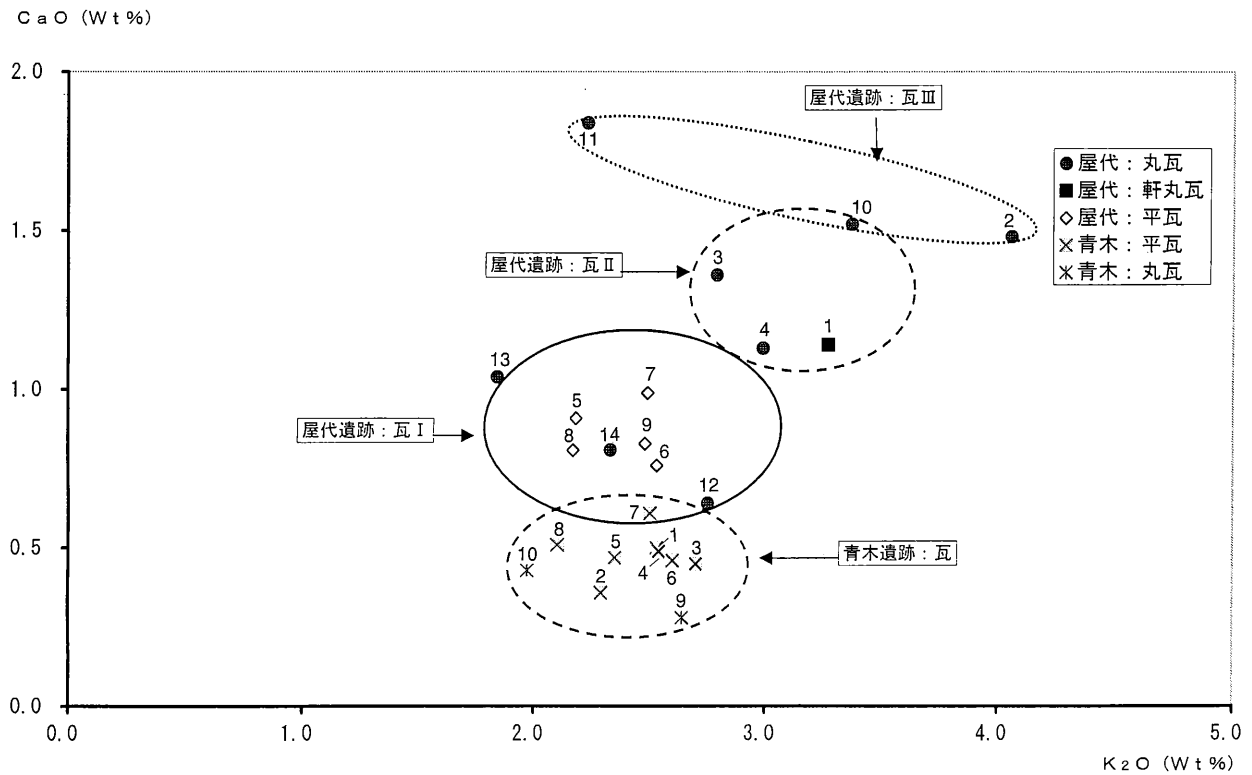
Al₂O₃ (Wt%)



第91図 SiO₂-Al₂O₃図

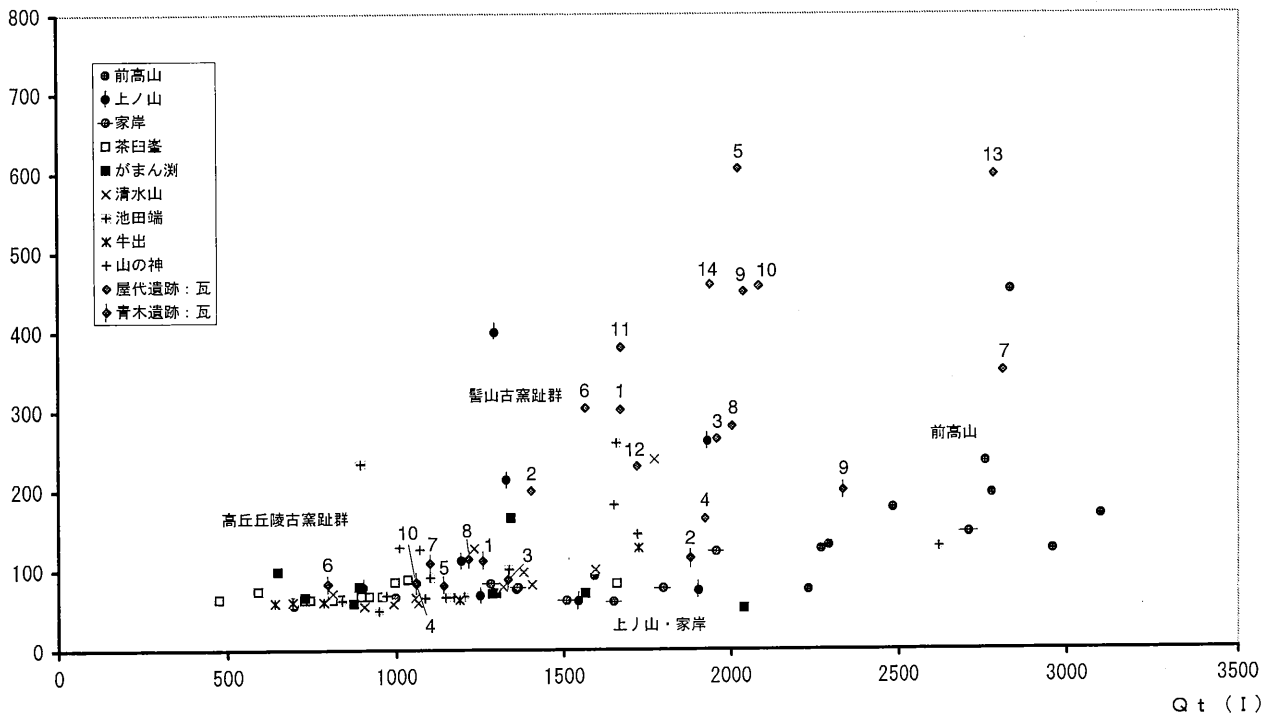


第92図 Fe₂O₃-MgO図



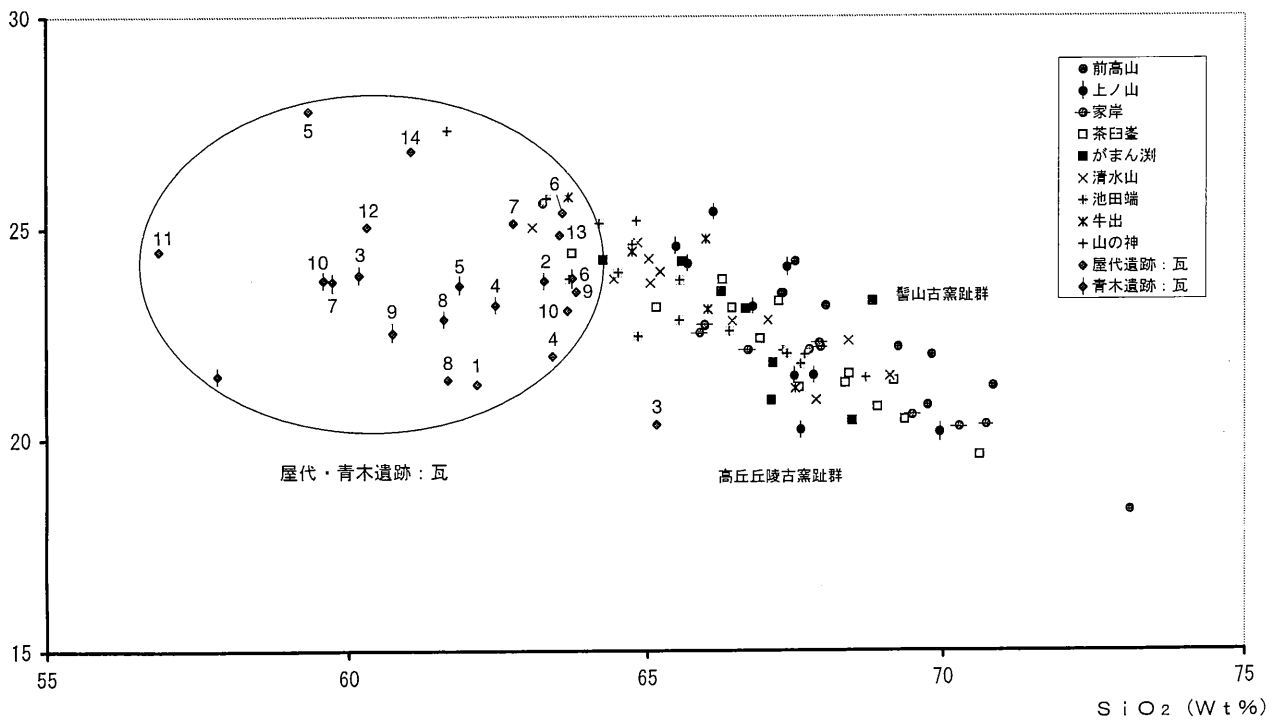
第93図 K₂O-CaO図

PI (I)

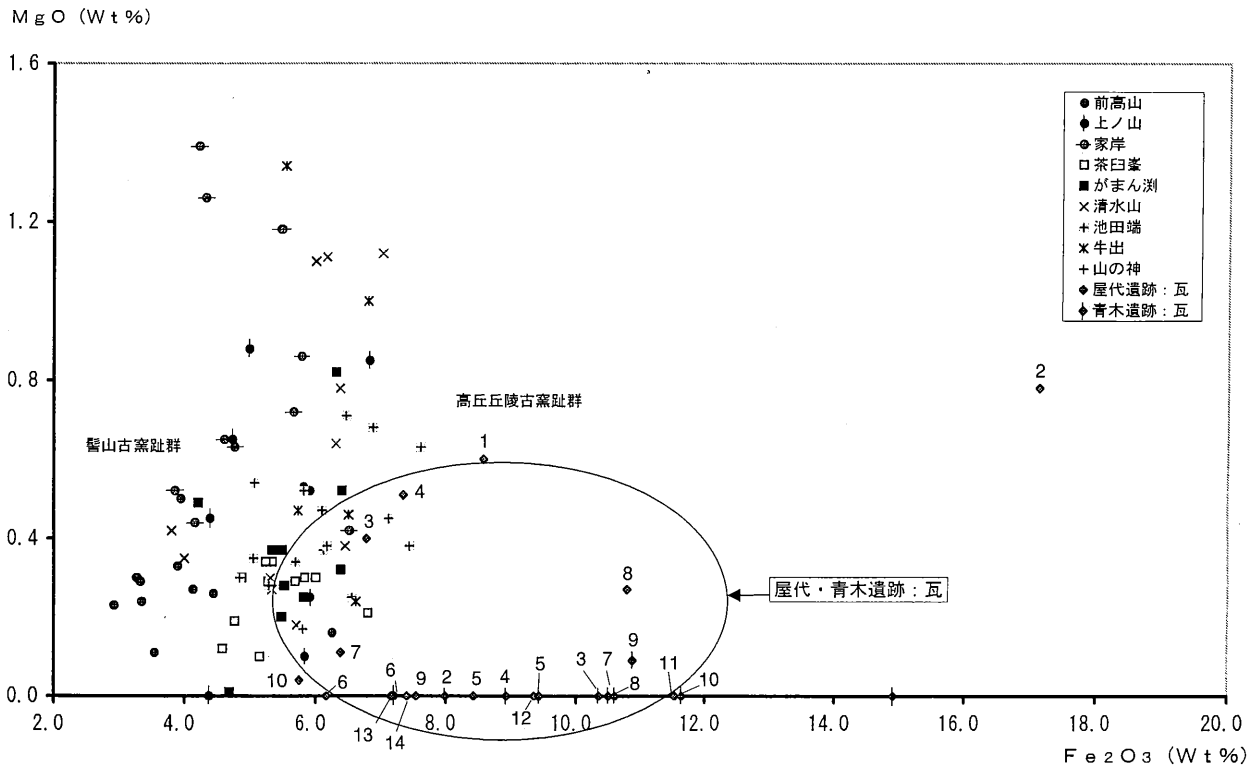


第94図 長野市周辺Qt-PI図

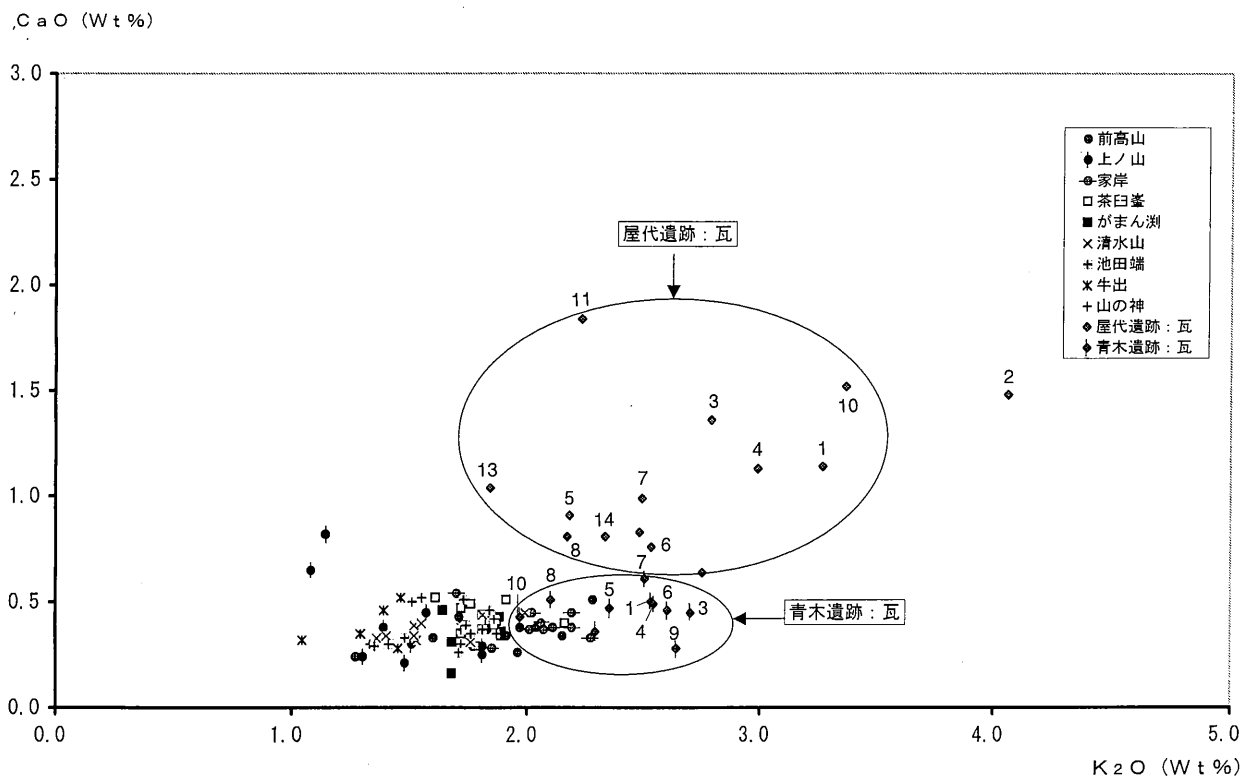
Al₂O₃ (Wt%)



第95図 長野市周辺SiO₂-Al₂O₃図

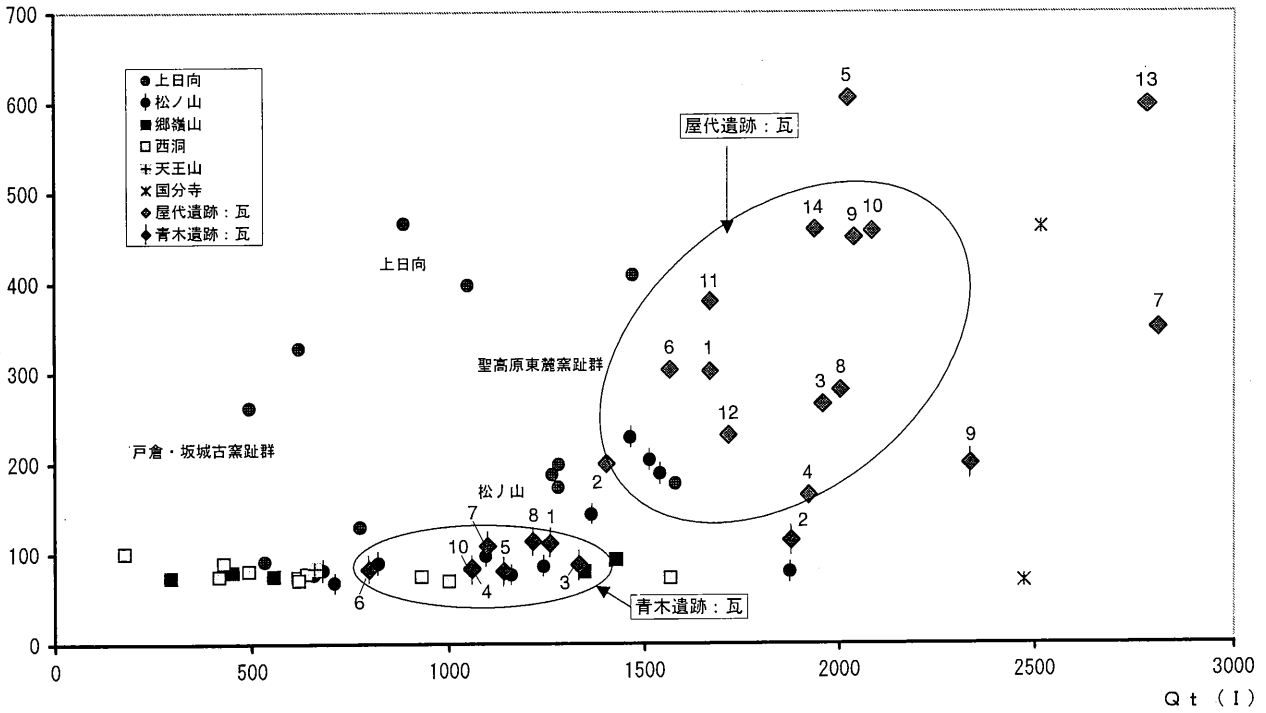


第96図 長野市周辺Fe₂O₃-MgO図



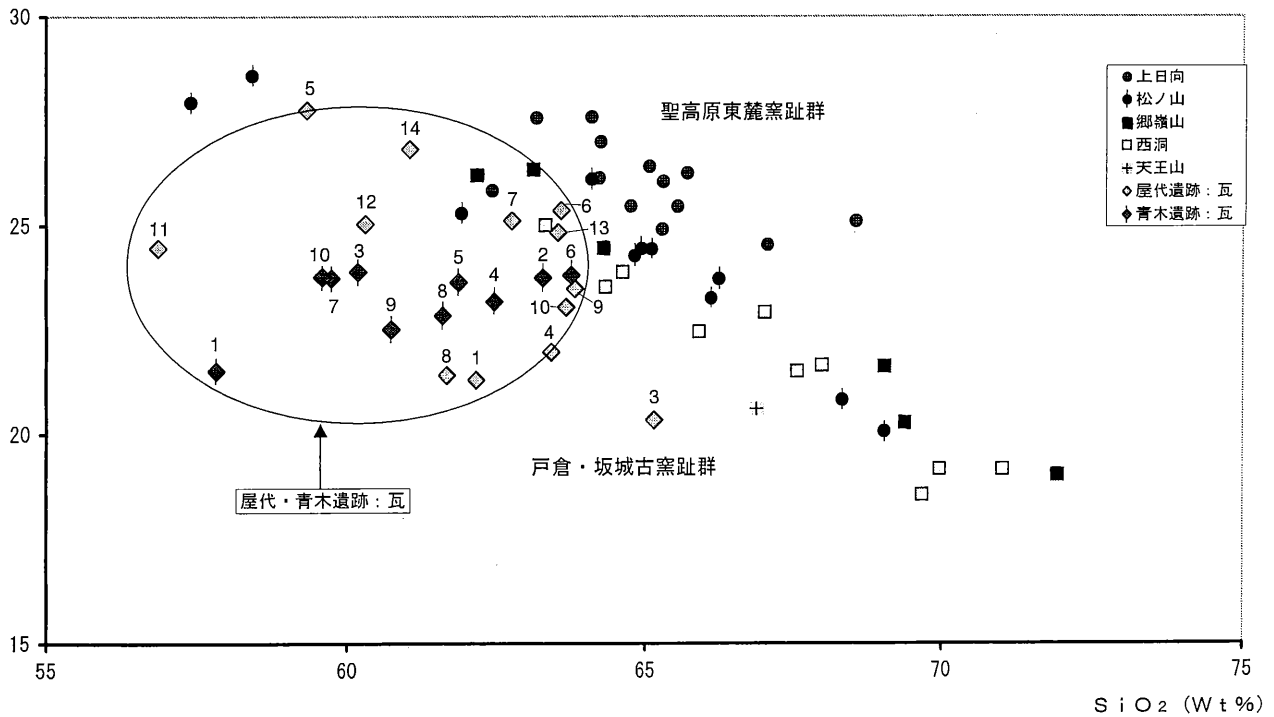
第97図 長野市周辺K₂O-CaO図

PI (I)

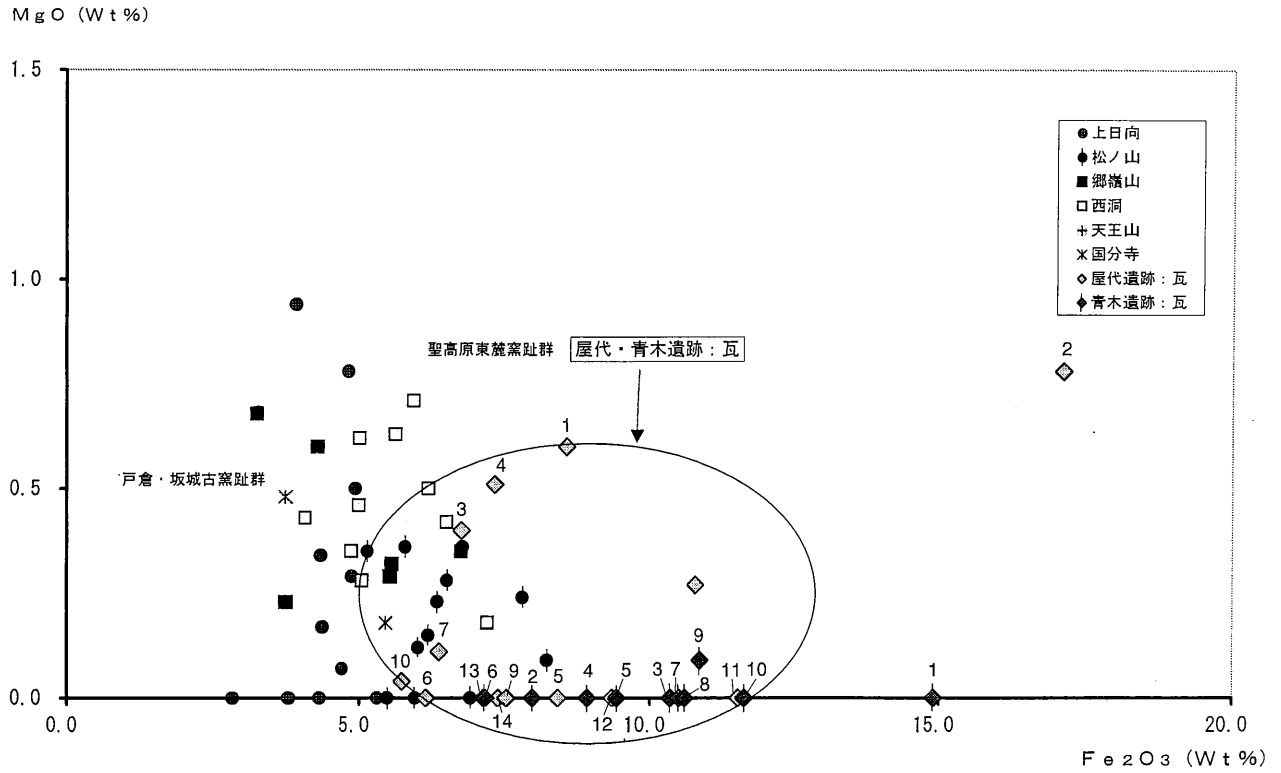


第98図 戸倉・更埴Qt-PI図

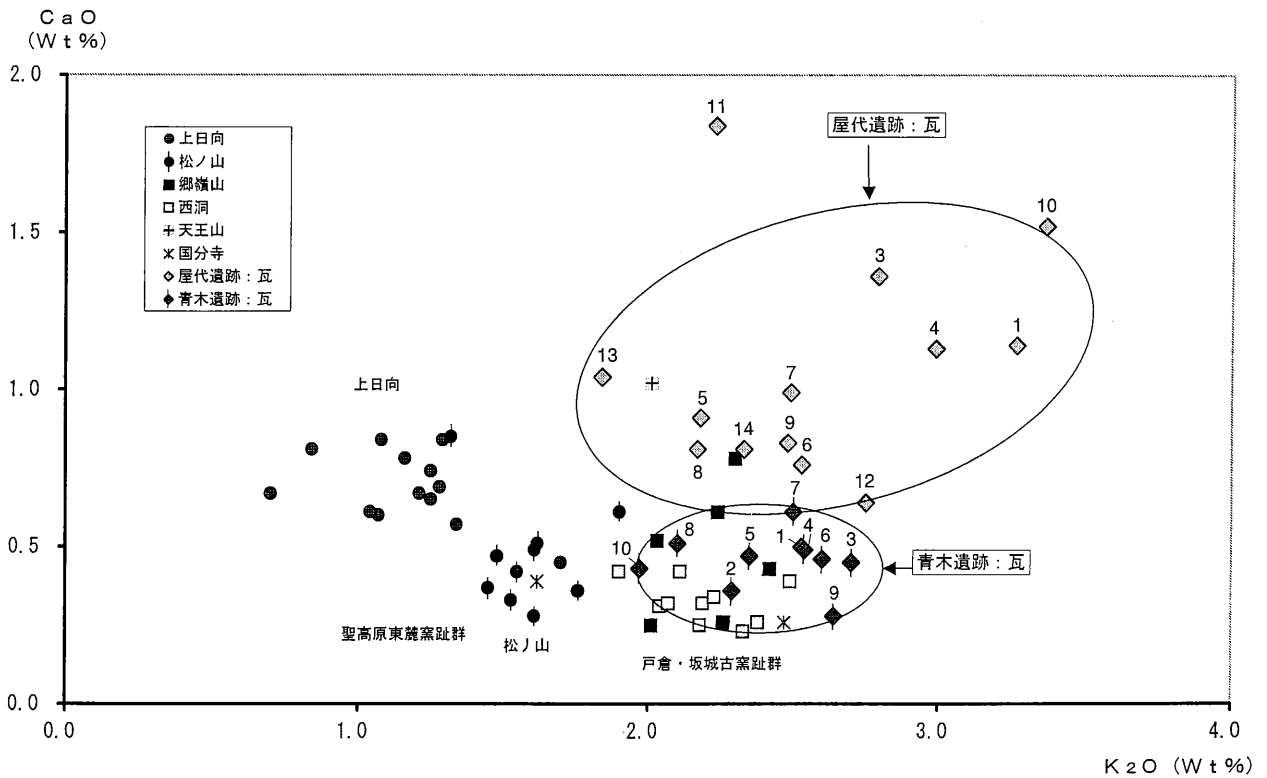
Al₂O₃
(Wt%)



第99図 戸倉・更埴SiO₂-Al₂O₃図

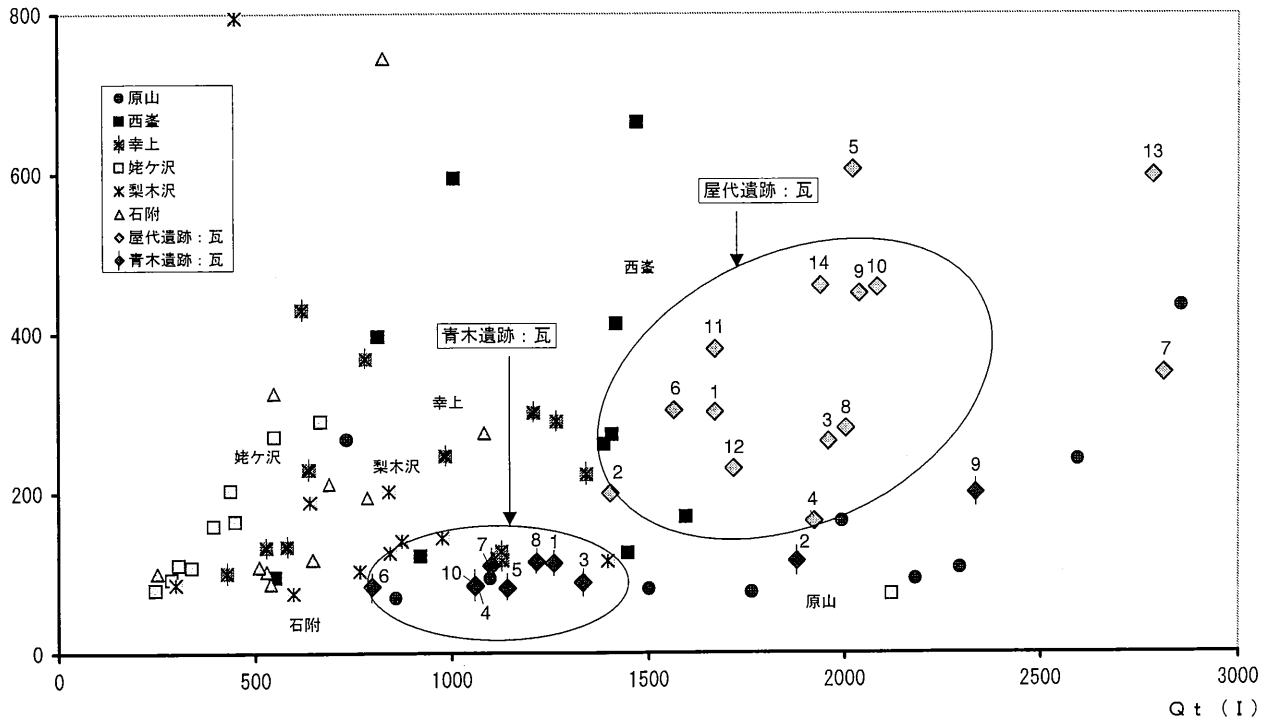


第100図 戸倉・更埴 Fe_2O_3 - MgO 図



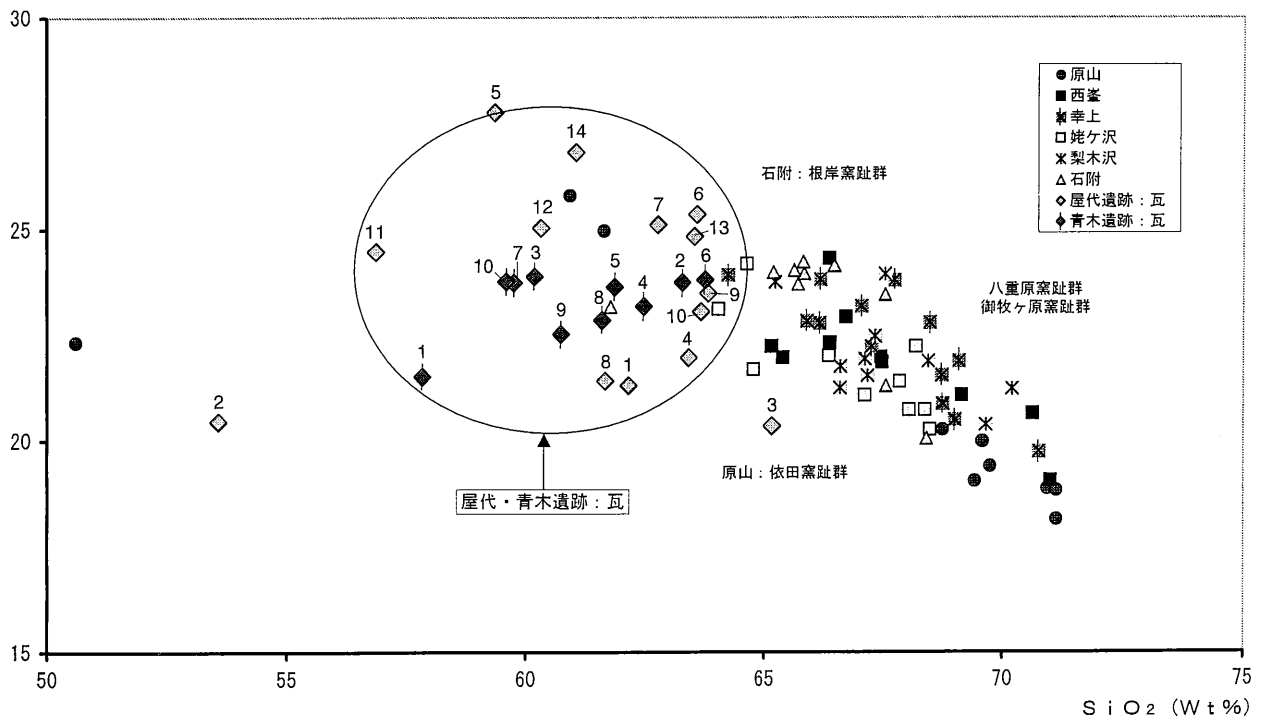
第101図 戸倉・更埴 K_2O - CaO 図

PI (I)

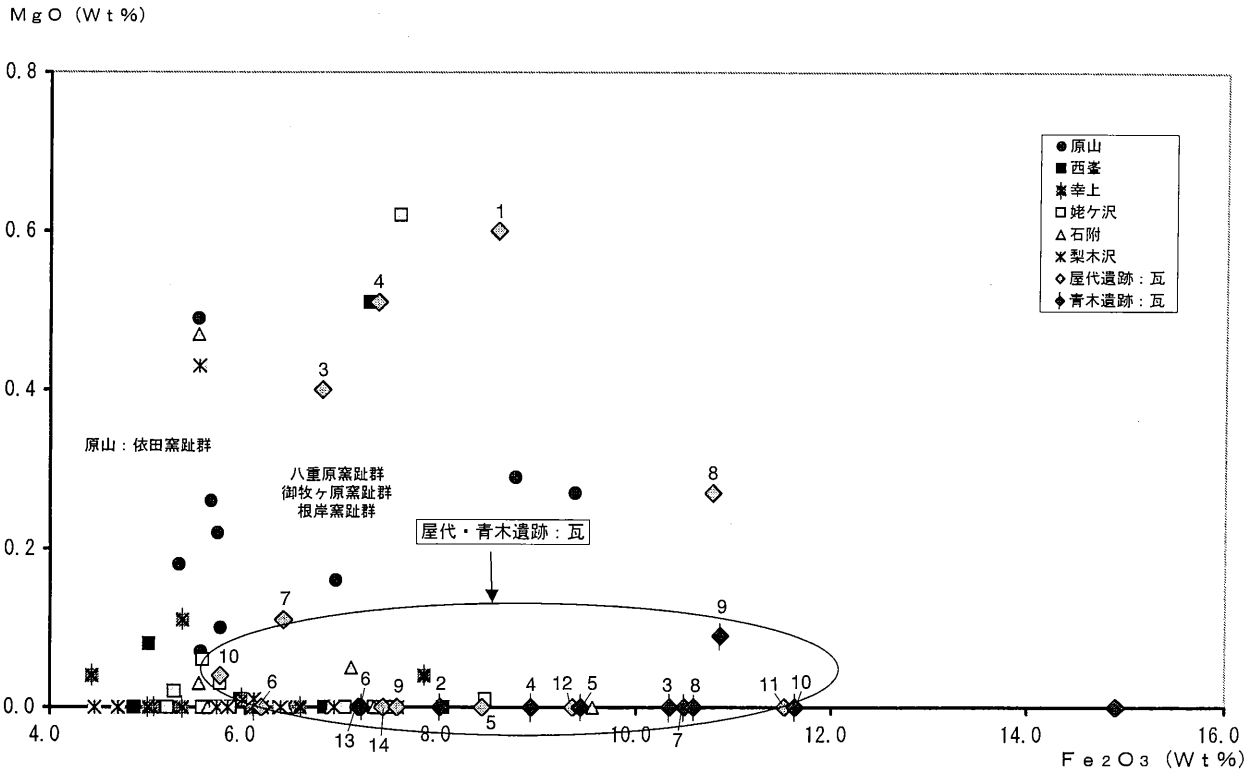


第102図 佐久市周辺Qt-PI図

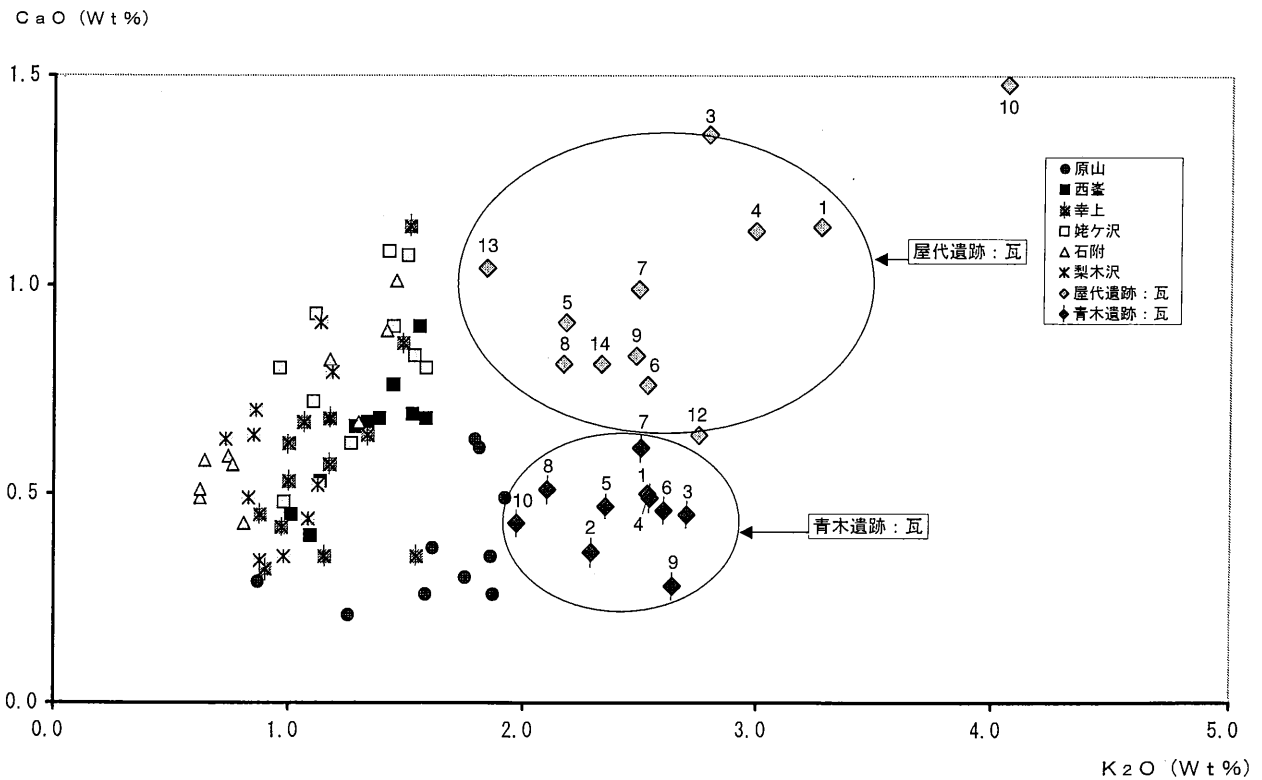
Al₂O₃ (Wt%)



第103図 佐久市周辺SiO₂-Al₂O₃図

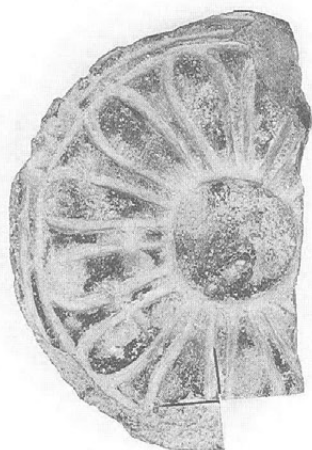


第104図 佐久市周辺 Fe_2O_3 - MgO 図

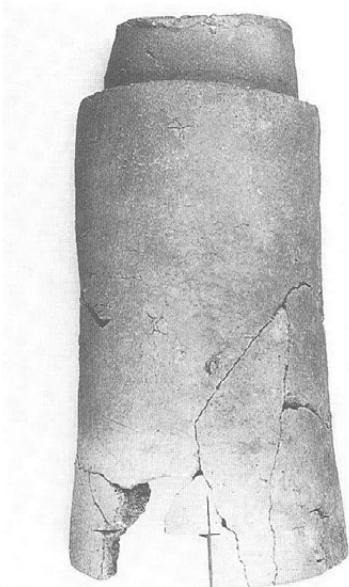


第105図 佐久市周辺 K_2O - CaO 図

第106図 分析試料1



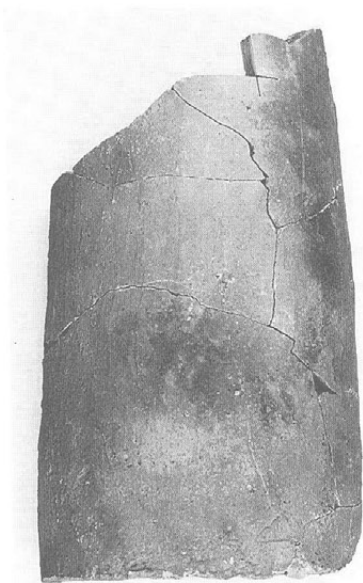
屋代-1



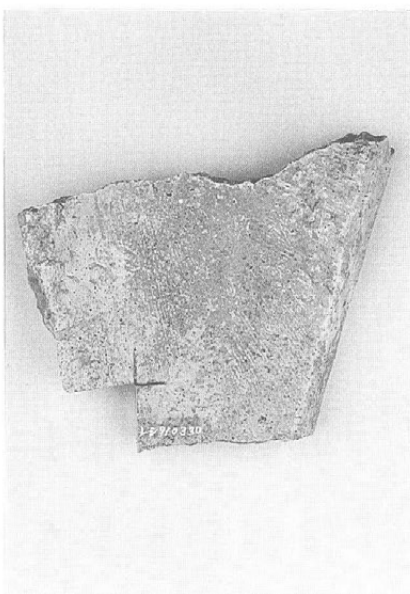
屋代-2



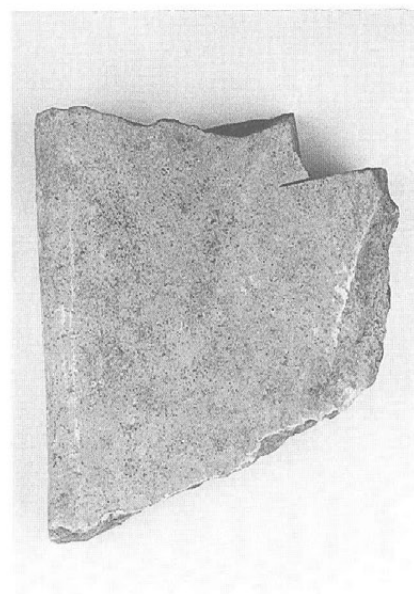
屋代-3



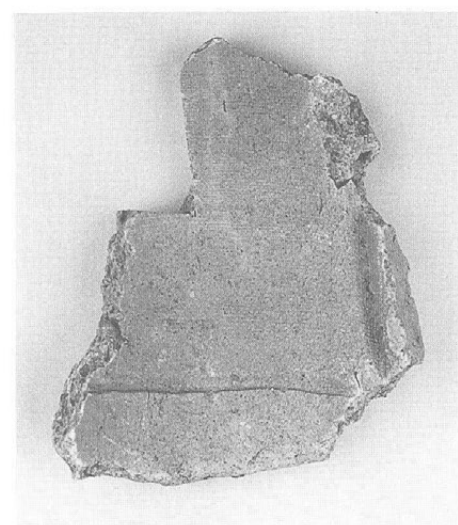
屋代-4



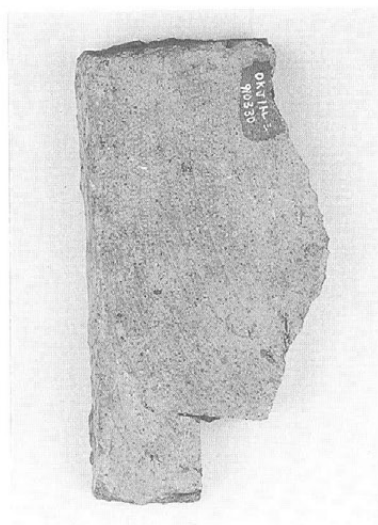
屋代-5



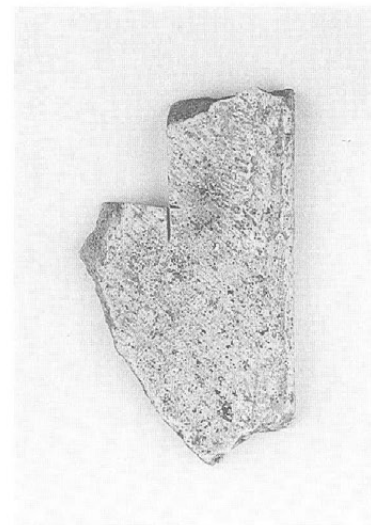
屋代-6



屋代-7

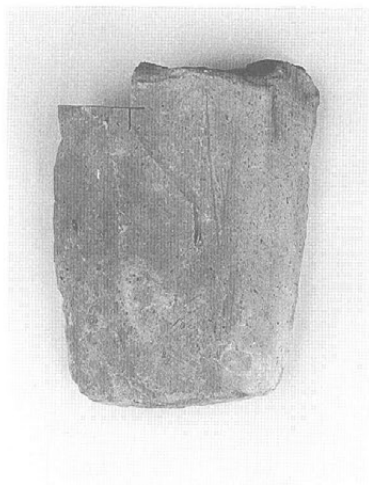


屋代-8

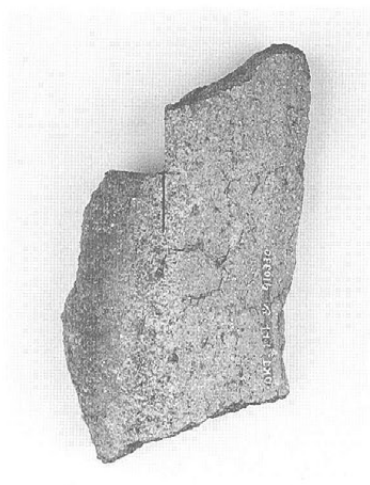


屋代-9

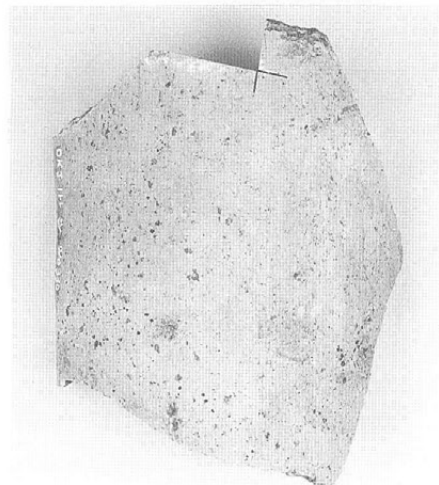
第107図 分析試料2



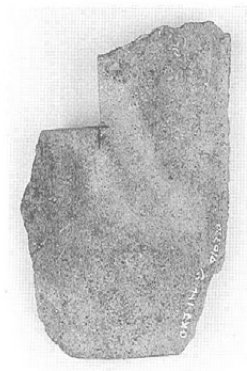
屋代-10



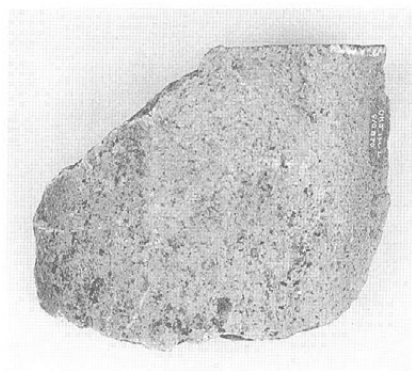
屋代-11



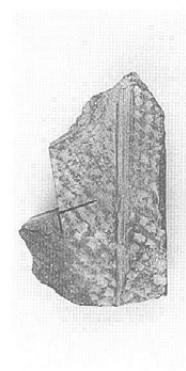
屋代-12



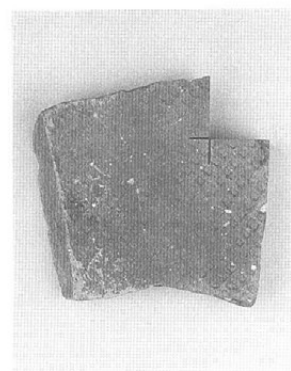
屋代-13



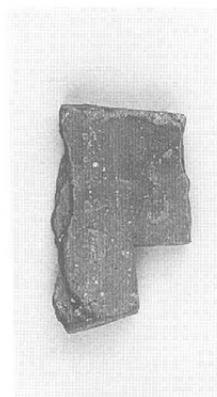
屋代-14



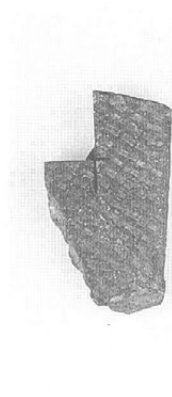
青木-1



青木-2



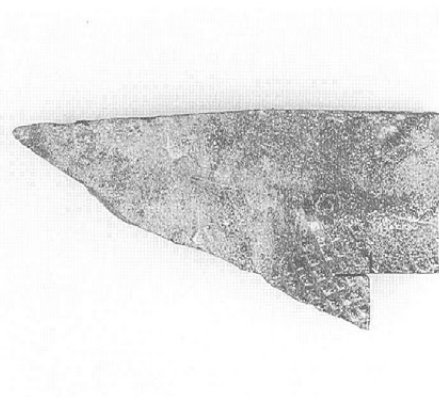
青木-3



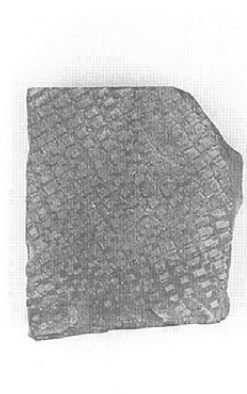
青木-4



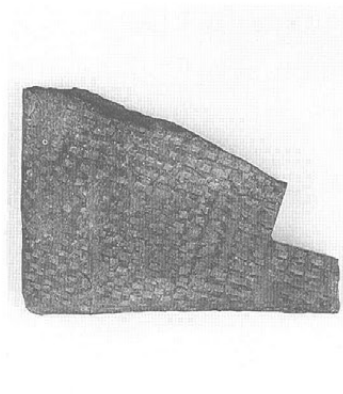
青木-5



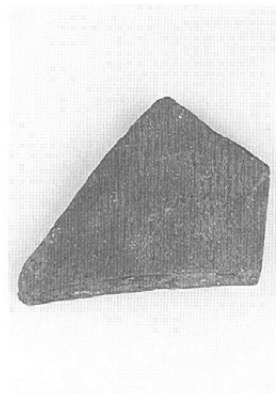
青木-6



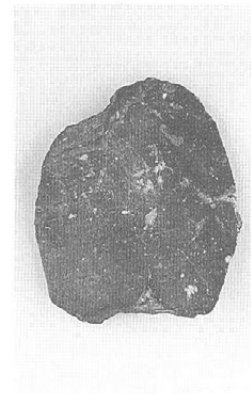
青木-7



青木-8



青木-9



青木-10

第8章 考察

第1節 屋代寺地区出土の北陸系土器について

白居直之

本遺跡からは14号竪穴住居（以下14住と呼称する）およびその周辺から在地の土器を凌駕する数量の北陸系土器が確認された。出土状況は、床面から埋土にかけて幾つかのまとまりをもって散在し、一括投棄もしくは遺棄された可能性が高く、同一時期の一括土器群として捉えられる。また土器そのものの遺存状況は良く、完形もしくは略完形として器形全容が把握される個体は17個体を数える。以下、この住居内出土土器を中心に北陸系土器の分類を行い、本地域から出土した北陸系土器群と在地土器群の比較検討を試みる。

1 器種分類と特徴

14住出土土器群の内容は図示した29個体と拓影図4点（第39・40・76図）の他に器形の類推される21点の口縁部破片が確認された。以下に示した用途名称分類（器類）は明解さに欠けるが、大半が従来の在・在地外の器形分類に該当しない。そこで壺と甕の区分は、器形と外面調整の特徴から、壺は口径に対し頸部径が3/4以下の法量で、外面ミガキ整形（赤彩）のあるもの、甕は口径×3/4<頸部径で外面ハケ整形のものをあてた。本分類以外には甕とした11～13・15・16が壺、10が鉢、高坏とした2が器台、鉢とした1が蓋との認識も可能である。しかし、これら器形分類に窮する特殊性は在来型式（様式）と外来型式（様式）の折衷形態と解釈されるが、そこには地域空間と時間の隔たりによる土器機能のズレを読み取ることができる。器種分類に関しては今後の資料収集・分析の中で再整理したい。

図示した土器群は壺（24～26・28）・甕（10～23）・高坏（2・6・7）・器台（3～5）・鉢（1・8）・蓋（27）・ミニチュア（29）の器類に分類された。

壺は24が在地の箱清水式の系譜をひく器形で、やや歪んでいるが底部から胴部屈曲が明瞭である。胴部下半がハケ整形でミガキが粗雑であることが在来器種の変貌を示している。26は球胴器形に「く」の字に屈曲する口縁部となる新出の器種である。底部から胴部への接合に稜を有する在地技法を残しながらも、口縁端部の摘み上げによる有段状に内湾する器形を呈することと、丸底状の底面仕上げ技法に北陸の影響が看られる。28は胴部に擬凹線文帯貼付がある台付装飾壺の胴部破片で、赤彩が施されている。25は有段口縁に擬凹線文を施し赤彩された口縁部で、台付装飾壺になる可能性もある。この壺4点のうち、器壁が薄く胎土が緻密で精選された壺は26・28である。

甕は15個体図示（内底部2個体）し、4点拓影図とした。器形全容がわかるものは6個体であるが、形状は個々に異なる。甕の分類にあたっては外来出自の地域傾向が示される口縁部形状から、破片資料も含めておこなった（第76図10・13・20・21）。分類は以下のごとくである。

A類・・・有段口縁で、擬凹線文を施紋するもの。

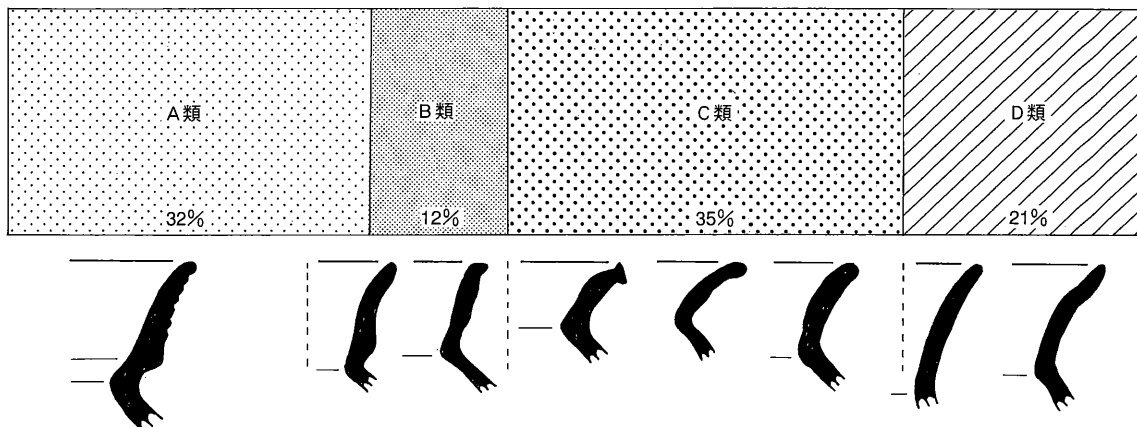
B類・・・有段口縁で、無文（ナデ整形）のもの。外面肥厚による有段口縁も含む。

C類・・・「く」の字に屈曲外反するもの。C類は更に端部形状によってC-①類・・・ナデ調整によって

平坦に面取りされるものとC-②類・ナデによって整形されるが面取りがなく尖鋭・丸棒状となるものの2種に分けられる。

D類・・・幅広口縁で、端部は丸棒もしくは尖鋭状となり外反・外傾するもの。櫛描文施紋。

この4分類のうちA～C類が北陸系で、A類が北陸南西部、C類が北陸北東部（能登）を本貫とし、D類が在地系（箱清水式）の土器群となる。14住出土の破片資料を含めた34個体の口縁比率は以下の表である。（註1）



第5表 14住出土甕口縁部比率

A類（10～13）の口縁部はナデによって尖鋭状に緩く外反し、頸部から有段部に至る屈曲は大きくない。10には5条、11・12には8条の擬凹線文が、13は端部に3条の擬凹線文が施紋され、下部にナデ・ケズリが施されている。この擬凹線文には3～4単位の施紋具が用いられている。口縁内面はハケからナデ、胴部は一部ケズリの後にハケ・ナデ整形されている。口縁内面の指頭圧痕はなく、頸部内面には接合時の圧痕が顕著に残されている。B類（16・17・20）3点はいずれも完形個体であるが、器形は個々に異なる。16は屈曲の緩い有段部で外傾口縁を作りだしている。器面は内外面ともハケ整形で、平底底面までハケを残している。17・20の口縁部は外面肥厚によって有段部を作りだし、端部は面取りが行われている。底部は両者とも微妙な上げ底となり丸底を志向している。17はケズリによって器壁を減じた球胴薄甕で、内外面ともに緻密なハケ整形が施されている。これに対し20は倒卵球形の厚甕で外面ハケ、内面ナデによって整形されている。C-①類（14・15）は口縁部のみの出土であり、図示した2点とも良好な資料ではないが、口縁部破片では数点抽出された。14の端部は外面からの強いナデによって外縁に粘土突出が観察される。15は本類に帰属するか疑問があるが、頸部から内傾し、端部で屈曲する形状をもつ。C-②類（21～23）は口縁端部がナデによって突出気味に外反する。器形は中位に最大径を有する楕円形状（21）もしくは球胴（23）である。21の底部は上げ底であるが器壁は厚い。C類の整形は外面ハケ、内面の一部（肩部）にケズリを残すが、ハケ・ナデによって整形されている。D類（9）は中部高地型櫛描施紋の在地系土器である。9は台付甕で、球胴から明瞭に屈曲した口縁部が外反し、口縁端部がナデによって内腕尖鋭形状となる。整形は胴部施紋の櫛描波状文下部がハケ整形され、口縁内面はミガキとなる。18・19は小底径の平底、上げ底である。この底部成形は胴部下半の粘土を押し付けることによって胴部と一体化させており、円板底部から成形する在地技法とは異なる。

高坏は3点あるがいずれも異なる形状である。2が北陸系、6・7が在地の系譜で解釈できる形態である。2は筒型棒状脚に盤状の坏部を接合した大型高坏である。坏部は脚部から水平に大きく広がり、屈曲外反する口縁部をもつ。口縁端部は面取りが行われ、坏有段部には2条の擬凹線文の隆帯が貼付によって垂下する。器面は内外面ともミガキ赤彩が施され、胎土も緻密で精選されている。6・7は坏部碗型形状で脚部は残存していないが、「ハ」の字に短く開く小型の高坏が想定される。6・7ともに緻密なミガキが施され、6には内外面に赤彩が、7には外面一部に赤彩が施されている。

器台(3～5)はいずれも完存する個体で、受け部径が脚部径を上回る中空中型器台に分類される。3は屈曲柱状脚に碗型の受け部が付く形状で、8～9条の擬凹線文施紋の有段口縁となる。4は受け部が小さく水平に開く形状で、口縁端部に2条の擬凹線文が施紋されている。器壁が一定でなく、粗雑なハケを残す。5は短脚から屈曲して長く開く受け部形状で、端部は面取りが行われている。整形は外面にケズリ・ナデ、内面ハケである。3点の器台のうち、3のみが緻密なミガキで精選された胎土である。

鉢(1・8)2点のうち8は有孔鉢、1は無台碗型鉢である。8は高坏(あるいは平底鉢)を有孔鉢に転用したものである。底面には湾曲形状を作るためのケズリが残り、焼成後に内外両側から穿孔している。本来は内外面ともにミガキ赤彩された在地の高坏(鉢)である。1は蓋とする分類もある小型鉢で、内外面ともハケ整形されている。鉢は(8転用後の有孔鉢の器形)両者とも北陸系である。

27は盤状の蓋で、縁辺2ヶ所対照に突起が貼り付けられた痕跡がある。口縁部は桶状の挟りこみが廻り、合子の蓋を思わせる。整形は外面ミガキ赤彩、内面ナデである。

2 在地土器の編年上の位置付けと北陸系土器の特徴 (第6表参照)

出土土器群の時期について①在地系土器型式と②近隣遺跡における北陸系土器との共伴状況から検討してみたい。

図示した29個体のうち在地系土器は24の壺、9の甕、6・7の高坏、8の転用前の高坏(鉢)の5点である。(図示した17%を占める)壺24は、広口壺の系譜上にある中型の器形で、球胴化傾向の器形と整形の粗雑化、ミガキ赤彩が省略されていることなどから、終末期から古墳前期の様相として捉えられる。しかし、該期の壺としては胴部から口縁部へ至る屈曲が明確でない点、胴部ミガキが粗雑で胴下半部がハケ整形であることなど、技法上の乱れが指摘できる。この壺は四ツ屋30住～篠ノ井SB7508段階までの間に存在する。甕9は口縁端部が微妙に屈曲する状況と胴下半部がハケ整形であることに在地技法にない要素を見いだせるが胴部と口縁部の屈曲が明瞭であることと、櫛描波状文が胴下半部まで施紋される特徴は、壺同様に終末期に該当する。甕の頸部屈曲の変化は四ツ屋30住～9住段階に顕著にみられ以後継続するが、精緻な櫛描波状文は次の段階に残存することはない。6は坏部碗型形状の高坏で、有稜高坏とともに箱清水式を通して存在する器形であり、終末期の高坏の小型化に伴い数量が増し、東海系の小型高坏とも共伴する。浅い坏部に口縁端部が内碗尖鋭化する形態は、篠ノ井SB7508段階まで存在するが、赤彩高坏は前段階までの様相である。7は坏部碗型形状と直立口縁有稜形状の中間形態を示す。口縁幅がやや狭いことと深めの碗形状になることが在地と異質な観があるが、「ハ」の字に開く低脚高坏の範疇にあることから終末期に属する。8の鉢も後期通有の器種であるが、四ツ屋9住以後の組成に赤彩鉢は存在しない。

以上のことから、在地土器群は箱清水式終末期から御屋敷式、青木編年(1996/1998)の3期・6

段階から4期に位置付けることが妥当だと考えられ、四ツ屋30住～御屋敷1・2・4住段階が該当する。

次に北陸系土器群の諸要素から系統を探ってみたい。本来ならば北陸各地の法仏・月影式土器を理解し、実見検証をすべきところであるが、筆者にその力量がないので各研究者の編年観、地域性に関する論考をそのまま使わせていただく。

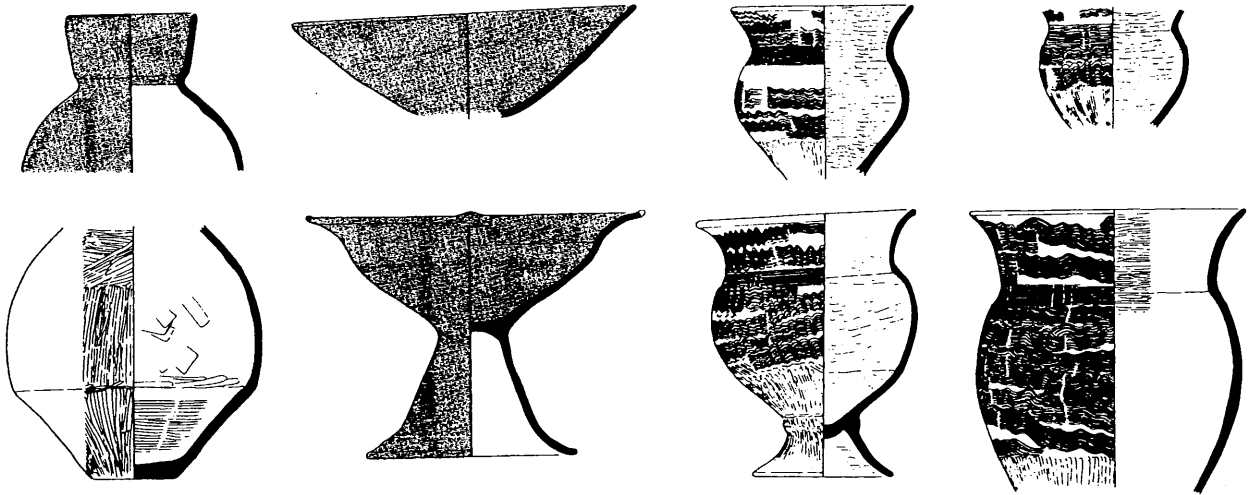
甕A類は有段口縁が長く、口縁端が先細りして外反し内面ハケ整形である。内面の指頭圧痕は残存しないが、口縁部は月影式の特徴を示している。甕B類は有段口縁を呈すること以外北陸地域に同器種を見いだせず、甕C類も端部の特徴以外言及できない。甕口縁の出土比率を検討してみたい。本址での比率は〈A類32%・B類12%・C類35%・D類21%〉であり、C類の割合が比較的多く、A類も1/3を占めている。隣接する北陸北東部地域（越後・越中）が従来から「南西部に比べ有段口縁無文の甕、くの字甕の占める割合が多く、内面ケズリが未発達である」との指摘があり、北東部内においても「越中是有段口縁甕・ケズリが多く、越後では有段口縁甕が少なくハケ・ナデが多い」という指摘がなされている（野水2000）。これに当てはめてみると口縁部形状の出土比率傾向は北陸南西部に近く、体部整形は北陸北東部ということとなる。近接する屋代遺跡群土口バイパス地点7A住（木下・佐藤2000）出土土器でも同様の傾向を示している。（註2）

高坏2の形態は、法仏式系の棒状有段脚の高坏（器台）に近似する形態で、月影式系の有段鉢に脚部が接合し、小型化傾向になる高坏とは大きな隔りがある。この高坏は本地域の編年時期からみると旧型式の模倣として捉えられる。

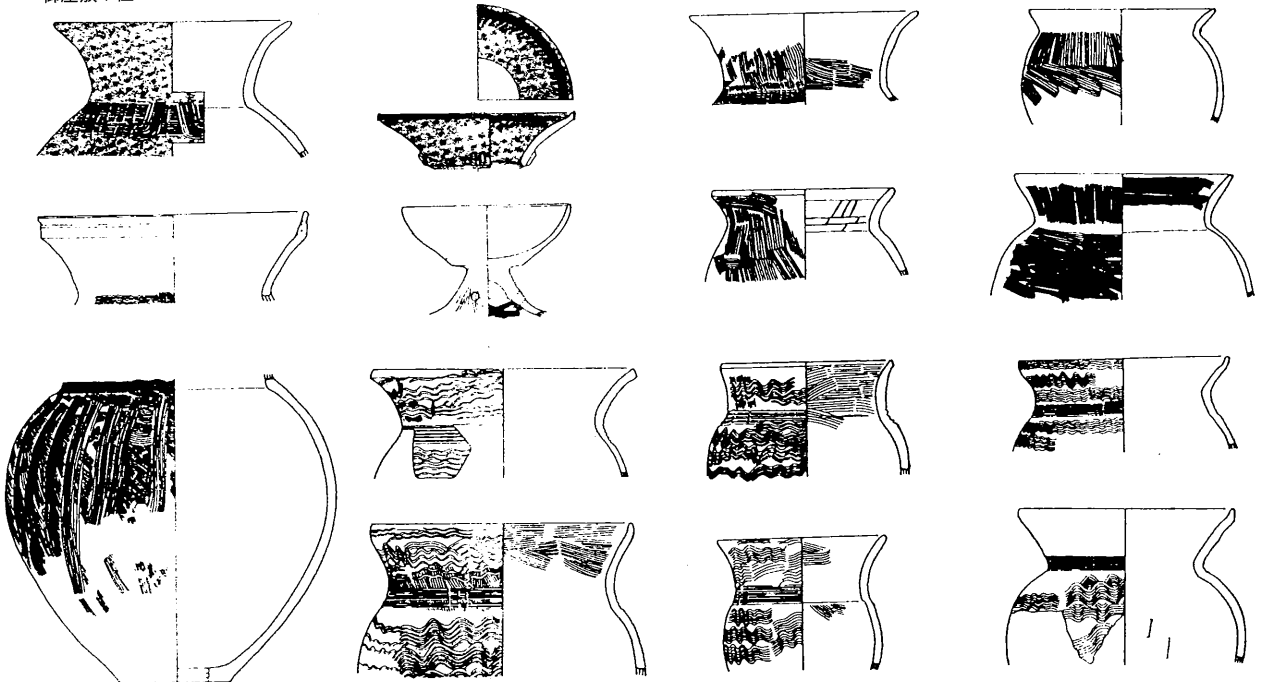
	青木 (1996) / (1998)	本論で対象とした 基準資料	坂井・川村 (1993)	楠 (1996)	
吉田式	1期 1段階	四ツ屋30住 御屋敷1・2・4住 四ツ屋9住 篠ノ井SB7508・SB70 灰塚H1住	I期（最新） II期—1 II期—2 II期—3	猫橋式 2期	
	2期 3段階				
箱清水式	3期 4段階 5段階 6段階				法仏式 3期
	4期				月影式 4期
御屋敷式	5期				白江式 5期

第6表 編年対照表

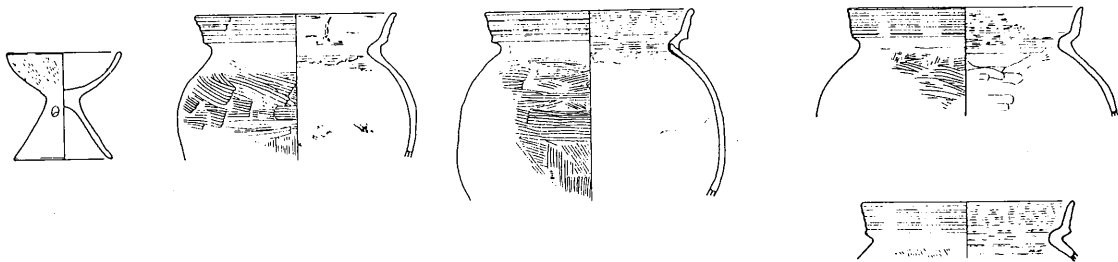
四ッ屋30住



御屋敷1住



土ロバイパス7A住



第108図 編年対照土器 (1:6)

器台3～5は中型器台で法量という点では月影式系として捉えられる。しかし、3・4にみる受け部有段部への擬凹線文の施紋、湾曲形状の受け部は、法仏式期にある山陰系器台の縮小形態として認識される。台付装飾壺28は、市内の郷津遺跡（山根1990）からも出土しているが、この器種も法仏期に盛行する。

以上のことから、本址出土土器群は多分に法仏式系的な要素を持っていると言え、これら土器群を法仏・月影系と呼称したい。

3 土器群の位置と課題

出土土器の器種組成及び形態を整理し、北陸地域の編年と対照してみることにする。器種組成は、中型の壺（在地形態と北陸形態）、中～大型・小型の甕（中型の台付甕のみ在地形態）、小型・大型の高坏（小型は在地形態で大型は北陸形態）、中型の器台（北陸形態）、鉢（北陸形態）である。本組成に小型器台の欠落が指摘できるが、在地土器型式にみる様相は小型器台の出現期であり、御屋敷式段階と捉えられる。

坂井・川村の越後編年（坂井・川村1993）では、Ⅰ期からⅡ期への変化は「北陸北東部系の甕の盛行・有段擬凹線口縁土器の激減と衰退・小型器台の出現と定着…」という観点から区分している。これに照らすとⅠ期（最新）～Ⅱ—1期に該当する（註3）。また北陸地域との時期的な併行関係は、能登地方南部編年（栃木1995）の9期、能登地方編年（楠1996）の5期直前ないしは5期前半に該当する。

千曲川流域において北陸系土器を出土した遺跡は30数遺跡を数え、法仏式系から月影式・白江式段階までの土器が認められている。出土状況は遺跡・遺構によって異なり、多くの場合は在地土器群との混在となるが、本遺跡（遺構）にみる北陸系土器群の主体的な在り方もいくつかの遺跡で事例が報告されている（註4）。これらの出土器種を総合すると時期的な隔たりも考慮されるがほぼ全器種を認めることが出来る。器種の中で高坏（大型器台）・台付装飾壺・壺の形態・施文、甕胴部の装飾の特徴は、時期差・出土状況に関係なく法仏式期の所産として認識される。

本地域において在地土器群がほぼ払拭される段階にあっても、北陸地域の前段階の土器様式を取り入れた意味は何であろうか、本遺跡を出発点として今後の課題としたい。

註

- 1 14住床面・埋土から出土した口縁端部の残存する資料を対象として分類し、検出面・グリッド資料は除いて集計した。対象破片は口径の残存率に関係なく扱い、観察によって同一個体と認識されるものは1個体の土器として換算した。
- 2 本地域全体が有段口縁擬凹線文甕が多いわけではない。本遺跡と対峙する千曲川左岸の鶴前遺跡ではC類が多く北陸北東部と同様の傾向が見られる。
- 3 信越境に位置する妙高村「大洞原C遺跡」において、箱清水式系と北陸北東部系の土器が出土している。（三ツ井明子：1997「大洞原C遺跡」(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団) この土器に対し、破片資料を含め緻密な分析が行われているが（春日真美：2001「新潟県大洞原C遺跡の弥生時代末から古墳時代初頭の土器」研究紀要第3号(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団）、信州系土器群とされるものは本址出土段階（小型器台出現・盛行以前）の様相として捉えたい。
- 4 飯山市上野遺跡、中野市七瀬・間山遺跡、長野市鶴前遺跡、更埴市屋代遺跡群、上田市宮の前・琵琶塚遺跡などが

上げられる。

参考・引用文献

- 青木一男：1996「大星山古墳群・北平1号墳 第二部北平1号墳・北平塚まとめ」
上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書7 長野県埋蔵文化財センター
- 青木一男：1998「松原遺跡 弥生・総論6 弥生後期・古墳前期 第4章成果と課題」
上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5 長野県埋蔵文化財センター
- 白居直之：1994「鶴前遺跡 第4章調査の成果と課題」
中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書14 長野県埋蔵文化財センター
- 木田 清：1998「法仏式土器の認識と再認識」石川考古学研究会会誌 第41号
- 楠 正勝：1996「弥生時代中期後葉から古墳時代前期前半の土器」西念・南新保IV 金沢市教育委員会
- 木下正史・佐藤信之：2000「屋代遺跡群 国道403号(土口バイパス)道路改良工事に伴う発掘調査報告書」
更埴市教育委員会
- 栃木英道：1995「谷内・杉谷遺跡群」石川県立埋蔵文化財センター
- 坂井秀弥・川村浩司：1993「古墳出現前後における越後の土器様相―越後・会津・能登」
磐越地方における古墳文化形成過程の研究
- 西山克巳：1997「篠ノ井遺跡群」中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書16 長野県埋蔵文化財センター
- 野水晃子：2000「越中・越後における弥生時代後期後半の土器について」新潟考古学談話会会報 第22号
- 矢口忠良：1980「四ツ屋遺跡(第1～3次)・徳間遺跡・塩崎遺跡群(3)」長野市教育委員会
- 山根洋子：1990「古道遺跡他 発掘調査」平成元年度更埴市埋蔵文化財調査報告書 更埴市教育委員会

第2節 屋代遺跡群出土の竈形土器について

鳥羽 英 継

はじめに

竈には、堅穴住居に造り付けられたもの（造り付け竈）、中世の絵巻物に見られるように単独で築かれたもの（築き竈）、更に焼き物で形作られたもの（竈形土器）がある。（杉井1993）この内本稿は、東北信地方で初めての確認例となる屋代遺跡群出土の竈形土器についてまとめたものである。県内で5例目と出土数がきわめて少ないため、一般的に見られる竈形土器の特徴を概観し、その特徴をつかんでから、屋代遺跡群例を観察し、若干の考察を行うこととする。なお、土器の年代観は屋代遺跡群編年（鳥羽2000）に従う。

1 竈形土器の特徴

一般的に見られる竈形土器の特徴は以下のようなものである。ここでの記載は、近澤1992からの引用を中心とし、足りない部分を稲田1978、神谷1988、近野1990、水口1990、岡野1994、その他の資料で補って行う。

名称……………竈形土器、竈形、移動式竈、置き竈、土製竈、竈、韓竈、辛竈、竈形土製品等のいろいろな呼称がある。この中で研究史上一番古い呼称は、「竈形土器」で、大正7年に既に登場し、その後も多くの研究者により使用されてきた名称であるという。本稿も、使用頻度の多さから「竈形土器」の名称を用いる。

時期……………古墳時代中期後半から中世まで存在する。畿内とその周辺では、6世紀代に現れ、8世紀代まで存続し、9世紀以降は、形骸化したものだけが残る。ただし、他の地域では9世紀以降でも著しい退化は見られないとされる。また、岡野1994では、出現時期を造り付けの竈が増加する5世紀とほぼ同じ時期とし、畿内や九州で造られるとしている。

形態……………ほとんどは、断面台形状の円筒形を呈する。正面に大きく炊口を持ち、炊口に付随する庇の作り方の違いから、①付け庇系統、②曲げ庇系統、③庇無し系統の3系統に分けられる。①の付け庇系統は、粘土を張り付けて庇にするもので、庇を貼り付けた後最後に炊口をヘラで切り開くため、庇と炊口との間には多少の隔たりがあり、庇はそれ自体で独立した存在となる。②の曲げ庇系統は、炊口の切り口上部を折り曲げ、多少の粘土を継ぎ足して庇とするもので、炊口を切開して後に切り口を折り曲げて作るため、体部とは一つながりになる。また、炊口の両側近くの内面と奥壁内面に支柱様の粘土帯を貼り付ける特徴を持つ。③の庇無し系統は、庇を持たないものである。稲田1978によると、系統の違いは、組み合う釜形土器の形態の違いと対応する例が多く、①は口縁部を竈形土器の掛口に直接かけるため、体部径より口縁部径を大きく作った釜形土器とセットになり、②は羽釜形態のものとも組み合う例が多い。量的には①の付け庇系統が多い。また、器高50cmをこえる大型品から、器高10cm以下のミニチュアまで多岐にわたっている。

分布……………南は鹿児島県から北は佐渡まで広く分布している。個体数では、7～8世紀は畿内が優位である。しかし、発生期（5～6世紀）や後期（9世紀以降）には、分散化する傾向にある。古墳への副葬品として使われる例は畿内が圧倒的に優位である。形態の項で述べた庇の作り方の違いから分類される3系統の分布は、①の付け庇系統で、掛口が内傾するものは、全国広範囲に分布している。同じ①の付け庇系統でも、掛口がくの字状に外反するものは、日本海側に広がっている。また、②の曲げ庇系統は、畿内とその縁辺部に分布していることが明らかにされている。

東国での出土例……………1988年の神谷の集成では、群馬県で8遺跡・8例、山梨県で8遺跡・9例、神奈川県で10遺跡・31例、東京都で4遺跡・5例、新潟県で3遺跡・3例があげられている。長野県内の初出土は、1990年であるため、この時点では長野県の出土例の報告はない。庇から見た系統では、圧倒的に付け庇系統が多い。出土数は年々増加しており、1994年の岡野の山梨県の集成では、1988年の8遺跡から19遺跡に増加している。

出土状況……………大きく次の3つに分けられる。①古墳副葬品、②旧河道・大溝等、③竪穴住居内及びその周辺。①については、大津地方では横穴式石室の玄室袖わきに釜・甕等とセットで置かれる例が多いことから、古事記に記載されている黄泉戸喫伝承とからめて論じられた。（小林1949）また、奈良県・大阪府・兵庫県古墳出土例のミニチュア模造品も祭祀性を論じる材料として扱われてきた。②については、祭祀関係遺跡（遺構）として考えられ、土馬や墨書人面土器といった祭祀系遺物を伴って出土している。③については、甕形土器と造り付け甕が同時に同所に存在する例があり、住居内の造り付け甕の上に投棄された形での出土例が多いという。住居の廃絶に伴って、甕形土器が意図的に造り付け甕に投棄されたことを示している。造り付け甕は日常の炊飯に用い、甕形土器は非日常の祭祀的な目的を持ったものであるとされる。破片よっての出土が多く、復元によって全貌がわかる個体はわずかである。すすの付着もあまりなく、使用頻度は低いと考えられる。神奈川県出土例では、甕構築材として使用されたものもある。また、東京都出土例では、造り付けの甕を持たず炉を使う竪穴住居内で、甕形土器が、炉及び炉の周辺から出土している例が複数見られる。

出土量……………出土量の多い畿内でも、土器全体・土師器の中で占める割合は、多い遺構でも2～3%程度で、大部分は1%未満と少ない。

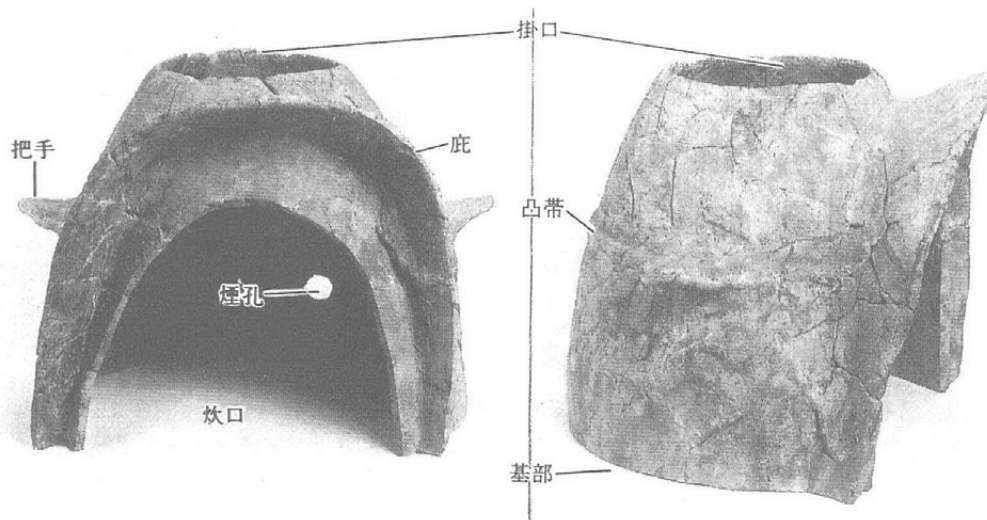
変化……………稲田1978では、庇の形態およびその取り付け位置を型式変遷のメルクマールとしている。付け庇系甕形土器の変遷の第1段階においては、器高の2/3あたりの高さに庇が取り付け、庇の出も小さいが、第2段階では庇の位置が掛口にかなり接近し、より幅広くなった庇が斜め上方につき出し、庇の背後にかろうじて煙孔をみすかすことのできる前面観となるとしている。しかし、近野1990では、古墳出土例の検討から、この庇による型式変遷は成立しがたいとしている。また、近澤1992では、付け庇系で掛口が基本的に内傾するものは型式変遷が追い易いとし、次のように変遷を述べている。「掛口の端部は、初期の内湾し、細くおさめるものから、直線的に立ち上がり端部を肥厚して受け面をもうけているものに変化する。庇高は、最初掛口高より低い後に逆転し大きくせり上がるようになる。炊口の立面形は、半円形のものから次第に肩の丸い台形に変化する。把手は、その先端が水

平→先上がり・先下がり→透し孔と変化し、ついには無くなる。初期のものには凸帯が付着し、煙孔が存在するが、後のものには見られない。基部は平坦で裾あきにならない。」地域による違いでは、神谷1988は、東国出土の竈形土器は、畿内との共通性を持つものも見られるが、正面観、把手、整形等の観点で比較すると、多くは大きな違いを持っていることを指摘している。

使用目的……………正倉院文書や延喜式の中に見られる「韓竈」・「辛竈」・「贄土師竈」・「土師韓竈」が竈形土器に相当するとされ、文書の記載内容から祭祀に伴う調理に際して使用されたと考えられている。文書に記載された例は、稲田1978に詳しい。また、出土状況の項でもふれたが、考古学的な所見からも祭祀に関係する出土状況を示すものが多い。神奈川県で出土した竈構築材として使用された例では、竈神信仰からの解釈も行われている。(註1) また、ミニチュアの竈形土器は、道教思想に基づく祓えに使用された非日常的祭祀具であることはおおかたに認められた見解であるという。(水口1990) 一般に祭祀の場は、広場や臨時の仮設建物あるいは祭祀専用建物といった日常生活の場から離れたところで行われることが多いが、竈形土器の移動性が祭祀にかかわる場での使用に適していたことが指摘されている。更に、「韓竈」という呼称が示すように、異郷に由来する竈の形式であることが当時の人々に明瞭に認識されており、この異郷の形式で行う炊飯により調理された物が神聖さを持つとも考えられていたとされる。(稲田1978)

祭祀関係以外の使用例も指摘されている。東京都多摩ニュータウン例では、平安時代後半の竪穴住居跡で、竈から炉への転換が行われており、竈形土器は炉及び炉周辺から出土しているため、日常的な調理にも使用されたとされる。(水口1990)

各部位の名称 (第109図) ……………近澤1992にわかりやすく写真で部位の説明がされているため第109図として引用する。本稿での名称も、ここで引用した名称に統一した。

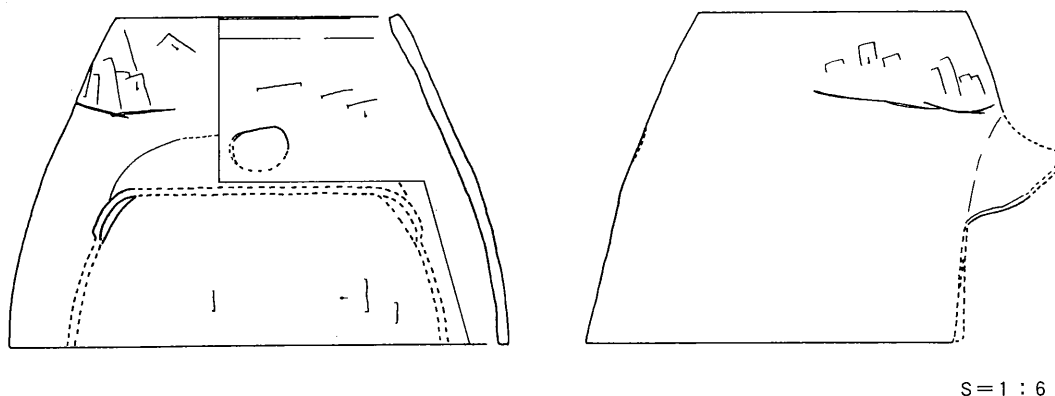


第109図 竈形土器の部位名称

2 屋代遺跡群出土例の観察

屋代遺跡群から出土した甕形土器を第110図に示した。近澤1992では、甕形土器の諸要素を以下の10の視点から分析している。10の視点とは、(1)胎土、(2)焼成、(3)成形及び調整、(4)掛口、(5)底、(6)炊口、(7)把手、(8)凸帯、(9)煙孔、(10)基部である。

以下、全体的特徴や出土状況、時期の問題も含めて、屋代遺跡群出土例をこれらの視点に沿って観察してみたい。



第110図 屋代遺跡群出土の甕形土器

(0) 全体的特徴

残存率は1/2程度あり、小破片が多い甕形土器としては全体復元が可能なほど良好な残存状況である。復元された個体の法量は、器高25.4cm、掛口径20.8cm、基部径38.0cm、炊口の最大径30.0cmである。内外面共に、黒褐色の煤けた粘土を塗りつけた部分が見られる。掛口と炊口部と基部の内外面の一部には煤が付着している。前記の黒褐色の煤けた粘土がとれた部分も煤状を呈するためあるいは、それがはがれた跡の可能性もある。この煤けた粘土の意味ははっきりと分からない。

(1) 胎土

非常に細かい粒子が混和材として多く混入されており、大きな鉱物の混入は少ない。共伴する甕には、大きな粒子の混入が目につき、胎土の緻密さという点では、共伴する甕より勝っている。

(2) 焼成

土師質で、燈色を呈する緻密な焼成である。共伴する甕と比べると燈色が強く明るい印象を受ける。

(3) 成形及び調整

外面は、縦方向のヘラ削りで整形され、基部近辺から接地面には横ナデが施される。掛口の端部は、ヘラ削りできれいに水平からやや内傾気味に平坦面が作り出される。掛口の内面部分は、ヘラ削りによりやや肥厚気味に整形され、直立した立ち上がり意識されている。内面の整形は、上半部は縦方向のナデ、下半部には横方向のナデが施され、ナデを主体とした整形である。

(4) 掛口

掛口は、内傾するものと、くの字状に外反するものの2種類があるが、本例は、内傾する例に属する。

(5) 庇

炊口を切開した後に切り口を上部に折り曲げて庇を作っており、折り曲げ部には粘土を継ぎ足してナデにより補強を行っている。東国では少ないとされる曲げ庇系統に属する。

(6) 炊口

一般的には、立面形が半円形に近いものと台形に近いものの2種類があるとされる。本例は、炊口部の欠損が激しく、そのどちらに属するかは不明である。

(7) 把手

把手の付く位置は、側面から見た場合、左右の方向ではほぼ真ん中に来る場合と、炊口部方向へかたよる場合とがあるようである。また、上下の方向で見た場合、真ん中に位置するものもあるが、掛口部により接近する例もある。本例は、側面部に欠損が認められ、場合によっては欠損部に把手がつく可能性も考えられるが、現状では、把手は認められない。側面の残存状況では、把手のつかない可能性の方が高い。

(8) 凸帯

本例には、凸帯は認められない。しかし、庇の折り返し部のやや上方に沈線が一条めぐっている。沈線は前面を中心に約半周見られているが、庇の折り返し部の補強のための粘土とナデ整形により一部がナデ消されている。本来、凸帯がめぐる位置と同様の所にあるため、凸帯の退化形と見ることもできる。

(9) 煙孔

炊口の背面やや上方に、円形の透かし孔が一孔穿たれている。胴部成形後、切開して作られている。炊口から見て正面に位置するかは、炊口部分の欠損が多いためはっきりしない。

(10) 基部

本来曲げ庇系統の竈形土器では、炊口の両側と背面の3個所に、支脚状のものを配し、裾あきにする特徴が見られるようである。しかし、基部の残存状況は、1/5程度であり、復元は、裾あきでない形態で行われている。基部の欠損個所が、ちょうど支脚の位置する個所と重なっているためはっきりしないが、本来は支脚状のものを配し、裾あき形態になる可能性が高い。

(11) 出土状況

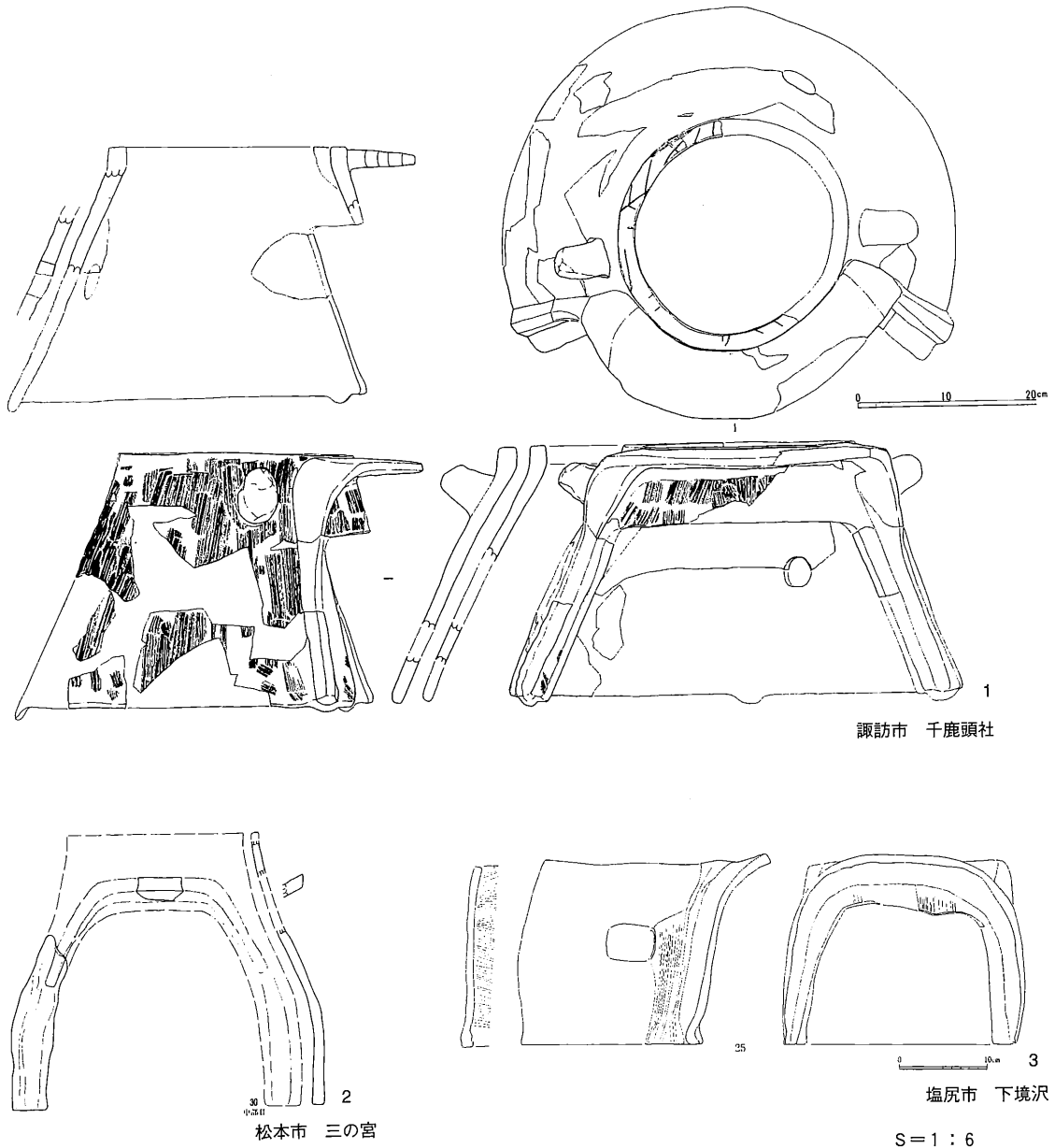
1号住居跡からの出土であるが、住居は調査区外へのびており、半分しか調査されていない。竈は東壁南寄りに作られている。竈形土器が出土したのは住居跡の床面で、北壁付近からまとまって出土している。付近からは炭も確認されたが、焼土は未確認であった。ほぼ同じ位置から、黒色土器A杯AⅡが一点出土している。

(12) 時期

1号住居跡には、竈脇に貯蔵穴が確認され、土器がまとまって出土した。竈形土器は床面出土のため、これらの土器と同時代と考えられる。土器の内容は、黒色土器A杯Aが2点、黒色土器B蓋が2点、須恵器杯Aが1点である。この内、須恵器は軟質須恵器であり、黒色土器の比率が高いこと、土師器がないこと、須恵器の蓋を模倣した黒色土器Bがあること等の理由により、古代7期後半（9世紀中頃に近い9世紀第3四半期）に位置付けられる。竈形土器も同時代の所産と考えられる。

3 長野県内の出土例

長野県内の竈形土器の出土例は本例を含めて5例である。(註2) 県内で大規模な発掘調査が本格化した1990年代から出土例が見られる。時間の関係で実見できないものもあったため、報告書に記載された関連部分を引用し、所属時期については若干のコメントを付ける。



第111図 長野県内出土の竈形土器

① 松本市 三の宮遺跡 1990 (財)長野県埋蔵文化財センター (第111図-2)

検出面出土 「残存率は低く、厚さ10mm~13mmの輪積み痕の見られる器壁に厚く粘土帯を張り付け、厚さ40mmの支柱様に仕上げた焚口部下側の破片と、厚さ7mmで径200mmと推定される釜孔付近の破片、

端部を板状工具に押し付け、平に仕上げた庇付近の破片が確認されたにとどまる。推定される器高は70cm、焚口部の最大径は33cm。庇部は焚口部の破片から、器壁を切開した後、切り口を折り曲げて作られたと判断される。胎土は1～3期に見られるやや黄色味を帯びた土師器甕類に類似し、砂粒が多く混じる。] 時期は、検出面出土で共伴遺物がないためはっきりしない。しかし、胎土が1～3期に見られる土師器甕類と類似しているという記載があるため、それらの甕類と同時期と考えれば、7世紀後半～8世紀代の可能性が考えられる。

② 諏訪市 千鹿頭社Ⅳ 5区50号住居跡 1991 諏訪市教育委員会 (第111図-1)

住居跡の規模・平面プランは切合によりはっきりしない。北壁中央部付近に石組み竈がある。竈内には焼土が厚く堆積し、竈付近を中心に土師器甕類が出土している。竈の西側床面上から鉄製紡錘車が1点出土。灰釉陶器の出土は無い。覆土から鉄滓、覆土中に1号集石を検出。「竈形土器は、1号集石及び50号住居跡覆土から検出。器壁の焚口部分切り取り後、粘土紐を重ねた庇を貼り付けた付け庇式の竈形土器である。1対の把手を有するものと思われる。背面には中心からやや外れた場所に円孔が一基あけられる。外面は、タテ～ナナメ方向のハケ目調整を行った後、庇の張り付けを行い、その周辺部にナデを加える。内面には、ていねいなナデ。一部に煤の付着が認められる。釜孔の口唇部に木の葉痕を残す。器高24.9cm 釜孔内径約22cm 粘土には石英粒及び砂粒を含む。淡茶褐色を呈するが焼成は甘い。検出時の状況から1号集石構築時に破片の状態で廃棄されたと考えられる。1号集石の下端は、推定床面とほぼ同レベルのため1号集石は50号住居跡廃棄時もしくは廃棄後まもなく構築され、この時に竈形土器が廃棄されたと考えられる。」 時期は、灰釉陶器が伴わないこと、本住居跡に伴うかは不明であるとされるが、覆土から高台径の広い須恵器杯Bの破片が出ていることから8世紀代と考えておきたい。

③ 塩尻市 下境沢遺跡 第20号住居跡 1998 塩尻市教育委員会 (第111図-3)

住居跡は、4.2m四方の方形プラン。東壁中央に造り付け竈がある。竈手前から竈形土器の前面部が出土。「断面は台形状で円筒形を呈しており、焚口の周縁には粘土紐を貼り付けた付け庇が見られる。内面には横方向のハケ目が、外面には縦方向のハケ目が見られる。また、側面には持ち運びに使用したと考えられる穴があいている。」 時期は「平安時代8～9期」とされるが、共伴する食膳具は土師器が多く、灰釉陶器も内湾度が強く10世紀代の特徴を持つものがほとんどであるため、10世紀代とするのが妥当であろう。また、20号住居跡は、17号住居跡に切られているという記載がある。17号住居跡は、土師器杯AⅡが多く出土し、その口径平均は、報告書で計測すると11.8cmとなり、古代10期(10世紀中頃)の法量を示す。このため、この住居に切られるので、竈形土器の時期は、10世紀前半～中頃と限定することができよう。

④ 飯田市 恒川遺跡 未報告 飯田市教育委員会

『千鹿頭社Ⅳ』(諏訪市教育委員会1991)の報告書の中に、飯田市教育委員会の小林正春氏の御教示として出土例があると記載されている。

4 屋代遺跡群出土例の持つ意味

(1) 別火の信仰の視点から

稲田1978を参考にしながら、竈形土器の使用目的との関連から、今回の出土例を考えてみる。竈形土器の使用目的は、1の項でも述べたように祭祀に伴う調理に際して使用されたと考えるのが一般的である。調理の内容も神聖な食物の調理ばかりでなく、小林行雄氏の指摘するように冥界の食物・穢れた食物を調理するための物でもあった。(小林1949) また、奈良・平安時代に竈形土器を用いた祭りにかかわった人々の範囲は、宮廷にかかわる人々から竪穴住居の住人にいたるまで広く、それを用いた祭祀も神祭から儒教・仏教及び地鎮・上棟などの雑多な祭りにまで及んだと考えられている。

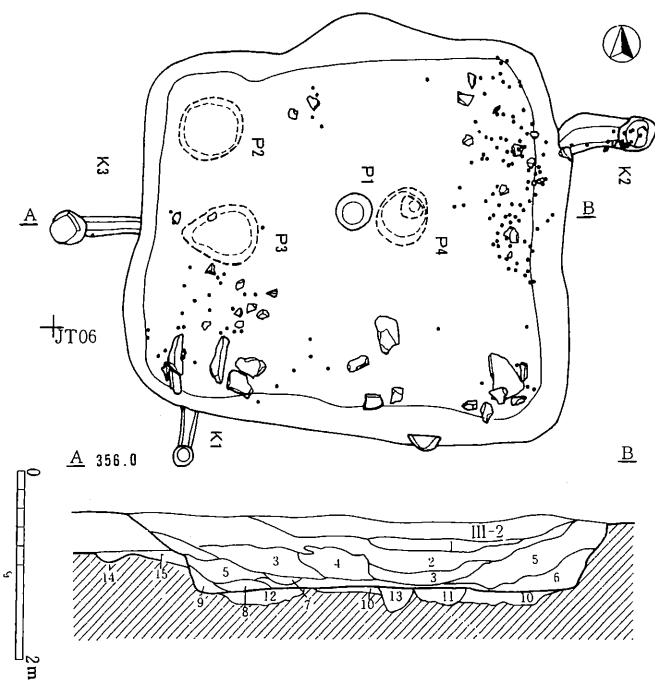
奈良・平安時代に竈形土器がこれだけ多様な祭祀に共通して用いられた背景にあるものは、竈形土器が別火の信仰に奉仕する竈として普及し、発達してきたという点が重要であるとされる。火切杵・火切臼できり出された神聖な火は忌火と呼ばれ、それは神饌・神酒に奉仕するための別火であると考えられる。竈形土器も日常炊さん用の竈と区別された第二の竈と考えれば、忌火と同様に忌竈と呼ばれるべきであるとする考えは妥当であろう。宮廷で使用される竈形土器も、一般民衆の竪穴住居で使用される竈形土器も、この別火という観念では同質のものが貫かれていたと考えられる。

屋代遺跡群出土の竈形土器は、集落遺跡から出土した例である。宮廷内での使用例では、支配権の確立に伴う神人共食などの儀礼に用いられたことも考えられているが、集落遺跡の場合の使用例は、これとは違った意味を持っていよう。集落遺跡で竈形土器を使用する根底にある心情は、「自然のもたらす豊饒への願いや災厄に対しての忌避の心情であり、その願いを実現するためにかかわる祭祀に使用された」と考えられる。

こういった、祭祀にかかわる調理に竈形土器は使われたわけであるが、それは出土量の多い西日本や畿内で一般的に言えることである。屋代遺跡群で注意する点は、出土例の少なさである。長野県では、本例を入れて5例しか確認できていない。しかし、このような少ない中でも、西日本、東日本を問わず別火の観念はこの時代を生きた人々が共通して持っていた思想と考えられる。この別火という観念で出土数の少ない屋代遺跡群の竈形土器を考えた時、別火を行うために竈形土器にかわるものがあるのではないかという考えが出てくる。この時に注目することは、一軒の竪穴住居に複数の竈の跡を持つ住居の存在である。

上信越自動車道関連の屋代遺跡群では、報告書の中で竈の残存状況について細かい分析が行われている。(寺内1999) ここで示された基礎資料を基に、各時期で複数の竈を持つ住居跡の数を数えてみると、7世紀代は1軒、8世紀代は2軒、9世紀代には39軒も見られる。(註3) 複数の竈を住居跡内に持つ例が、検出遺構の数による時期的なかたよりは持ちつつも、検出数の少ない古代3～4期(8世紀中頃～後半)を除いて、古代1期(7世紀後半)～古代8期(9世紀後半)にかけて長期間存在していることがわかる。複数の竈の存在する理由は、住居の建て替えに伴う竈の位置の移動をあげているが、その中で、S B 3006の2基の竈は同時存在が指摘されている。(第112図)

第112図のS B 3006例を見てみよう。この住居は、古代8期前半(9世紀後半)に属する。出土量は少ないものの、椀形鍛冶滓と炉壁も出土し、住居跡中央部に位置する炉状遺構内の採取土から鍛造剥片が若干検出されている。竈は、北側を除く3方向に1個ずつ、計3個が検出されている。この内K 1、K 2とされている南側と東側の竈は、破壊された状況が明確に住居内に残っており同時存在して



第112図 屋代遺跡群 SB3006
カマド残存状況 (K1、K2、K3)

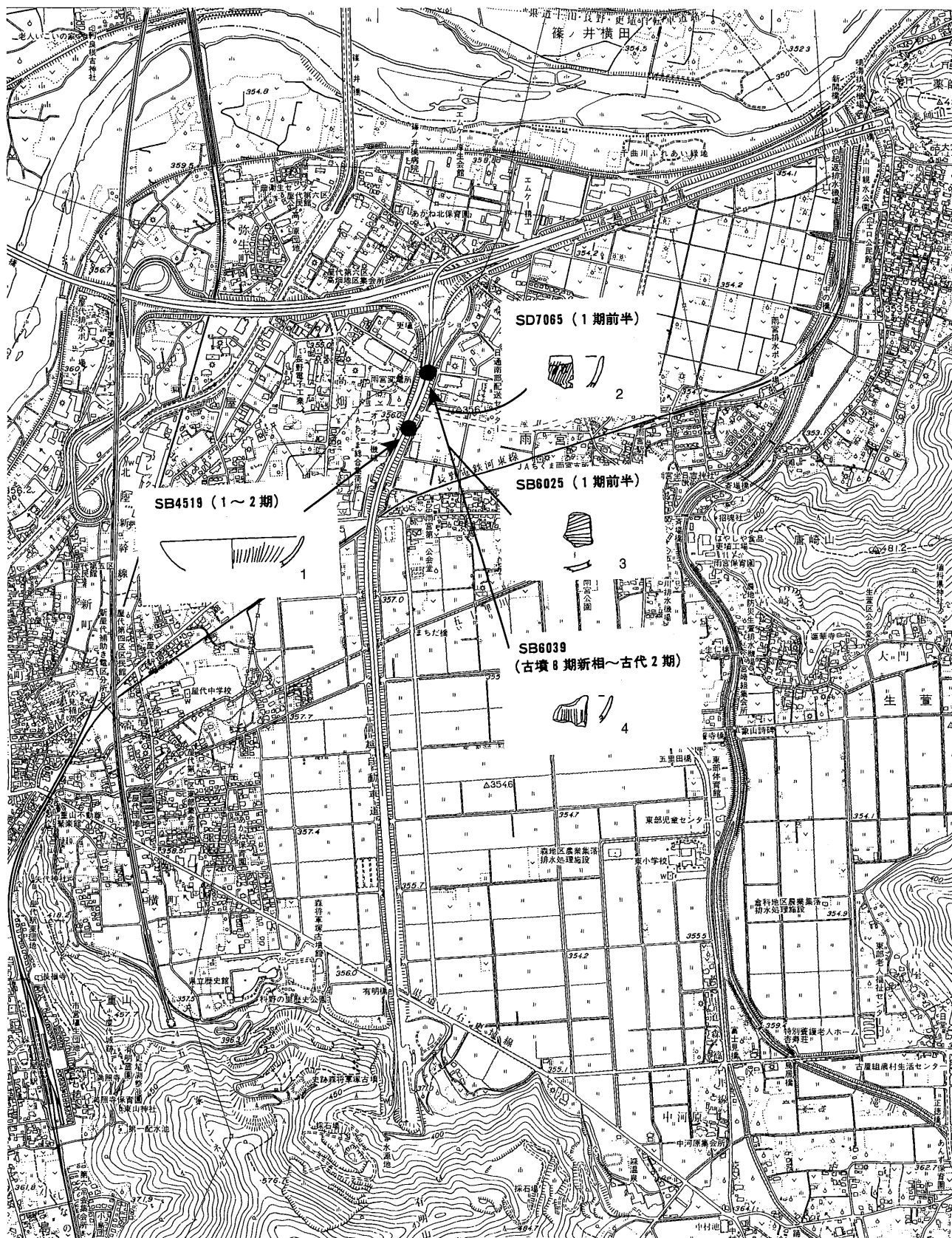
いたことがわかる。東側のK2とされる竈は遺物の出土も多く、破壊された多量の土器の他に焼成を受けた礫も廃棄されている。煙道内からは完形の杯も出土している。南側のK1とされる竈も袖の一部が残存しており礫と破壊された土器が竈周辺から出土している。西側のK3とされる竈は住居内にその痕跡はなく、煙道のみ確認されている。煙道が住居の西壁から明確に出ており、更に、煙道出口部に土師器甕（砲弾甕）が伏せた状態で出土している。出土状況から、明らかにK3が一番古く、その廃棄後、K1とK2が使用され

たことがわかる。ここでK3は生活の竈であったことは明確である。K3の廃棄の後、時間差はわからないが、K1とK2の2つの竈が作られる。その中で、K1とK2の内の一つはK3の役割を引き継ぐ生活の竈、そして、もう一つの竈は、生活の竈と違った役割を受け持つ忌竈であった可能性が考えられよう。煙道内や煙道の出口部に完形の土器が出土している共通点から考えると、K2とK3は生活の竈の可能性があり、K1は忌竈だった可能性がある。また、K1は南側に作られており、屋代遺跡群内でも非常に珍しい方向に築かれた竈である点も非日常的な竈である傍証となるかもしれない。
(註4)

このように、竈形土器を別火の信仰からくる忌竈ととらえると、長野県内のような出土例の少ない地域では、それにかわる施設が存在が指摘でき、複数の竈を持つ堅穴住居跡の中のいくつかは、忌竈として使われた可能性があることが考えられた。屋代遺跡群出土の竈形土器は、古代の別火の信仰のあり方という古代の人々の生活を左右していた観念を探るための貴重な出土例の一つと言えるだろう。
(註5)

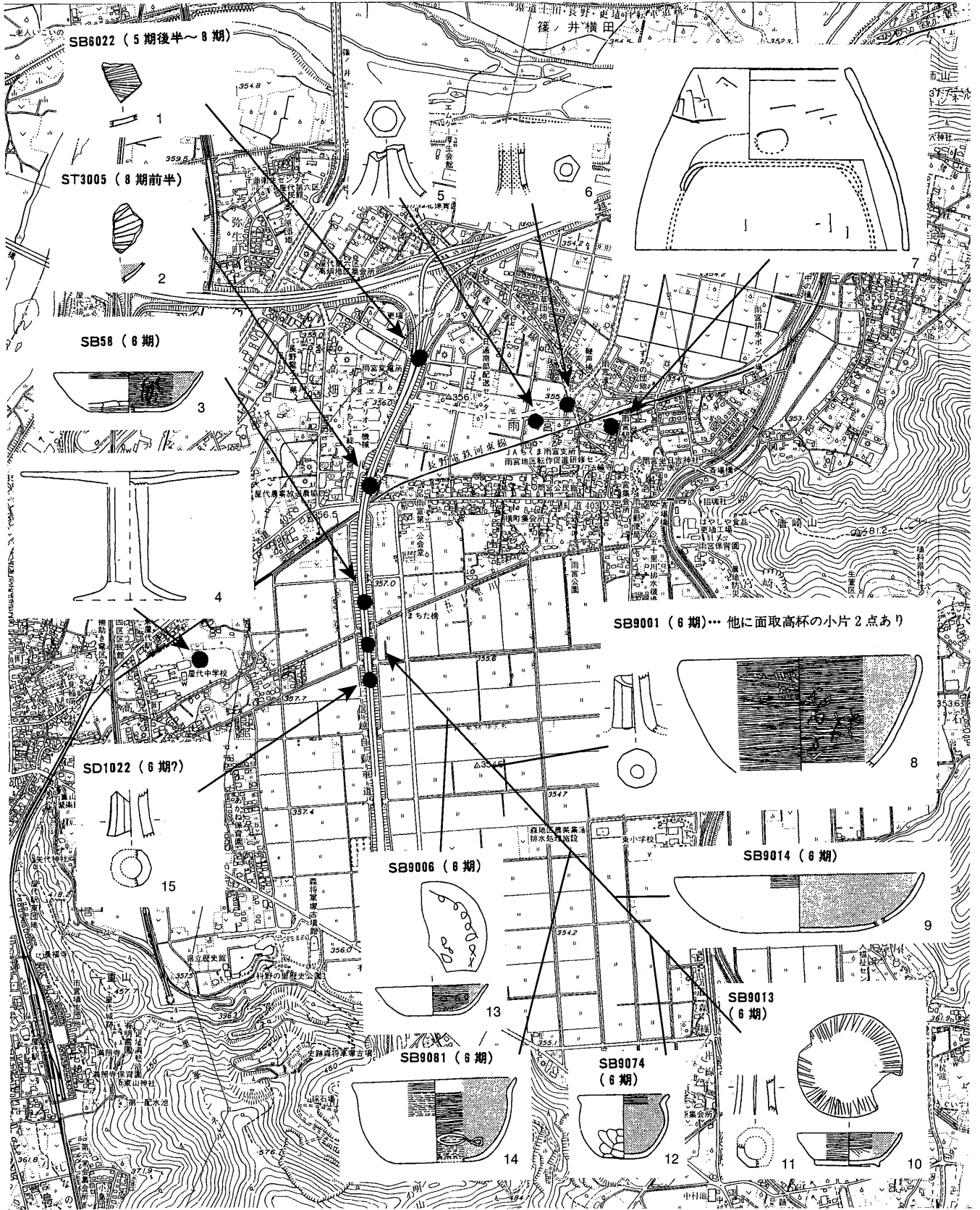
(2) 外来系土器という視点から

竈形土器が県内で非常に少数しか出土していないということは、外来系土器であるという視点からも重要である。今回の出土例は、庇の形態から東国には少ない曲げ庇系の竈形土器である。この曲げ庇系は、畿内とその縁辺部に分布しているとされる。上信越自動車道関連の屋代遺跡群では畿内系土器が多数出土して注目されたが(鳥羽1999)、本例の竈形土器の出土により、屋代遺跡群の古代における畿内とのかかわりの強さがより一層大きく推測されるようになったと言えよう。畿内とのかかわりが推測される土器は、直接畿内からもたらされたものと在地で畿内の土器を模倣して作られたものの両者が存在する。更埴市教育委員会による屋代遺跡群をとりまく周辺の遺跡の調査でも複数出土してお



1~4 屋代遺跡群高速道地点

第113図 屋代遺跡群出土の畿内系土器その1 (7世紀後半~8世紀前半)



1～3 屋代遺跡群高速道地点 4 大塚Ⅱ 5 灰塚 6 屋代遺跡群土ロバイパス地点 7 屋代遺跡群屋代寺地点 8～15 更埴条里遺跡高速道地点
7 屋代遺跡群屋代寺地点 8～15 更埴条里遺跡高速道地点

第114図 屋代遺跡群出土の畿内系土器その2 (9世紀)

り、畿内系土器は屋代遺跡群内の広範囲で出土していることがわかる。

第113・114図に屋代遺跡群近辺で出土した畿内系土器の分布図を提示した。畿内系土器は遺跡数の多い善光寺平南部でも、屋代遺跡群のみに典型的に出土例が見られる。時期によって出土例を分けて作成したが、7世紀後半～8世紀前半と9世紀前半を中心とした9世紀代の2時期に出土時期が集中する傾向が見られる。7世紀後半～8世紀前半は（第113図）、律令体制の整備とかかわって住居跡数が増加する時期であり、屋代遺跡群の北側の千曲川旧河道に新たに水田が造成される時期でもある。9世紀代は（第114図）、住居跡数の急増期であり、屋代遺跡群の南側の背後にひかえる更埴条里遺跡で条里区画をもつ水田の造成が始まり、完成を迎える時期でもある。共に屋代遺跡群で、新たな生産域が拡大・整備されるという大きな変化を迎える時期であり、住居跡数も増加する時期と重なる。そのような、集落展開上の画期をなす時期と畿内系土器の出土時期が重なることは、屋代遺跡群の性格を、開発とその推進者といった視点から考える上で重要な問題を投げかけていると言えよう。

(3) 出土した遺跡の性格から

今回の竈形土器の出土した屋代遺跡群の性格は、いろいろな方面から論じられてきた。屋代遺跡群は、善光寺平南縁に位置し、千曲川の自然堤防上を居住の中心として、背後には生産域として利用される広大な千曲川の後背湿地を持つ。居住域、生産域を取り囲む山麓部には、長野県最大の前方後円墳である森將軍塚古墳を初め多くの古墳群が存在し、広大な墓域を構成している。縄文時代以降多くの遺跡が存在し、奈良・平安時代には益々繁栄を極めた善光寺平の代表的な拠点集落である。屋代遺跡群から出土した木簡の分析では、奈良・平安時代には埴科郡衙の存在が明確になり、7世紀末～8世紀にかけては初期国府の存在さえも想定されている。また、遺跡近辺には、越後国へ抜ける東山道支道のルートも想定され、馬家の存在を推定させる馬口という地名も残り、屋代遺跡群新幹線地点からは、過所木簡と見られる木簡も出土している。

一方、竈形土器を出土した他の遺跡を見てみると、中南信に出土例が多い。飯田市の恒川遺跡は、伊那郡衙の想定地である。松本市三の宮遺跡は、7世紀後半から大規模に開発が開始された奈良井川西岸に位置する大きな集落遺跡である。諏訪市千鹿頭社遺跡は、有賀峠を流下する中沢川の形成した、扇状地上に位置し、近辺の十二ノ后遺跡等といった大きな遺跡へと続く諏訪湖盆地でも最大級の縄文・奈良・平安の重複遺跡である。塩尻市下境沢遺跡は、松本盆地南東部に位置する。この山麓地帯は有数の遺跡密集地帯である。吉田川西遺跡や和手遺跡なども付近に存在し、丘中学校遺跡は、中央自動車道を隔てて反対側にあたる。この遺跡は9世紀中頃から出現し、10世紀代には消滅してしまうが、9世紀から始まる新たな開発によって形成された新興集落として位置付く。

県内の竈形土器の出土遺跡を見る限り、東北信ではこの屋代遺跡群例のみで、中南信地方に多い点指摘できる。それらは、それぞれが遺跡の密集地帯に存在する遺跡から出土し、その時期の拠点集落を中心として新興集落をも加えた遺跡である点指摘できる。しかし、この竈形土器の出土をもって、出土した遺跡の性格を限定することは難しいのが現状と言えよう。

おわりに

屋代遺跡群から出土した竈形土器について検討してきたが、重要な点をまとめて結びとしたい。重要な点を箇条書きにすると以下の様である。

- ・県内5例目の出土例であり、東北信地域では初めての出土例であること。
- ・破片資料の多い中であって、本例は残存状況がよく、全体復元が可能な例であること。
- ・形態は、東国には少ない曲げ底系の竈形土器であり、県内では、松本市三の宮遺跡例に続いて2例目の曲げ底系となること。
- ・本例に基づく考察では、竈形土器が別火の信仰にもとづく造物であるということをふまえ、信濃においては、その出土量の少なさからは、複数の竈をもつ住居跡では、そのうちの一つが忌竈の性格を持つものも存在する可能性が指摘できること。
- ・外来系土器であるという視点からの考察では、曲げ底系の竈形土器は、畿内とその縁辺部とのかかわりが指摘されているが、屋代遺跡群からは、ほかにも畿内系土器の出土が多い。これらを総合して、屋代遺跡群が、特に集落展開の画期と言える時期に畿内と強くかかわりを持ちながら展開してきた遺跡である点を指摘する一つの材料となること。
- ・竈形土器を出土する遺跡の性格では、遺跡の密集地帯に存在する遺跡から出土し、その時期の拠点集落や新興集落として繁栄した遺跡である点は指摘できるが、それ以上の遺跡の性格の限定は難しいこと。

註

- 1 神谷1988では竈形土器と竈神信仰とのかかわりについて次のように述べている。「(竈形土器の)破片を使用して築竈の構築材と利用しているものや築竈内からの出土しているものは、町田 章氏が模造ミニチュア竈の意味について「中国における竈形信仰と結びつけ、祓柱の一種とされている。竈神は荒神とされているが、それは、年に一度、年末に昇天し、その家族の年間の功過を天帝に報告、天帝がそれに相応の罰を下すことに由るのではなかろうか。竈の構造は竈神を和めるためか、逆に破壊し、竈神の動きを封じる意味であろう。」と推定しているが、竈形土器片を築竈内に用いるのも竈形土器=竈神であることから竈神への崇拜の念から起きているのではないだろうか。ちなみに、屋代遺跡群からは、「竈神」と書かれた7世紀後半～末の木簡も出土している。また、竈神を祭れば、時には福祥を得るとも考えられていたようで、盛大に祀られた。
- 2 文献による調査は、2001年9月17日現在における長野県埋蔵文化財センター図書室所蔵の報告書による。
- 3 寺内1999に掲載されたP39の図15から数を数えた。
- 4 屋代遺跡群での竈の作られる方向は、北側が多く、続いて東側、次に西側である。本例のような南側に作られた例は、細かくは分析していないがほとんどないといえる。
- 5 長野県内で初めて竈形土器の報告がされる1年前(1989)に、桐原 健氏は、『伊那』誌上に「韓竈雑感」を発表している。その中で、「信濃では、奈良・平安時代1300軒の竈穴住居が発見されており、その殆どの住居には造り付け竈がある。それに対して、韓竈は零である。古代、家において、村において、国において、非日常的な行為の占める部分は結構大きかった筈であるから、非日常的な竈とされる韓竈が零というのは納得できない。」とし、「日常性をもつ造り付け竈に、釜清め・釜祓いの儀式を施せば、特定の日に於ける忌竈に転換できる。」と民俗例もあげながら指摘している。筆者の考察も同様の視点からのものである。また、桐原氏は、住居跡の床面上に残されている火熱痕をイロリの痕跡と考え、この上に竈形土器を置くことも想定している。

参考・引用文献

稲田孝司：1978「忌の竈と王権」考古学研究25-1 考古学研究会

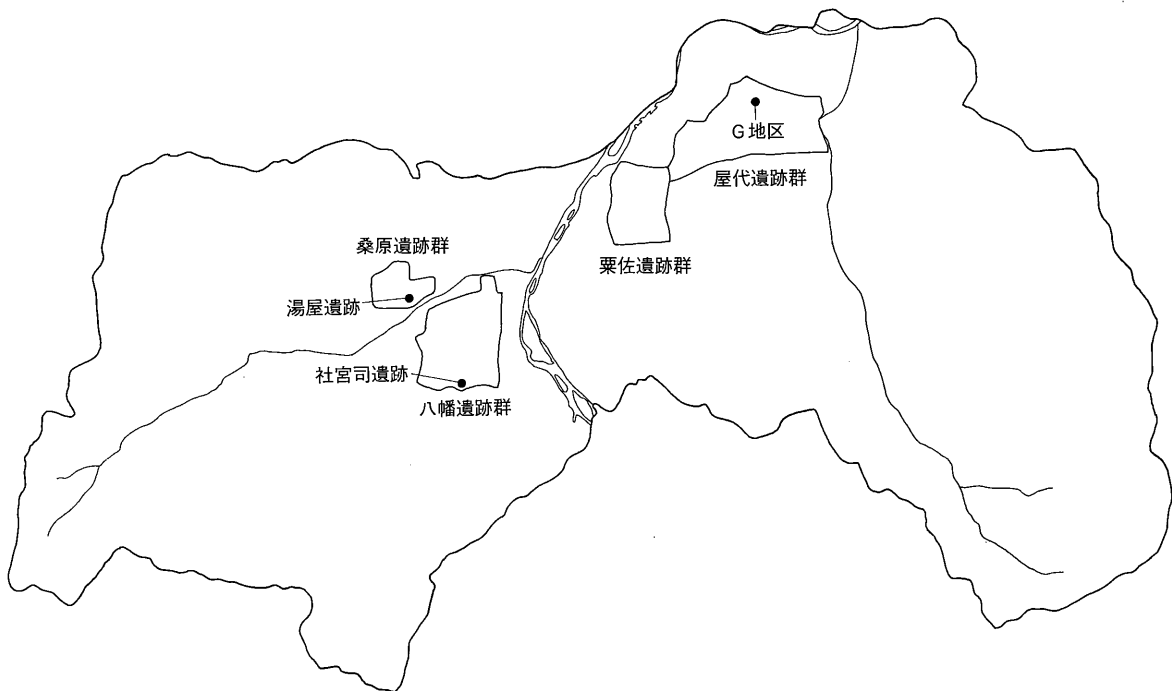
- 岡野秀典：1994「甲斐国の竈形土器」山梨考古学論集Ⅲ 山梨県考古学協会
- 神谷佳明：1988「東国出土の竈形土器についての検討」群馬の考古学
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 桐原 健：1989「韓竈雑感」伊那 1989、5月号 伊那史学会
- 小林行雄：1949「黄泉戸喫」考古学集刊 第二冊No.2
- (財)長野県埋蔵文化財センター：1990「三の宮遺跡」中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書9
- (財)長野県埋蔵文化財センター：1990「更埴条里遺跡・屋代遺跡群」上信越自動車道発掘調査報告書26
- 塩尻市教育委員会：1998「下境沢遺跡」
- 諏訪市教育委員会：1991「千鹿頭社Ⅳ」
- 近澤豊明：1992「竈形土製品について」長岡京古文化論叢Ⅱ 中山修一先生喜寿記念会
- 近野正幸：1990「古墳出土の炊飯具形土器について」神奈川考古第26号 神奈川考古同人会
- 塩尻市教育委員会：1998「下境沢遺跡」
- 杉井 健：1993「竈の地域性とその背景」考古学研究第40巻第1号
- 寺内隆夫：1999「更埴条里遺跡・屋代遺跡群 第2章第4節2(2)B 竪穴住居・建物の付属施設」
上信越自動車道発掘調査報告書26 (財)長野県埋蔵文化財センター
- 鳥羽英継：1999「更埴条里遺跡・屋代遺跡群 第8章第1節2(6)搬入系土器」
上信越自動車道発掘調査報告書26 (財)長野県埋蔵文化財センター
- 鳥羽英継：2000「更埴条里遺跡・屋代遺跡群 総論編 第4章第1節3 善光寺平南縁の古墳時代前期～古代の土器編
年(3世紀後半～11世紀後半)」上信越自動車道発掘調査報告書28 長野県埋蔵文化財センター
- 水口由紀子：1990「南関東における竈形土器を持つ集落遺跡の性格」物質文化54 物質文化研究会
- 宮坂光昭：1995「第3章第2節 カマド形土器の発見」諏訪市史 上巻 原始・古代・中世

第9章 まとめ

更埴市域における官衙的配置を持つ遺構について

更埴市域には、律令期における郡衙比定地が2ヶ所存在する。埴科郡衙比定地となる屋代・粟佐遺跡群と、更級郡衙比定地となる八幡・桑原遺跡群である。本項では、両遺跡群から検出された官衙の様相を持つ可能性のある掘立柱建物群について若干の検討を行い、まとめとしたい。

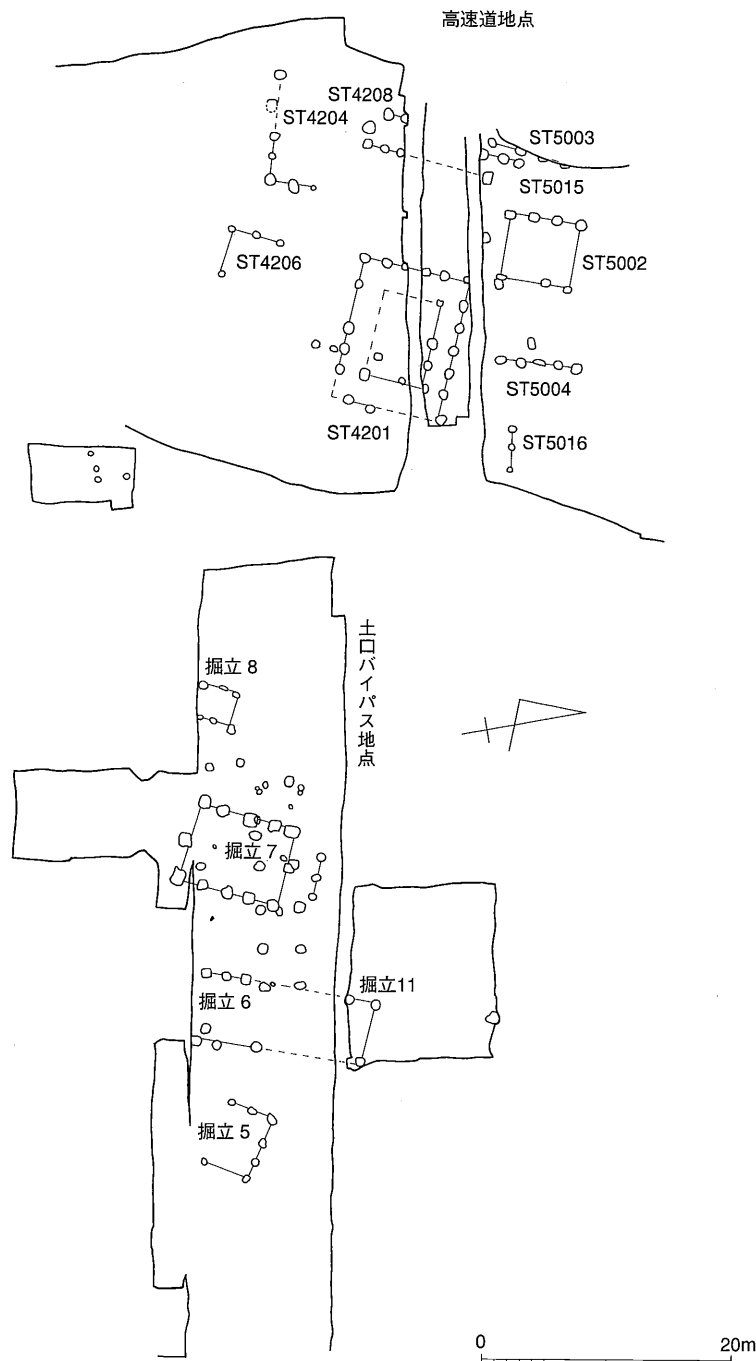
屋代遺跡群G地区周辺では多くの掘立柱建物跡及び、柱痕を持ったピット群が検出されている。特に高速道地点では四面庇を持つ可能性が指摘されている（註1）、大形の掘立柱建物跡（ST4201）が検出されており、郡家とそれに関連する建物群とする考えがある。また、ST4201の西側にはほぼ一直線に並ぶ掘立柱建物跡（ST4208及びST5015）が検出されており、これを同一の建物跡とした場合、ST4201と同規模の建物が2棟並立していた可能性も考えられる。これらの掘立柱建物群はいずれも主軸方向に規則性が認められるため、強い関わりがあることは確実であろう。ST4201の周辺では手工業生産に関わる遺物も出土しており、製品の生産を掌握していた有力者の居宅であるとされている。また、北側に隣接する水辺の祭祀にも大きな役割を果たし、更に旧河道内から出土した木簡の存在からこの居宅内において公務も行われていた可能性が指摘されている。一方、土口バイパス地点から検出された7号掘立柱建物跡は東柱と思われる柱穴が認められることから、総柱の建物とする見方もある。また、掘方の底部に礎板を据えることなどST4201との共通性が指摘できる。7号掘立柱建物跡が総柱建物であると仮定した場合、掘立柱建物群の中で「倉」的な機能を有していた可能性が窺える。



第115図 遺跡群位置図（1：100,000）

ST4201が「政庁」的な機能を有していたとすると、7号掘立柱建物跡を「正倉」と見ることも不可能ではないと思われる。ただし、官衙遺跡に一般的に見られる方形の区画を持つ囲溝や柵列等はこれまでのところ確認されていないため、これらの掘立柱建物群を官衙と断言することは難しい。

掘立柱建物群から東方に約150m離れた土口バイパスC地点からは、1棟のみではあるが掘立柱建物群と主軸の一致した掘立柱建物跡が検出されている（10号掘立柱建物跡）。C地点からは唐三彩が出土しており、また84号土坑は9世紀半ば以降に構築された井戸跡と考えられているが、その井戸枠には大形の建築部材が転用されており、周辺にかなりの規模の建物跡が存在していたものと思われる。10



第116図 屋代遺跡群G地区周辺掘立柱建物跡検出状況

号掘立柱建物跡の周辺からは基壇状遺構が検出されている。報告では出土遺物から9世紀中頃のものとしてされているが、主軸方向が掘立柱建物群と一致しているため遡る可能性もある。これを基壇と仮定した場合、礎石建の建物を想定することが可能になる。

屋代遺跡群周辺では古代前期における、畿内系土器の出土に2つの画期が認められるとされる(鳥羽1999)。掘立柱建物群が存続していたと考えられる7世紀後半～8世紀前半と、条里形地割が施工されていたと考えられる9世紀前半の2時期である。後者は条里形地割施工に伴う中央からの技術者の派遣あるいは、技術の移転に伴ってこの地にもたらされたものであると見ることも可能であろう。前者はST4201を中心とする地点のみから出土しているとされていることから、ST4201に居住していた人物と密接な関連があることが窺える。また、G地区瓦集中区より出土した布目瓦は、胎土分析により屋代寺推定地周辺で出土する瓦とは組成の異なるものであるとの結果が得られている。屋代寺推定地で出土する軒丸瓦は単弁六葉蓮華文であるが、屋代遺跡群からは複弁六葉蓮華文の軒丸瓦も採集されている。この軒丸瓦は胎土分析の結果、G地区瓦集中区から出土した瓦と同一のグループに属するとされる結果が得られているため、付近に屋代寺とは異なる瓦葺の建物が存在していた可能性が指摘できる。ただし、屋代寺瓦とは組成の異なる瓦はこれまでのところG地区瓦集中区から出土した個体のみが知られているだけであり、また製作技法にも屋代寺瓦との共通性が認められることから、同一工人のグループによって生産されたものである可能性も否定できず、この場合、屋代寺の補修瓦として生産された可能性も出て来よう。

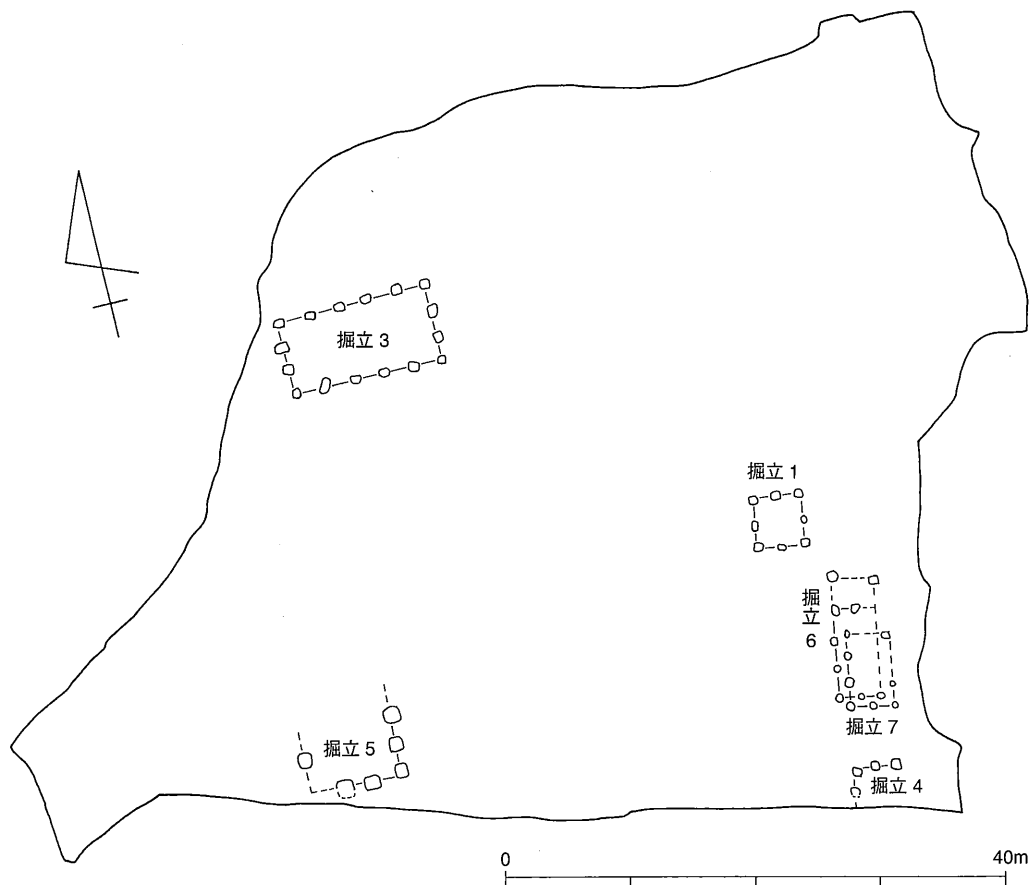
掘立柱建物群の主軸方向はN-25°-E前後であり、これは後に施工される更埴条里水田址の畦畔走向とは明らかに異なっている。屋代遺跡群周辺で条里形地割が施工されたのは9世紀前半と考えられているため、それ以前の基本的な地割線とも考えられるが、周辺で検出される同時期の竪穴住居跡の主軸方向にはバラツキが認められる。

これまでの調査では、官衙遺構そのものの検出は未だできていないものの、国府・郡府木簡や唐三彩など特殊な遺物が出土していることから、屋代遺跡群内に官衙が存在していたことは間違いないものと思われる。また、高速道地点から出土した国府木簡の存在から、付近に初期国府が存在していた可能性も指摘されている。更に、屋代寺跡は貞観8年(866)に定額寺に列せられた屋代寺と考えられており、雨宮坐日吉神社を延喜式神名帳に記載のみえる祝神社に当てる向きもある。いずれにしても、屋代遺跡群周辺が古代埴科郡の中心的な地域であったことは確実であろう。

一方、千曲川を挟んだ対岸の八幡・桑原遺跡群においても規格性を持った掘立柱建物群が検出されている。桑原遺跡群湯屋遺跡からは、6棟以上の掘立柱建物跡が検出されている。このうち、5号掘立柱建物跡はその全容は掴めていないものの、柱掘方は一辺1mを測る大形のものであり、柱間寸法も約2.4mと一定している。また、3号掘立柱建物跡は3間×5間の規模を持つものである。これらの掘立柱建物跡群はいずれも主軸をほぼ正方位に持ち、遺構の重複関係から8世紀代のものと考えられる。また、調査区内からは弥生時代後期から平安時代前期の住居跡が多数検出されているが、8世紀代の住居跡は検出されていない。このことから、調査地周辺では8世紀代のある一時期、掘立柱建物のみで遺構が構成されていた可能性が想定され、また数は少ないものの墨書・刻書土器も出土していることから官衙に関連する施設であった可能性が指摘できるだろう。しかしながら、検出された掘立柱建物跡は全て側柱式のものであり、また周囲を区画する囲溝や柵列なども検出されていないため、この掘立柱建物群を官衙遺構と断定することは難しい。

八幡遺跡群からも官衙的な要素を持った遺構群が検出されている。八幡地区はその名が示す通り石清水八幡宮の荘園となっていた地域であり、現在の武水別神社はその別宮として勧請されたものと考えられている。古代更級郡は式内社が多く記録されている地域であり、更級郡9郷に対し、式内社は11社となっている。武水別神社は延喜式神名帳では明神大社の社格を与えられていたものであり、その比定地は八幡地区に当てられている。式内大社は信濃国全体でも7社しかないため、この地域が信濃国内で重要な位置を占めていたことが推定される。また、地区内には「郡」(コオリ)という集落が存在しており、更級郡衙の比定地のひとつとなっている。

八幡遺跡群青木遺跡からは布目瓦が出土しており、また瓦塔も採集されていることから寺院跡が存在していたものと推定されている。更級郡内に所在していたとされる定額寺である安養寺に当てる向きもあるが、寺院の規模が現段階では不明であるため、否定的な考えが大勢を占めている。また、社官司遺跡からは方形の区画溝に囲まれた掘立柱建物群が検出されている。特に、平成13年度から始まった国道18号坂城更埴バイパス建設に伴う調査では、一辺約40mの方形の区画溝に囲まれた掘立柱建物群が検出されており(註2)、この区画溝の内部は基本的に掘立柱建物のみで構成されていたものとされている。この区画溝の西側においても一辺30mほどの方形区画を持つ溝と掘立柱建物群が更埴市の調査により検出されている。区画溝及び掘立柱建物群の主軸方向は正方位にはほぼ一致していることも特長のひとつである。出土遺物には奈良三彩や緑釉陶器などがあり、墨書土器もかなりの数が出土している。ただし、これらの掘立柱建物の規模は、屋代遺跡群で検出されたものに比べて貧弱な観が否



第117図 湯屋遺跡掘立柱建物跡検出状況

めないものであり、また柱掘方内には礎板が敷かれ柱根がそのまま残っていることや、溝内から多くの木製品が出土していることなどから、かなりの湿地帯であったことが予想される。

これらの掘立柱建物群は、8世紀後半から9世紀代を通して営まれていたものと考えられており、屋代遺跡群の掘立柱建物群よりも後出するものである。主軸方向が正方位に一致してくるのはこの時期差から来るものかも知れない。

以上、更埴市域における官衙の様相を持つと考えられる遺跡群について簡単に述べてきたが、遺構や出土遺物個々については官衙に特徴的なものが認められるが、全体を見た場合、明らかに官衙遺構と呼べるものはこれまでのところ見つかっていないのが現状である。ただ、屋代遺跡群高速道地点や社宮司遺跡で検出された掘立柱建物群は官衙的色彩の強いものであるとすることができるだろう。

最後に今回の調査にあたり、関係の皆さんの御協力に対し深く感謝申し上げ、まとめとします。

註

- 1 報告では5間×5間で南北に庇が付く建物と想定されているが、木下正史氏の復原案では5間×6間で四面庇の付く建物と想定されている。
- 2 長野県埋蔵文化財センター 町田勝則氏のご教示による。なお、国道18号坂城更埴バイパス建設に伴う発掘調査は平成14年度以降も継続して行われる予定であるため、詳細については報告を待ちたい。

参考文献

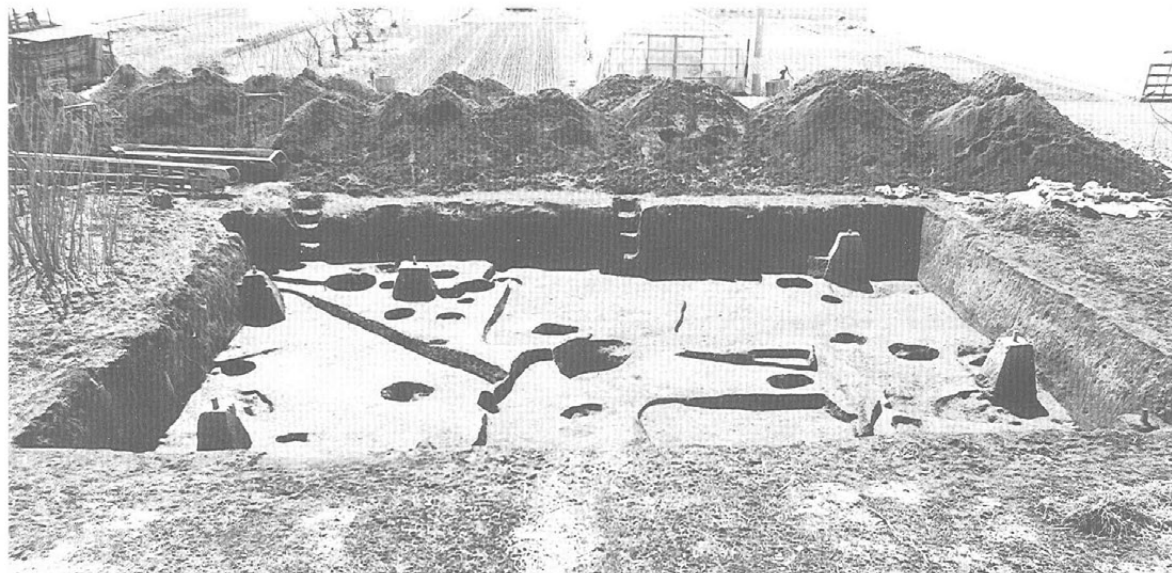
- 長野県教育委員会：1968「地下に発見された更埴市条里遺構の研究」
- 岡田正彦・竹内三千夫：1972「長野県更埴市大字八幡青木遺跡発掘調査報告」更埴市教育委員会
- 更級埴科地方誌刊行会：1978「更級埴科地方誌第2巻」原始・古代・中世編
- 更埴市教育委員会：1985「社宮司遺跡」西部沖県営ほ場整備に伴う発掘調査報告書
- 長野県埋蔵文化財センター：1996「長野県屋代遺跡群出土木簡」
上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書23
- 長野県埋蔵文化財センター：1998「更埴条里遺跡・屋代遺跡群 弥生・古墳時代編」
上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書25
- 更埴市教育委員会：1998「桑原遺跡群 湯屋遺跡」老人保健施設建設に伴う発掘調査報告書
- 長野県埋蔵文化財センター：1999「更埴条里遺跡・屋代遺跡群 古代1編」
上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26
- 長野県埋蔵文化財センター：2000「屋代遺跡群」国道403号土口バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書
- 長野県埋蔵文化財センター：2000「更埴条里遺跡・屋代遺跡群 総論編」
上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書28
- 木下正史・佐藤信之：2000「屋代遺跡群 本文編」
国道403号（土口バイパス）道路改良に伴う発掘調査報告書 更埴市教育委員会

写 真 图 版

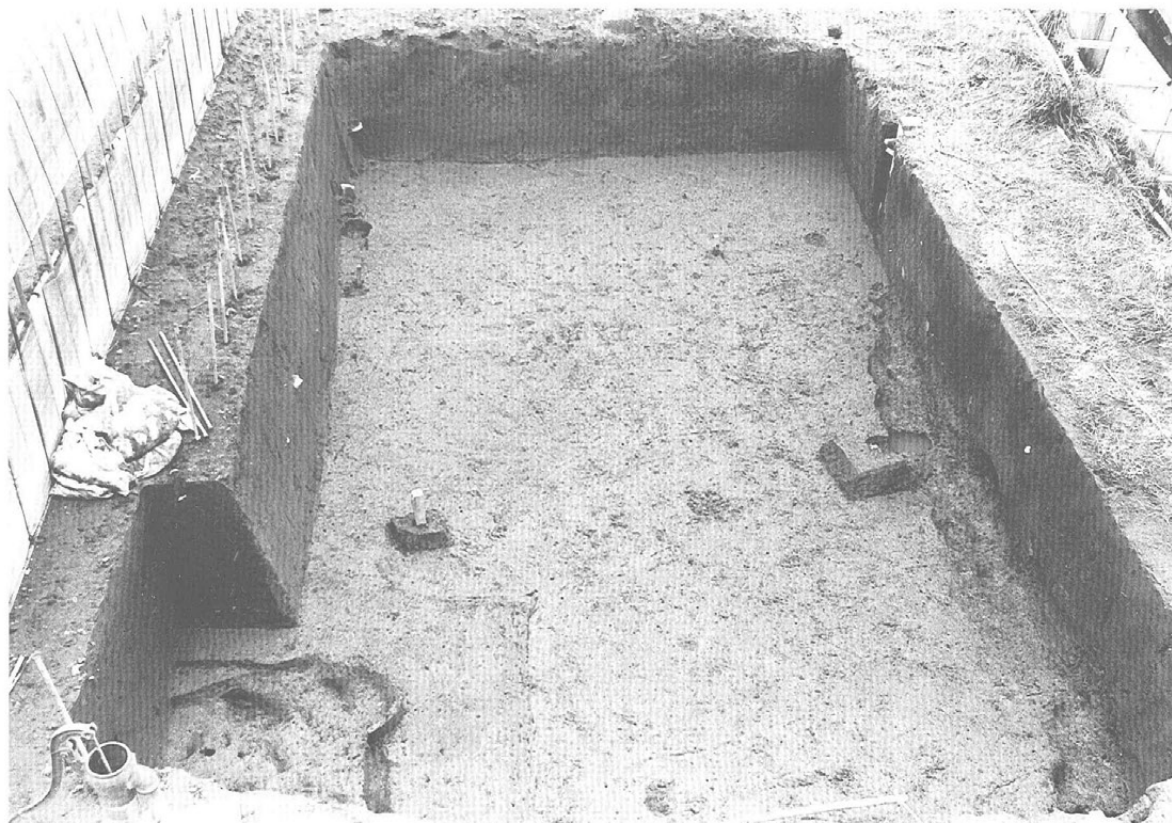
屋代遺跡群G地区



平成8年度調査区全景
(南側より)



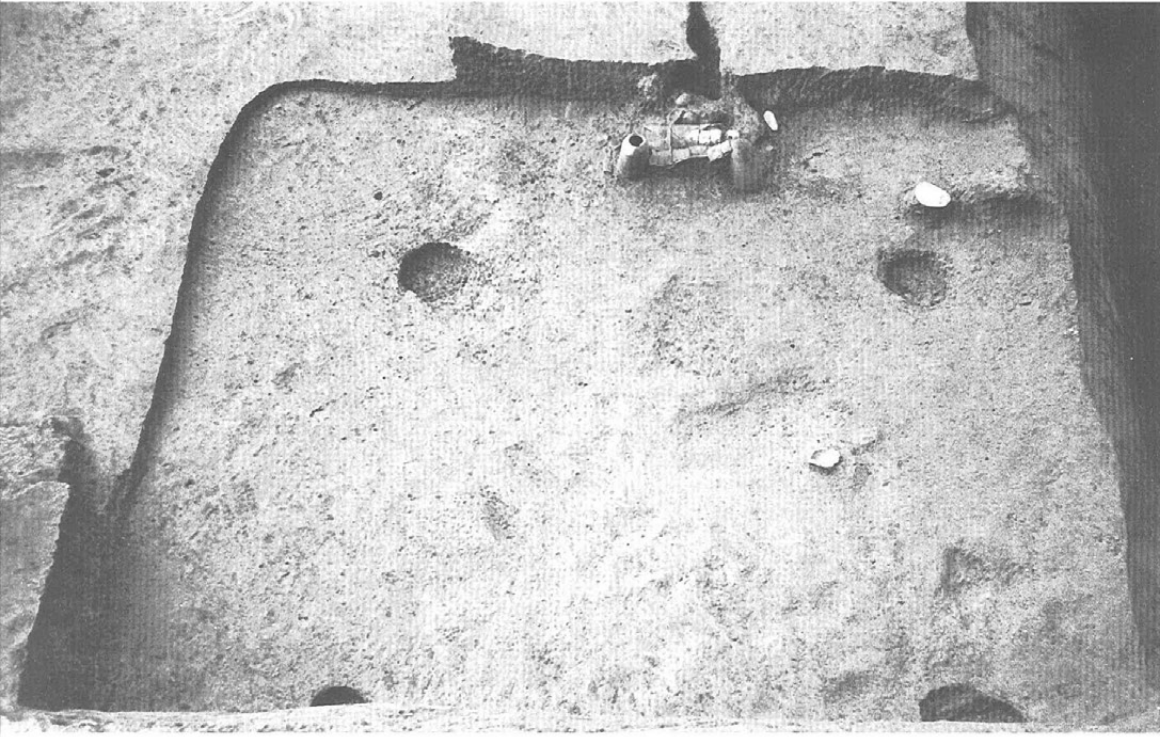
平成9年度調査区全景
(北側より)



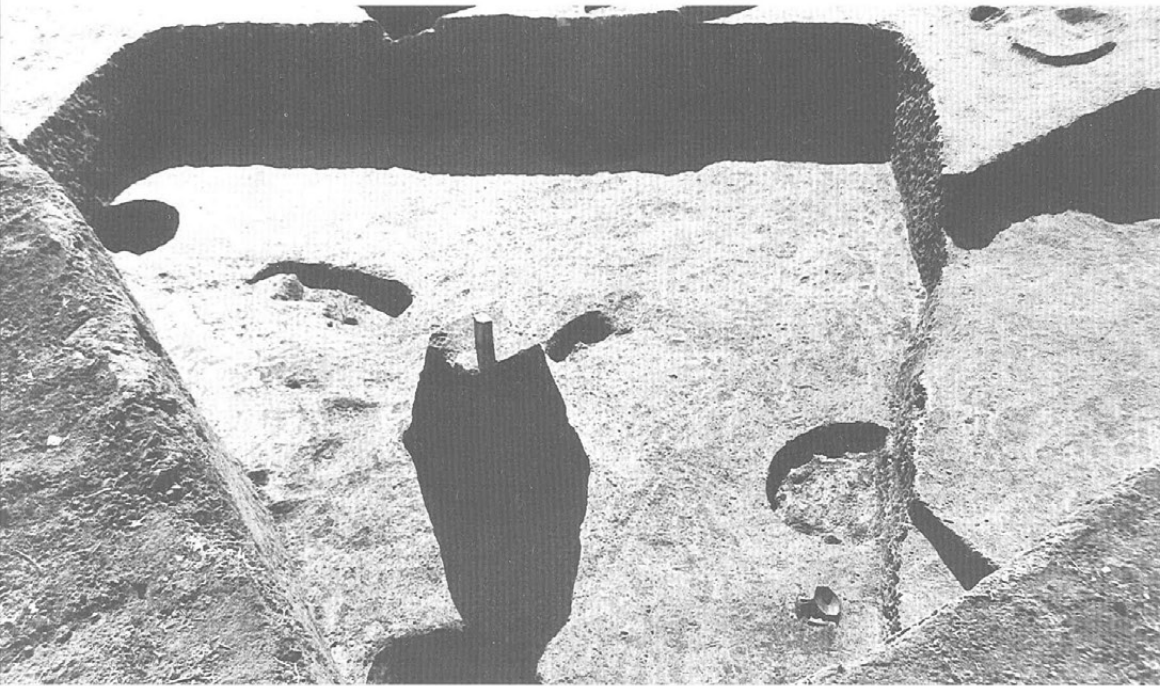
平成10年度調査区全景
(北側より)

図版 2

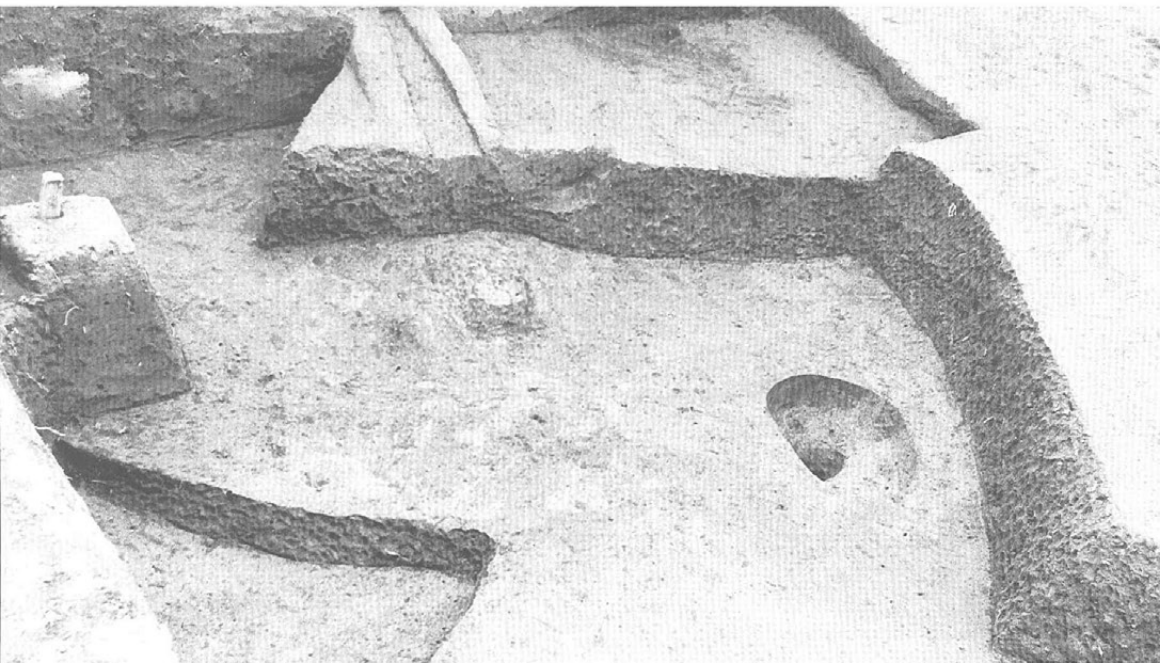
屋代遺跡群G地区



359号住居跡
(東側より)

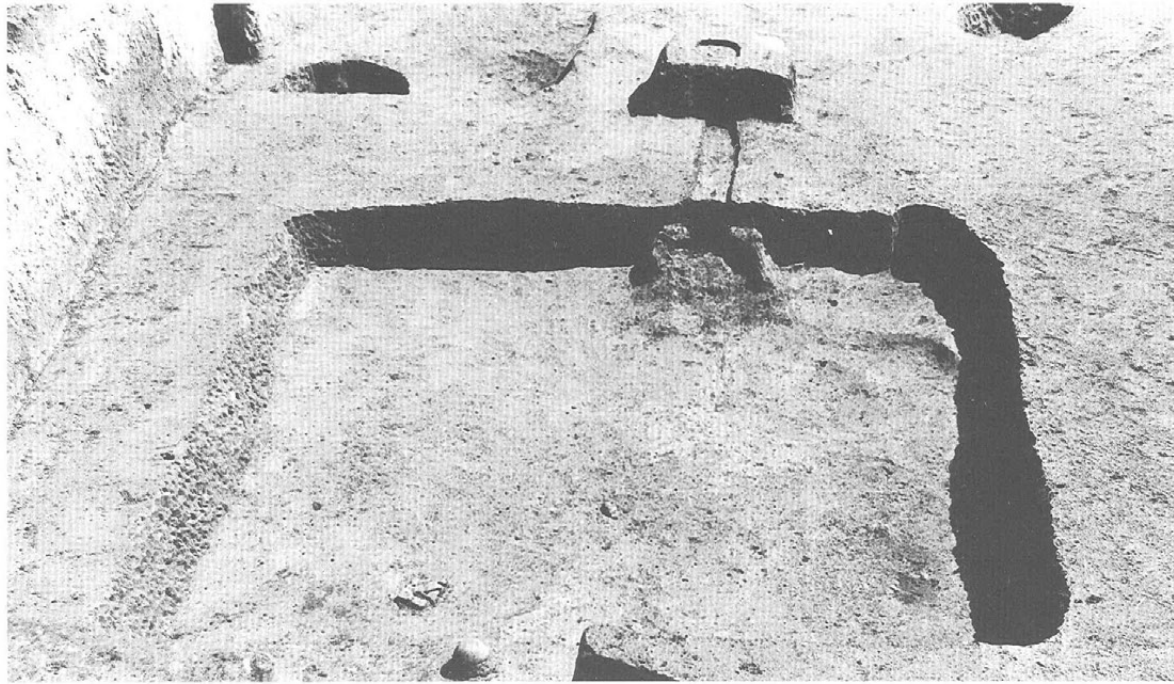


368号住居跡
(北側より)

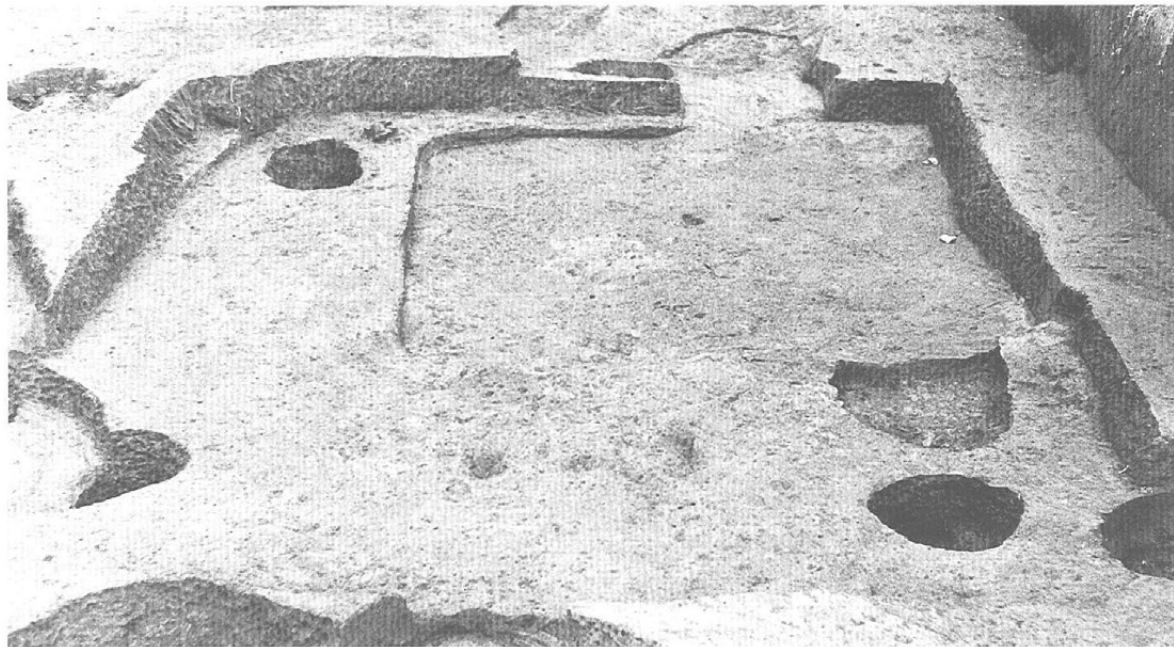


370号住居跡
(南側より)

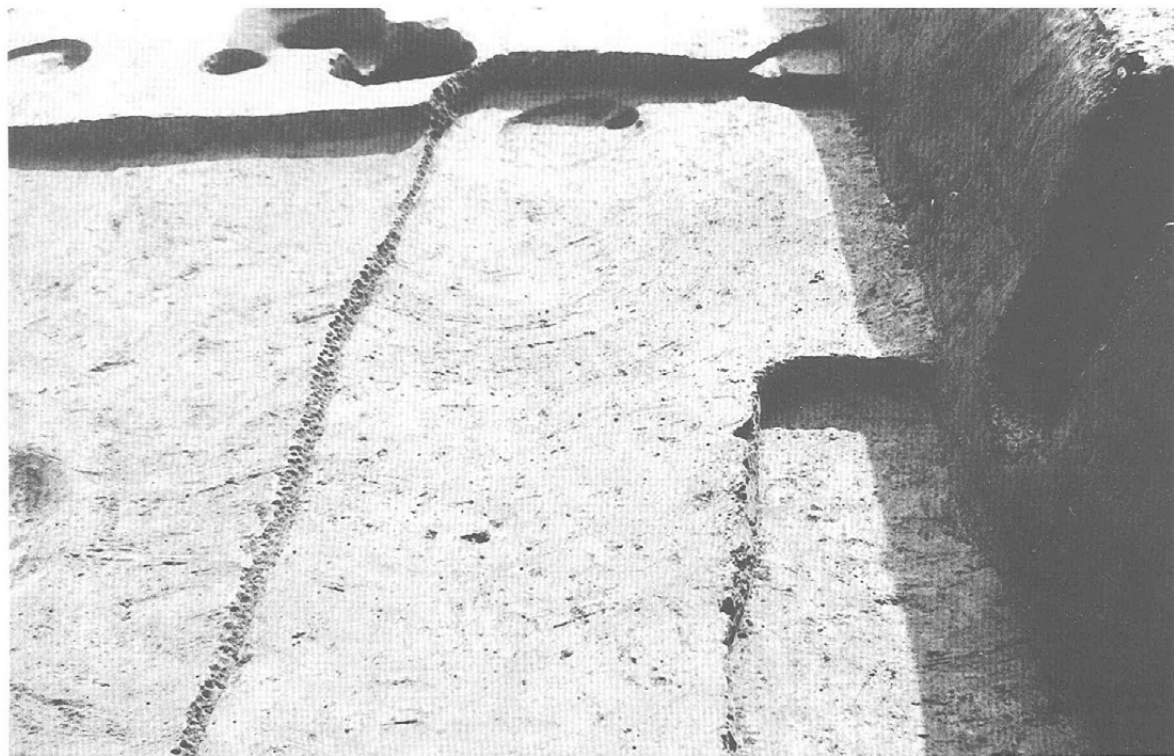
屋代遺跡群 G 地区



377号住居跡
(西側より)



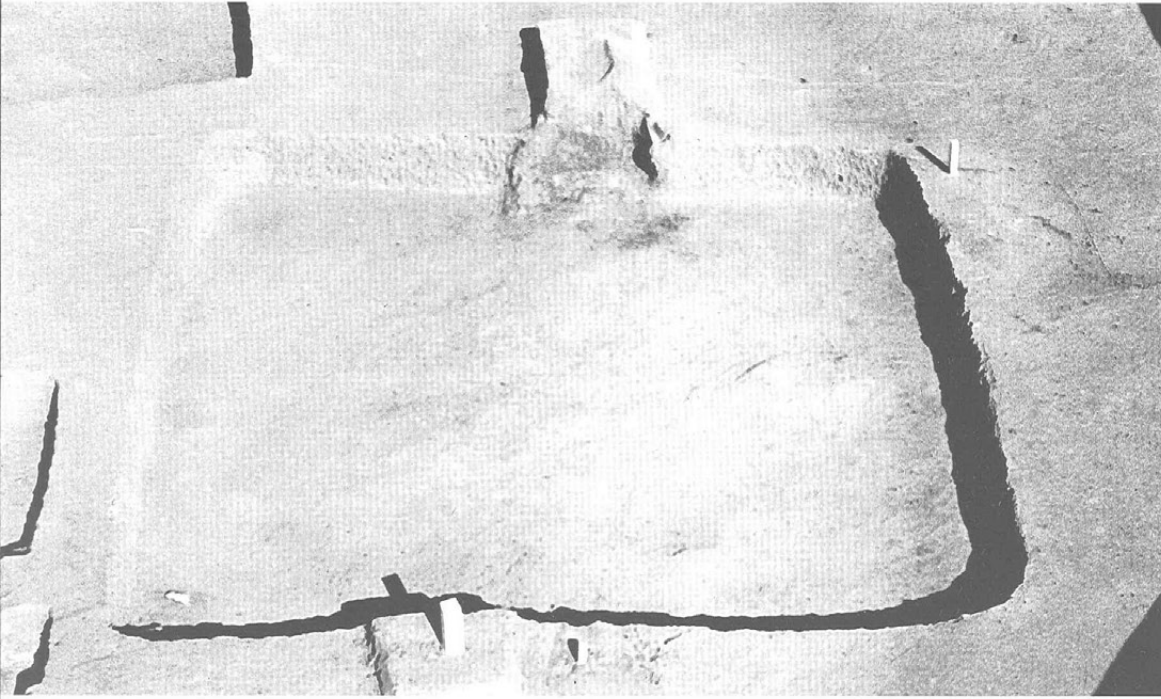
379号住居跡
(東側より)



382号住居跡
(西側より)

図版 4

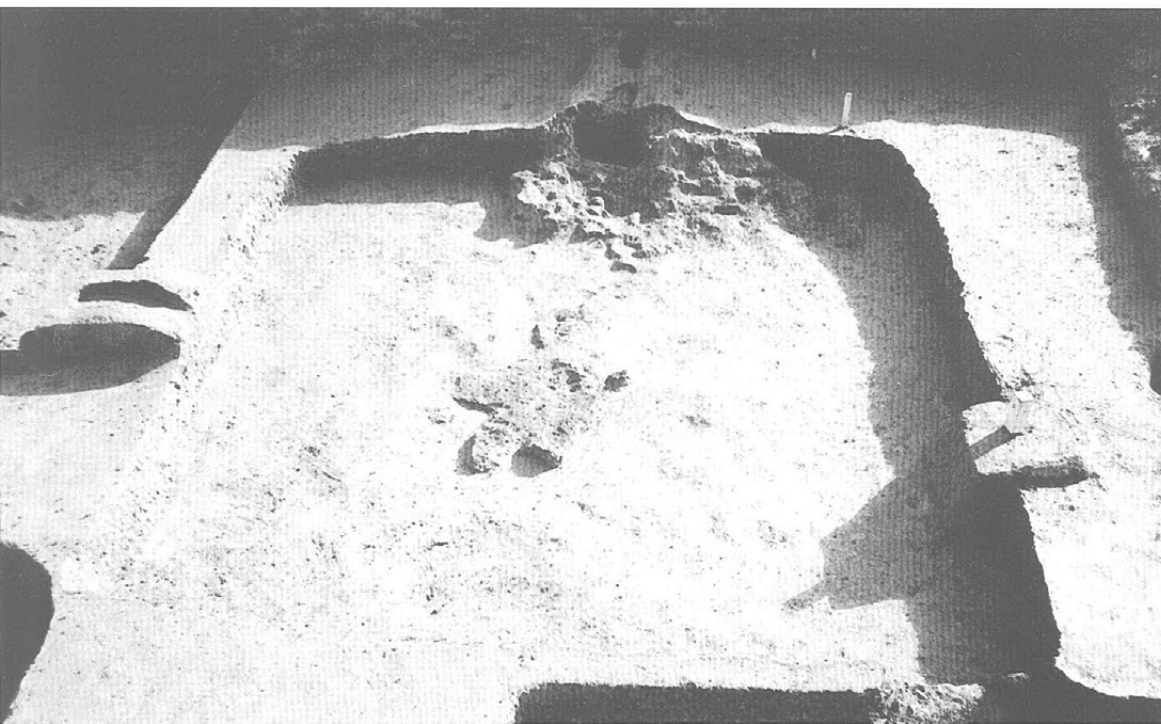
屋代遺跡群 G 地区



352号住居跡
(南側より)

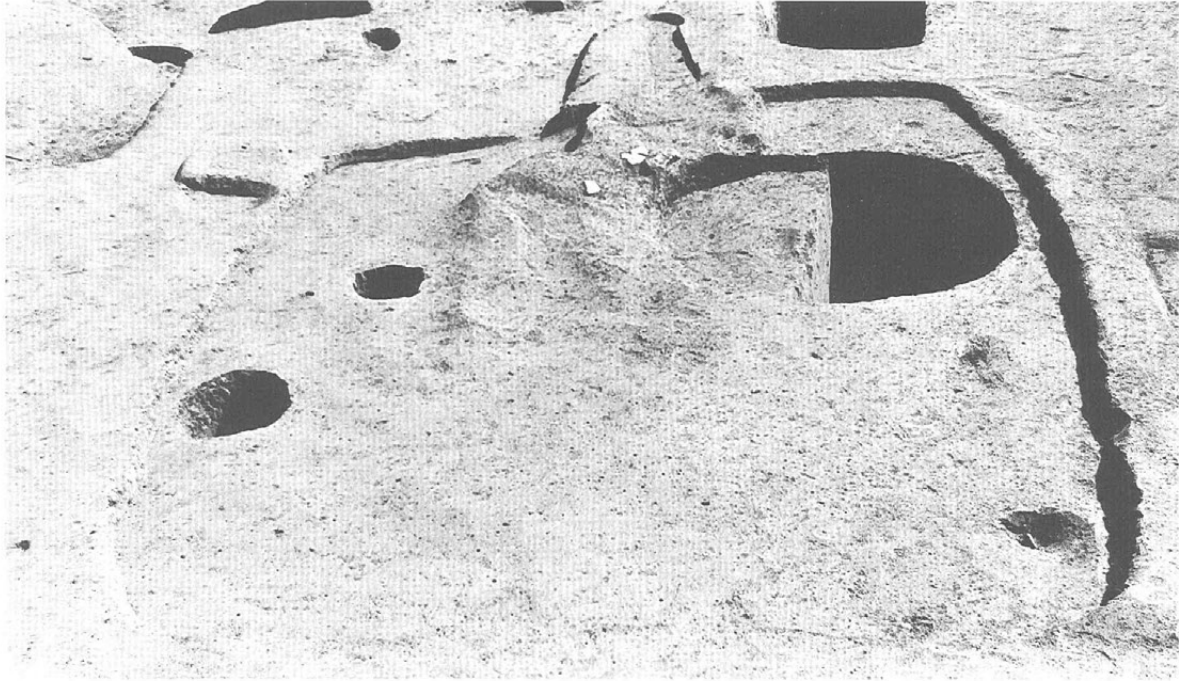


353号住居跡
(東側より)



358号住居跡
(西側より)

屋代遺跡群G地区



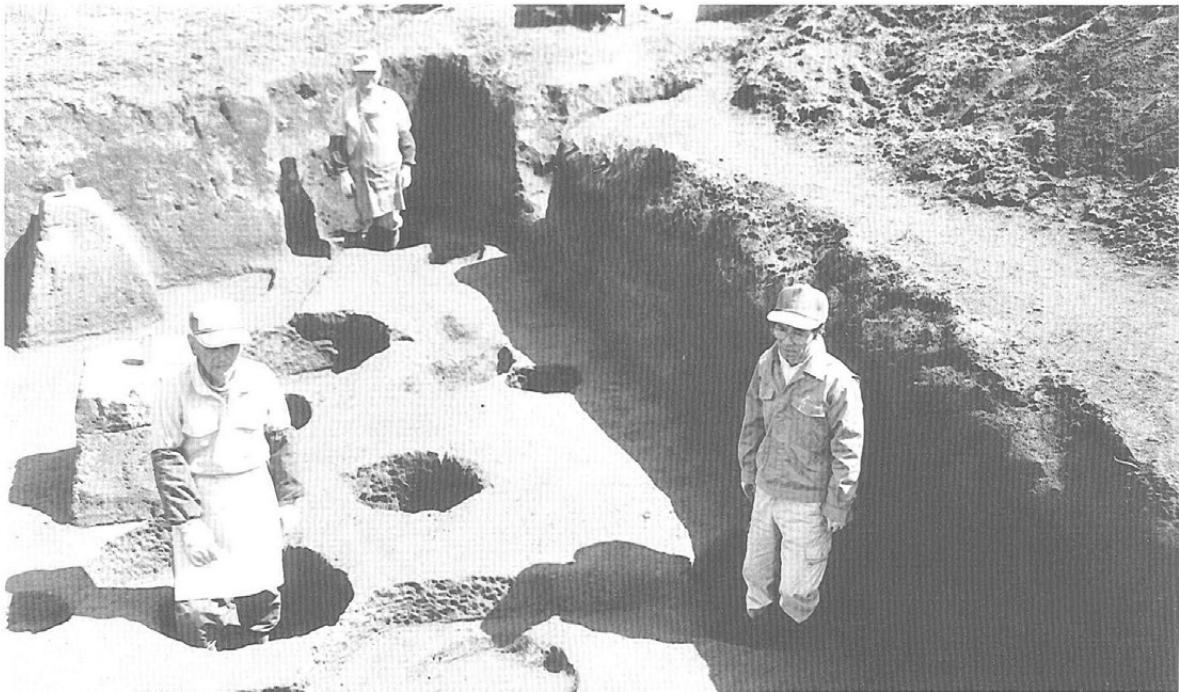
366号住居跡
(西側より)



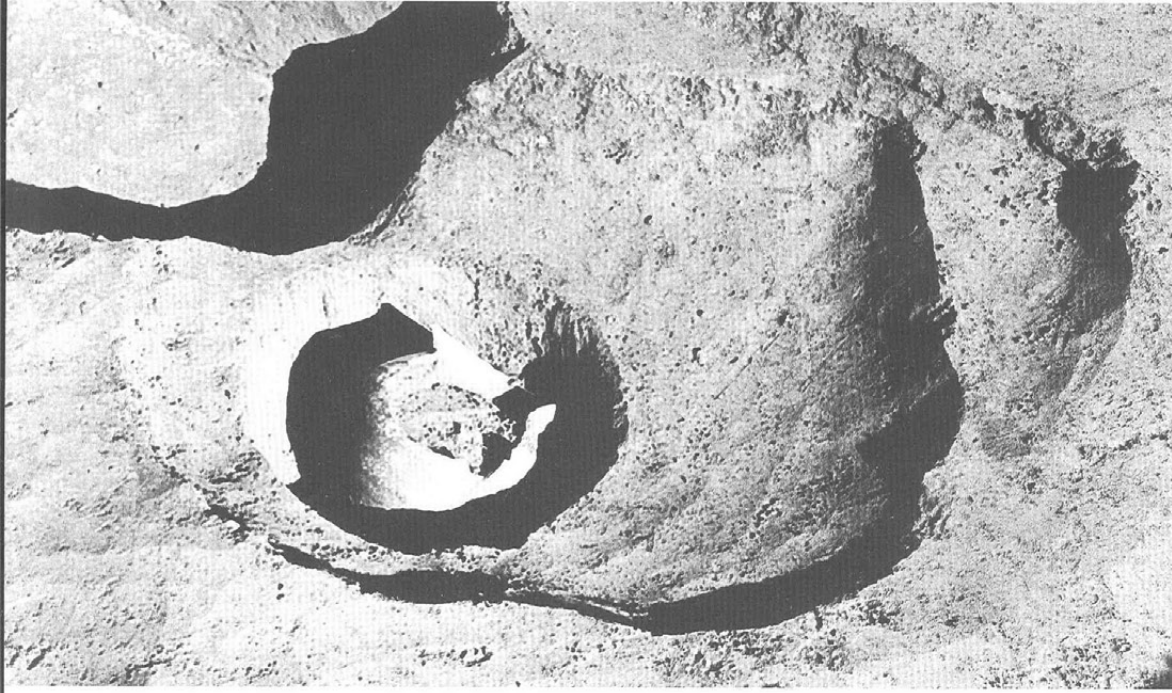
左 373号住居跡
(西側より)



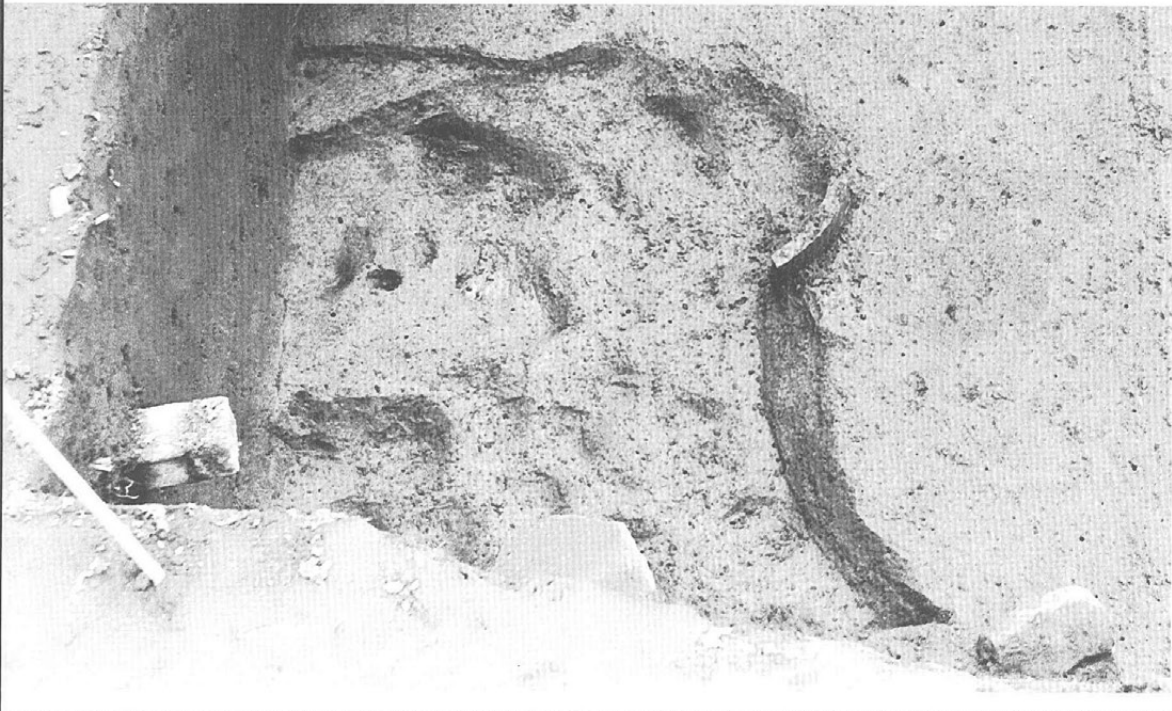
右 373号住居跡カマド
(西側より)



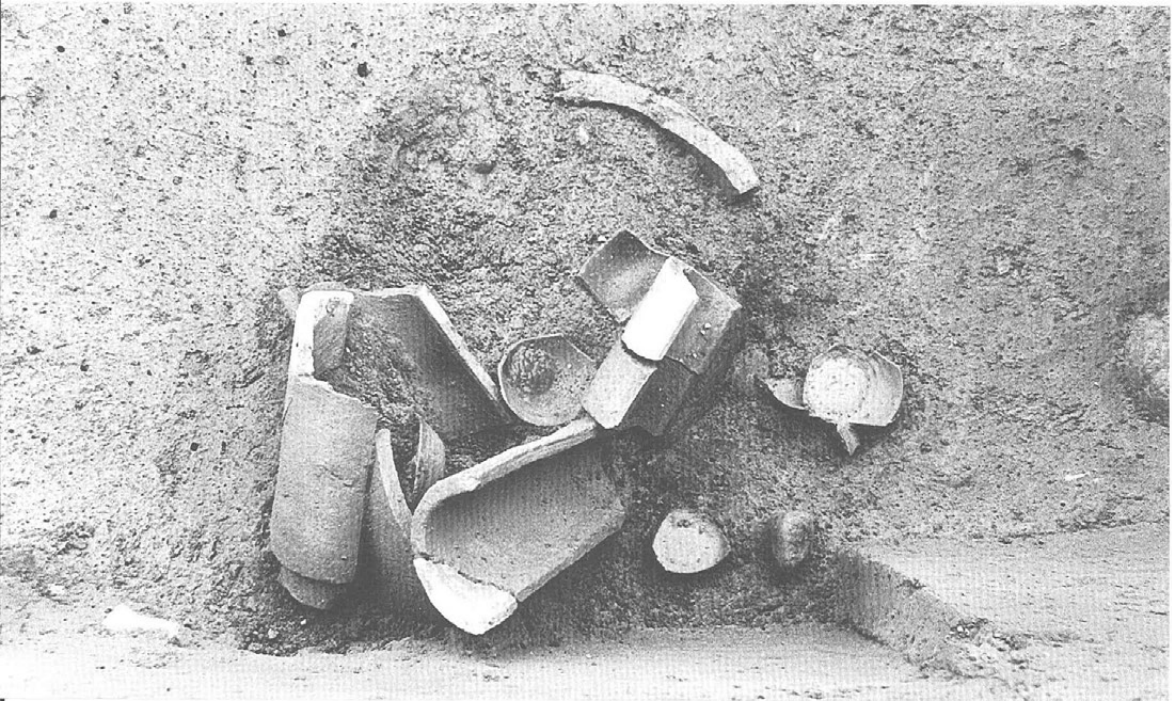
11号掘立柱建物跡
(西側より)



194号土坑
(南侧より)

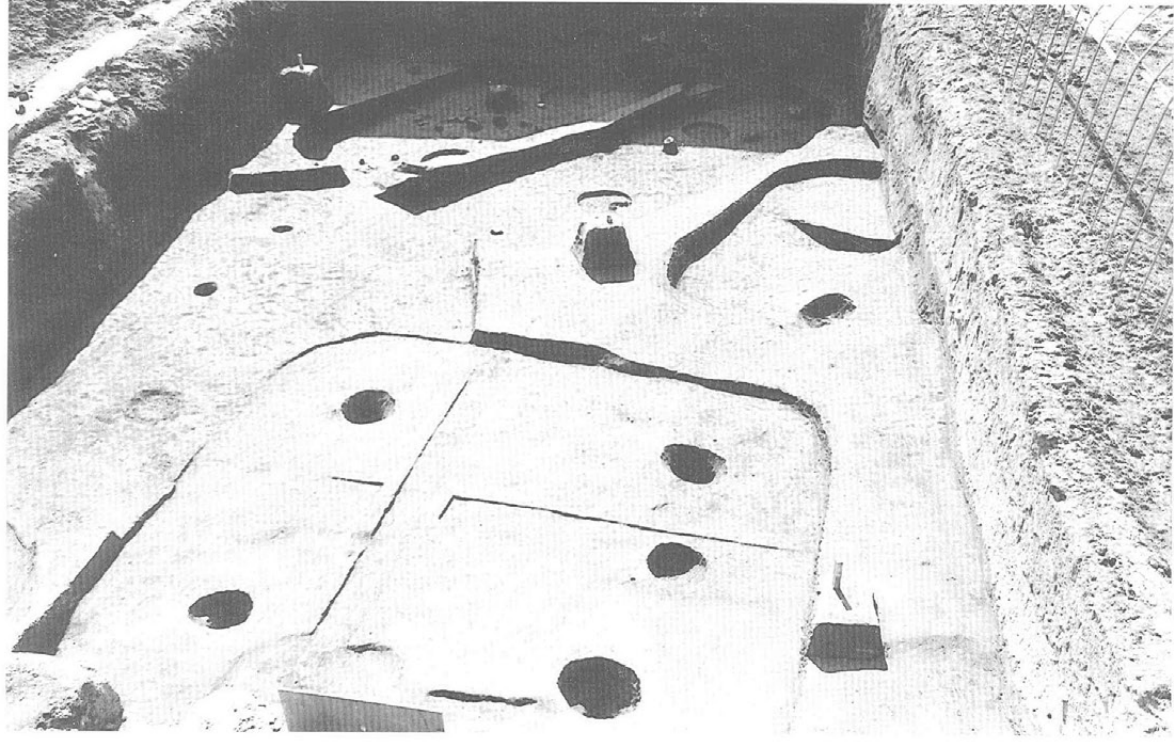


瓦集中区
(北侧より)

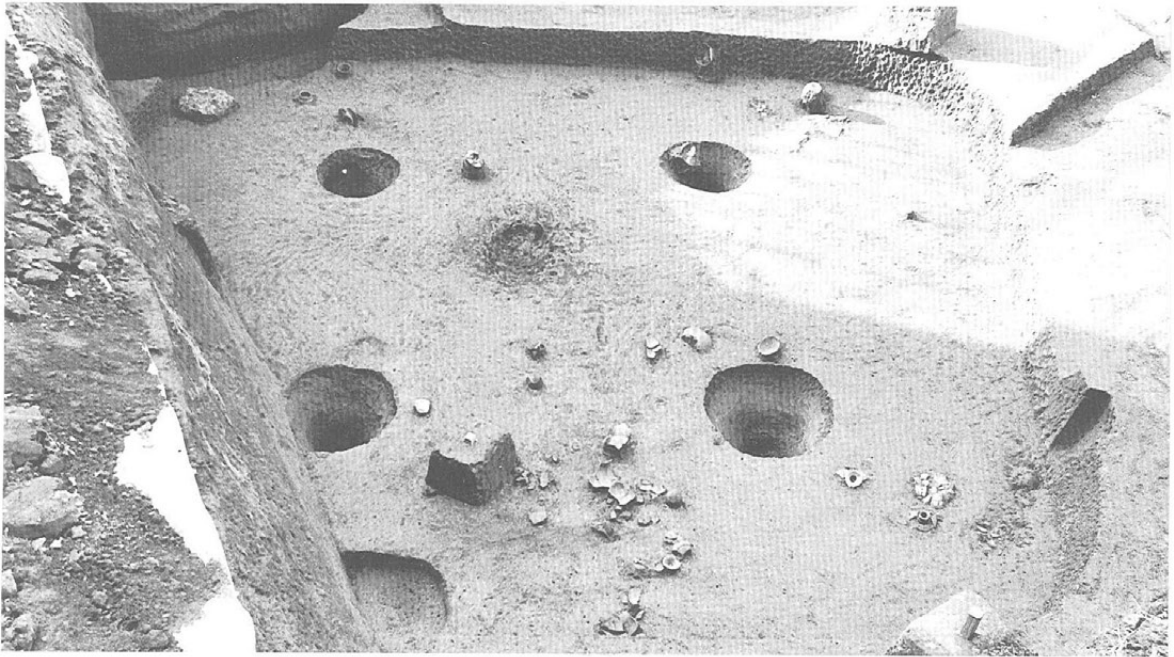


瓦集中区遺物出土状況

屋代寺地区



屋代寺地区全景
(南側より)

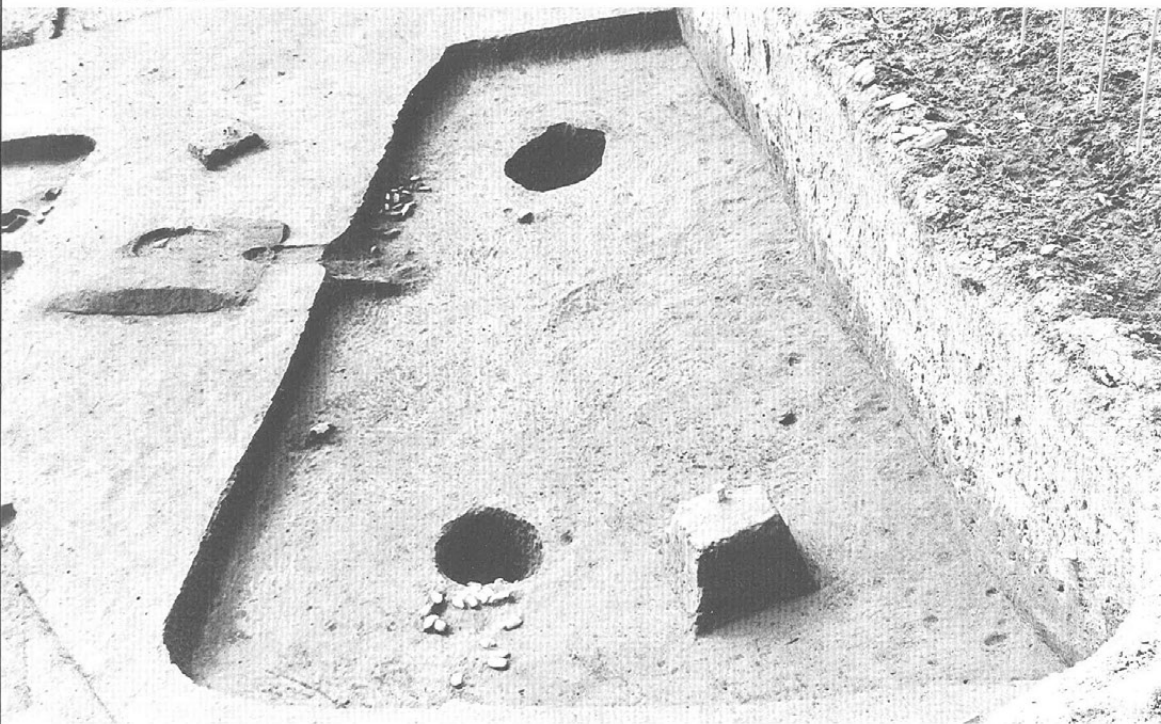


14号住居跡
(東側より)

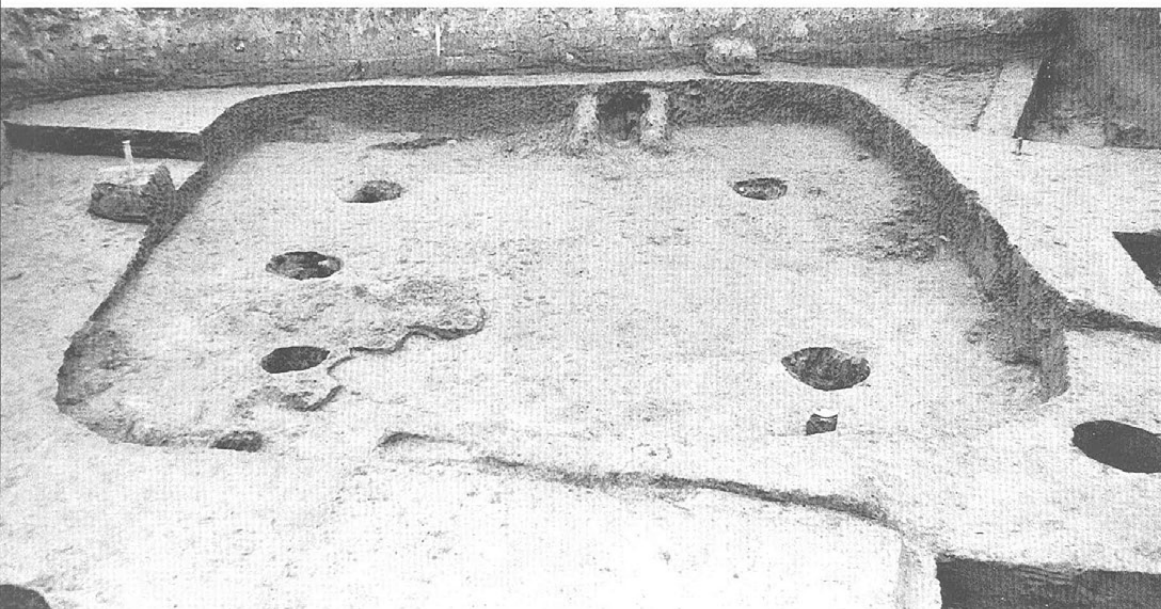


2号住居跡
(東側より)

図版 8
屋代寺地区



3号住居跡
(北側より)

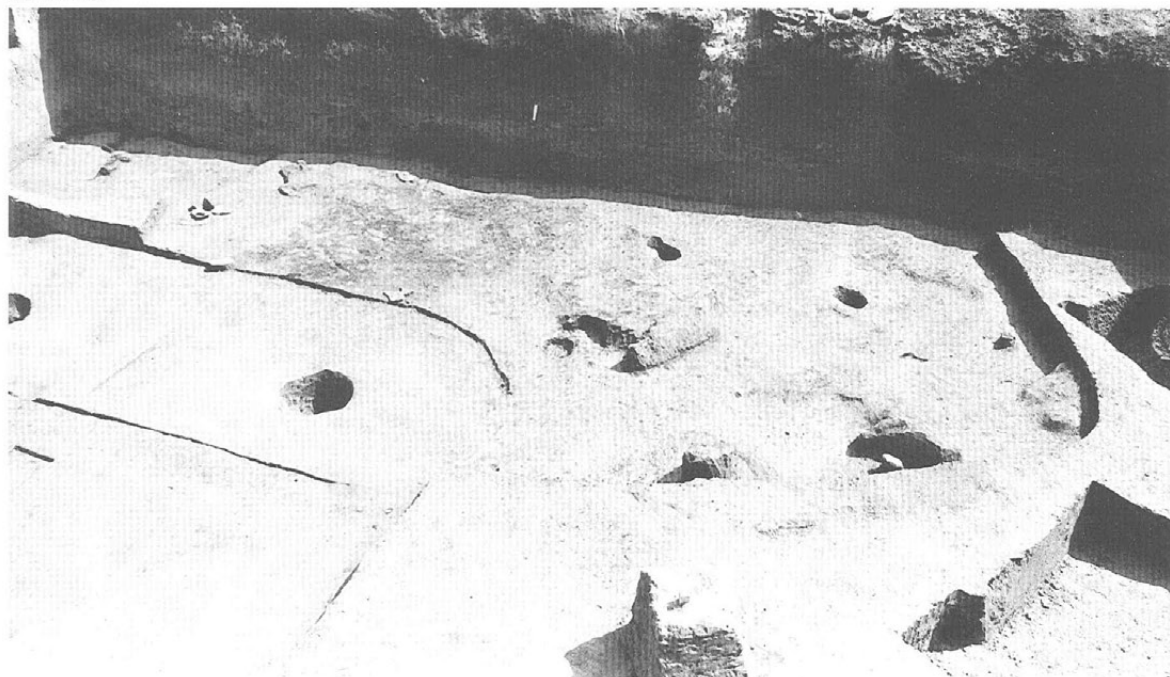


8号住居跡
(南側より)

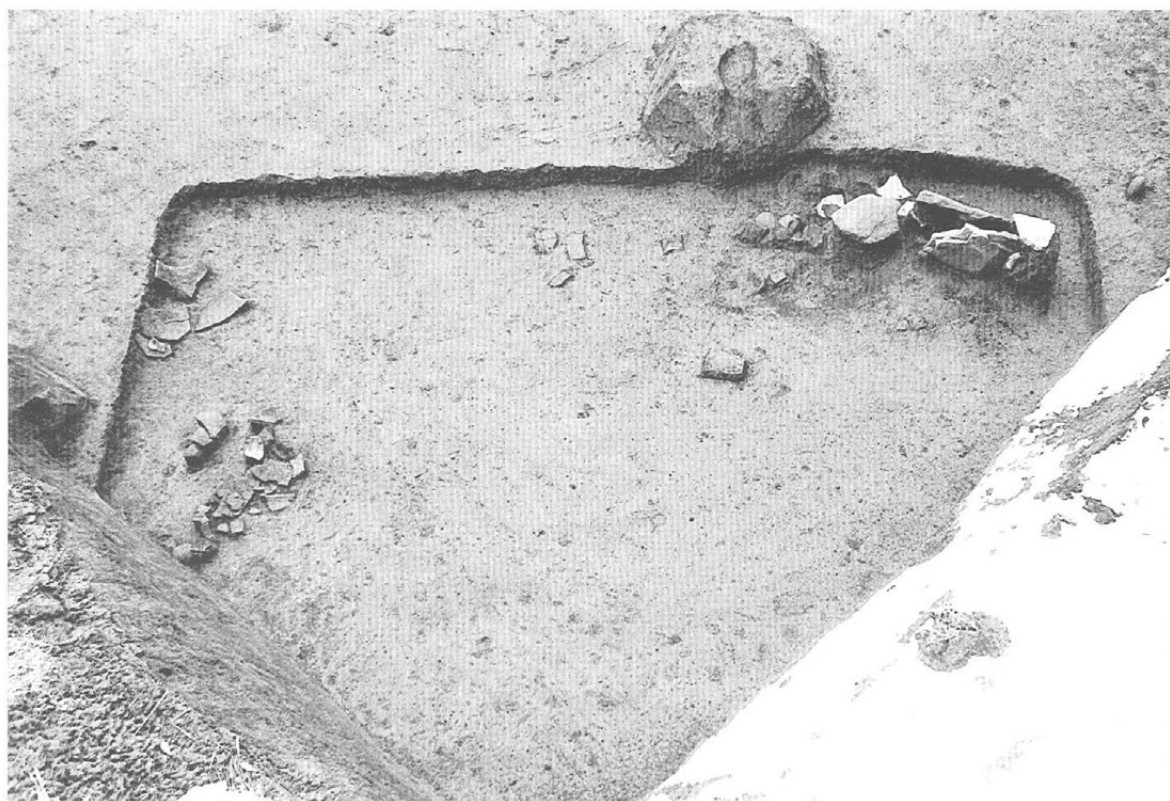


11号住居跡
(北側より)

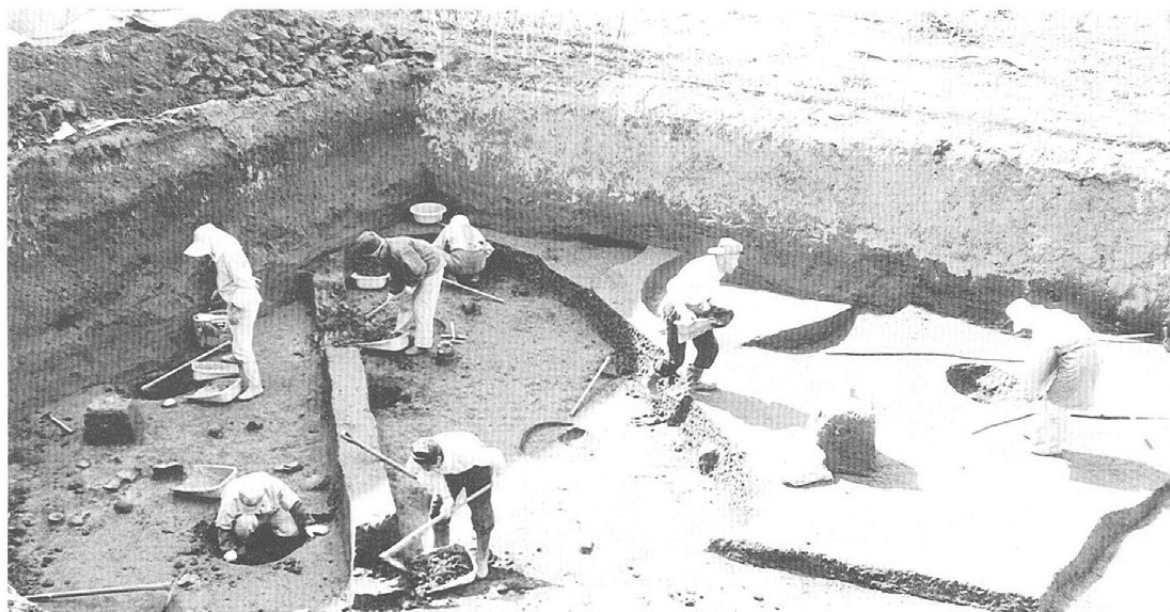
屋代寺地区



13号住居跡
(西側より)



1号住居跡
(南側より)



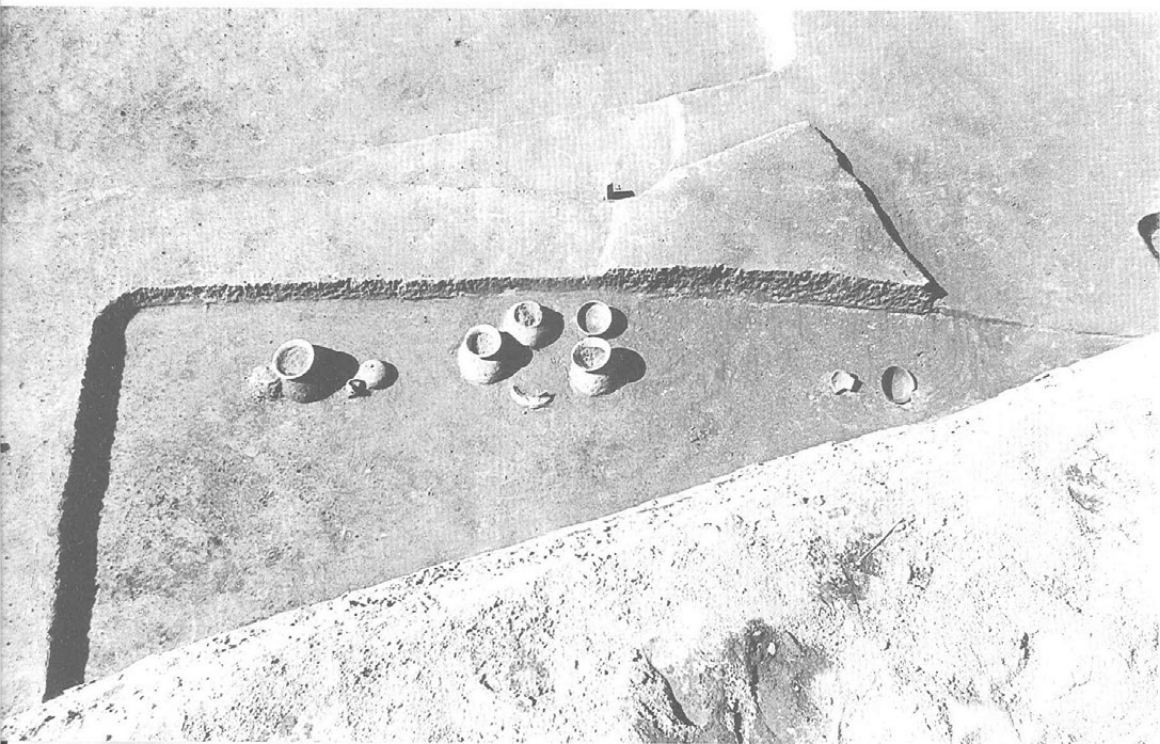
調査風景



大境地区全景
(東側より)



19号住居跡
(南側より)

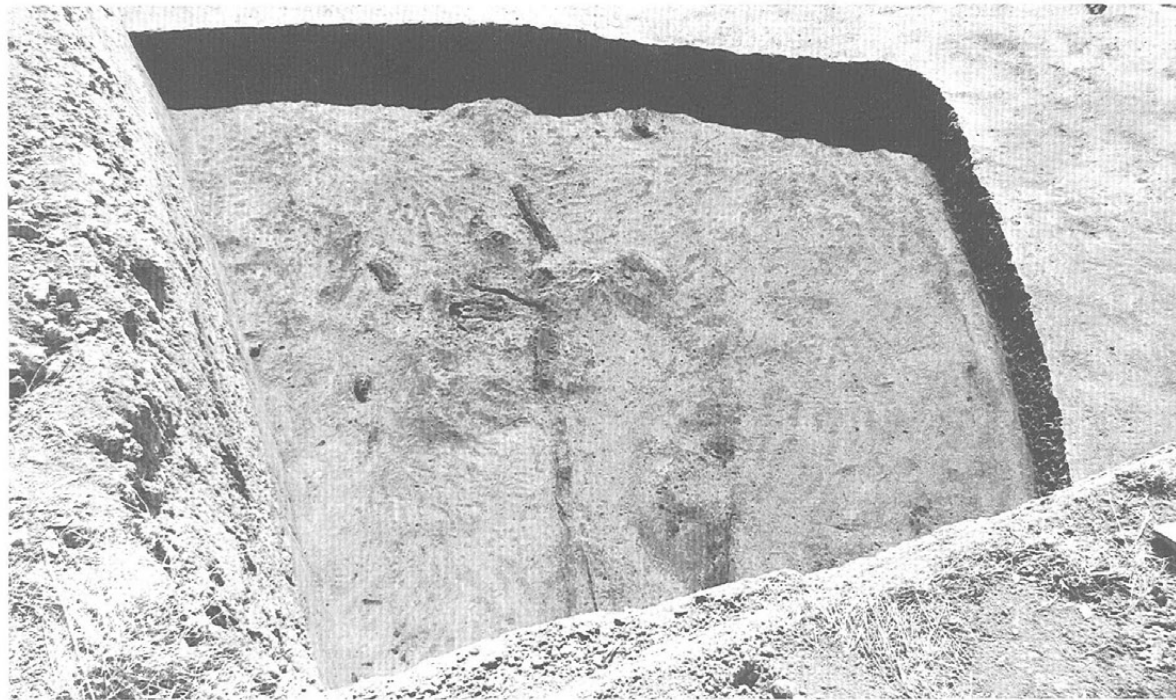


10号住居跡
(東側より)

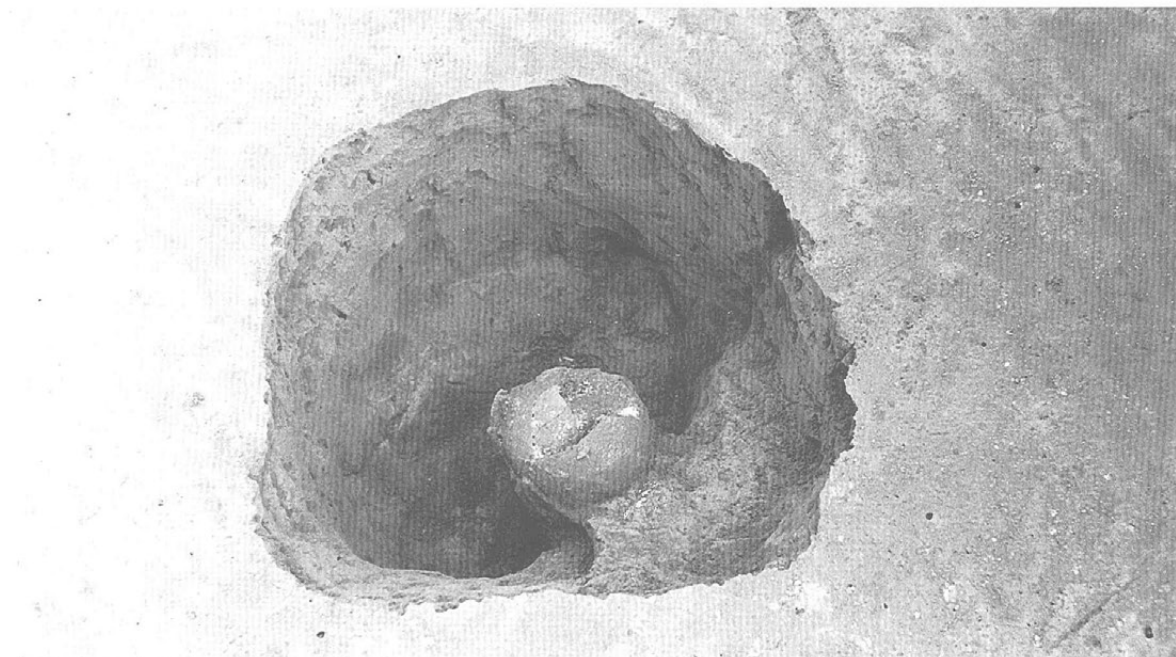
大境地区



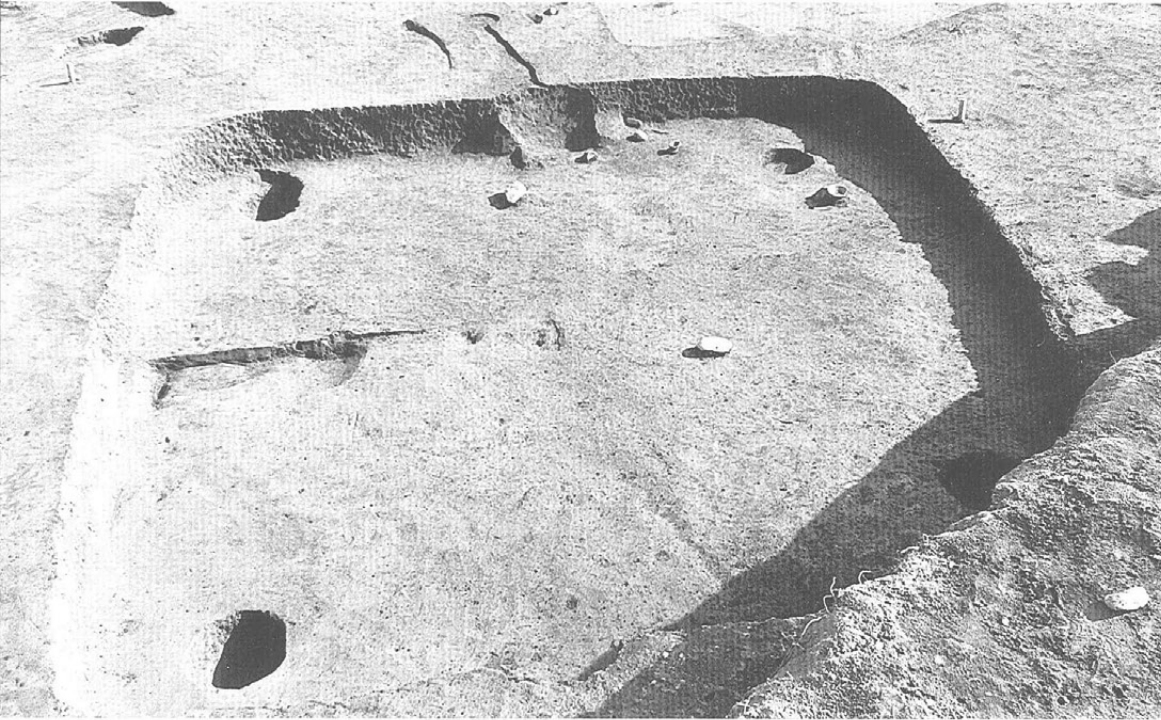
11号住居跡
(西側より)



15号住居跡
(北側より)



4号土坑
(南側より)



4号住居跡
(南側より)

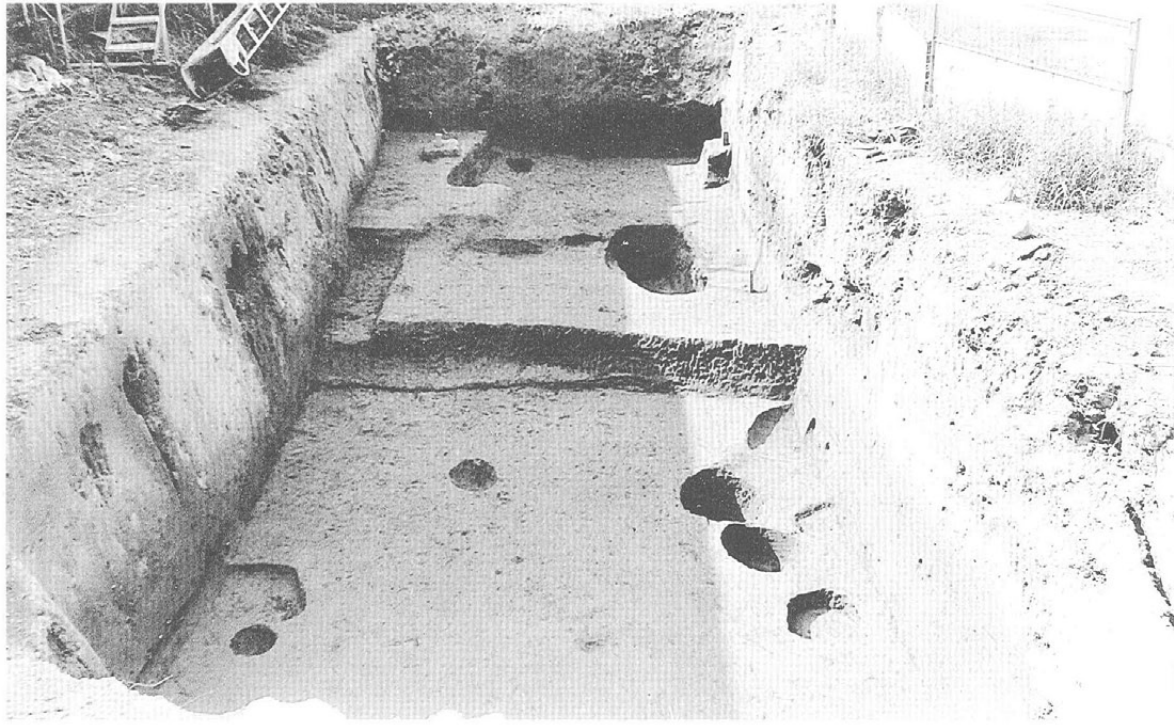


12号住居跡
(南側より)

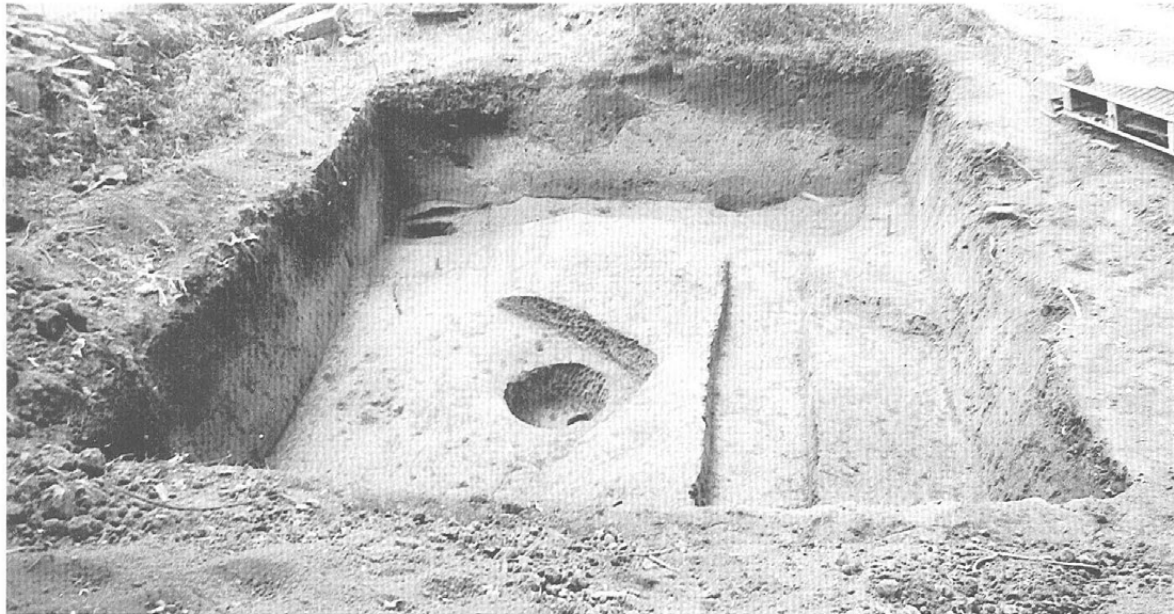


1号掘立柱建物跡
(西側より)

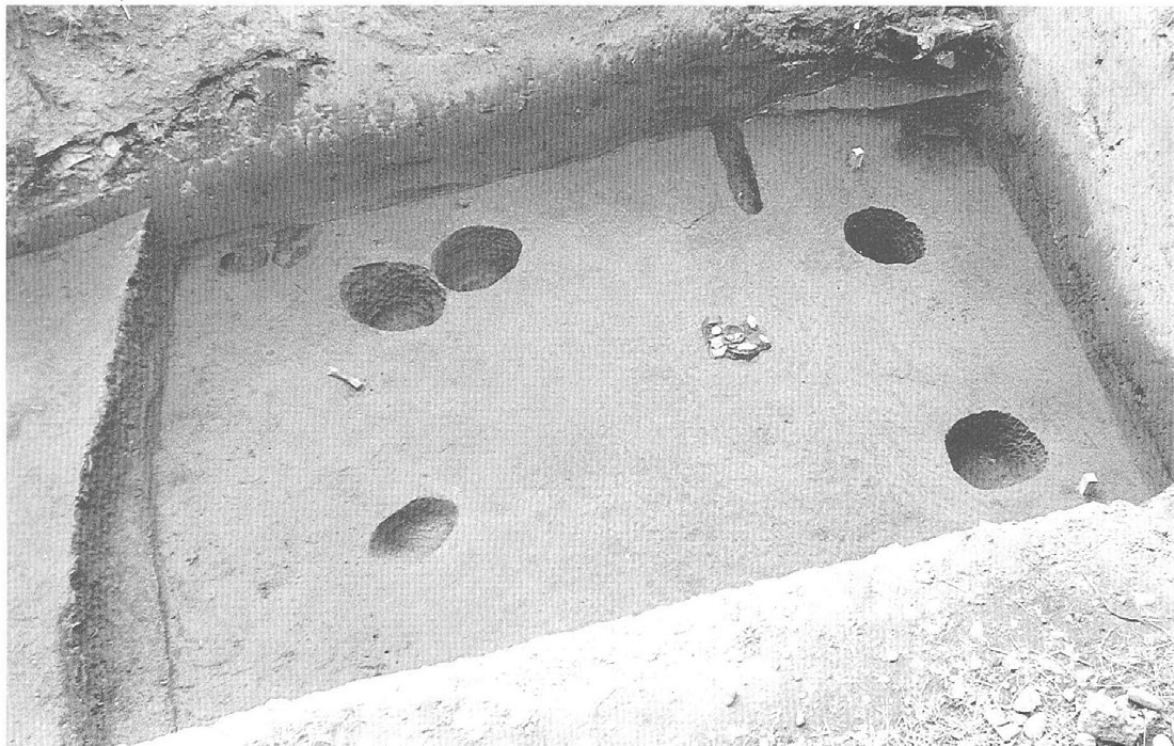
大宮地区



1 トレンチ全景
(北側より)



2 トレンチ全景
(南側より)



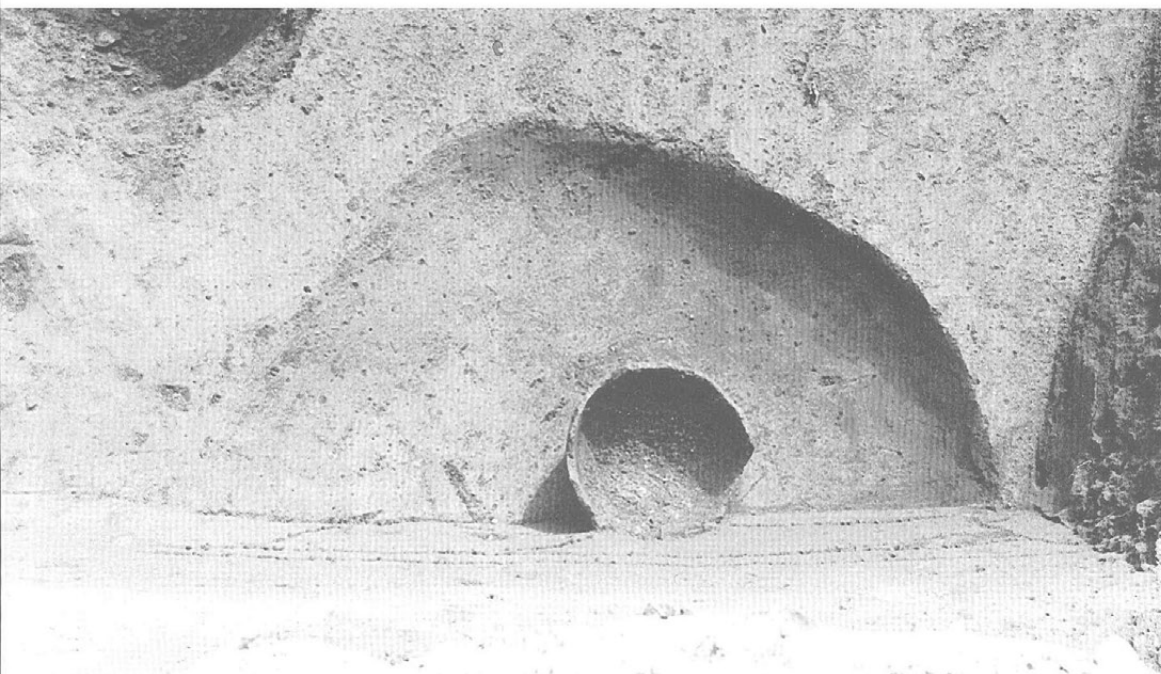
3号住居跡
(東側より)



4号住居跡
(西側より)



5号住居跡
(西側より)



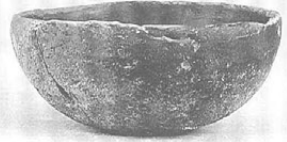
2号土坑
(西側より)



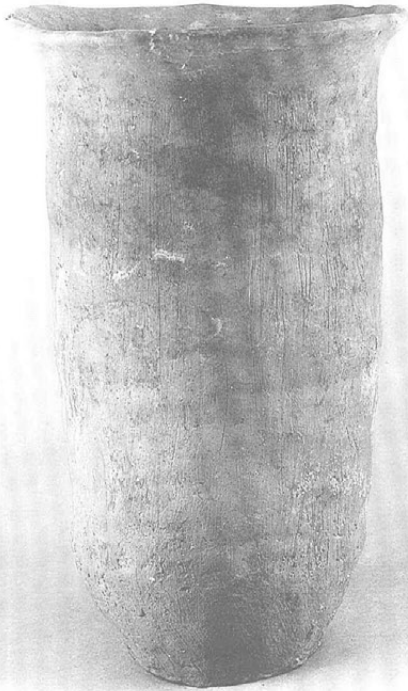
1



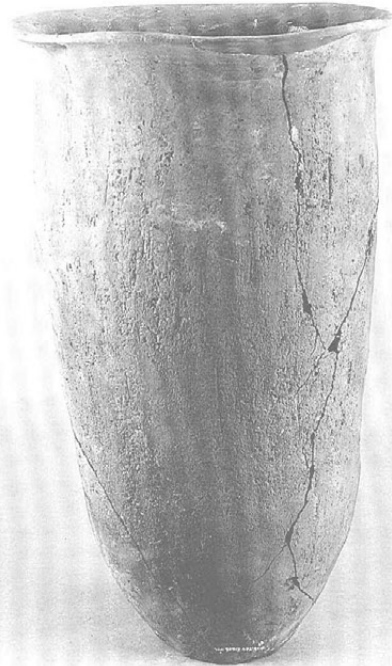
3



4



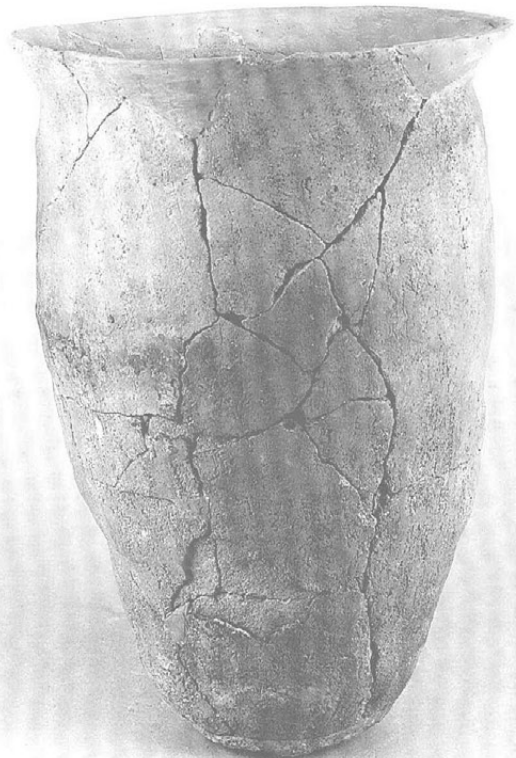
5



6



7



8

图版 16

G地区368号住居迹出土土器



1



2



3

G地区370号住居迹出土土器



4



6



1



9

G地区377号住居迹出土土器



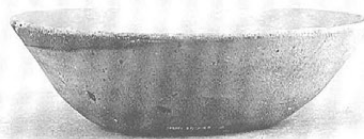
1

G地区384号住居迹出土土器



1

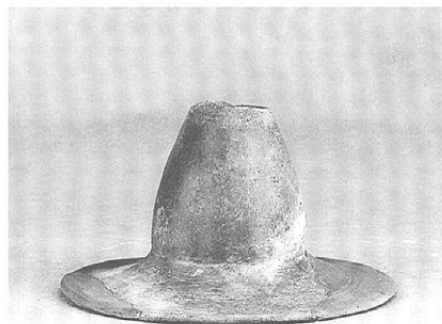
G地区352号住居迹出土土器



1



2



5

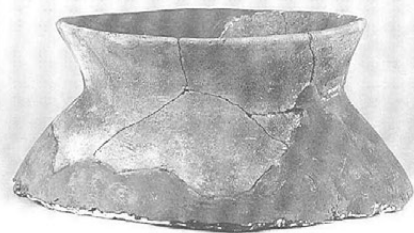


2

G地区379号住居迹出土土器



1



9

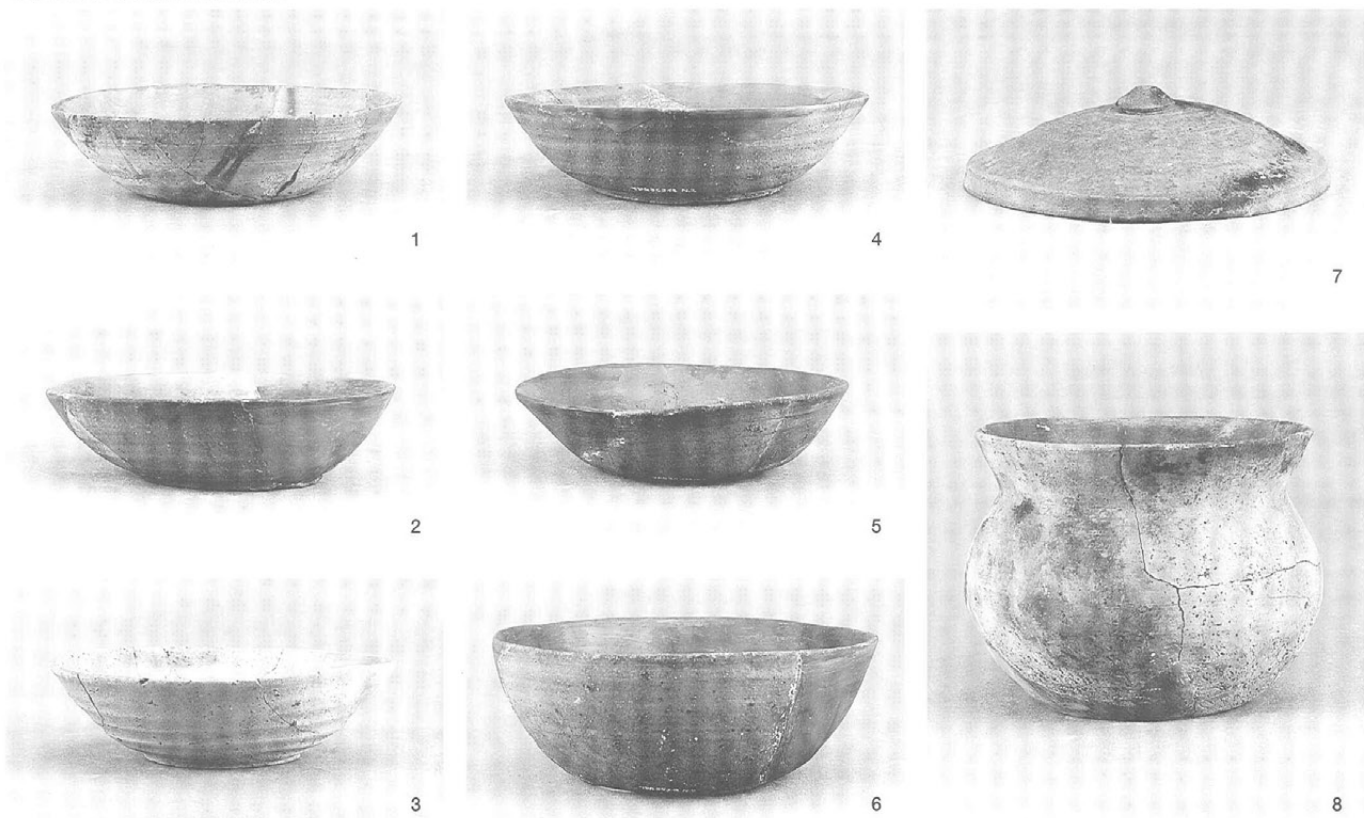


3

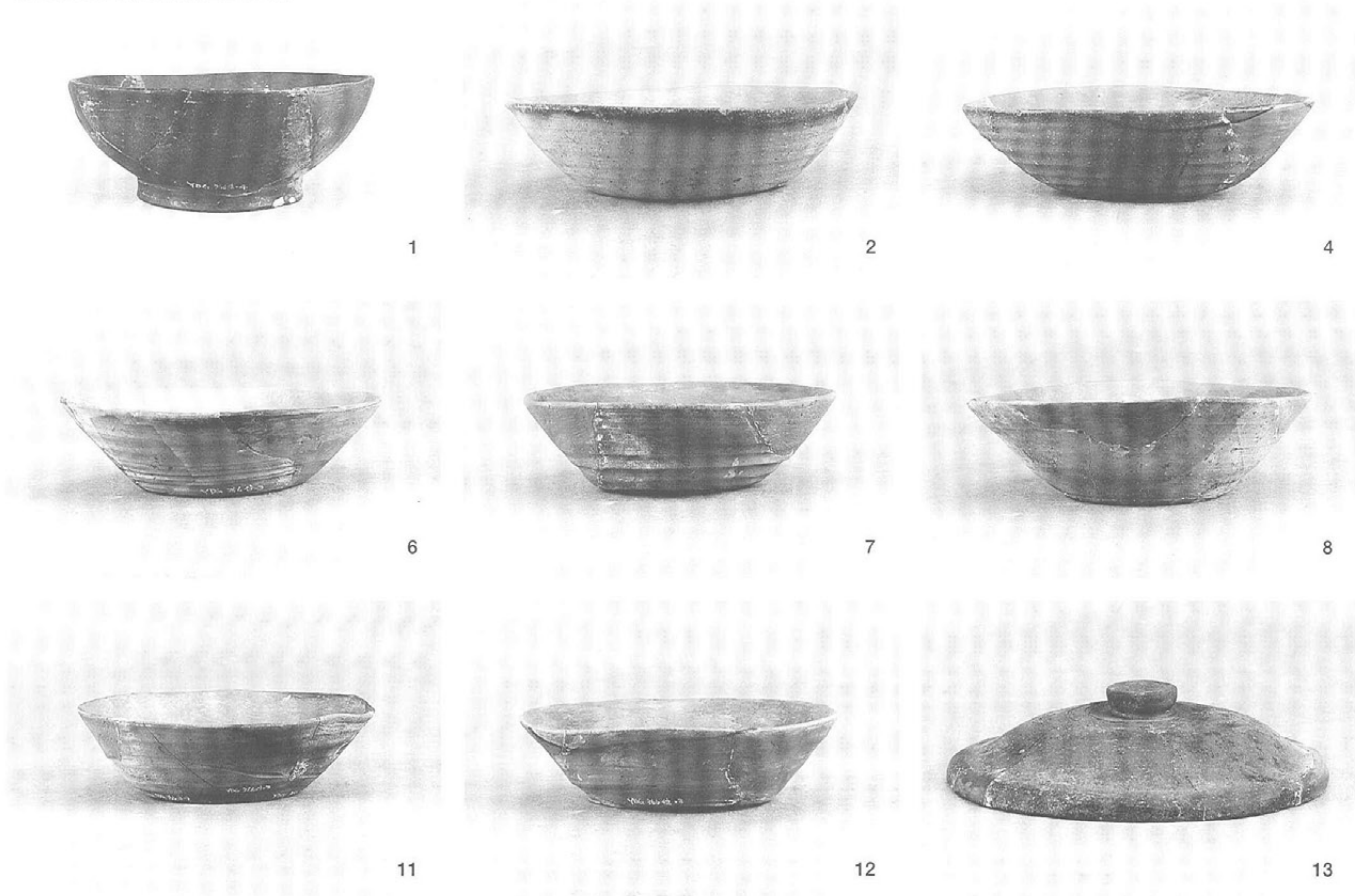


4

G 地区353号住居迹出土土器

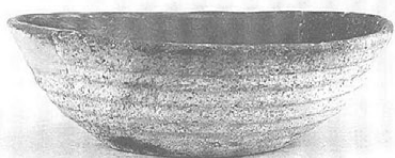


G 地区366号住居迹出土土器



图版 18

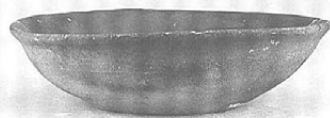
G 地区373号住居迹出土土器



1



2



3



5



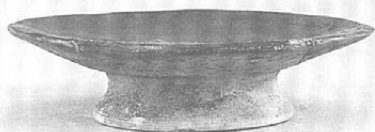
6



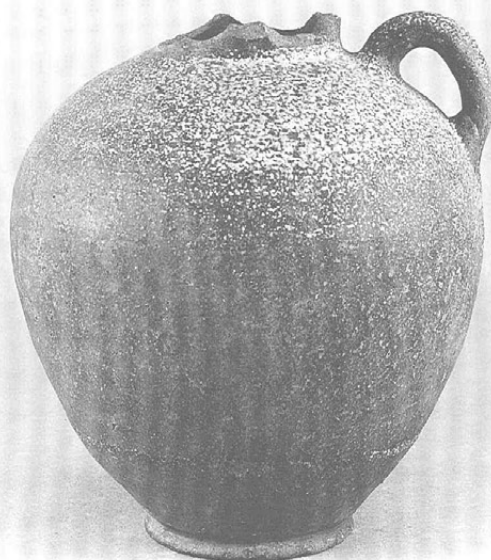
7



8



10



11

G 地区瓦集中区出土土器



1



2



3

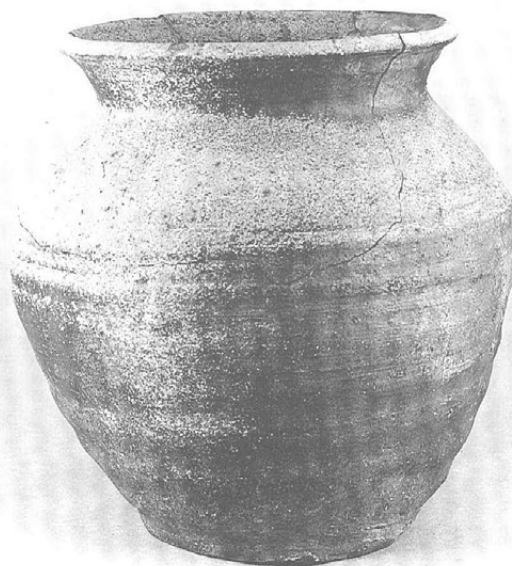


4

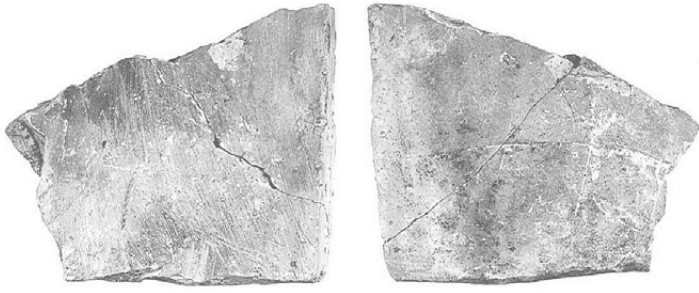


5

G 地区194号土坑出土土器



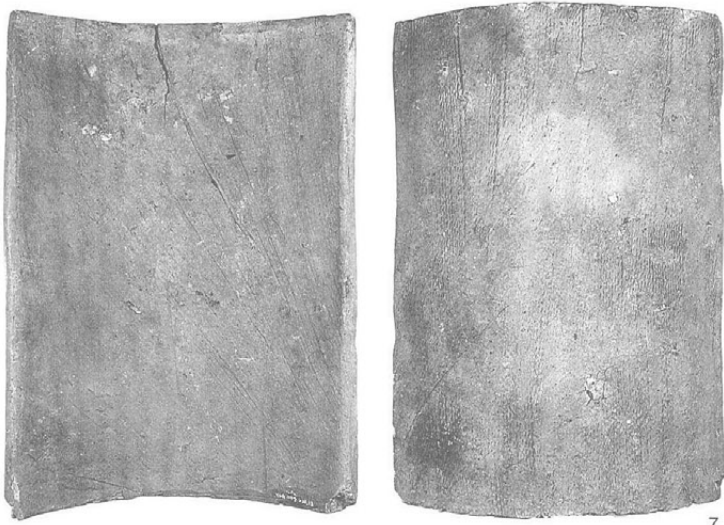
1



6



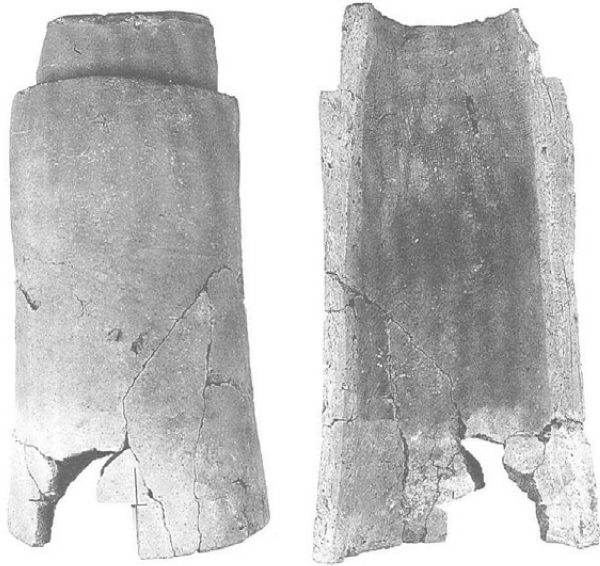
8



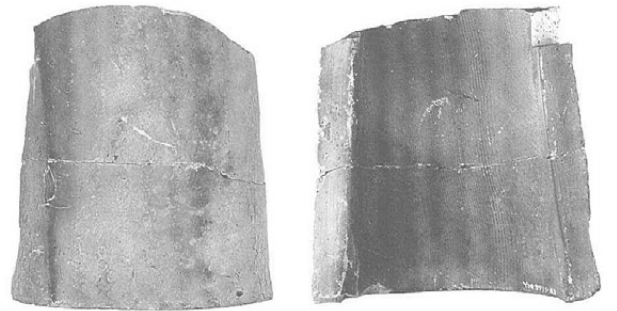
7



9



10



11



1



2



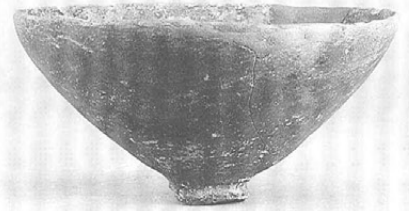
3



4



5



6



7



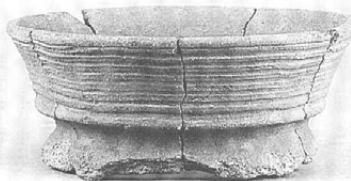
8



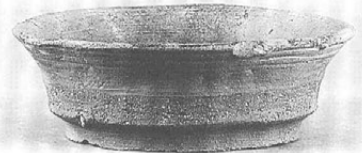
9



10



11



13



15



16



17



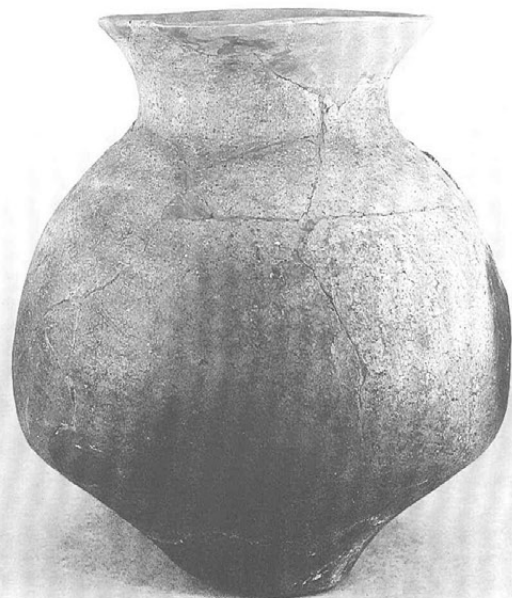
20



21



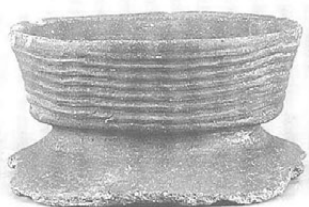
22



24

图版 22

屋代寺地区14号住居跡出土土器



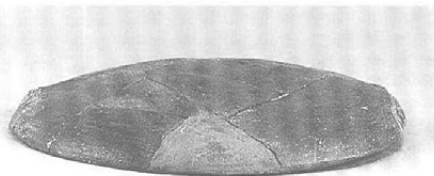
25



26



29



27

屋代寺地区2号住居跡出土土器



1



2



3



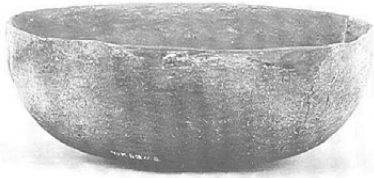
4



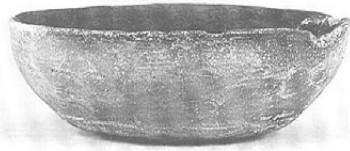
5

屋代寺地区 8 号住居跡出土土器

屋代寺地区 3 号住居跡出土土器



1



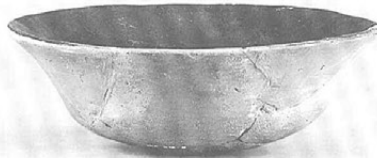
2



1



3

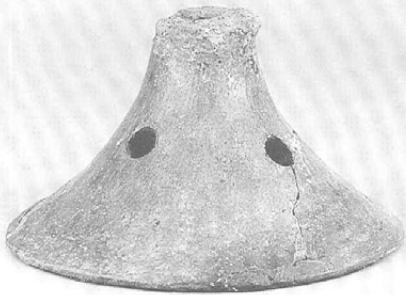


4



5

屋代寺地区 11 号住居跡出土土器



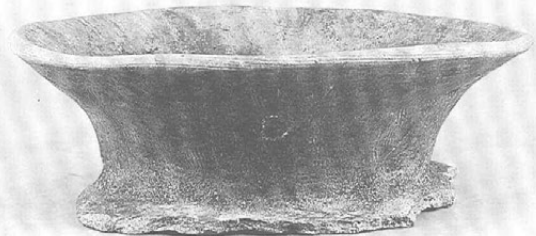
1



2



3



4

图版 24

屋代寺地区13号住居跡出土土器



1



2



3

屋代寺地区1号住居跡出土土器



1



2



3



4



5

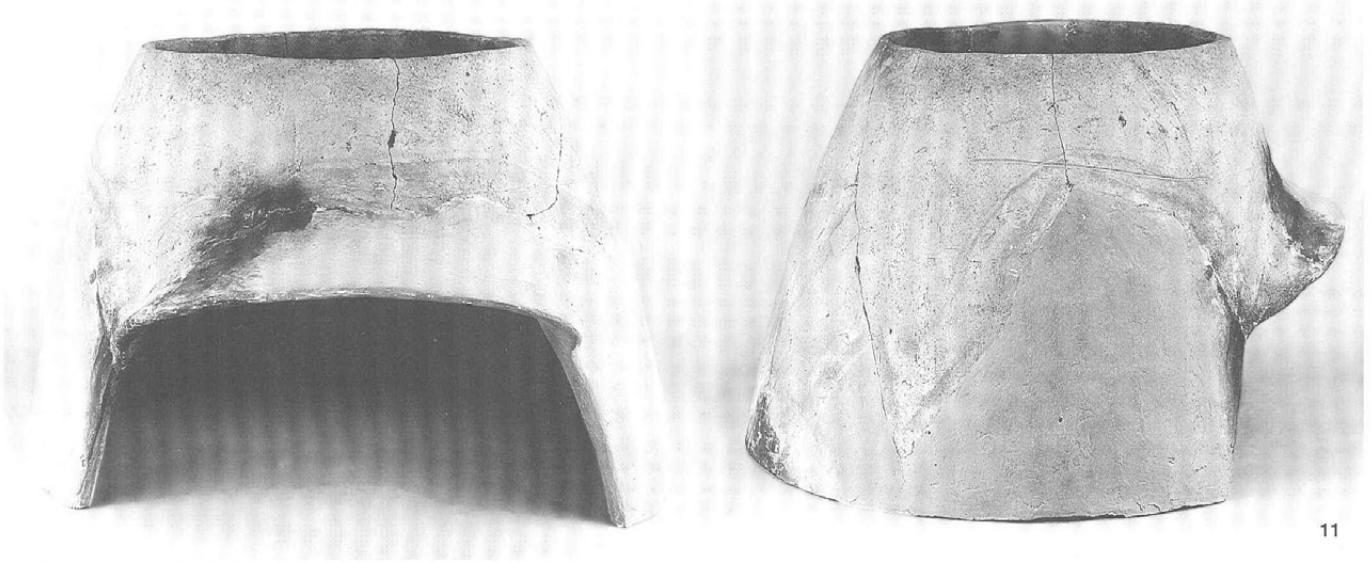


7



10

屋代寺地区 1 号住居跡出土土器



11

大境地区 17 号住居跡出土土器

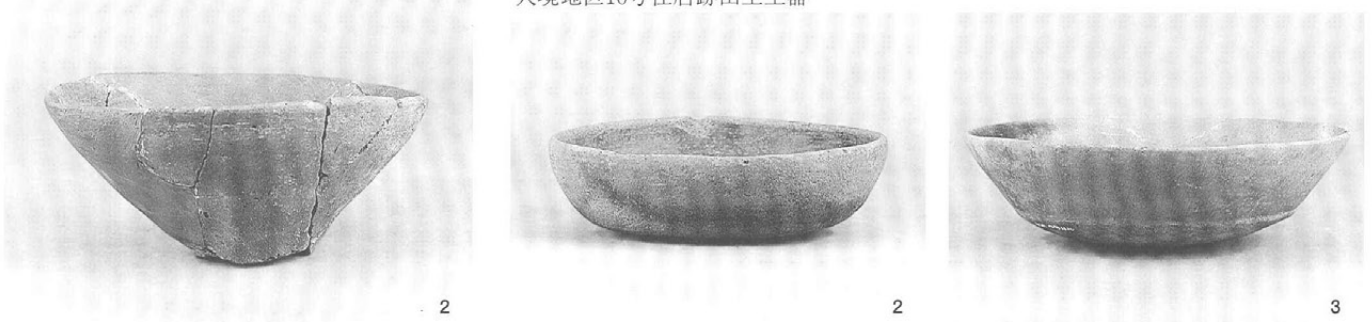


1

3

4

大境地区 10 号住居跡出土土器

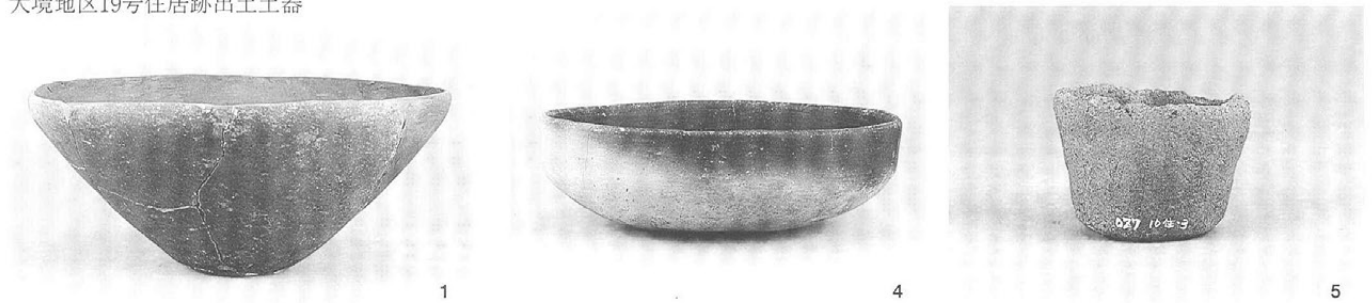


2

2

3

大境地区 19 号住居跡出土土器



1

4

5

图版 26

大境地区10号住居迹出土土器



6



7



8



9

大境地区11号住居迹出土土器



1



3



4



2

大境地区4号土坑出土土器



5



6



1

大境地区12号住居跡出土土器



1

大境地区4号住居跡出土土器



4



8



2



10



11

大宮地区3号住居跡出土土器



1



3



4



5



6



7



8



11



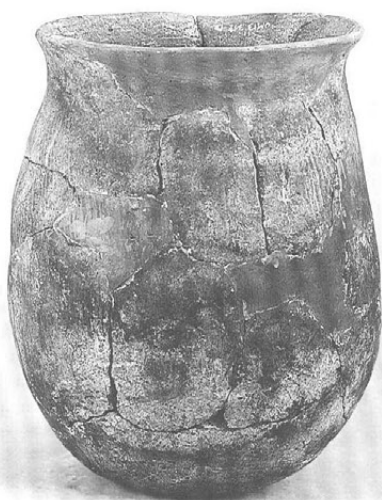
12

图版 28

大宮地区 3 号住居跡出土土器



13



20



22

大宮地区 5 号住居跡出土土器



16



3

大宮地区 2 号土坑出土土器

大宮地区弥生時代中期土器



1



9

屋代寺地区北陸系土器

屋代寺地区軒平瓦

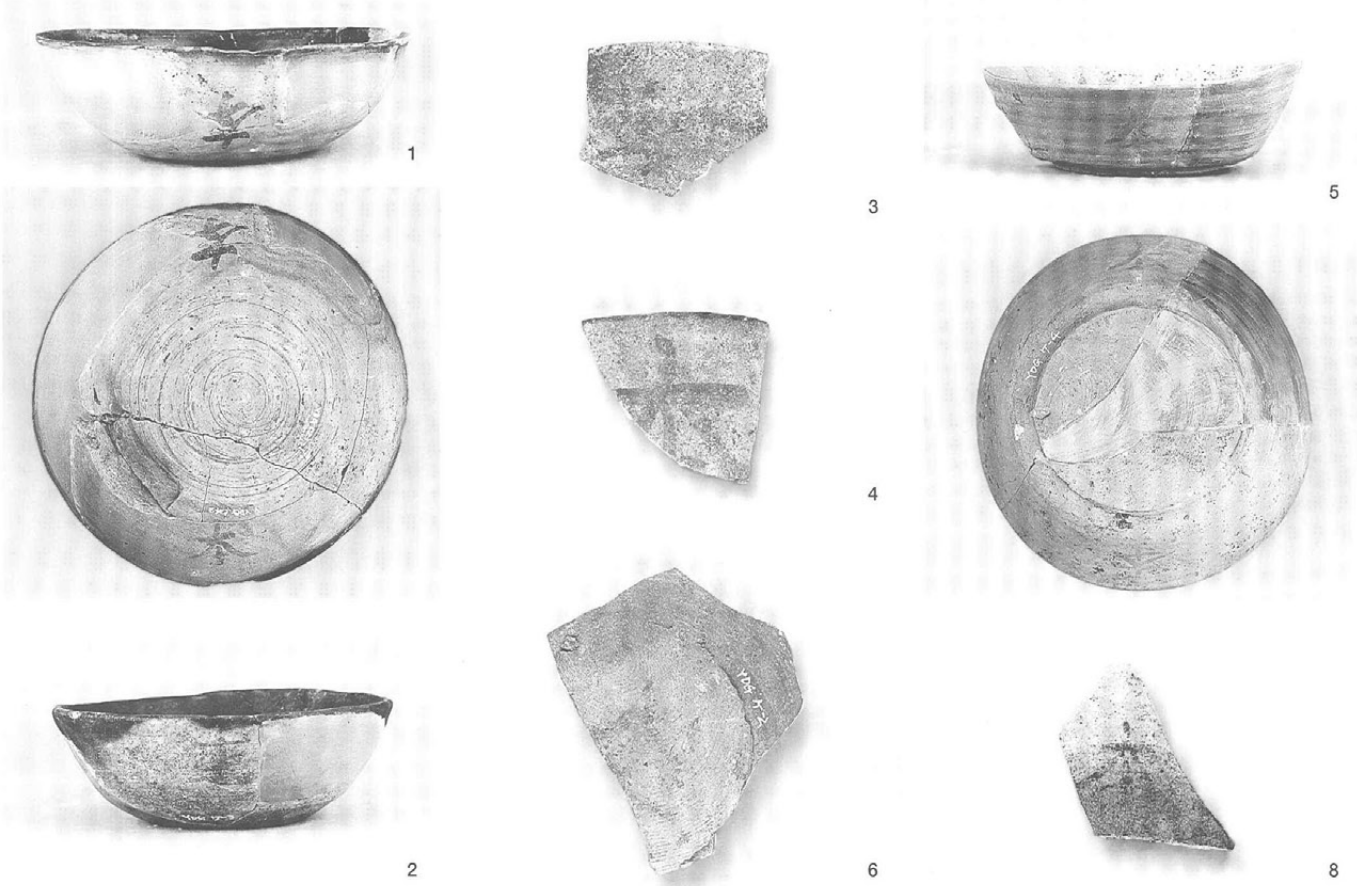


1

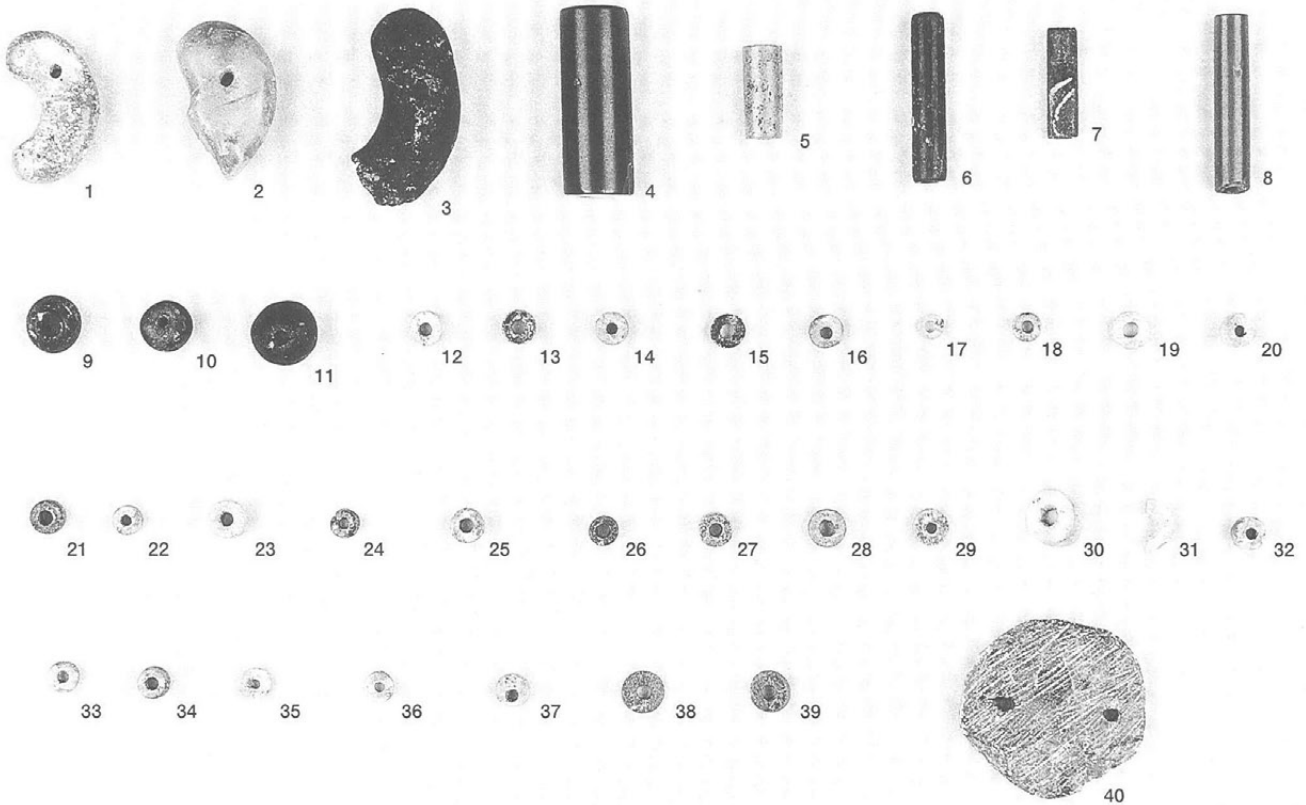


1

墨書土器



玉類・滑石製模造品

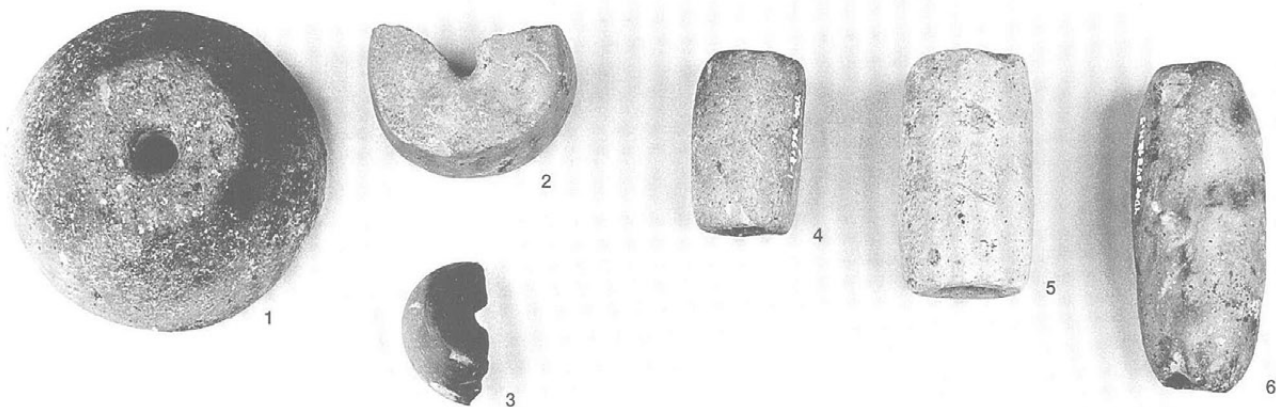


1・16・17 屋代寺地区3号住居跡 2 大境地区3号土坑 3・8・10・30~37 大宮地区3号住居跡 4 G地区369号住居跡
 5 屋代寺地区10号住居跡 6・7・21~25 屋代寺地区グリッド 9 G地区359号住居跡 11・18~20 屋代寺地区8号住居跡
 12 G地区352号住居跡 13~15 屋代寺地区2号住居跡 26 大境地区1号住居跡 27 大境地区3号住居跡
 28 大境地区6号住居跡 29 大境地区9号住居跡 38・39 大宮地区グリッド 40 G地区384号住居跡

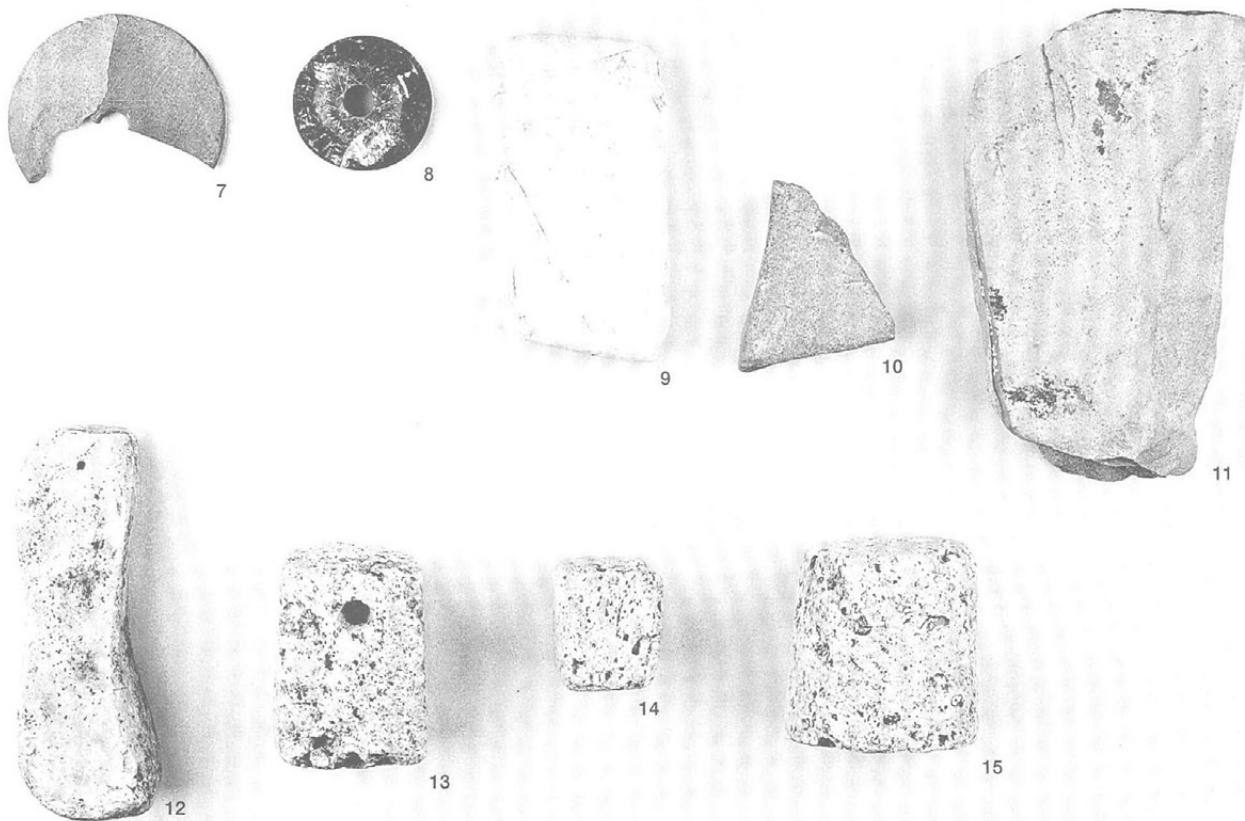
図版 30

土製品・石製品

土製品



石製品



- 1 G地区370号住居跡 2・8 G地区グリッド 3 大境地区グリッド 4・10 G地区366号住居跡 5 G地区368号住居跡
6 G地区373号住居跡 7 G地区352号住居跡 9 G地区359号住居跡 11 屋代寺地区11号住居跡 12 大境地区11号住居跡
13 G地区374号住居跡 14・15 屋代寺地区グリッド